生田春月全集

第二巻

詩集（2）

新潮社

大正七年六月（「春の序曲」執筆時代）

大正七年六月「春の序曲」執筆時代）

目次

夢心地……九五

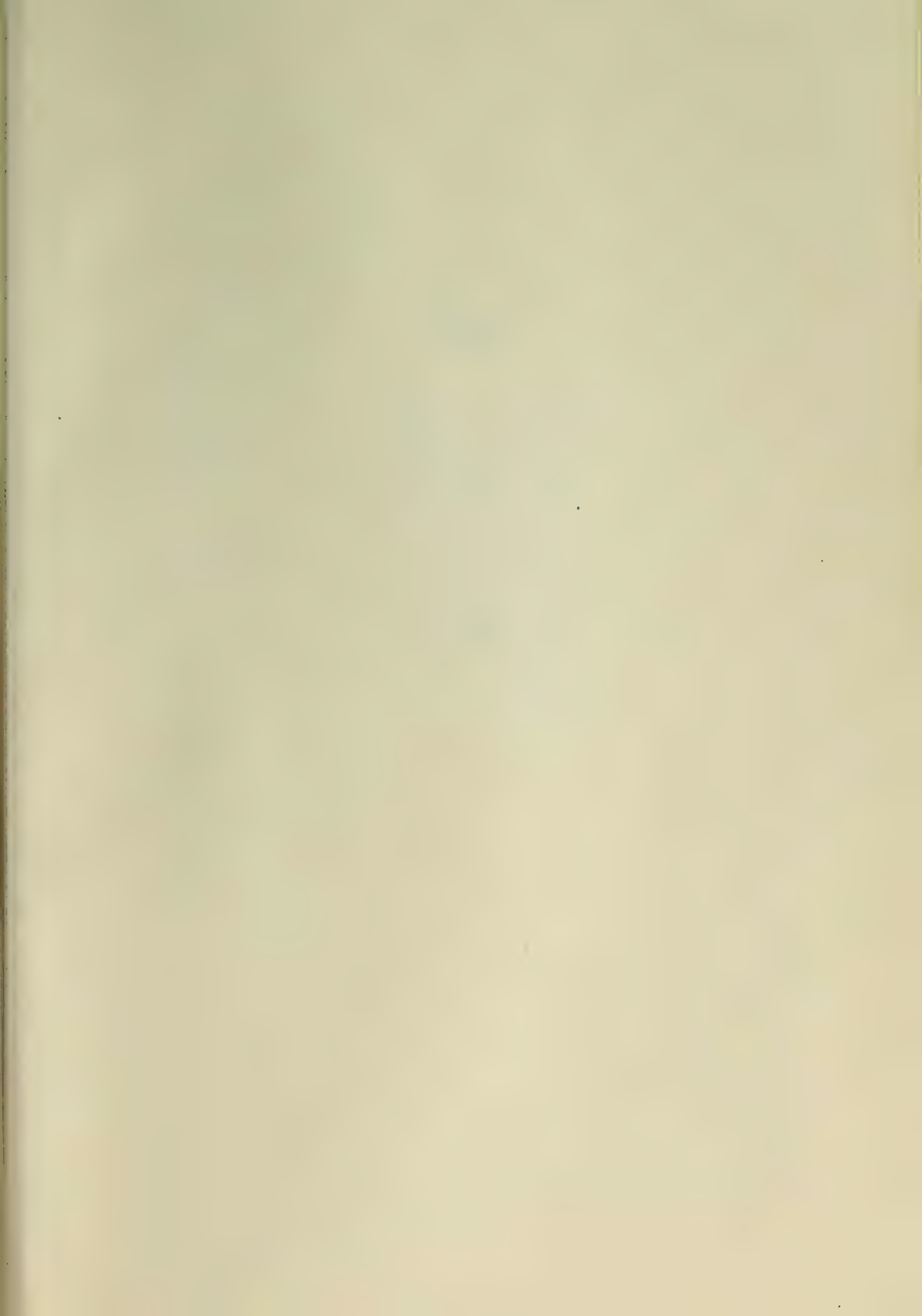
春の序曲

——目次了——

詩集

(2)

われを愛するすべての人に
われの愛するすべての人に
われは贈らんこの歌を、
寢られぬ夜半の守唄に
かなしき時のなぐさめに。

佛草紙

野ゆき山ゆき

水の上

水にぽつかり
白い花、
おのづからなる
うつくしさ。

春風

里はみどりの
草なのに、
山はましろな
雪の波。

なぜにわたしの
春風が、
雪をとかして
來なかつた。

むさしの

むさしのの
くろい林はものおもひ、
綠り明るい林には
かるいたはむれ。

うちつれだちて
行くときは、
あなたのお好きな
林の中へ。

蘆

水のほとりの一もと蘆、
一條青くすくすくと
右に左に葉をひらき
春の光にみづみづしい、
末はつれない秋風に
吹いて折られる身だらうと
伸び伸びて行く一もと蘆。

螢籠

何處からまぎれ込んだか
枕もとに、首筋の赤い蟲が一匹、
かはいいね、めづらしい螢――
てのひらに載せて見てゐると、
手の筋のながれの上に
ぽつと青い火をてらす。

螢ッてほんとにかはいいのねと言つて、
蚊帳の中に一杯螢をはなして
ひとりで寢てゐたその人の俤が
ふとおもひだされてなつかしさ――
あれ、螢、螢と子供たちが遠くで叫ぶ、
部屋一杯の大きな螢籠です。

溪流のほとり、草露にむらがる螢。
水はさらさら一夜ながれて、
螢も流れ、影も流れて、涼しさ。
佗しい都ずまひに、ふとそのかみを思ひだし
私はそつと螢を庭へはなしてやつて、
しばらく、垣根の覺束ない光を眺めてゐた。

京うまれ

しとやかにややもの羞ぢて
なよやかに面（おもて）を伏せて
見るからにやさしげなれば、
今日もなほかかるをとめの
世にあるものか、
生れしさとはいづくぞと
ふとおもひふとたづぬれば、
京のうまれと
こたふるも聲のしづけさ。

ぬかるみ

こんなに深い
ぬかるみであらうとは
知らなんだ、
春の霜どけ。

行きなやみ
行きがてにして立歸り、
高いあしだを買うたぞえ、
春の晝すぎ。

この心くんでくれよと
かにかくに、
ぬかるみを踏みかため行く
春の田舍路。

眞間のをとめ

しもふさの眞間（まま）の手古奈（てこな）の
あはれにもなつかしきあと、

入江ばし、つぎはし渡り
うるはしき少女にあひぬ、
何びとの兒にかありけん。

そのかみの若きをのこの
よりつどひあこがれわたり、
手古奈よとまちける井戸と
云ひつたふこれの濁りて。

梅の花咲けるほとりを
今の代の眞間の少女は、
こひわたる一人もあらで
眉伏してわらやにぞ入る。

芭蕉の秋

芭蕉葉、秋にやぶれたり、
やさしき人のふところに
祕めし夢さへやぶるるを、
秋はさやげり、芭蕉葉に。

月ほのかなる庭のおも、
芭蕉は女とあらはれて、
さみしき影も夢のごと
秋をかなしむ涙ごゑ。

芭蕉葉、秋にやぶれたり、
やさしき人のかなしみを
そぞろに秋の風ふけば、
芭蕉の女もともに泣く。

さやけき月のすむときは
秋の思ひも胸に澄む、
涙をふきてほほゑめば

芭蕉のやれ葉、うなだれぬ。

二月の雪

さむざむと山もとかけて
雪はひといろ枯れた木の
梢にかかる去年の夢。

花の微笑みあともなく
春のおもひのいづこぞや。

路の邊につもれる雪は
いつ消ゆるはやく消えぬか。

草ぐさの緑のなかに
よき人の面輪かがやく
春ぞ待たるる山のきさらぎ。

萩と薄

萩やすすきの生ひしげる
河原の砂のさらさらと
漉される音も秋ふけて、
水のつめたさわびしさよ。

萩やすすきのうらがれて
二人行つてもさみしいみち、
語るおもひもあとやさき、
風のつめたさわびしさよ。

春の夜の吹雪

急にしんしんと降り出した
春の夜の吹雪のながめ。

傘もなくして毛皮のマントを
すつぽりと顔にかけたる男のかげ。
傘もなくして狐の皮の首卷きで
すつぽりと顔をかくした女のかげ。

相思ふ二人そろうて故郷(ふるさと)の
アメリカか、はたイギリスかしのぶ雪。

花暦

野みちの菫、
垣根のうばら、
園生(そのふ)の中の桃、櫻、
春が來たなら
いつもうれしい花の國。

春から夏へ、
つつじ、卯の花、櫻草、
花壇のアネモネ、ヒヤシンス、
たつたひとりのさまよひも
なにかたのしい花のみち。

めくれど盡きぬ
一年中の花暦(はなごよみ)、
花から花へ心をかけて
そのひとつにも籠もる思ひ出、
わたしの暦(こよみ)の紅(あか)とむらさき。

初夏

五月がくれば、ふるさとの
砂の畑の葉のさわやかさ、

若い心をさながらに。

五月がくれば、野も畠も
みんなひと色、
青い夢から萌えいだす。

海邊の秋

秋たちて、はやも幾日か、
宿の欄干にかけた手拭はひとつ、
輕くかわいてひらひらと舞ふ――
ああ秋の風、夕となればさみしさに
やさしき君が移り香を
しのびながらに、ふともまどろむ。

君とわかれしその夏の日の
海はなごりを音にたてて、
岩にくだけて、波は白雪。
すでに日かげとなりぬれば、
山影水に入つて蒼々と、
ああ、秋はひとりの身にぞしむ。

秋刀魚つる沖の漁り火
露芝の露にきらめく螢さながら
はやもそぞろかに波に燃ゆる、――
漁り火をかぞへかぞへて今日も寢られぬ、
筑紫の海の不知火の
燃ゆるを君は知りもせで……。

柳によせて

ふるさとのみかへり柳
水のあたりのかはやなぎ
緑の夢をとくであらう、

春のかすみに、春雨に、
色まさりゆく賤が家の
柳、やなぎ……

思ふにあまるのぞみごと
若き日よりのこのねがひ
いつか叶ふや叶はぬや、
釣瓶の水の流るるしづく
朝日に光る春の門の
柳、やなぎ……

やなぎの笛をくちびるに
生をたたへし時もあり、
楊の枝に琴をかけ
春の光を身にあびて
夢をうたひし日もありし
柳、やなぎ……

そぞろちまたのゆきかひに
高架線より見おろせば、
いらかの中の柳さへ
はや青やかにもえそめし、
いのちめざむる春なれば
柳、やなぎ……

白き幻

目のそこにうかぶ幻、
ありし日にわが佇みし
たそがれの白きかの橋。
繪の中の人のごとくに、
わが影も白かりしかな。

いで會ひし人も白かりし、

その人の衣も、面も、
心さへ白かりしかな。
夏の夜を、わかれ惜みて、
ためいきも白かりしかな。

若き日の夢も、ねがひも、
青、紅、黄、はた紫に
亂れてし色もしづみて、
ただひとつ沁みてのこれる
おもひでの白きかの橋。

おもかげの白くのこれば、
はてしなきものと化らまし。
雪に、白紙に、白鳥に
わが心なりて美し、
その白き橋をしのべば。

水の光

夕ぐれの光しづかに照り匂ふ湖の
さざなみの上にうかべる白きかげ。

望樓の白き柱のかげおちて
夕ぐれの光なごめる水の上。

消えも入る淡きけはひの望樓に
ほのかに白き鳥うかぶ。

白鳥をよぶ少女子のいで來ずや
憂き人の心は迷ふ圓柱。

あひおもふあつき心のこひびとと
このうつくしき夕ぐれと。

湖にかよふこみちのねむの葉は
すでに光のきえて失せゆく。

初夏の素描

ガラス函は明(あか)るい水にすきとほり、
上からふりそそぐ光線にすみわたり、
しんしんと冴え光り、
ただ一條(でう)の落水(らくすゐ)が
銀の小粒をひるがへす。

おお、色よ、
美しいものの色よ、
紅(あか)いダリアのまつかな虹(にじ)、
夕映(ゆふば)えの雲、ストロオベリ、
べに色さんご、町むすめ。

ガラス函は明(あか)るい水にすきとほり、
上からふりそそぐ光線にすみわたり、
しんしんと冴えかへり、
ただ一條(でう)の落水(らくすゐ)が
銀の小粒をひるがへす。

火の部屋

夫人よ、
私は思ひ出します。
煖爐(ストオブ)まぢかにおよりになつて
何かお讀みになつてゐたところへ、
扉(と)をあけて入つて行つた私の心持。

夫人よ、
私は思ひ出します。

暖爐(ストオブ)に燃えてゐる石炭の火よりも
紅くて力づよい双眸の火であつた、
おさへつけられひきつけられた私の心持。

夫人よ、
私は思ひ出します。
室が暖爐(ストオブ)にあたためられるやうに、
人間の心は人間の眼で温まると知つた時、
生の惱みと喜びに私の心の燃え上つた時。

若き女性に與へて

うるはしき面輪(おもわ)に匂ふ春の光りに
ゆるやかに水の流るるほとり、
おもひをゑがく君たちの心の鏡、
その清き瞳とこぼれいづる微笑(ゑみ)やいかに。

くろかみに光りかがよふ秋の入日を
ふりはへて窓かけしぼり見る夕、
あこがれゑがく君たちの善き魂の
花と咲きづるかぐはしき匂ひはいかに。

咲く花の蕊(しべ)の中なるその祕密を、
波打つ海の底なるその恐れを、
風わたる林のなかのそのさやぎを、
めぐる日月(ひつき)のうつろひを、君も知るゆゑ。

眞珠(またま)なす少女(をとめ)の身にもおそひくる
そのくさぐさの憂ひ、痛みを
心亂れて堪へがたみ、生きは迷ふも、
その迷ひ、その憂き中に生命(いのち)めでたし。

うらわかき少女子(をとめご)たちの行末の
幸(さち)をねがひて、詩人われ告ぐるはかくぞ、

苦しとも憂しとも君よ、捨てたまふな、
又となき世に、ひたすらに生くる勇氣を。

夏の夜の微風

燃ゆるひと日のもの狂ひ、
かつ光り、をどる木の葉も、
夕暮のそよ風くれば、
うるほひてやはらぎうたふ。

もゆる血潮のくるめきに
心みだるるそのあこがれも、
やすらひてしづかになごむ
この夕暮のそよ風に。

夕ぐれ窓によりそへば
白き衣、波とはためき、
おのれさへ風とおもはる、
しづかなる幸にそよぎて。

きのふの日

たのしかつたと
云へることは、
きのふの風の
音のやうに、
とらへがたい。
きのふの呼吸のやうに
かぞへがたい。

悲しみと心配と
涙と痛みとの
そのときのほかは、
多分みんな

たのしかつた時。

心に闇をもつもの

心の中に深い闇(やみ)をもつてゐるものは
夜のあかりを慕うてゐる。

「ここの珈琲(コーヒー)はうまいよ……」
ストオブの赤い火のそばで
久し振りの友達と珈琲を飲む、
その窓の外を、何とはなしに
あかるい灯影を浴びて人が通る。

赤いトマト、白い林檎の匂ひ、
少し顔をほてらせて詩の話……
ゲエテ、ブラウニング、ホイットマン、
このありふれた小さな貧しい魂は
偉大な名前を口にするのを好む。

心の中に暗い闇をもつてゐるものは
夜のあかりを慕うてゐる。

花あやめ

白、まだら、
うす紫の
花あやめ、
今かも咲ける
ふるさとに、
あはれ初夏。

ふる池の
みぎはに生ふる
花あやめ、

君がたたずむ
花あやめ、
あはれ初夏。

うつむくと
見ゆる面輪の
ほほゑみは、
水の上にうかぶ
花あやめ、
あはれ初夏。

とりどりの
色をきそひて
花あやめ、
今かも咲ける
ふるさとに、
あはれ初夏。

林中小池

おそ秋の林の中に
澄んでゐる
水の色。

そんなところに
たたへた水が
あらうとは思はなかつた。

秋の光はみがき出す、
さやかな水の色を。

池は哀しまず、
みづからやぶらず。

珠のやうに明るい。

秋

芙蓉の靑葉吹く頃の
はつ秋風に頰を吹かれ
紫苑の花の咲く頃の
秋なかごろの風のなか。

おもひつづくる自分のこと、
いつしか夢も過ぎたりや、
色そまりゆくかへで葉の
のぞみもすでに過ぎたりや。

柔かかりし芭蕉葉も
心ほのかに裂けたりや、
おのづからなる心澄み

冴えてぞ秋をわれに見る。

たそがれの旅

秋のくれがた、宮城野を
たつた一人で行く旅人、
トランクさげて乘りこんだは
山の湯へ行く田舍馬車、
中には子供が一杯だ、學校がへり。

日はくれかかる濁川、
土手から畑に、野の中に、
刈田の中を、村々とほし
馬車がはしればよろこんで
子供は唱歌をうたひ出す、學校がへり。

日はくれはてた暗い山、

とほくに見るは湯の村の灯か、
ああ忘れて遠い故郷(ふるさと)を
今旅人は思ひ出す、うつむいて、
子供は唱歌をうたひつづけた、學校がへり。

夜音

陰にこもる冬の夜、
犬のとほ鳴き、
憤(いきどほ)る聲にはあらず、
あてもなき遠き訴へ。

陰にこもる太き聲して、
ただ一つとほ鳴きをする、
夜は暗き丘の上、
大き邸宅(やしき)の塀の中より。

何者かこの犬のごとく、
陰にこもる太き聲して
あてもなき訴へをする、
この悲しみは悲しみを超ゆ。

一枝

こまやかに木の葉をすかす
葉脈の心をもちて、
この世渡れば、
薄きかよわき人とぞなる。

粗(あら)くつよきはよしといへ、
人と人との心の枝は
梢細くぞ撓(たわ)むもの、
大風吹けば亂れ立つ。

時とところのよしあしや、
光と影の木の姿、
後から見ても前から見ても、
こまやかなその一枝。

冬枯れ

めぐりあひの悲しみに似る
この冬がれ。

若かりしものを、
緑なりしものを。

かくも移らふものか
冬枯れは。

明るかりしものを、
親しみしものを。

夕榮え

ああ、光はいづくに囘るや、
ただ消ゆるや、
冬の夕の
夕ばえ。

ああ、命はいづくにかへるや、
ただ失するや、
冬の夕の
夕ばえ。

ときがたき思ひをもちて
心しみいる、
冬の夕の
夕ばえ。

薔薇ひらく

このうれしい時(タイム)……
薔薇の花が開(ひら)ききつた。
温かい火鉢のそばで
あなたとお話しするうちに。

このあかるい時(タイム)……
薔薇の花が開(ひら)ききつた。
温かい火鉢のそばの
卓(デスク)の上の花瓶に。

申し分(ぶん)のない時(タイム)……

薔薇はわたしの心持。
もつて來ましたそのをりは
まだ開(ひら)ききつてはゐませんでしたものを。

あやめ折るとて

紫のその花びらにやどれるは
けさ、あかつきの雨しづく、
折ればかつ散るしづくにも
をとめ心はなづみゆく。

ましろなるその花びらにやどれるは
ゆふべ、しづかに落つる日ざし、
折れば光のたゆたひて
をとめ心はうちふるふ。

あやめ折るとて來てみれば、

ものの風情のしめやかに
さても心はさわやかに、
わが身も花とおもはれて。

藪柑子

夜ふけて、灯のしたで
ほほづゑをつく、心の散歩。
赤い實が一杯ですね——
やぶ柑子、そつと默つて。

夜ふけて、ひとりをれば、
あれやこれやと、夢見心地に。
灯に映えて、しげみに赤い
やぶ柑子、默りくらして。

君は一日のつとめにつかれ、
夜の葉のしげみの中で
はやそつと眠りじたくの
やぶ柑子、その眼はうるむ。

ふたりゐても、何も云はねば
「なにかおつしやいな、
寂しいわ」とあまえて云へば、
やぶ柑子、微笑む眼と眼。

まごころ

あなたのお顔をみるときは、
熱い心も涼しくなり
迷ひも靜かな悟りとなり
涙も柔和な笑みとなり
我執もやさしい奉仕となり、
ただひとすぢのまごころに

みだれぬわたしとなるならば、
あなたのお瞳(め)のそのなかに
みどりの夏の花のかげ
うす紫の秋の夕雲
白い冬の空の星
ほのあかい春の木の芽、
たのしい自然のいろどりを
おもふがままに見る氣がして。

若　草

おおよく伸びる若草ね、
どんな明るい素直な心も
おまへほどには行かないだらう。

このまへここに來た時は
おまへは去年の枯れ草から
二寸ばかりの芽を出して
やつと春陽(はるひ)にてらされてゐた。

おまへのそばには緩(ゆる)い水が
土をじつとりうるほして、
脂(あぶら)のやうに白く澤(つや)づいて
流れるともなく流れてゐました。

水と光が愛のやうに
甘くうれしく身にしみとほり
おまへを育てて育てつづける。

おおまあやさしい春のめぐみよ
まつたくおまへはきれいになる
今日より明日(あす)と少女(をとめ)のやうに。

夕映え

遠いみそらの夕雲が
うすくれなゐの色をして
花の匂ひを蒔くやうに
ほんのりなびいてゐるのを見ると、
この美しい天と地の
云ふに云はれぬめぐみを思ひ、

一輪咲いた白い薔薇の
そのみづみづしい花びらの
やさしい人の頰のやうな
そのやはらかさ見てゐると、
したしい人とわたしとの
云ふに云はれぬなさけを思ひ、

われとわが身がいとしくて
心かぎりにつかへるはしため、
ふとしたことのあやまちから
あたらたふといこの寶玉を
きずつけてはいけないと
自分にかしづくわたしの心。

その薔薇を

ああ、やさしい小さい花でした
淡い黃色とうすべにのその薔薇は、
花うる店のかざり窓に
冬の日をほかりとうけて、
金魚のやうに咲いてゐました。

お友達にわかれてさみしい氣持で
寒い風の吹く町すぢを

ひえて冷たくなつた頬をして、
たつたひとりで歸る途中で、
ふつと見つけたのです、その薔薇を。

ああ、長いこと見とれたのでした
淡い黄色とうすべにのその薔薇を、
花うる店のかざり窓に――
丁度まづしい娘がしみじみと、
寶石入りの紅い指輪を見入るやうに。

ないしよごと

なぜに河原が
こひしいか、
いつも夕と
なるごとに、
なぜに河原に
おでましか、
月見草でも
見るためか。

いいえ、いいえ、けれど
それはないしよ、
人に言へない
ないしよごと、
こつそりしまつた
このくるしみを、
河原の石に
告げるため。

壺すみれ

ひとつひらいた壺すみれ、
少女心のそのすみれ、

君に相ひ見る壺すみれ、
今日の心のそのすみれ、
野の片隅に咲いた身に
おもひがけないことばかり。

かに

人氣がするとおどろいて
小石の下にそそくさと
その身をかくすかになるか、
行き逢ひさうな氣がすると
ひらいてかざす水色の
かうもりがさのその中で。

櫛の唄

わかき愁ひに鎖されて、
こころむすぼれ黒髪の
櫛の歯からむこの惱み、
ふと折れたるを何とせう。

洗ひ髪

靜かな春の洗ひ髪、
二尺にあまる陽の光り、
乾いてくれればさらさらと
そよふく風にゆらぐほど
わたしの心もゆらぎます。

かげろふ

野に陽炎のもゆる日は
頭のわるくなるわたし、
梢の花のちるころは

黒髪さへも重いよな、
春は心がむすぼれて
あをざめてゆく頰のいろ。

埋み火

それをはなしてしまふたら
匂ひが花からちるやうで
雪がとけてしまふやうで、
本意(ほい)ない氣持がしますので
そつと心の中の埋(うづ)み火。

窓邊の春

窓邊の柳ははやも芽ぐみ
そよ風ほのかに春を告ぐる、
ああふるさとはいかになりし
わが父母(ちゝはゝ)はいかにおはす。

はるけき都にひとり住みて
あけくれ書物(ふみ)には眼をそそげど、
おもひはかよふああふるさと
そのふるさとのなつかしの家。

若葉

さわやかに搖らぐ若葉、
はつ夏の陽(ひ)にかがやける
かへでの下のさまよひに
さわやかに搖らやぐ心。

はつ夏の陽(ひ)にかがやける
かへでの下のさまよひに、
世の憂きことも忘られて

みどり兒のひとみにかへるわが瞳。

うるはしきわれを見ばやとのたまひし
われを見たまへ、はつ夏に、
うるはしき君を見ばやと、われ思ふ、
この初夏のさまよひに。

花束

あの方の御病氣をなぐさめようと
わたしは花屋に出かけて行つて、
大きい大きい花束をつくらせました。
紅い薔薇やら、白い薔薇、
桃色のスヰイトピイにアマリリス、
カアネエションにアスパラガス
その名を知らぬ花花を
束ねて、銀の紙で卷いて、

丁度こよない寶のやうに
そつと大切に、わたしは持つて行きましたの。

「まあ、なんてお美しい……」と
その方は白いベッドに起きかへり、
明るい色のとりどりに、眼をかがやかせ、
うるんだ涙にお目をぬらして、
さうして寂しくおつしやいました、
「わたし、この花が一等好きよ……」
それは名知らぬ寂しい花でしたの。

セルの頃

夏はちかきに葉ざくらの
木蔭もほのに惱ましく、
たつたひとりで行くときは、
わたしの夢をさながらに

鳴いてをりますさみしい小鳥。

（空を吹く風にまぎれて
鳴く聲の消ゆるを惜しめ。）

薄藤いろのセルを着た
その都ぶり、せんもなや、
きみに離れてゐるわたし、
都に遠い林の中で
泣いてをりますさみしい少女。

（やはらかなその白い頰に
珠ばしる涙を惜しめ。）

山茶花の友達

わたしの庭の山茶花よ、
もう冬の日はくれました、
光はななめになりました、
おまへの影のながいこと。

夕陽の中の山茶花よ、
ああ何といふ美しい色、
紅のささべり匂ふ色、
おまへの姿はあの方のやう。

山茶花よ、やさしい花よ、
今日あの方はどうしてらつしやるの、
あの方はなぜお出でにならなかつたの、
あの方の事で心が一杯になるわたし。

やさしい花よ、山茶花よ、
もうすつかり暗くなりました、
おまへは見えなくなりました、

わたしの心のさみしいこと。

花束を持てる女

あなたのお持ちになるものは
いろいろの風呂敷包み、
それとも革の折かばん、
それとも何かの紙包み、
または讀みさしの雜誌ですのね。
わたしの持つてゐるものはなあに、
このパラピン紙からのぞいてませう、
花束なのよ――
美しい薔薇と、カアネエションの……。

あなたのお考へになることは
おかへりになるお家のこと、
それともお金のこと、
それとも學校のこと、
またはほんの無心ですのね。
花を持つてゐるわたしの心は
心の中は嬉しさばかり、
今日は久しぶりの訪問ですもの
美しい方の、ほんのりとした大應接間の……。

夕の窓

都ずまひも秋ふけて
夕の窓に散る柳。

ふとも箪笥の抽斗に
さぐりてえたる緋縮緬、
その長ききれ夕闇に
匂ふをみてはものおもふ。

針箱だして絹針に
糸は通してみたれども、
襷にせまし前垂の
紐にやせましさだめかね、

さしぐむ襟に風さむき
夕の窓にものおもふ。

秋の落日

ひとりたたずむ花園に
ああ、もう秋の日は暮れる。
日の暮れ、心に影おとす
白いダリアよ、佗しい夢よ。

夢の國から咲き出たか、
ほんとに靜かな花の色、
その花みればいつしかに
をとめとなりし身を思ふ。

わたしの顔にたはむれた
をさない子供の微笑も
今はかくれて、うかぶのは
ややおとなびた羞恥のいろ。

花はきれいに咲くものを
日は暮れてゆく、花園も、
秋はつれない夕日かげ、
どうしてくらくなるのやら。

燃ゆる躑躅

これはわたしがしていい事か、
してわるいとは重々しれど

心ひとつはままならぬ、
つつじ、つつじ、まつかなつつじ。

こんな事したわたしはだれに
何といはうかいふまいか、
心ひとつはままならぬ、
つつじ、つつじ、まつかなつつじ。

つつじはまつかに咲くことが
おもひのままに出來たけど、
さうして人に見せるけど、
わたしは、人に見せるには、

ああ、つつじのやうに人のまへ
ぱつとまつかに咲かうには
まだ十分のときが來ぬ、
その時節まで待ちませう。

追羽子の歌

ももいろの五つの羽根の
きりきりと空にまはりて、
　妹よ今日はひと日を大江戸の
昔をとめの振りの袖。

むらさきの五つの羽根の
きりきりと空にまはりて、
　妹よ正月なれば靴ならで
昔をとめの紅(べに)はな緒。

くれなゐの五つの羽根の
きりきりと空にまはりて、
　妹よ夕とならばうちつどひ
昔をとめの歌がるた。

たんぽぽの花

あの野へ行つて
蒲公英の花を
見つけたいと思ひますわ、
氷も解けてさらさらと
流れてる水の畔に。

このごろのやうな
温かい春の日ざしに照らされたら、
とても咲かずにはをられますまい
あの明るい可愛らしい
たんぽぽの花。

水の畔で
ああわたしは見つけましたわ、黄ろい花
黄ろいきものの踊り子のやうな
たんぽぽの花、
春の光を幸福さうに浴びてをりますわ。

春の歌

その一

里はみどりの
草なのに
山はましろな
雪の波。

わたしの心の
春風で
あの白雪を
とかしたい。

その二

野邊はまつかな
花なのに
この世はさみしい
荒れ野原。

わたしの心の
春風で
きれいな花を
咲かせたい。

斷られた髪

斷髮した少女に與へて

銀の鋏か
斷つた髪、
わたしの髪よ
さやうなら。

いつもふさふさ
垂れてゐた
かはいい髪よ、
黒髪よ。

どんなにおまへは
たのしげに
わたしの顔を
かざつたらう。

垂れた手さきの
つまさきまでも
とどいた髪よ
黒髪よ。

けれどあんまり
ながすぎて、
おまへはわたしを
ちらすので、

わたしの白い
首すぢに
垂れたあまりは
斷りました。

銀の鋏の
斷つた髮、
わたしの髮よ
さやうなら。

藤色のスエータア

若き未亡人の歌へる

櫻の花の咲きみちた
寂しい春のえんさきで
わたしは今日も藤色の
スエータアを編みませう。

そよとの風に花吹雪
散りみだれたる春の庭、
道子は坊やと一緒に
花をひろつてお遊びな。

今は鄙(ひな)にてくらせども
二人を生んだは花の都、
お父さんもおそくさいで

お庭の櫻でお酒をめした。

おまへたちが都にある
女學校と中學校へ
ゆく時が來ましたなら
いまに見ませう都の櫻。

まあそれまでのいくとせは
かうして暮してゆくばかり、
つまらぬ事を思はずに
スエータアを編みませう。

少女のうたへる

今のこの身は花ならば
さくらの花か薔薇の花、
いやいや、わたしは牡丹の花、
帶の模樣も緋の牡丹、
それを双乳の上にしめ
虹よ、霞よ、面紗の
色はこのみの薄桃色。

みな眩しげに見るけれど
われの眩しき人はなし、
どんなにそれが寂しいか、
うはべばかりを見る人に
どうしてわからうこの惱み、
貧しいむすめになつたなら
いつそほんとの人に逢へようと
眞實おもふこの心。

春の女・秋の女

新しい望み

美しい空、美しい春、
あらゆる不幸と禍ひとは
みな雲片れのやうに吹き拂はれて、
青々と、底深く澄み切つた空
はつ春の空、
仰げばいかに心をどる、
胸の底からは湧き出づる
この世に生きるものの新しい望み。

美しい空、美しい春、
この年こそは榮えある年と
限りなき望みいだきて
勇ましくわたしは生きて行かう、
春の立ちかへる毎に
ああ、此の世は何と云ふ美しさ。

早春

何をしに、何を話しに出て來たか？
ただ默つて、顔合せて微笑むばかり、
何もかくべつ話したいと云ふこともない、
いやいや、言葉でなくて
心と心が話してゐる、
口に出る言葉はみんな無意味だ、
默つてふたりは眺めてゐる
秩父の山にかかつてゐる雪を、
その山こえて吹く風に吹かれ吹かれて。

若草のつまもこもるとうたへりし
その武藏野の春あさく、
若草もいまだ芽ぐまず、
たゞ、ふたつの影が寂しげに
眞黑(まくろ)な土の上に搖れてゐる。

我が世の春

ものみな芽ぐみ、湧きかへる
今は春、身も人の世も。

わが世の春はめでたしと
きのふまでは思つてゐたものを、
どうしてこんなに寂しいか。
水のほとりに來てみれば
柳の若芽、すくすくと伸びて靑みて
その影うつす噴井(ふきゐ)の池水は
わたしにささやく、その寂しさが
春のはじめの春の夢、
望みは夢にこもれりと。

ものみな芽ぐみ、湧きかへる
今は春、身も人の世も。

さくら草

さくら草さくその野邊を
浮間(うきま)が原の名もなつかしや。

をとめの胸の夢のかずかず
地に落ちて花と咲いたかさくら草、
草かげにむらがつて
ほのかに紅(あか)くつつましく
かぼそい莖(くき)にふし目して。

濃い紫と紅と水色の
さしすてた三つのパラソルが
影をつくつたそのあたり、
油のやうな春の日が、
ゆるく流れてあたたかい。

さくら草さくその野邊を
浮間が原の名もなつかしや。

櫻

たまの外出に、いそいそと門口出れば、
風呂敷包みをかかへた右手の袖を
くぐるそよ風、春着も輕く
そことはなしに物匂はしい四月朝。

來る日來る日の雜用に忘れてゐたが、
屋敷町から出はづれる角の塀越しに、
枝さしのばした櫻の老木には
ああ、もう花も咲いてゐる。

花のころにはきまつて心惱ましかつたのも
今は昔の、その折りのしみじみなつかしく、
たまの外出に、用達しの用もわすれて
しばし見とれたひともと櫻。

秋晴れの日

秋晴れの靜かな眞晝
わたしはやはり熱がある。
この四五日ずつと下らぬこの熱で
病がすすんで行くのかしら、
娘の着物を縫ひながら、

幾度も腋に入れて見る
驗温器の目は下つて見えず、
こんなでわたしが病氣になり、
つひに死んだらそのあとで
娘や良人はどうなるだらう、
不幸になるのは知れてゐる、
それを思へばこの命も
自分ばかりのものではない、
いつまでも生きて行かねばならないと
或ひはおもひ、また或るは
自分のやうなおろかなものを
妻に持つのは良人の不幸
母に持つのは子の不幸
いつそ死んだがましではないか、
思ひまどへば秋の日の
靜かな光り胸に沁む。

秋の夜の寢ざめ

秋の夜中にふと眼がさめて寢られない、
長いひと夜をしみじみとおもふは昔、
はつ春の日のつみ草のこと、
さくら草さく浮間が原の春の風。

そよそよと風がわたれば
ふつと話をやめて目をはなつ、
目に近く水はひたひた
ゆるやかな春のひと日を
語るもあかぬ夢のかずかず。

いまは覺えてもゐない夢のかずかず、
あのをりのふたりの友も、いまは人妻、
西ひがしまた逢ふこともいつかわからぬ

こんな夜は思ひ出されてなつかしや。

またしても屋根の上をすぎる風
ばらばらと木の葉の落ちる音がする、
眞實わたしは祈ります、
むかしの友達がみんなたつしやで
しあはせでありますやうにと。

羽衣なくて

この世は異國、ふと下り來て
水浴みしひまに衣とられて、」
しばらくこの世に宿りする
その天人と身をばさだめつ、」
身も面もしろじろと
塵の世の塵には染まぬ
天つをとめの誇りを祕めて、」
人の世のわれや人妻。

かくされしその羽ごろもを
求め求めて探し出されず、
いつの日か天つふるさと、
その青空に飛び立つまでは
人の世の人のおきての
つらくとも堪へてあらむと、
ふるさともしばし思はず
かしづきのわれや人妻。

古風な調子

小唄

一

むすめ盛りは
丘邊のさくら
咲くともおもへば
散つてゆく。

散つたさくらに
心はないが
むすめごころは
なんとせう。

二

蝶よ花よの
年をばつみて
いつか頭に
つもる雪。

野邊の雪なら
春にはとける、
わしが身からは
消えやせぬ。

三

風がもの言や
言づてしよもの、
山のむかうの
あの人に。

なんとまうして
言づてしよか、
山のこちらで
泣いてると。

四

ぬしの來ぬ夜は
月夜の千鳥、
ないてゆけゆけ
この思ひ。

月夜ちどりは
いつまでなくか、
わしが泣寢（なきね）に
寢入るまで。

月夜の野ばら

「空には月がかすんでゐる
野には野ばらの花がうるむ」
「白いほほかぶりして
娘よ、娘よ、村の小娘、どこへ行く」
「どこへも行かぬここへ來た
このいい匂ひの花かげへ」

「眼には涙を一杯ためて
娘よ、娘よ、村の小娘、何を泣く」
「何にも泣かぬ、涙ではない
少女心（をとめごころ）のただ夜つゆ」
「あれ見よ月は冴えて來た
野ばらの花は白雪のやう」

手拭とれば顔は白珠
娘よ、娘よ、村の小娘、名は何と云ふ」
「名は恥かしい云ひたくない
お虎といふ名であるものを、
花に隠れて、月あるうちは
わたしの顔をもう見せませぬ」

野邊の小唄

よその娘さんは
さくらか梅か、
花を咲かせて
また咲かす、
わたしや木かげの
名なしぐさ、
なさけない身よ
そのまま萎れ
花の咲く日は
つひぞない、
夜ごとひとりで
泣くばかり。

秋の小唄

しぐれ、はらはら
紅葉をそめて、
秋の夜ながは
夢ばかり。
夢のゆくゑを
見果てぬうちに、
霧のなかから
夜が明ける。

夜明け、ほのぼの、
紅葉の露は、
昨夜(よべ)のしぐれか
朝霧か。

こころ妻

おもひおもはれ
心ぢや添へど、
添へぬ身ぢやもの
死ぬがまし。

これがこの世の
ならひとて
おもはぬ方(かた)に
寄る波の、

波のよる晝
浮寢(うきね)の床に
落ちる涙が
無理かいな。

うき世の波

板子一枚、下は地獄とは
そりや舟乘りよ、
わたりくらべて世の中見れば
阿波(あは)の鳴門(なると)に波もなし
とは、またよく云うた。

世間は荒海、荒灘よ、
人の心の波風に
かへらぬ舟もあら磯の
人さまざまの

浮世のなげき。

見るに無情の花さへも
身につまされてはらはらと
さてもかなしく散るものを、
花よりもろい人の身は
けふも涙がふりかかる。

朝露

露はやさしや
朝日にとける、
とけてひとつに
なつたとみれば、
露はやさしや
すぐ消える。

露と消えましよ
あしたが來たら、
わしもそなたも
ひとつに溶けて、
露と消えましよ
朝露と。

人の心と

人の心と
さくらの花は
さくも早いが
ちるも早い。

さくら、さくらと
もてはやされて
三日見ぬまに

塵となる。

ほんにこの世は
花も人も
三日見ぬまの
仇ざくら。

こひし、こひしと
おもふも三日、
三日すぎれば
また他人。

罪のふかいほど

罪のふかいほど
命はつよい、
岩の松ほど
根はかたい。

罪のふかいほど
心はふかい、
松はかたいほど
色濃いい。

罪のふかいほど
さとりも近い、
罪が救ひの
みちとなる。

罪のふかいほど
救うてくれる
彌陀の御慈悲は、
ありがたや。

麻の葉

みじか夜の麻の葉ずれの音よりも
はかなきものはわが見たる夢

序

麻の葉、麻の葉、あの爽かな葉ずれの音よ、あの涼しげな葉の感じよ。私は麻の葉が好きだ。麻の葉模様の帯をしめる女の人たちも、そのすつきりした感じが好きなのに違ひない。が、私にはなほ特殊の思ひ出が、麻の葉にはこもつてゐるのだ、それは私の故郷の海邊を思ひ出させる、故郷の海邊のわが若き日を。

新しいものを新しいものをど、ひたすらに求め喘いだ若い時が去ると、心はいつしか古いものがなつかしくなる。かうして人は故郷を思ひ出し、昔の夢のあとを踏んで見たいと思ふ。この年の二月末、私は久し振りで故郷にかへり、第二の故郷なる出雲の地を踏んだ。それは古い國である、そして遠い上代の思ひ出を胸に喚び起す。

日本人の心は、つひにはその故郷にかへる。萬葉や「松の葉」がいつまでも忘れられないのも、芭蕉が限りなく崇まれるのも、民謡が絶えず思ひ出されるのも、その世界がわれわれの心の故郷だからである。私も今暫く故郷にかへつて、その裏に強く打つ日本人の心、日本人の傳統的精神に身をゆだねる。西詩の濃情に醉うたのも長いことであつたが、年とともに、さすがに私の激しい心も、今や閑寂を求め、枯淡を愛するやうになつた。私の心はなほも靜かに澄まんことをねがつてゐる。

この「麻の葉」一巻は、如上兩様の意味での私の歸郷の土産である。新しい詩人によつて、かやうな復歸はどんなに咎められるだらう、それは想像にあまりがある。然し、私は默つて自分の道を行くばかりだ。私はいつも孤獨の詩人である、非難と默視とが私の受けた酬いであつた、だが、それも私にはふさはしいことに思ふ。

われは水草
たよりはないが
風にゆらいで
のびのびと

沖の御前に
うつ波さへも
凪いでしづかな
ときもある

大正十一年の初夏

　　　　青桐の家にて

のびのびと――ここまで私の心境も今は進んで來たのだ。そしてかやうな心の動きを鮮かに見せた點で、私はこの一卷が好きである。

　おもふにこの集は、私の詩集の中で、全く特別の地位を占めるに違ひない。私の生涯に二度とつくる事の出來ないもののやうな氣さへもする。私は敢て「古調」の名をもつてこの詩章を呼びたいと思ふ。けれども、これを新しい「松の葉」と呼ぶのは僭越の至りであらう、それはただ「麻の葉」にすぎない、私の故郷の海邊の畑に鳴りさわぐ「麻の葉」ずれの寂しい音にすぎない。

　終りに添へた「出雲新唱」は、私の久戀の地、思慕の國なる出雲の國に對する私の限りない愛着から生れた。かの地の俗謠のおもむきに則つたこの調子を、卑俗と斥ける人もあらう、いつもヴアイオリンのやうな張りつめた音色ばかり出してゐた私も、なほ三絃のおもむきを解しないものではない、これを徒らな戲れと罵る人には、私は卷末の一首をもつて答へたい。

憂き鷗

憂き鷗
うきうき鷗
けふもまた
水にかなしき
文（あや）見せて
消ゆるを
水夫（かこ）は
雪とながむる。

山清水

萩の露
芒の露も
ながれては
おなじ谷水
山清水。

とけあうた
山の清水も
ながれては
村の水車で
われてながるる。

泉のほとり

ほとばしる
泉のほとり
すて石に
ならんでかけて
はなす話も
こぼす笑ひも

誰れ知らず
おのれも知らず
夢をたどりて
泉に落ちた
君がハンケチ。

水汲み

をとめ子よ
袖をぬらすな
水を汲み
袖をぬらすな
人思ひ。

水にぬれたら
乾きもするが
戀にぬれたら
乾きやせぬ。

愛執

眞淸水の
あさき淸さを
わが戀に
うつさまほしと
おもへども
にごるもよしなや
わが戀は
君をおもひの
ふかければ。

落葉

滿山の

落葉とぶ日
われも落葉
郷を出る
風に吹かれて
何となる
身の果しらぬ
さすらひの旅。

忍駒

忍駒
しのびしのびの
しのび音の
わが戀すらも
音をばたてけり
時につけては。

枯笹

狹山には
枯葉さわだつ
今日もまた
二人來べしと
ささやくか
その枯笹は。

笹の葉

笹の葉の
うすい心を
枯れた心を
その笹の葉に
消えてゆく

雪と見る夜の
心もとなさ
君かわたしか。

里住み

朝な朝な
朝露草の
露ふみて
砂のながれの
砂ふみて
われもそなたも
すこやかになる
里にし住めば。

前髪

前髪に
手拭（てぬぐひ）かざし
水汲むと
白きかひなを
うごかせば
君はうつくし
この朝ぼらけ。

袖

こひしとも
袖をひくなよ
小むすめの
袖はもろきに
かよわきに
袖をひくなよ
こひしとも。

水草

われは水草
たよりはないが
風にゆらいで
のびのびと。

月の出

月の出に
潮はみちたよ
夕けむり
賤がふせ屋も
飯を焚く。

谷川

まろい月
ぽつかり浮いて
瀬の石に
水は鳴ります
さらさらと。

谷川を
ふたりで行けば
まろい月
どこまで追うて
くるのやら。

月見草

人に知られず
河原にさいて
しぼむ
月見草。

人に知られず
しぼんだとても
露はうるほす
月見草。

夢

夢を見ました
故郷の夢を
夜見（よみ）ヶ濱邊（はまべ）の
青あらし
君とふたりで
扨露（しとうろ）とり。

一村翁

野のけしき
見てはまどろむ
簀子（すのこ）の上に
今日も日ねもす
一村翁
晩年は
かくもあれ
浩歎の
この詩人にも。

隱栖

ふたりして
かくれて住めば
やすらかに

世をあざむもよしや
豆を煮て
番茶すすらん
この山家
ふたりかくれて。

深山櫻

人に知られず
さいてはちれど
深山櫻も
花のうち。

花のうちなら
ちらねばならぬ
春が行く日は
人知れず。

名なし草

野邊にそだつて
野邊には朽ちる
名なし小草も
花がさく。

花はさけども
野末にすめば
いつが春やら
さかりやら。

畑打

かげろふは
與作をつつんで

日もすがら
畑にもえる。

打て打て與作
畑を打て
國のためより
身のためだ。

初雪

初雪に
今日はどうとやら
かうとやら
となりのお嫁
むかひの娘
女はおしやべりだね
寒さも知らず
この初雪に。

毛蟲

毛蟲やく
煙ひとすぢ
靑々と
野中の小家。

毛蟲やく
うつくしい人
白々と
その指うごく。

毛蟲やく
音ヂリヂリと
うつくしや

その青い煙。

朝戸出

霜ばしら
くづれて
病める
胸痛む。

かよわき少女(をとめ)
いぢらしや
今朝も
朝戸出。

養生に
歩く林に
オゾンただよへ

こまやかに。

横顔

硝子ごし
音もなくして
書(ふみ)を讀む
今宵も君は
さびしとも
おぼしめさずと。

その横顔の
この頃の
あのやつれよと
ながめつつ
ふとさしぐむを
知りもせで。

雪の音

ものいはぬ夜の
雪の音
火鉢をかこんで
紅茶をのんで
顔を見合はせ
何ともなしに
笑つたよ
窓の外には
雪の音
ふたりをおきて
なほもさらさら。

少女心

少女子(をとめご)は
人を怨まず
たかぶらず
ことにふれては
ただに泣くのみ
少女子(をとめご)なれば。

静澄

よき人は
泣かず怨まず
かなしまず
悔いずおそれず
ただ笑むよ
世をばながめて。

落葉せよ

枯葉して
みにくくなりぬ
わが心
落葉せよ
落葉せよ。

道心

青麥の上一寸
黄寺のいらか
近し法燈のもと
遠し遠し
わが悟道の日。

西上人を偲ぶ

むかし見し
野中の泉
かはらねば
その面影を
またもうつせよ
憂き人のため。

思念

野をこめて
夜霧はふかく
露ふかく
哲人默して
寒燈の

及ばぬところ
ただ風が鳴る。

夜讀

霰白く
木の葉黒き
夜のあらし
なにげなく
あけし窓より
さと吹き込めば
史書幾頁
めくりとばさる
英雄の二人三人
事もなく
風が片付けて
霰ふる夜。

夜の雨

夜の雨
ぱらぱらぱつと
小家越し
生垣を越し
野に逃げて
誰に追はれて
夜の雨。

夜明方

さびしさよ
瓦斯ほのしろき
夜明がた
ひそひそ通る

ふたつの影が
誰とも知れず
さびしさよ。

ひとすぢ

君おもふ
道はひとすぢ
のがれむとは
おもへども
行くもかへるも
道はひとすぢ
おもふ戀路に
わき道もなし。

祕むる戀

切なき戀は
あらはさぬこと
あらはさぬこと
祕むるほど
祕むるほど
切なき戀は
切なれば。

火中の花

戀すれば
われもそなたも
燃え燃ゆる
火中(ほなか)の花よ
花の葉よ。

戀すれば

舟中

海に寢て
つれなき波の
音きけば
世も憂しや
人も憂しや
いかによからめ
このままに
消ゆる身ならば。

ささかに

ささかにの
雨にかくるる
家もなみ
花のそなたも
葉のわれも
おなじ火ぢやもの
灰ぢやもの。

砂の山

大河(たいが)の末に
なになれば
あまり小さな
砂の山
二つ三つ四つ
それでもそこで
君とわたしと
遊んだね
もうふた昔。

網の眞中に
ゆられゆらるる。

ささかにの
網にかかりて
てふならば
われもぬれつつ
ゆられゆらるる。

家鴨飼ひ

家鴨づれ
鳴き立つ暮は
うらさびし
うらのながれ川
水も涸れけり
草も枯れけり

うらぶれて
世を侘び住めば
うらさびし
家鴨を飼ふも。

櫻の家

櫻葉の
木の葉しぐれの
音ききて
秋はさみしや
櫻の家も。

世を侘びて
ひとりし住めば
こほろぎばかり
これが友かや

憂き人の。

清　涼

八月の
この炎天に
谷川で
衣(ころも)を洗ひ
さて身を洗ふ
山のひとり居
妻もなく
子もなし
何といふ涼しさ。

朝の囀り

めづらしや
朝のさへづり
出てみれば
ゆらぐ枝に
はや影もなし
どこかむかうで
朝のさへづり。

鳩をよぶ

鳩を飼ふ
家のむすめが
今日も日くれて
鳩をよぶ。
誰をよぶかと
みかへれど
みかへりもせず

ただ鳩をよぶ。

なよる鳩

鳩を飼ふ
むすめによばれ
なよりくる
鳩と
よばれず
路ばたに
立てるわが身と
いづれよろしき。

ゆあみ

ゆあみする
白きはだへを
繪のごとく
ながめてあれば
心もとなし
まのあたり
鳥ともなりて
飛びも立つやと
この童女(わらはめ)が。

たをやめ

たをやめは
戀もせずして
老いるてふ
海のなかなる
國を慕ふと
かたるもかなし
君はたをやめ。

ほくろ

いい着物
着られる
ほくろですよと
うれしげに
君が撫でたる
ほつそりとした
頸の
そのほくろ
ふつと心に
うかびては
むかしこひしや
なつかしや。

垣つづき

君が家は
音羽の町の
そのおくの
灯影まれなる
垣つづき
白き梅さく
垣つづき。

花の野

汽車をのりすて
二里三里
行けば行くほど
花の野邊。

この世の旅は
つらくとも
春はたのしや
ひとり旅。

瓜小屋

瓜小屋の
瓜の葉ずれに
夜すがらを
かたしく袖の
露にしつとり。

まどろむまなく
ほのぼの明くる
夏の短夜
はかなしや
青蚊帳の夢。

錦の浦

ふるさとの
錦の浦を
とぶ鷗
とぶ反子舟
いつもお山の
風に吹かれて
うらやましや。

板廂

ふるさとの
鳥の巣くひし

板扉
いまもかかるや
重たげに
ゆれてありしが。

松露

松露かはいや
松葉のしづく
いやよそなたの
涙のしづく
砂の中から
ころころと。

松露かはいや
松葉のしづく
昔こひしと
磯松かげを
行けば行くほど
ころころと。

麻の葉

麻の葉
麻の葉
その藍色の
君が白地の
中形の
きものの模様
なにを偲ばす
ふるさとの
海邊の村を。

六月の夢

みじか夜の
麻の葉ずれの
さわさわと
なる音よりも
はかなきは
君をはなれて
わが見たる夢
六月の夢。

松露

ましろにて
色つやつやし
夜見(よみ)ヶ濱(はま)の
松露のごとき
妹(いも)が肌かも。

漁火

網小屋に
あまた
かなしき漁火(いさりび)を
ふたりかぞへし
秋をわすれず。

海の秋

舟のかげ
並びて
海の香をかぎて
手とりて泣きて

わかれたる
秋の偲ばゆ。

海の響

わかれ際
海のひびきに
こめたりし
かたみの言葉
いまも鳴る
海のひびきに。

夕濱

とつぷりこ
日が暮れた
潮もみちたよ
とつぷりこ
海にも目にも。

ちろちろと
波もなげくか
千鳥もなくか
ちろちろと
濱にも身にも。

人魚

白波の
末にぽつちり
人魚がういた
黒髮の
肌しろじろと
人の女か

やつぱり人魚
波のなぞへに
うれしやな
銀の鱗が
月にきらめく。

そのころ

穗芒も
白き流れも
椎の丘も
なつかしかりし
そのころを
思ひいでては
ほろとなく
われもそなたも。

蛾

夜となれば
あかるき街（まち）に
ふらふらと
迷ひ入る身は
蛾にはあらぬか。

燕

とぶ燕
とびかふ燕
ツイと來て
さつとよこぎる
靑樹立
若葉若葉も

燕がへしに。

現身

觀ずれば
夢の世
とは思へども
心がままならぬ
せんすべもなや
生きの身なれば。

水草

根なし水草
われから浮いて
寄るべなぎさに
添ひもせず。

夢遊

秋の夜を
ねられぬままの
憂き思ひ
おもひし人は
おもはねば。

あかり吹き消し
磨硝子(すりがらす)より
ぬけいづる
外は月の夜
蟲もなくなく。

雪あられ

雪あられ
ふりてまたやむ
瓦屋根の谿に
白くとどまる
雪あられ
なにをおもふや。

月

李白の月
西行の月
月は心の
鏡かや
おもふ心を
うつしだす。

諦観

雨風を
怨みしことも
昔なり。

をりふしに
泣きつることも
昔なり。

ありがたや
ここに世相を
觀じそめては、
煩惱の徒も
身のままに

聖（ひじり）とぞなる。

身命

身後は寂寞
生前の酒
李白の嘆。

世は濁る
汨羅（べきら）は深し
屈原の怨。

菊を東籬の
下に採る
淵明が樂。

知らず
わが心
いづれにかある。

遁世

如（し）かざりき
如かざりき
戀もをとめも
名も富も。

野に庵（いほり）して
ただひとり
行ひすまして
世を終へむには。

枯草

枯草の
山にこの身を
なげ出せば
われも蟲かや
なげかるる
さてもひと夏
つたなくも
空に生きしと。

初心

ああこの夜
ふたりの胸は
戸もささず
されどかたみに
入らんともせず。

自戒

そのなみだ
空ぞ無益ぞ
泣くなかれ
人もわらふぞ
身も痩すぞ。

首筋

うつくしや
黒髪に
ほんのりあをい
君が首筋

悔ゆるを知らず
ひたすらに
小さき誇りを
つみあぐる
をみななれども。

妖

瞳には
人をあざむく
うるみあり
脣には
人をおぼらす
火あり
これが女か
君なるか。

日暮

池のほとり
日の暮に
とほれば
そこにもここにも
なく蛙
なくなく蛙
なくきけば
むかしの戀が
しのばれる。

やもり

眞晝ふと
屋根から落ちた

やもり一匹
夏の日の
かるい夢路を
おどろかす
夢から落ちた
やもり一匹
チョロチョロと
井ぜきをめぐる。

とつぷり暮れて
やもりが一匹
ノソノソ出て來て
硝子の上に
ぴつたり吸ひつく
その吸盤は
手形か花か。

薄暮

瓦斯燈が
ひとつポッツリ
人待ち顔に
ともつてゐる
小路のおくに
人も來ないで

自棄

かなしうてならぬ
いつそこのまま
雪の中に
眞裸で寢て
死にたいと
おもうた
やげツくそ。

涙

なぐさめられて
はじめて出る
涙はづかし
いい子いい子と
あやされて
急に泣き出す
子供のやうで。

浩歎

ベアトリチエと
おもひし女
何事ぞ
二二が四に

詳しからんとは
さても世の中。

十六の歳

平顔の
そのふくれたる
頬ぺたも
なつかしかりし
十六の歳。

夏帽

秋なるや
ふところを吹く
秋の風
君も痩せたり

われも痩せたり
かへりみて
わらへば
夏帽に
さつと秋風。

底の心

いつもうはべは
笑つてをれば
底の心は
人知らず。

夜なかにこつそり
泣く身とは
ゆめのゆめにも
人知らず。

よしや夢見に
それとは見ても
ばかな夢よと
わらつてすてて
底の心は
人知らず。

夕暮

夕風そよそよ
軒から
蝙蝠が飛びだす
子供がさわぐ
親爺(おやぢ)は留守か。

油問屋の

帳場の中に
若い息子が
ふみをよむ
女郎のふみを
まあ、あの長さ。

追分

若い馬子が
醉うて馬ひいて
松並木。

西は追分
東は關所……

ぽつこぽつこ
馬に曳かれて
松並木。

せめて關所の
茶屋までも……

泥龜

泥龜(どんがめ)が
なにをのそのそ
容態ぶつて
小田の畔(ほと)りを
やつこらさ。

泥龜(どんがめ)が
泥にもぐつて
またもぐり出て
甲羅を干すや

石の上。

泥龜（どんがめ）か
いくら勿體ぶつても
泥龜は
いつまでたつても
泥龜ぞ。

妻

しづかな愛のめでたさよ、
人目につかぬいつくしみ、
聲を高めてふれありく
賣物ならぬたふとさを
年へて人はさとるらん。

どんな人でももつべきは
まごころふかくつつましく
やさしい一人の妻である、
そのある日にはそれとも知らず
なくてぞ戀しき妻である。

青　柳

青柳（あをやなぎ）、枝もたわわに
かつうたひ、かつなくきけば、
うらぶれの、さすらひの
わが身ゆゑ、あはれ悲しや。

かはばたの風はよけれど
あさぎりの思ひまどひて、
たえまなき一日の
塵埃（ちり）にむせては、影うするる。

車ひく人のいこひて
煙草すふ、煙にむせて
寒空にひとり立つ。

ものの音のよどむみぎりを、
川端柳、枝垂柳
きしかたの思ひ出を泣く。

磯づたひ

松かげの透きて磯山、
小さなる網小屋も
ありし日をさながら
月かげに夢とうかべど、
呼ぶは松風、ささやくは波、
ふたすぢの影もしたしく
ともにさまよふ人はあらず。

年をへてまたここに來て、
磯草の露をふみつつ
さまよへど影はひとすぢ、
ふるさとも今は他國、
ありし日を思ひしぬびつ
磯づたひゆきゆけば、
波の音に涙とどめず。

昔の戀

海は、波は
ひびかふ角の
ほそ音もあはれ、
昔通ひし
ほそ道こえて、
けふもまた

あはれひびかふ
そのなげき。

角の響は
つたへねど、
つたへはせざれ
わが戀は、
いつの日とても
消えはせず、
ひとりつぐみて
また鳴りどよむ。

愁　思

はてしなき大海の
限りこそ、はかられね、
わが胸の悩みごこちも
見る眼には限りありとも。

いとせめてしきりうつとも
時刻む時計ならねば、
思ひいでてはたまたまに
かなしみの涙こぼるる。

ゆふづつのかゆきかくゆき、
冬空に寂しき花は
しげしげとわれをながむる、
いとしと友をあはれむがごと。

見れば小さきわが思ひ、
あはれはかなきわが愁ひ、
されどなほ、はてしなき、
大空のその青のごと。

故郷の唄

わしが故郷は
海ばたよ
朝と夕に
さしひきの
潮が鳴るぞえ
さらさらと。

わしが故郷は
海ばたよ
麻の畑に
風吹けば
葉うら葉うらを
日がてらす。

わしが故郷は
海ばたよ
夏の宵々
瓜番が
西瓜畑に
火をともす。

わしが故郷は
海ばたよ
白い砂地を
松のかげ
月夜ちどりが
波になく。

わしが故郷は
海ばたよ
花の都を

三百里
汽車はかよへど
いつ歸る。

故郷の唄

知らぬ他國に月日をかさね
いまは他國があぢきない
苦勞ばかりにやつれた身には
花の都も荒野なる。

戀しなつかしわがふるさとは
海のほとりの田舍町
その町なみの柳でさへも
昔ながらのなつかしさ。

これが浮世か世のなりゆきか
さても變るは人心
昔馴染の友だちさへも
顔をそむけてもの言はず。

これが故郷か生れた町か
わしがしるべは墓ばかり
知らぬ他國となげいた身には
生れ故郷も他國なる。

出雲新唱

關の五本松一本きりや四本あとはきられぬ夫婦松
關はよいとこ朝日を受けて大山おろしがそよそよと
風がよせるか女郎衆がよぶか關の港にかかる船
關と御崎に燈臺あれど戀のやみ路は照らしやせぬ
嫁ケ島根に夕日がさせば松の小枝を舟が行く

出雲古謠

關の五本松

出雲よいとこ
こひの國
緣をむすぶの
神の國
關の松さへ
夫婦松。

安來ぶし

出雲よいとこ
うたの國
のんでうたうて
日をくらす
たれが飽きましよ
安來ぶし。

嫁ケ島

松江よいとこ
袖師ケ浦に
かくす姿も
嫁ケ島。

出雲富士

けふは松江で
大橋なれば
はれてうれしい
出雲富士。

白魚とり

松江大橋
四つ手の網に
白魚いとしや
すくはれる。
白魚いとしや
四つ手の網に
わたしやあなたに
すくはれる。

千鳥

岸に蘆の葉
波には千鳥
嫁ヶ島根に
月がさす。

松江

たれを松江と
とふ人あらば
わたしや揖屋だと
玉つくり。

宍道湖

心中しましよか
あなたとならば
湖は名さへも
宍道うみ。

關まゐり

關にまゐろか
杵築に行こか
ひとりものなら
關に行け。

白帆

關へ關へと
白帆ははしる
關は女郎衆と
惠比須樣。

關の夜明

關はよいとこ
夜あけが來ても
ぬしをかへらす
鷄はない。

戀の港

關はよいとこ
惠比須樣ゐます
鷄がきらひも

慾のため。

鶏なき里

鶏(とり)はないとや
關のこの里に
とりはをります
かけとりが。

關であそんで

關であそんで
身上(しんしよ)をしもて
今はあひるを
關で飼ふ。

沖の御前

沖の御前(みさき)に
うつ波さへも
凪いでしづかな
ときもある。

夢心地

わきいづる春の潮のごとくなる
胸いだきつつ物をこそ思へ

「感傷の春」

序

「夢心地(ゆめごこち)」とは、英語の reverie 或はもつとあやをつけて、brown study といふ位の意味である。この題名によつても、それが私のより早い時期に屬してゐて、およそ今の心持とは、かけはなれたものである事が察せられるであらう。私の最近の心境と傾向とは、昨秋刊行した「澄める青空」の一巻に盡きてゐる。あの詩集を讀んだ人の中には、これはあまりに寂しすぎる、あまりに肅殺の氣に滿ちてゐると云つて、率直に、その理解しにくい事を訴へた人があつた。それは確かに正直な告白に違ひない。全く、そこには一點の感傷味もなく、甘美な歌謠のおもむきは、殆んど見出されないからである。それは謂はば、北極光の寂寞に照らされてゐる。そして、それが今の私の心の姿である。また、私の敢てめざすところの境地でもある。

今、私はその内生活に於ても、外生活に於ても、生涯の一番困難な時期に際會してゐる。私のめざす境地はあまりに高い、私の道はあまりにけはしい、それに、私の力はあまりに弱い、しかも——常に劍(つるぎ)に觸れて泣くべし、をののくべし。かやうに私は敢て、この弱い自分に命ずるのだ。眞實は劍のやうに鋭く、匕首のやうに刺す。しかし、一意、眞實の生を求めてすすまうとする。

かやうな時に、早い時代の、この夢とあこがれとのスキイト・ソングを見るとき、私の心は、羞恥に紅らまずにはゐられない。が、また、その底には、不思議にも、人知れず慰められもし、微笑ませられもするのである。詩は私の病である、——かう自分に私は囁く。

この reveries の中には、もとより最近の作は殆どない。概ね、「慰めの國」以前の時代に屬してゐるのである。そして、本來「慰めの國」の中に加へて、若くは、その稍以前に公表さるべきものであつたが、一冊とするに足りなかつたため、延び延びになつて今日に及んだものである。

大正十二年　五月二日

心にそまぬこのわかれ、
はやくはやくとせくやうに
小鳥はなきますあの森で。
ああ、ふたりがわかれて行くことは
なぜにかうまで堪へられぬ、
また逢ふのぞみがないならば、
さやうなら、さやうなら。

たとひ草木は枯れようと
ふたりの思ひは枯れませぬ、
たとひそなたは見えなくならうと
わたしの胸から消えはせぬ。
ああ、ふたりがわかれて行くことは
なぜにかうまで堪へられぬ、
また逢ふのぞみがないならば、
さやうなら、さやうなら。

わかれ

――古歌の替歌――

燕がくると夏になる
たとひ一羽の燕でも、
そなたを見ないと心が痛む
たとひまことはあるとても。
ああ、ふたりがわかれて行くことは
なぜにかうまで堪へられぬ、
また逢ふのぞみがないならば、
さやうなら、さやうなら。

あすはおたちか、うき世のつらさ

夢ごこち

一

みどりの草に寢ころんで
いまかいまかと待つうちに
ついうとうととまどろんで
はてなき夢にさそはれて
どれほど行つたか知らないが、
小鳥の聲にさまされて
みれどやつぱり君は來ず
草生にわたしの影ばかり、
これが夢ならよからうに。

二

これからわたしはあの方を
愛してあげなければならないと
ただあの方ばかりを懸命に
愛しなければならないと
心に誓つてゐるものを、
なぜまたこんな夢をみる
こんな悲しい夢をみる、
おほかた夢の神さまが
とりちがへたのにちがひない。

三

小鳥のねぐらは何處だやら
つい突きとめたこともない、
庭の木立でなく聲を
いつもかうして聞くばかり。
あの子の家は何處だやら
たづねることも出來ないで
とほる姿を見おくつて

けふもきのふも夢ごこち。

わたしの心

一

いたみやすいわたしの心、
風のそよぎにふるへる葉より
十一月の花より脆く
枯れて萎れて破れてしまふ。

いたみやすいわたしの心、
手にとらば死ぬるかげろふの
つゆの命のそれより脆く
消えてうすれて絶えてしまふ。

いたみやすいわたしの心、
どんなあらしが吹けばとて
荒々しい手でもまれればとて
默つて散りたいわたしの心。

二

誰も知らないわたしの心、
知られないのが寂しいけれど
知られないのが幸ひと
おもふ日もあるわたしの心。

誰も知らないわたしの心、
人の知らぬは不思議はないが
ともすればその轟きが自分でも
何だかわからないわたしの心。

誰も知らないわたしの心、
自分でもわからないその動きさへ
それでいいのだ、ただこのままで

動いてゐてくれよと祈るわたしの心。

鳴りやんだ琴

わたしの心で歌ふものは
ただ戀ばかり、あこがればかり、
いつも鳴るよと聞いてゐたのに
その胸の琴はだまつてしまつた。

いくらあこがれてゐても何になる、
つまらない、つまらない、
心はそんなにつぶやいて
そして默つてしまつたのです。

愛する人よ、あなたさへ來て下すつたなら、
うれし涙にかきくれて
わたしの心はどんなに鳴りませう、

たとひ張りつめた絃は斷れようと。

巣立ち

小鳥は飛んで行つてしまつた、
きれいな卵と生み落されて
やさしく孵されはぐくまれて
柔毛が生えて黄色な嘴で啼いてゐた小鳥は、
親鳥の巣から飛んで行つてしまつた。

かはいい小鳥よ、おまへはなぜ飛んで行つた、
親がきらひになつたのか
この巣がいやになつたのか
親もその巣もいやではないが
わたしがゐるにはもう巣が狹い。

かはいい小鳥よ、おまへは嬉しさうに

啼いて歌つて飛んで行つた、
飛んで行つておまへはいつ歸る、
遠い國で自分の巣をかけて
もう二度とかへつて來やしない。

Wide, wide world!

籠の鳥ゆゑカナリヤは
羽いろ音(ね)いろのめづらしさを
めで、めぐしまれてをりながら
その身のしあはせが身の恥と
今日もなきますかなしくて、
かなしいよりも籠の外
ひろい世界がこひしうて。

ああ、あの世はひろい美しい、
あのひろい世界に出て行つたなら
どんな花でも咲いてゐる、
綠の森もある淸い水もある、
たとへ翼やぶれて野に落ちて
誰に拾はれる身だらうと、
何處(どこ)まで行つても果てのない
ひろい世界を飛んで行きたい。

白インコと鶯

鳥なかまでも
お利巧ものの白インコ、
飼ひならされて
春の鳥屋でうたひます
「うぐひすは……」

春の鳥屋のお店から
買はれてかへり、

いい聲でなく白インコ、
お孃さまを見てはとひます
「うぐひすは……」

鶯を買つてかへつたお孃さま、
白いインコは大きい聲で
「うぐひすは……」

「鶯、おまへ、何とかお云ひ」
かうおつしやると
「ホ、ホ、ホケキヨ……」
と、なきました。

たのしい春

行きませう
行きませう、
春をたづねて
海邊に山に。

ゆるやかな波
ゆるやかな舟、
沖はかすんで
遠くの島も
音樂のやうに
線がふるへる
たのしい春。

やはらかな空
やはらかな草、
木々の枝にも
綠のいろが
春のしらせを
告げるとき、

わたしの胸も
たのしい春。

たのしい春
うつくしい春、
風がそよそよ
わたしを誘ふ
海へ山へと
わたしを誘ふ、
でも春はをります
わたしの胸に、
うつくしい春
たのしい春。

かへりませう
かへりませう、
春をたづねて
わたしの胸に。

夢に告ぐる

たれでせう？　あれはたれですか？
わたしがうつとりしてゐる時に
つい眼のまへに來て
そつとわたしに會釋（ゑしやく）するのは？

その淸らかな白衣（びやくえ）のすがた
それはわたしのいちばん仲よし
ほんとにたのしいお友だち
それはうれしいわたしの夢よ。

わたしはこの手をさしだして
あなたをおむかへしますわ、
ねえ、なつかしいわたしの夢よ

どうぞわたしと話をして頂戴。

夢よ、あなたの顏を見ながら
ふたりでしみじみ話をしてゐると
いつかわたしはそと微笑(ほほゑ)む
口でいへないその嬉しさ。

おお、うつくしい夢
わたしの淸らかな夢、
いつまでも淸らかでゐておくれ
そしてわたしを捨てないでおくれ。

樂しみ苦しみ

あはれ、樂しい年月(としつき)は
疾風(はやて)のやうに飛んでしまふ、
惱みに充ちた束の間を
苦痛(くるしみ)は永遠にする。

——古歌より——

籠の鳥

あなたはわたしのものですよ、
わたしの胸に閉(と)ぢこめられて
鍵(かぎ)はどつかにすてましたもの、
もう出ることは出來ませぬ。

野のうた

北の海から南まで
この世がわたしのものならば
みんな捨てても惜しまない、
野邊の女王のその胸が
この手のもとに打つときは。

たのしい春

春の陽はクロオヴアのやうに甘い
愛の蜜をいつぱい塗りたてられて、
人の心もみな燃えあがる
春がかへつてくるときは。

春が來たとて花はほころぶ
野邊もうるほひ露にかがやく、
をとめ心のかなしみも
愛と笑ひに代へられる。

愛せられるものと愛するものは
春の日和をあだにはせじと、
出會ひの時とところをきめて
人目をさけてむつみ合ふ。

中世紀のうた

おいで、來てくれ、愛する人よ、
わたしはあなたを待ちました、
長いことあなたを待ちました、
おいで、來てくれ、愛する人よ。

薔薇いろをしたおいしいくちで
わたしを元氣にして下さい、
元氣なものにして下さい、
薔薇いろをしたおいしいくちよ。

北國のわかれ

わが去る明日は
わが庭の

花木ことごと
しぼむべし。

鳴けようぐひす
こゑかぎり
月の今宵を
夜もすがら。

いましが歌に
わがこころ
慰めん日は、
わが庭の

花木に憂(う)さを
はらすべき
たのし日ははや
長からじ。

少女エルラの唄

わたしの夜(よる)は雪のやうに白い、
白い薔薇いろしめやかに
ただひつそりと夢ごこち、
銀(ぎん)のささべりとりながら
その雲の中からもれいづる
ほのかに青い月のやう。

わたしの夜は雪のやうに白い、
さわやかな雪のやうに冷たい、
ただぢつとして死んだやう、
けれど燃え立つ朝あけの
そのひそやかなあこがれが
熱い涙となつてわきあがる……

苺摘み

燃えるやうな夏の暑さの中に
いろいろな花の咲き匂ふとき、
わたしは選んだ、奥深い森かげに
出會ひの場所のやうにわたしの席を、
かがやく日かげのものうさに
ただぼんやりと、浮れた心持で。

色さまざまに染められた花が
露に惠まれた草がいきいきと
そよ風の中に息づいてゐる
野邊には一本の樹が立つてゐた、
下手な詩人やゑかきでは
こんな美しい場所は描けまい。

直ぐ傍らを小川はささやき流れ
小鳥はいそいそ囀つて、
遠くからは歌聲がひびいてくる、
「まるで天國だ」とわたしは叫ぶ、
これよりたのしい爽かな
有難い場所は知らないから。

わたしがさうして心を慰めて
夏の日の木蔭と涼しさとを
ひとり樂しんでゐた時に、
一人の娘が近くにやつて來て
葉を分けて苺を摘み出した、
おお、何といふ美しい娘だらう！

彼女を見ると、その場でわたしは彼女を愛した、
どんな不思議な攝理があつたのか、
わたしがそつとそばへ近づくと、

彼女は驚いたやうに振り返つて
わたしの顔を見ると眞赤になつた、
丁度その手に摘んだ苺の實のやうに。

旅人

帽子に花をさし、手に杖ついて
この世はさみしいひとり旅、
町から町へ、村から村へと旅人は
やつぱり行かねばなりませぬ。

道のほとりにどんなに花は咲かうとままよ、
そのままそつと行きすぎる、
花は匂へどかをれどままよ、
やつぱり行かねばなりませぬ。

山の麓のこんもり茂つた樹のかげに
小ぢんまりした家見れば、
ああ、あんな家に住みたいとは思へども
やつぱり行かねばなりませぬ。

この世の樂しみ數多けれど
よろめく足を驅り立てられて、
やがて墓場に辿りつき、ふりかへれば、
この世の樂みは何にもなかつた。

——古民謠から——

野花のうた

花ちる日

いたむ心地
すぐれぬ日なれば、
病むといひて
ひとりこもる。

春のゆく日に、
戸外（とのも）には
花もちるちる、
やはらかき光の中を。

世を憂しと
おもひそめては、
春來ても
心は雪にとざさるる。

おのれさへ
その冷たきにおどろかる、
この春の日に
花の身ながら。

心病みて
ひとりこもれる戸の外に、
花もちるちる
此世に名殘さらさら無げに。

日本の春

雨も日影もみちたりて

人もうるほふ春四月、
野にも山にも川邊にも
日本の花は咲きそろふ。

これが日本の花の女王、
枝もたわわに咲きほこれども
櫻はすぐに散つてしまふ、
ああ、美しいものが一番脆い。

ああ、美しい日本の少女(をとめ)、
春は四月の花とともに
若きさかりに散らばやと、
おのが姿を花にたぐへて。

不死の戀

牧の泉のわく水の

しろがね、こがね、
流れゆく淀みさながら、
わが戀もかつせかれ、かつはたゆたふ。

たゆたへどやむにやまれず、
靑葉なす淸瀧川の
水にかくれて泣きもせず、
けふもかすかに底を流るる。

秋の木の葉のふる戀の
枯れて芽生ゆることもなくて、
ふるきは逝きて
あらたなる靑葉のそよぎ。

牧の泉のわく水も
またも昔にかへりやせず、
いつももとへとかへるのは

わればかり、わが戀ばかり。

美しき人を思ひて

蓑笠につつむべく
君が淸しき白玉の
かほばせは、あまりに淨し。

眞珠なす御手も、姿も、
いづれはた、人の世ならぬ
神の代の神の姿か。

天つ國、そこに住むべく
げにやふさはめ、君こそは
神ならずとも、神の使女。

遠くゐて戀ふべき人か、
近くゐてたたへむ人か、
君をおもへば、堪へがたし。

君がまなざし、淸くつぶらに
薔薇色のその掌は何の葉ならん、
そをばおもふだに、堪へがたし。

ひらひらと白鳩の飛ぶにもまがふ
その素足して、わが方へ君來ますとき、
堪へがたし、わが醜さの堪へがたし。

春の鳥

さへづりかはす
春の鳥、
雲雀は雲の
なかにして、

よぶはいかなる
戀人ぞ。

畑にかくれて
われも待つ、
くだる雲雀と
はすかひに、
もしその人の
來もせんと。

春はちひさき
いとし兒と、
わけへだてなく
いだくらん、
雲雀とわれと
戀人を。

麥生の中に
よこたはり、
のちのまことを
誓ひつつ、
まくもやさしや
黑髮は。

花守

靑野の草をしきぶして
今日(けふ)もねむりに入りたまへ、」
そしたらあなたのその顏は
ましろな花かと見えませう。

あなたの顏をくびすぢを
花とおもうて蝶がくる、
蝶はしばらく舞ひながら

どこにとまらうかと惑ふでせう。
百合の額か薔薇の唇か、
何の憂ひもなげに咲き出した
花のめでたさいつくしけさに
蝶もみとれてしまふでせう。

ただ野にふたり、ただふたり、
ねむるあなたをみまもつて
わたしは花守、春のひと日を、
ああ、こんなたのしい仕事はない。

つれなき人に

せめてあはれとも
思ひたまはば、
靜かに夢にも
おとづれたまへ、
ああ君を待つの
外にすべなき
この胸のなかに
惱むこころを。

涙はてなき
かかる戀路の、
われはひとり寢を
泣きてあかすに、
あまりに悲しき
君がこころね。

二なき戀ゆゑ

今もわたしの手にのこる
たつた一つのこの寶、この寶石よ、

その艶はもう曇つてしまひ
そこここに疵さへついてゐるけれど
それでもやつぱりたふとい寶。

思ひに沈んでぼんやりしては
つい取落さうとしたこともあり、
またその冷たいおもてがうらめしく
いつそ碎いてしまはうかと思つたが、
ああ、これも二なき戀ゆゑ。

行くに行かれず

うつくしいあの人のもとより
はなれて行かねばならぬ、
心ならずもかなしくも
今は野心も逸樂も、名譽も富も、
みんなうたかた、夢の夢、
生も死もない今の身に
これは迷ひか煩惱か、
ああ一人の君ゆゑに
後髪がひかるるぞ。

ひかるるも
よしや、
かなしや、
大象もつなぐとふ
君が髪の毛、
などわれを
つなぎたまはぬ！

彼女の聲

彼女の聲は
わたしが生れた日から

たつた一つ心から聽いた聲だ、
忘れられない聲だ、
いつも耳についてはなれぬ聲だ。

何と形容したらよからうか、
滾々と湧き迸る泉水の音と云はうか、
晴れ渡つた大空を白鳩の翔る翼の音と云はうか、
靑海原の海の音の中に漂ひながら
白鳥のうたふ聲もあゝであらうか。

まことハイネの詩のやうな聲だ、
ハイネの歌つたロオレライの聲だ、
その甘さ、そのさわやかさ、
わたしの胸はこつそり云ふ
愛らしい聲、心にしみいる聲、恐ろしい聲……

彼女の手

彼女の手ばかり美しいものはない、
まだ一度も觸れたことさへないけれど
よのつねの柔かにふくよかな手よりも
なほなつかしく心を惹くあの手よ。

その指のあのほそやかさ、
動けば眞白い百合が風にそよぎ、
その膝の上におかれるときは
蝶がとまつてゐるやうな手よ。

でも、この痩せてほつそりした手より
世の悲しみを知つてゐる手はない、
淚に靑く染められた手よ、
わたしはその手を見てはいつも夢見心地になる。

心に問ひ

あなたのことを思つてゐると
顔がまつかになりますわ、
誰が見るでもないものを、
そしてまた今度はそのあとから
胸はかなしい思ひで一杯になる、
丁度しづかな野を霧が降るやうに。

心に答ふ

いとしい少女、
やさしいむすめ、
愛も惱みも口ではいはず
默つて笑つてゐるがよい、
そしてしづかに愛しつづけるがよい、

この世がふたりに滅びても。

片戀

ああ、かうも悲しい思ひがわいてくるものか、
おさへきれぬこの涙、
いつ乾あがることであらう。

戀してはならぬ人を戀ふるかなしさ、
自らを恥ぢて、かくれつつするこの片戀、
死なうと思ひつつもなほ君を戀ふる。

ああ、いつの日かこの悲しみをとりさられて
おもうてはならぬ姿を忘れて
昔の自分にかへつて行かれようか。

焦　心

戀といふ字は
飽くほど書きたれど、
なほ死ぬほど戀し
君戀し、
どうにかならぬものか。

羞　心

わく泉
あふるる泉、
かなしきは
夜もねむらぬ
胸のそこより
わく泉、
あら恥かしや。

さみだれ

あれはまた
誰が泣くのだ
雨の音、
咽び泣くよな
さみだれの音。

秋

春よ、春よと
小さな鳥が、
まあ氣の早い
さわぎやう。

春が來たとて
いくらなかうと、
わたしの心は
秋ぢやもの。

かへらぬ春

春はすぎたりとこしへに
ああすぎ去りぬとこしへに、
夢と望みと慰めの
汝が日はつひに去りはてぬ。

去りてかへらぬ汝が春に
いかにそそぐもあだならむ、
たとひ涙のつくるまで
その思出を泣けばとて。

光と影

そなたは光
われは影、
光が强くなるにつれ
影も色濃くなるけれど、
かなしや光は消えてしまふ
影のこの身をうちすてて。

憂き身

涙もたえて久しくなり
瞳にも天の光は消えて、
はやも秋、はやもまた春、
瘦せし身のなほ瘦せ瘦せて
息づくさへも今はくるしき。

春の夕ぐれ

「君なにゆゑに泣きたまふ」
「ただこの春の夕ぐれの
過ぎゆくことの悲しくて」
「おなじ過ぎゆく束の間の
人の命をわれも泣く」

夜の思ひ

木の葉ごとに沁み入る
月影の忍び音、
蟲さへも忍びなく
このかはたれ、
愁ひつつ歩めば
遠き響かすかにわななく。

川邊

行く水のかげのみだれに
安き身をかきにごされて、
靑蘆の葉がくれわれは
寂しさに心ひだされ、
ありし日を思ひわづらふ。

月の夜

緣側に
たつたひとりうつぶして
泣いてゐる
少女のいぢらしさ。
月のかげ

水のやうに流れて、
蒼いその頬に
キラキラと涙がひかる。

編物

あのむすめ
なにを編むとて
今日もいちにち
指の舞ひ、
白くもつれて
またほぐす
その指のをどりの
おもしろさ。

あのむすめ
朝から縁先きに
ぢつとすわつて、
ふとしては
ほつと溜息
つきながら、
なにをおもうて
毛糸編む。
うつむいたその横顔の
さみしさよ。

ものたらぬ心

青海を
すべる白帆も
鷗らも
濡れたつ杭も

ものたらぬ
ものたらぬ
ひとりしをれば
春の日ながら。

かのひとも

少女（をとめ）なりせば
そのむかし
さだめて
人を泣かせけん。

いなそれよりも
いかばかり
おのれ泣きしか
かのひとも。

寂しい心

悲しいと云ふのも
寂しいと云ふのも
ひとつこと、
おなじ心のありさまよ。

若い男のものたらぬ
悲しい寂しいその心、
きつぱりと言ひあらはせる
言葉はないか。

人の身

のぼればくだる
峠みち、

みつればかぐる
十六夜(いざよひ)の
月と人の身。

悲しみ

冬の夜さめて
水をのめば、
冷水(ひや)をのめば
冷氣腸(はらわた)にしみん、」
そのごとく
悲しみは
沁みぬ心に。

水火

火もて
かなしみを煮たる人、
水もて
涙を洗ひたる人、
われ……

いま何を煮、何を洗はん、」
かなしみは石と化し
涙は火となりたれば。

思ひ出

思ひ出の
こは何よりの幸(さち)なるを
知らぬにあらねどわが心、
そのよき言(こと)の
甘きをも
いつはりとする、

思ひ出は樂しきものを
ただわれにのみ
耽るに悲しき
思ひ出なれば。

さくら花

無慙なるかなさくら花、
心せはしき春風に
あまりにも短命なる身を
なげきいだむかさくら花、
またもはらはら散りかかる。

花のなげきを知りもせず
花の下には人が舞ふ、
通りすがりの小むすめの
袖さへ引いてさわぎののしる、
それも束の間の夢と知らずに。

つかの間の春は人にもなげかるる、
花のをとめのおもかげも
詩人のほまれもさかり短かく、
うつらふ人の世をばおもへば
花のなげきは身にも知らるる。

新春

寂しい枯野の都にも春が來た、
春は日本の國にかへり來た、
新しい希望と喜びの花を蒔きつつ
この初春は、我等に何をか語る、
「さあ、君等も心勵まし勉めたまへ
男らしく、強く、いさましく、
どんな嶮しい岩床の道も恐れずに

ただ進め、前へ前へと水の流のやうに、
君等は希望に充ちた小英雄！」と、
この年はかくも語つて、そのやさしい手もて
小さな勇士の搖籃に好運の花を飾る、
ああ、その花と咲き出でよ、我等の未來！

朝の心

わたしの小鳥がないてゐる、
さやさやと風の吹く朝、
冴えた空へと首あげて。
ちやうどわたしが
さやさやと風の吹くとき、
冴えた空へと首あげて
歌つてみたい心のやうに。

わたしの小鳥がないてゐる、
風も、木の葉も、朝の空も
みなすさまじく移る中で。
ちやうどわたしが
もえきる蠟のそのやうに
くづれゆく生の流轉の中で
歌つてみたい心のやうに。

昨日の花

この乾ける泥土を黄に染めつつ、
みどりしたたる葉ざくらは
その梢もて寂しく笑ふ。
そは昨日のわが花なりき、
わが戀なりき、夢なりき。
わが心いま梢にあり、また泥土にあり。
ただあるがままの相にて足らむ、
ゆく春の空はことなく晴れたるを。

春の序曲

「春月小曲集」題詩

たつたひとりのわたしが殘る、
あらゆる賞讃、あらゆる非難、
みな雪のやうに消えてしまふ。
雲が暫く蔽うたとても
やつぱり月はもとのまま、
いつもさびしいわたしが殘る。

一九一九年秋

春の序曲

われは燕にあらねども

われは燕にあらねども
去年(こぞ)のふる巣のくづれては
鳴く音(ね)もしげきいとなみに
都の泥をはこぶなり。

われは燕にあらねども
海原(うなばら)こえてはるばると
こひしき國にきて見れば
ここもさびしき世なりけり。

われは燕にあらねども
ここも海原、すさまじき
浪のどよもす音きけば
都かなしく鳴くものを。

水のほとり

もろくも萎(しぼ)む月草の
水のほとりにもの思ふ
ふたりとともに暮れしとき。

流れはあをくあきらかに
いつまでとなく眺めいる
四つの瞳(ひとみ)につくるなき
河は暮れつつ流るなり。

かくてもふたり言(こと)なくて
かたみに握る手をすてず

さていつまでかありぬべき。

流れはやがてくらみゆき
見かはす瞳にわかき世の
光も失せてかなしさは
蘆とかたみに戰ぐなり。

ああ月草のもろくして
萎れはつべき明日の日を
ともに萎れぬわれ等かは。

ふるさとの夜

その一

愁ひて夢もやすからず
くるしきままに目ざめては
かなしき海をながめいる。

みえがくれするいさり火の
なにを種なるわがおもひ
いともはかなき夕かな。

潮のしぶきのしろく散る
磯の夜風のつめたさに
目ざめいでたる戀ごころ。

胸にとどろくうなばらの
暗にもしるき音きけば
さこそ搖るらむあまが舟。

その二

ああいさり火のほのかなる
戀もするとは誰がうへぞ。

人も忘れしふるさとの
小夜ふけゆくをさびしとて、
抱かむ君もあらぬ身は
死ぬるもつらき物おもひ。

にがき酒だにつきぬれば
冷えにし牀もはかなくて
潮を聴きつゝうち嘆く。

その三

ああいさり火の夜もすがら
燃えて戀ふとは誰がうへぞ。

春の夜風のしめりては
おばしま寒き星かげに
長き怨みのある世ゆゑ
くらきに落つるわが涙。

人も忘れしふるさとに
くるしき夢のさめしとき
夜は悲しき歌なりき。

戀のかなしきあぢはひは

戀のかなしきあぢはひは
はかなく苦くいたましく
心ごころに沁むなるを、
浮きてぞ今日もすごしぬと
言ひよこせたるその文の
長きうらみとなるものを。

君し涙をよしといはば
我も涙は見せなむに、
君し涙を見せざれば

我も涙はかくせども、
ああ世に戀のあるかぎり
人の涙はつきざらむ。

戀のかなしきあぢはひは
はかなく苦くいたましく
心ふたつをくだけども、
しばし忘るる夜のありて
憂きをあざむく笑ひをば
君はこよなくおぼすらむ。

君の來ませしそのをりは

君よこの世のかなしさに
君よふたりのわびしさに
われは夜すがら嘆けども、
樂しきさまにいそいそと
君の來ませしそのをりは
君の笑みますそのをりは
われも涙はかくしてむ。

春　夜

すがらむ母も
もたぬ身は
泣きなむ君が
ふところに。

君がうなじを
かき抱き
落つる涙は
盡きせじと。

四つの頬に沁む

四つの日の
涙は人の
ものならず。

消ゆるともしも
おもはずに
むしろ闇こそ
よしと泣く。

梅のかをりの
ただよふに
くゆるか胸は
鳴りひびく。

いかにしたまふ
わが君よ
われいま君の
ものなるに。

君が言葉の
消ゆる間を
生くるにたへじ
わが胸は。

をとめごころ

こひをくるしとたがいひし
こひをかなしとたがいひし、
げにくるしきはこひにして
またかなしきもこひなるを。

かくいひそめしそのひとも、
さだめしこひのくるしさに
さだめしこひのかなしさに

なみだながせしひとならん。

われもくるしきこひをして
かくもかなしきこひをして、
かみのみだれのいやましに
もつれもつるるこのおもひ。

ああをとめごとなるなかれ
ああひとをこふことなかれ、
をとめはよわきものなるを
こひははかなきものなるを。

こひのくるしさかなしさに
やつれはてたるわがすがた、
むねになみだのますなべに
ほそりにけりなわがゆびは。

わがおもかげにおどろくを
ましてやひとのいかならん、
かくもやつれてあるときは
ひとのおもひのいかならん。

をとめごころのよわくして
それともことにいでざれば、
くるしきこひをたれかしる
かなしきこひをたれかしる。

けふもきのふもかのひとは
われにやさしくしたまへど、
われはうらみにおもふなり
しらずがほなるきみなれば。

こひをくるしといひたりし
ひともかくこそもだえけん、

こひをかなしといひたりし
ひともかくこそなきにけん。

夢はなにとて

夢はなにとて
夜とともに
來て夜とともに
去るならむ。

夢みることを
せめてもの
世のなぐさめと
するわれに。

夢はなにとて
夜とともに
來て夜とともに
去るならむ。

母

いつかまた
我はかへらむ、
あたたかき
母のふところ。

うつくしき
世の戀びとも、
わが母に
などかまさらむ。

わがこころ
ただに疲れぬ、

かへらなむ
いざ母のむね。

ひとり歌へる

いつしか碎けしふたつの玉よ
いつしか破れしふたつの胸よ、
かがやく玉よりこぼるる涙
きらめく胸より落ちくるなげき。

かばかりかなしき君を慕ひて
うるめる玉より涙をおくり
いためる胸よりなげきをおくる
やつれし命の絶ゆる日なきに。

ここらの眞珠よ、ここらの胸よ
碎けていつしか海にしづめど、
ああ君受けませ、涙となげき、
それにもましたるわがこの歌を。

夜半に歌へる

ねむりはすべての目蓋に落ちて
たのしき夢に入るもあらむ
くるしき夢に入るもあらむ。

ただひとり、ひとりわれ寢ねず、
醒めて、醒めての夢をおひ
殘るともし火になほもわづらふ。

ああそのくるしき思ひのなかに
われはなほ君を忘れねど
君の夢には入るやいかに。

さはれ、いかにつれなき君なりとも
つかれし夢より醒むるの時、
わが面影の、など見えぬべき。

月に寄す

みそらに靜かにかかる月よ、
いましも戀をば失ひしか
さは何ゆゑにいと蒼白き。

みそらに夕をかかる月よ、
いましの瘦せてほそりし如く
われもまたいたく瘦せたり。

みそらにはかなくかかる月よ、
いましものうくわれを照らせば
われは涙をなれにそそがむ。

おもふこと

長くもいねず
おもふこと、
ただうつくしき
君がうへ。

長くもおきず
おもふこと、
ただうるはしき
君がうへ。

若き詩人の夢

若き詩人はたかく歌へり。
滿ち足らふ喜びを歌へり。

人生を我はよく知る、
わが歌は歌の歌なり、
若き詩人はかくぞ歌へる。

黄なる沙漠に

あはれ一人の兒よ、海へ、
海のあなたの靜けき國へ。
君がこひしき人はいづこ、
戀の玉座はどこにある。
訪めて行て見よ、鴉片の國へ、
黄なる沙漠にただひとり。

さまよふ時

——大阪にて——

益なき饒舌、
絶えざる欺瞞の街、
かなしき思ひを
たづねて迷ひいる。

夜の幕さぎりは
男女をかくしたり、
ともし火うたふを
聞きすてひとり行く。

河畔ささやく
河波寢入り時、
何處か叫べる
舟夫等のだみしこゑ。

いたむは肉體、
なやむはこのこころ。

野の眞晝

獵人の群れすぎ去れり
白鳥の群れとび去れり、
かくてのこれる野邊の草
眞晝の影はゆらめきぬ。

影に衣を染めなして
影の影なるわれひとり、
しづかに天を、獵人を
白鳥の群れながめいる。

幸福は流る

幸福は流る、
しばらくもとどまるなし
わがためにとどまるなし。
水の流れのはやきが如く
幸福はしかくすみやかに
わが前をよぎりてすぐ。

幸福は流る、
いつの日かまたかへりくる
わがためにいつかへりくる。

白鳩のやうな君

いつの夕のうれしさか
この夕またよみがへる、
悲しい夕の胸のうちに……

いつの夕か……まざまざと

目に浮びくる、うれしい夕、
白鳩のやうな君とわれと……

ああその戀のうれしさは
はじめてのもの！　そして終のもの！
人妻となつてしまつた君もまた……

この夕、かなしい夕、
いつの夕のうれしさかよみがへる……
白鳩のやうな君！

悲しい夜の歌

吐息

わたしは吐息した。
鐘が鳴る。
また吐息した。

また鐘が鳴る。
夜が更けた……

もはやわたしはひとりだ。
大きな家の冷たい夜を
冷たい寢床に横はる。
とぢてもとぢても眠らぬ眼は、
いつか涙に濡れてしまふ。
ああわたしは棄てられた……

わたしは吐息した。
もう鐘は鳴らぬ……
あけ方ちかい夜は凍る。
ああわたしの血も凍る。

遠くでかすかに鷄が鳴く、
天井で鼠が騷ぐ。

冷えはわたしの床から湧く。
なげきを盛つたくらい室(へや)に
ゆめ幻がゆききする……

あはれな男、——棄てられて、泣いて
それでもおまへは男なのか。
ほんとに憎い女だが、
しかし、ほんとに美しかつた。
ああ、いつはりのあの誓ひ、
ああ、あのいつはりの美しさ……

わたしは吐息した。
憎い女のいとしさに……

秋の日比谷

秋の日比谷の夜はさびしい。
風は木の間をもれてくるけれど
人はベンチに待つてをらぬ悲しさ……
忘れることの出來ないのは過ぎたその夜の物語。
短いたのしみを追うて來て
かたく手と手を握り合ひ、
聞くともなしに聞いたのは、
あの噴水の音だつた……

秋の日比谷の夜はさびしい。
愁ひにやつれて噴水は夢としたたる。
風は木の間をもれてくるのに、
その時泣いた人は今何處(どこ)に……
わかれて行つたのだ……遠くの國へ、
また手と手をとらぬやうにと。
のこる一つの唇は蒼ざめて、今ここに顫へてる……
知れたこと、合鍵のない戸はあかぬものを。
　わかれたはある夜の夢かわかれ際が
　またあるやうな氣のする晩だ

夜が更ける

夜が更ける。鐘が鳴る。
涙がこぼれる……
海の音、とほくにとほくに、」
ああしてだんだん高まつて、
響いてゆくやうに、
わたしの愁も大きくなる……
未だに眼をさらぬ悲しい夢。恐ろしいまぼろし。
あの唇。あの瞳。
捉へようとして眼はなやみ、
さしのばした手が頭髪をつかむ。
車も行かず、足音もせぬ
さびしい夜、かなしい夜。
涙がこぼれる……
どこやらで鶏が鳴く……

ふたつの夜

君と寝る夜のうれしさと、
ひとり寝る夜のかなしさと。
どちらがよけいにうれしいか、
どちらがよけいにかなしいか。

君と寝る夜の明けやすさ。
ひとり寝る夜のさてさて長いこと。

とても短い夜ならば、
ひとり寝てもよささうなもの。
そんなに長い夜ならば、
どんなにしても逢へばいいに。

君と寝る夜がかなしうて、

ひとり寢る夜が何ともなうなつたなら、
「あなたはほんとに美しい」と
こんなこと言ふやうになつたとおなじこと。
どうで末さね。

そらざき

波が急に音をさめて男の足下を這ふ。
何か恐ろしいたくらみでもしてるかのやうに、
波は急に黙りこんで、彼の足下を這ふ。

……ぢやぶ、ぢやぶ、ぢやぶ……
それが女の聲になつて、かすかにかすかに
「ねえ、あなた、いらつしやいね。きつとよ！」……

素足が氣味の悪いほど白く浮いて、
波に浸つて、この頃の涙のやうな冷たさを、
ぢいと堪へてゐる……黙つて波がゆれにゆれる……
くらいくらい海の上に白いものが見える……
きれいな幻だ……きれいな女の幻だ……
「ねえ、あなた！」波の音ともなく女の聲ともなく……

風が來て接吻する「春だもの、ねえ君」と。
だが、男はやつぱり闇い海を見てゐる……
「きつとよ！」……また、ぢやぶ……ぢやぶ……

わがおもて

ゆゑなき愚かなる悲みに今日も疲れて、
もくねんと燈火にうちむかへば、
闇と光をわかちたる、そのくもりなき
玻璃にうかびぬ、わがおもて、
青ざめしただひとつのわがおもて。

あゝわがおもて、これや秋の葉か、
げにひるがへる枯葉なるべし、
刻めるは命運のたはむれの皺、
艶もなく、うるほひもなし、
燈火の死の影は匂ひこそすれ、寂しき命。

木かげにて

光の雨にささなる葉、
いかなる唇のくちふれてか、
たのしき面持に
そよぐみどり葉。

黄なる日向葵
はやも彼方に面むけたり、
とり殘されし女のなげき、
くらき色もてふるふ木の葉。

七月の橄欖山荘にて

――小林愛雄氏に――

蒼ざめし紫陽花の吐息かすかに、
かがやく日、いやましにかがやく眞晝、
わが心また、湧きたちぬべし、
吐息もつらく、思ひまたいと蒼ざめて。

すず風は絶えず通へど、胸には入らで
海の詩を讀みつつ行くや、
スヰンバアンの集のうへ光ふるへて、
いまやはらかき眸おとす君をわれ見る。

紫陽花の吐息のひまに、
君が言の葉とぎれとぎれに、

わが愁ほのかに燃えて、
夢見ごこちのこの眞晝、いとも靜けし。

山莊の窓によりて

——七月六日の夕主人を待つ間の作——

波がしら、白く白く大空なして、いとも白し。
黑き渡津海をわれは見る、今この窓に。
とどろとどろの波の音なして、
都のとどろきをやみなくとどろくゆふべ。

ああ心地よきかなわがよれる窓。
この夏はわがために來りて、
このそよ風はわがために吹きて、
かくてこの窓わがためにあるにも似たり。

彼方なる小さき窓にうなだれて少女はよれり。

月かげはおぼろおぼろにてらすなり窓と窓とを、
ふたつの窓なる燈火は夢をなしつつ。
夏は、風は、またかの窓は、少女のために。

觀月橋

白くはたつめたき橋をふりわたれば、
墓へ行く道にも似たり。
げに戀のおくつきへ行く今宵なれば
わたらまし、觀月橋を。
晝は深くしづめる池も浮みて見ゆる
しのばずの夜風すずしき。
敗荷の音はきかねど、あまたつらなる
燈火のなげきをば見る。
わだつみの黑きが如くもだせる山に、
などふたりいそぎ行くらむ。
墓を行く重きなやみを攝る手さきに、

われは聞く、つめたき囀を。
幸ひの島にまつるは、女神(めがみ)ときけど、
わが見るは池のかなたの、
白くはたつめたき墓に似たるたてもの。
かしこには死もやすむらむ。
わざはひの道を行くとて溜息しげし。
水鳥はいづこにねむる、
そのねむりいとも安かれ、われらは戀の
果へとて惱みの橋を今ぞ渡る。

久遠の戀人に寄す

我れかつて汝を見き、ただ一たび汝を見き、
そはいつなりしか、何處(いづこ)なりしか、
いとかすかなる記憶をたどれば
汝はいまだ十五を出でざりしと覺ゆ。
我が惱みにありしことのみは疑ふべくもあらず。

紫がかりし着物をつけて、
十ばかりなる子を連れて（そは妹なりしか）
たのしき人々の行きかよふ遊び場にして、
いとしばしなりしが、我れを見て立てりき。
そのしばしこそは、我が無窮の生涯を値(あたひ)せしなれ。
いく度びか我れはこの苦しき世に生れ出でて
汝を求めき、饑ゑ渇きて、我れは
娼家の街に入り、荒野を旅し、劇場に求めて
つひに汝を見出でざりき。
ああそも何の處に、いつの日かまためぐりあふべき―
いな、いつなりしか、我れ汝を獲き……
されどそは夢なりしか、
我が夜毎の夢に汝はつねに訪れ來(く)れば……

石像に寄せて女に示す

我れを棄てたる女よ、

我が衣はやぶれ、我が髮は亂れき、
我が面は蒼く、我が手はふるへたりき、
この餓ゑたるものを汝れはいとひき。
されど今ぞ、
汝はそのうるはしき衣をはがれて、
蒼ざめし面を伏せつ、
來れとふるふ手をさしのべて、
その光なき目はゆるしをねがふ。
汝れもまた人に棄てられしか、
人を欺きしむくいをうけて
日も夜も、雨になやみ、風にいたみ
救ひを待つか。
世の人はなど我が情を持つべきぞ、
いざ我れ抱かば、汝れもまた蘇るべき、
我が血をわけなん、
その血は氷の如き胸に通ひて
いにしへの甘き思ひもめざめいで、

その唇はくれなゐに、その髮は黑く、
その目はかがやき、その頰には光ささむ。
されどああ、我れを棄てたる女よ、
汝はつめたき石なりき、
歡びもなく、苦みもなく、
氷の目もて見るものの胸を凍らしむるのみ。

月影

ああおぼろなる月影を浴みて、
夢のごとくに立ちつくす我等がこころ。

むら雲湧きのぼる限りなき空のあなた、
我等がほりするものこそあれ、
我等があこがるるものこそあれ。

君見ずや、おぼろなるかの月影を、

さはれ、まどかなるかの月影を。

おぼろおぼろの水上遠く、
百船千船のともし火うるむ。
しづかにしづかにねむれる街は、
罪の裳をいましつくらふ。

ひとり、かの天上の若き眸よ、輝ける眸よ、
いまし月よ、いましは小き夜をてらす、
いましは小き人の子の世界をてらす。

ああおぼろなる月影を浴みて、
夢のごとくに立ちつくす我等ふたり。
今し、たのしき望はよみがへり、
今し、さやけきまことの愛は胸の扉をたたく。

うなだれて歩む人よ

月はやさしくも汝れを見まもり、
星は汝の愁をなだめ、
雲は汝の慰めに舞ふ——
されど汝は空を仰ぐことなし、
汝そも何をか見る？
うるはしき少女をか？
いな、いな、いな、
汝はただ見る塵を、埃を、
塵の中にただ自れをば見る。
その墓を求むる人のごとく、
失はれたる幸福を求むる人の如く。
汝れはただ地をのみぞ見る。
地の中にただ悩みをば見る。

半夜の断片

夜ごとの夢のくるしさは
わが枕こそこれを知れ、
夜ごといためるわが胸を
わが衾（しとね）こそうちおほへ、
ねられぬ夜半のこの涙
てらすはくらきともし火ぞ、
なげきあかせしあかつきの
わが溜息を、枕より
また衾よりよく知るは、
しばしもわれより離れやらぬ
つれなき人のおもかげぞ。

墓場

あだし野の枯草は燃ゆる日なくて、
とこしへの無言にこもる墓の一列（ひとつら）、
とぶ鳥のひとつだにも鳴けるはあらず、
青き火の消ゆるごとくに凄惨の
　　光ただよふ。

けふは東か、むら雲の爭ひひとしきり、
いな妻の鋭きふるへ、濡れつ、乾きつ、
いと遠き果（はて）の地平に暮れのこりたる
刑人の姿しどろに、あやなしや
　　光ただよふ。

夕闇の行手遙かに、行方さだめぬ
ものの影さめざめと泣きやわづらふ、
もゝの墓かたちは消えて、殘りたるは
百合の葉のかげに隱るる蛇の眼（め）か、あな
　　光ただよふ。

歌集（明治四十一二年頃）

稚歌

わがまこと悲しつたなきいつはりと君が心にうつるこのごろ

石油にも似たる性なりこころして近づきますな君は火なれば

ああ少女誰を戀へとてつくられし前なるわれにほほゑみもせず

わが少女われに手かせてそちむきて恥づる日をだに悲しといひぬ

まどろめば夢にも君のみゆるかな君はた夢のつかさなるべき

いまここに夢のごとくにあらはれてわれを戀ひ泣く人もあれかし

さりげなく人をかへしてわかれむと文を書く夜を鷄さわになく

わだつみのいろこの宮はさぐるとも君にまされる寶あらめや

海のさち山のさちをもわれすてむしかして君にかなしみを得む

いたづらに生きてあらむもよしといへど今ははかなくなりにけるかな

夜の思ひ消ゆるあかりを悲しげに磨硝子より抜けいづるかな

夜の波はわづかにかなし眞晝がた涙おぼえて聞きしにも似ず

若き火の燃えなば燃えよ消なば消よわれのねがふはつよき酒のみ

いと高き才もねがはずただひとり老いることなき少女をたまへ

ここかしこ忍びて君を奪ひゆく惡者どもの一人かわれも

泣くを恥ぢてくるしくつくるわが笑みをよしと見たまふ憎き人かな

をとめみな美なるに心はぢいりて春の夕をわれ急ぎ行く

鳩のごと小さき二つのましろなる素足よりくる春のくれかな

わがまなこ二つ何見る今日もまたあらぬかなたにさまよへれども

少女子(をとめご)はわれとわれらが戀のため靜かに生きてうつくしきかな

春さきのなまあたたかき夜のほどをふけてしきりに人おもひけり

不知火(しらぬひ)の夜ごとあやしく燃ゆるごと知らぬ女にわがこころ燃ゆ

うるはしきもろき悲しきものみなを愛(め)づる心といつなりにけむ

命といひわかき日といひ戀といひものの終りはかなしかりけり

命とは人を待つ間のひとときを木かげにねむるそれなりしかな

いねたまへあまりにものを思ひては若くて老いし人も多きに

戀と死のあひに悔あり悔ののち涙ひそかに流るるを知る

僧院にのがれ行かんとおもひつつなほ年々に人戀ひて泣く

唇のうつり香春の夜ひと夜をわれにうれしき夢見せてけり

つとうかびつとまた消ゆる春の夜の思ひを君につたへまほしき

春の夜はなつかしきものかず多しなかにも君のうしろ姿の

潮の香に眞晝の秋のうたたねは身につらきもの涙はてなし

ふるさとの月草の花わすられじ泣きし少女もまた忘られじ

君によりかかる冷たき涙をばわが流すことならひとなりぬ

りんだうの花ざかりなる秋のくれ君の手とればやや痩せの見ゆ

暮れてゆくまがきのうちにほの白く去りし少女に似て匂ふ梅

はじめ見てわれはうれしくつぎに見てわれはかなしく君を慕ひぬ

この不思議わが慕ふ人のわれを見てそしらぬ顏にすぐる不思議さ

かずならぬわが身なれども君ゆゑに人にましたる物思ひする

海あをしかぎりなき世のおもかげに似たるさびしき冬の夕に

日もすがら海の上なるあはうどりなれも悲しきわれも悲しき

沖つべに消えゆく船のあとひきてのこる煙りと身をなさんかも

わが戀はくらき夜海のおくにしてほのかにひとつ輝ける火か

君をえずば微塵となりて碎けよとをさなく神に祈りたりしか

高山をふるさととして大河に棲むかの鳥にならましものを

朝あさを露草ふみて砂ふみてあさあさ淸き流れわたりぬ

砂原につづく草場のしら露に濡れてかよひしひとつ家の路

やや靑き花のやうなる瞳よとわれを見るとき胸さわぎしか

をさな兒をあやなすごときゑみをもてわれ見し人も老いやしぬらん

死ぬといへど人はむなしく聞き流し老いし日のこと饒舌するも

水わたるひとりにあらでいつたりの十の素足の浮草の花

たよりなきおのれをひとり見てあればやがて悲しき涙ながれぬ

いとあつし千歳のあとのある時に一人のやくる火と思ふかな

火の前に立つは二人かひた泣きてこの日この時やくるわれ見る

涙さへ出でぬかなしさうれしさの世よとはじめて知りしわれかな

一人には足らで二人にあまるてふあやしき人をおもしろがりき

ことさらに傷けさては罵りてそののちわれを思ふことなし

さりとてもかかる悲しきなりはひに十年（とゝせ）五年（いつとせ）すぎにけるかな

知る人のなきぞ悲しきわが戀のひそかなるにも飽き果てしとき

わが戀をさまたぐる人のあらざるをむしろ寂しくおもふこのごろ

深見草もゆる夕の花のごとふかくも君をおもひそめてし

淺見草ふづきの朝の潮ざゐにあさくも君をおもひそめてし

少女子（をとめご）があみだ河原に立ちいでて茅花つむ日を風な吹きそね

いつしかに淺茅淺茅といふ原にわれをし疎む君となりけむ

ひと目見しむかしの少女（をとめ）海のうへをましろき鳥となりて來にける

憎むにも憎みがたきにものたらずのちはいとしくなりにけるかな

かのをみな悔ゆる胸なしひたすらに小さき誇りをつみ上ぐるのみ

梅ばやしあるかなきかの朝雨にいつか濡れたる肩ならべ行く

胸にかざすこの花よりもいやさらに眞紅の花ぞうちに咲くなる

歡樂を捨てて涙にわれ行かむああ歡樂は盡くるときあり

おん指の白く長きをわすれえじふれてみし間はしばしなれども

わがあがむたふときお指水をくみ米とぎたまふことの悲しき

あやまちてそとふれたりしその時の指のふるへを忘れかねつも

大君につかふるごとく一生を君にささぐと誓ひたれども

君見ると長き宵羽の町まちをあかず通ひしわれなりしかな

五日ゐて月に一度も來ずなりし君ゆゑまたも逢ひえじと泣く

町に逢ひただつかのまをあこがれし少女あまたを思ひいづる夜

すぎがてに人によく似しわれを見てつかのまわれを戀へる少女か

人を戀ふ少女なるべしつとわれに媚をわかちて行きすぎにけり

戀を知る瞳うつくしあたたかき夜なればわれを戀ふ眼とも見る

なつかしき瞳のまへを足ばやに去りし心の呪はしきかな

讚め言にまさりてうれしほほゑみてわれを眺めし人をおもへば

流沙にも似たるわびしき果てよとてふたり寂しく笑みてわかれぬ

病人は病める木の葉のほろと散るそを見て泣きぬ親の戀しと

雨風を怨みし昨日を問ふなかれここに世相を觀じそめてき

觀ずれば夢の世なりとおもへどもなほ去りやらぬ執着に泣く

死にむかひなほ微笑める大量のわれと昨日は知らざりしかな

ふるとしの雪やいづことうつくしき花をながめて心さとりぬ

如かざりき戀をもとめもただひとり行ひすまして世を終へむには

求めて行く果ては知らねどただ今日の思ひのうちにわれ生きむかな

君をおもふほかには何も知らずなどほこりかに言ふ少女あらぬか

憎むまじ女のゆゑの罪なれば若きいのちのつくるときまで

ひとつ星空のまなかに靑ざめてわれも悲しと慰むるかな

憎まむとすれど憎めぬ君なればせめてすねても見たき夜かな

日の目だに見ずて育ちし草なれば月の影だにすねて望まず

失せしものみな美しくなつかししそれゆゑ君もわれに失せしか

助けたまへ若きわが世はいと狹しあまりに慕ふ人多きゆゑ

世の人のあらゆる人にすてられつふみにじられし女を戀はん

言しげく別れしのちはこのふたりいとつつましく泣くのみにして

疲れたるわれか戀にも宿世(すくせ)にも泣くももものうし笑むもものうし

生ける海生ける命の波うたふわが身のためのこれや早少女(さをとめ)

ゆふづつのさやにさやかに荒れくるふ海を見まもる如きみひとみ

見しは春たそがれやみの格子戸のなかなる君をやさしき君を

うま酒の醉ひは夜半までたもたねど君がゐまひはわが失するまで

わが憎む人も來よかし今日のこのよろこびのうちに心波立つ

つらかりきつらしとかこつ今日の日のありと覺えぬわれなりしとき

憎まれて憎みてはてはのろはれてのろひてわれやひとり死ぬべき

死なむとて靜かに涙ながるてふやさしき人をあはれと思ひぬ

ひとりゐの縁にあかるき月かげに蒼きもろ頰に涙じかれり

葉かげやみあやにく顏は見えざれどむしろ夢なすさまなつかしき

黑髮の夜ぶかの床に亂るるをかきつくらへる白き手の見ゆ

いたましく今日にやつれて明日を待つ人は昨日を思ひ出(で)ぬかな

石うてば石も音する世にありてさはいつまでか默(もだ)したまふや

靑き花たづねあぐみてみなつひに逝きし昔の人なつかしき

宿世(すくせ)より流れ落つる日ひとつひとつ食(は)みてすぐさむよき人たちと

崖のぞくかかる小さきおこなひになほ大いなる恐れもつ君

くろ髪の千筋のみだれなにおもふ若き愁ひのさわなる夕

をさな兒に似たるちひさきはぢらひをおぼえて君にむかひあふ夜

春の夜はくつるも惜しき四つの袖かたみに戀をしぼりつくさじ

音もなく霰はふりて地に消えぬかくも消えゆくわが身なるべき

ひとりにはやがて悲しくなりにけり板屋をたたくあかつきの雨

君ゆゑに十の少女(をとめ)をはなれ行きひとり聽くなるあかつきの雨

オルガンのキイの白きをはしる指さらにましろき春の夕ぐれ

深浦の波に手ひたしひややけき君の心を知りぬと云ひぬ

いつまでもながらへはせじかくまでもはかなきものの限りなる世に

十九にて二十五にして死ぬといふはかなき言(こと)も樂しかりけり

なかなかに死の一言(ひとこと)は言ひいでず生くと苦しき胸さするのみ

わが神はわれを憎みてわが後世(ごせ)を愛でたまふごとき心地こそすれ

戲歌

われいまだ十九にみたず戀せむと日ごと町をばさまよへれども

いたづらに人を罵りふと今日は才なきわれを見ておどろきぬ

われ才のなきはくやまずただ金のあらぬを切(せ)ちに嘆かまほしき

わが才を誰かいなまむただわれと父と母との三人(みたり)なり

せば

もしも世にただわれ一人あるなればわれにまさりてよき人なきを

わが姉はひとたび嫁ぎ肥えたれど夫にわかれてまた痩せにけり

をりふしの思ひあまりて人知れず卑しき戀もしてぞありつる

草山につたなく生きし古る命よこたへ歌も泣きうたふわれ

詩の才われになければくやしくはあれど夕を酒のみてゐる

人はみな口の大きさあざけれどわがおもふ君は口なきもよし

海こえて夜のみの國の毛蒲團に二百の夜を寢にゆかむかな

あはうどり今日もまた來よわだつみにうつらうつらのわざくらべせむ

阪のぼる車のあとに腕くみてわが行くゆふべ秋は來にけり

傲りたる髭の間を行かむより馬糞ひろひとわれならむかな

いにしへの猛者のやうにも歩まむかさらずば隅にかくれゐなむか

きもののみ美人なる世にわれ生きてきもの戀ひ居るいたましきかな

牛肉のごとく電車のつり革にをとこをんなのぶらさがる國

火をわたる源七翁は二宮を說くやからよりまさりたるらし

英語にて惡口たたく今の世に八百屋お七はまた出でぬかも

若からぬ美しからぬ女ゆゑ惜しくも金の失せにけるかな

かの女わが月給の額ききてやがてしきりに戀ひにける

かな
餘の悲しみ何か如かむやこの國の少女ことごと算盤を
持つ
女うたふ片髪にても禿にても藏にお米のあるがよろし
き
二宮の翁がをしへはよきをしへわれもまもらむ勳章た
まへ
大君の御德おもへばいくさしてあだ殺したくおもほゆ
るかも
遺憾なくわれすてられぬ仕方なしに今日は酒場に酒の
みに行く
日比谷なる便所の壁のらくがきに似たるたはれを云へ
ば名いでむ
われもまた大人なるべしいかにして生くべきかてふこ
と考ふる
佛蘭西の女をほめてわがくにの女いやしむかの友この
友

佛蘭西の女ばかりが女かはまづこころみに門に立ちて
みよ
知る知らぬ人をつどひて大君のみこと說くほどよき事
はなし
わが樗牛いしくも云ひぬげにわれも醉ひてうたはむ公
德唱歌を
世に生きむ心ありせば汝れもまたまめにお髭の塵はら
へかし
よき歌はかなしき時になると云へ文字もてあそぶ人々
に行き
夜のねがひ黄ばめる月のうしろよりさらにもひとつ月
出でよかし
都路を塵にまみれし花見むと塵にまみれし人群れて行
く
この戀の邪宗なりせばころべとぞ人のいふ時われころ
びてむ
ころべころべかくうちわめく人もあれ戀のふたりはと

くころびてむ

泣き男柩(ひつぎ)のさきに泣くごとくわれ泣きにけり君のみまへに

たはむれて金魚に似たる顔なりとわが慕ふ人をいふは誰が子ぞ

金魚賣り戀ひ待つそれもことわりや君は金魚に似てぞありつる

をみな子は鬼も十八蛇(じや)もはたちましてやかくもうつくしき君

遠くゐてわれを慕へる人ありとおもへばただに戀ひもかねつる

なほ君を信ずといふはおろかなり死ぬもふたりと古きこと言ふ

口笛を吹き吹きありく子等もやがて車を曳かむ車に乘らむ

手毬つきて遊べる少女(をとめ)そのなかにわが妻となる人はあらぬか

戀を賣る店をひらきて副業に涙も買はむと憎きたはむれ

われおもふは十三度目に嫁に來るやきもちやきの妻のみならん

黒人(くろんぼ)に似たる黒さもなつかししあなた好きよと言へる少女(をとめ)は

すねられて爲すすべ知らずおろおろと惑ふをつひに手(て)管(くだ)となしぬ

わが戀は薹(たふ)やたちけむこのごろはからかふ人もなくなりにけり

われを嫌ふ女はつねに醜しとさだめてのちの心やすけさ

わが言(こと)は誰れに言はせむわれ死にてのちのわが世にわれあらぬとき

なべて世に惑ひなき日となりにけむ若くて戀をわれも呪ひぬ

かしこくもすめらみことの下(もと)にしてかかるめでたき戀

もするかな
をとこもつことのみいとどたくみなるその下女をさへ
うつくしとみる
かなしさに堪へずつひには雪の中に眞裸に寢て死なん
とぞおもふ
おもふさま泣いて見たいと目こすればさすがに少し涙
出でにき
うつくしき女あまりに多きかなされど慕ふに足る女な
し
おなじこと繰返しいふくせつきぬ自然主義よりこの方
われは
煩悶にわれは飽きたりむしろかの彌次喜多となりふざ
け散らさむ
國のためわれは歌をばつくるなり奚ぞ大臣に劣るべけ
むや
文豪は多きうれへず日に月に雜誌文學さかんなるかな
や

男子等も廂髪してリボンなど靴にしむすぶ御世のめで
たさ
水白粉ほのにほどこし象徴詩となへてありく詩人めで
たし
かくてなほ君なびかずばヨボ國の泣き男ともなりや果
てなむ
わが鼻はいささかまろしさはあれどツルゲエネフに似
ると高むる
吾妹子が眉のほとりの小さなる痣をうれしく思ほゆる
かも
いにしへにただ彥九郎今の世に官吏ことごと忠君を說
く
果てもなき三千世界に一人なるすめらみことにわれも
つかへむ
女等の顏をあまねく解剖し批判する身も戀せざらむ
や
戀人に自らほこるあさましき下根のものは棄てられに

けり
忽ちにわれは戀してたちまちにすてられにけり電光(いなづま)のごと
夢にして裸をどりを見てしよりわれはこの戀すてむとぞおもふ
かくばかり世には悲しき夢もあるか裸をどりを君なしましき
やぶれ傘くるくるまはし寺小屋の歸りに餅を食ひし父かも
衣(きぬ)にうく大き乳房をめづるなどたはむるるわれををさな兒と見ませ
かへり來てただ手をあぶることのほか餘念もあらぬ君のうとまし
目白より妻をめとりて天金の詩集いだせば生き甲斐あらむ
株買ひて金儲けたるそのをりは勤儉の說つつしみ聞かまし

戀のくにをみなのくにの巡禮にわれはすぐさむ若き月日を
戀の花ふたつの胸に咲かせむとかの溫室に入りしならねど

戊申詔勅

大君の言(こと)にしあれば芋を食ひ味噌をなめつつ世をすぎんかも

自嘲

われしこをやがて妻もちみにくき子あまた生ませむわが國のため

佛蘭西を愛する友に

そのうへに佛蘭西の旗ひるがへる風きて吹きぬ若人(わかうど)の
髮

新しい春の歌

小曲

一

風に吹かれる蘆の葉は
なにを嘆いてゐるのだらう、
泣いてふるへて吐息して
それでもやつぱり折れもせず。

二

わたしの心の薔薇の花、
好き放題につみすてて、
これが別れといふ日にも
そなたは笑つて泣きもせず。

三

ほんにわたしは仕合せものよ、
顔をほんのりあからめて
なさけに燃える黒い眼が
ぢつとこちらを見てくれる。

四

おやすみ、おやすみ、かはいい子、
わたしの夢を見ながらに。
夜中になつて、かはいい子、
またゆり起してあげるまで。

五

わたしの夢ですんだひと、
幸福な日をくれたひと、
胸をやぶつて行つたひと、

みんな今ではおなじこと
思ひ出してはなつかしい。

六

わたしの膝で泣いたひと、
默つてわかれて行つたひと、
につこり笑つて死んだひと、
つやつぽい目を投げたひと、
背中あはせですんだひと、
それが殘らず忘られぬ。

七

わたしの愛よ、おまへがほんの愛ならば、
あの黑目がちな凉しい目のなかから
あのにくらしい心の底まで忍びこみ、
そこに隱れてゐる祕密を見ておいで。
それさへ、それだけの事さへ出來ないで、

それでおまへはどうして愛と呼ばれよう。

八

いつかはおまへも死んでしまふだらう、
そしたらもう誰もおまへを思出してはくれないだらう
その時にはみんな自分の好きな人のことばかり
思つてゐるのにせはしくて死んだ人などに用はない。
いつもいつまでもおまへのことを忘れない
おまへを好いてゐるたつた一人のわたしのほかは。
それなのに、どうしておまへはわたしにすげないのだ
らう。

九

あなたが來るといふ日には
いくら抑へても心が躍る、
でも愈々あなたと向き合つて
目を見合はせてはなすとき、

わたしの目はいつも負けてしまひ
悲しくなつてたまらない、
ああ、わたしはあなたのねうちがない
あなたはそんなに賢く美しいのに
わたしは醜く愚かだものを。

十

しづかな眉のやはらかさ、
白い齒なみのうつくしさ、
首をかたむけほほゑんで
わたしの顏をぢつと見て、
すぎた日のこと、明日のこと、
教會のこと、歌のこと、
それからそれへきりのない
そのさわやかな言葉の波に
まきこまれては夢ごこち、
そつと盗んで見る顏が
むかしの夢をよびさます。

十一

きれいな花はみな好きだ
だが長くもつのが一ばんいい、
きれいな娘はみな好きだ
だが信實なのが一ばんいい。

十二

きれいな娘を見るごとに
わたしの妻と呼んで見たい、
だがそれは所詮かなはぬ望みなら
その一人でも我慢する。

十三

銀座の柳に風が吹く、
男の醉ひに風が吹く、

青い酒つぐ白い手に
髪の亂れに風が吹く。

十四

まつさをな蚊帳のなかに
ひとりで寢てゐると
あとからあとから寄せる波、
疊の上のこの海に
おぼれるほどの涼しさよ、
けふもかうして寢てくらす。

十五

赤い林檎もそのなかが
くさつてをつたら何にならう、
きれいな娘も本心が
うそであつたら何にならう。

十六

戀と燕は巣をつくる。
花のさわぎもよそにして
燕はせつせと泥をはこぶ。
ふたりも小さな巣をつくる。

十七

さあ、一緒に山にのぼりませう、
だがころんではいやですよ、
あなたのかはいいその足が
折れたらわたしはどうしませう。

十八

けふも水車はまはつてゐる
なぜだか自分も知らないで、
娘はわたしにはらたてた

なぜだか自分も知らないで。

十九

ふたりが行けば、公園の
枝にとまつて鳴いてゐた
小鳥がこちらを見返して
つれの小鳥に何か言ふ、
何と言つたか知りたいな。

二十

二羽の小鳥がふざけてゐるを
ぼんやりふたりで見てゐると、
一羽の羽根から落ちた毛を
一羽がひろつて巣にはこぶ。
だからあなたの落髪を
本のあひだにはさんでをつたとて
わらふものではありません。

二十一

橋のたもとに家がある、
家のなかには娘がひとり
わたしがとほつて行くごとに
小鳥のやうにうたつてゐる、
朝のゆきにはうれしげに
晩のもどりにはかなしげに。

二十二

ばん方にいつも通ればあの家の
窓から見てゐるあのむすめ、
顔ははつきり見えないけれど
ちやうどま白な花のやう、
なんとはなしになつかしい。

二十三

涙のまじつた接吻を奪る
男はいちばん罪がふかい、
だが愛もないのに接吻をする
女はもつと罪がふかい。

二十四

山の上には風が吹く、
風に吹かれて松が鳴る、
松の下には若い衆の
膝にもたれて小娘が
忘れちやいやよと泣いてゐる。

二十五

たうとう小鳥をつかまへた
もうどうあつても放すものか、
かうしてぴくぴくふるへてゐる
小さな手を握つてゐるときは
ああ、この世も我れも夢のやう。

二十六

たのしい戀に息絶えて
おまへの胸にうめられて
どれほどたつたか知らないが、
おまへの接吻にさまされて
見ればかがやくふたつの星が
ぢつとこちらを見下してゐる。

二十七

こんなに思ひ合つてゐるものを
ふたりが一緒になれぬとは
なんてかなしい世でせうか、
これが最後といふときに
ぢつといつまでもだきあつてると
わすれなぐさが生えませう。

二十八

おまへの長い睫毛から
したたる露を手にうけて
瓶にをさめてとつておき、
年とつてから飲んだなら
若がへるにちがひない。

二十九

花壇のなかを歩くなら
花のにほひにむせかへる、
だが女學校のひけるとき
通りかかれば息づまる、
それでなくても少女（をとめ）といへば
生きた花ゆゑ香（か）もつよい。

三十

おいでなさいといふ聲は
小鳥の歌よりたのしいが、
さやうならといふその聲は
蟲の音（ね）よりもなほかなしい。

三十一

あの煙草屋の看板むすめ
あれがわたしの好きな娘（こ）だ、
愛嬌があつて深切で
いつもあなたは好きよと言つてゐた、
それにどうしたわけか今日はまた
知らぬ顔してすましてゐる、
こんな筈ではなかつたが。

三十二

きりぎりす、きりぎりす、
秋の夜つぴて何を泣く、

生きてゐるのがつらくてか
胸に思ひがつもつてか。
いえ、いえ、なんにも思はずに
おまへは床下(ゆかした)で泣いてゐる、
けれど泣かない私のはうが
心の底では泣いてゐる、
生きてゐるのがつらいので
胸に思ひがつもるので。

三十三

どんな苦勞も我慢して
默つて愚痴をこぼさずに
仕事に精を出すがよい。
そしたら心が落着かう。

三十四

いろいろ求めても手に入らず
いろいろ聞いてもさとられず
いろいろ見ても氣が附かず
かうして人は死んでしまふ。

三十五

おお、やさしいやさしいそよ風よ、
おまへの息に雪は消え
心の氷もとけそめる。
おお、やさしいやさしい春風よ、
おまへは花をもつてくる、
わたしにも愛をもつて來い。

三十六

春はいつまでつづかない
春の日はすぐ暮れてしまふ、
はやく花輪の花をつみ
美しい口に接吻(きす)をして

世のたのしみを吸ふがよい、
花はしをれる香はうせる
若い日はすぐ行つてしまふ。

三十七

わたしがいつも求めて喘いでゐる
遙かなはてもない永遠の象は
あなたの顔ではあるまいか
あなたの心ではあるまいか。
わたしはあなたに接吻をして
永遠に觸れたのだとかんがへたい。

三十八

今日もわたしはかんがへる
生や死のこと永遠のこと、
それがみなあなたひとりにつながつてゐる、
あなたがなければ永遠も何であらう
生も死もわたしには何であらう、
あなたを腕に卷いてゐると
全世界をつかまへてゐる氣がする。

三十九

——ハイネ詩集を愛讀する少女に——

あなたの瞳は星でない
あなたの口は薔薇でない
あなたの指は百合でない、
あなたの瞳は晝間も燃える
あなたの口には刺はない
あなたの指はいつもあたたかい。

四十

わたしの短い生涯のうちに
出あつたたくさんの人のうちでも
どうしても忘れることの出來ない人、

その人はわたしによつて生きてゐる
わたしの死ぬまで生きてゐる。
ああ、わたしもかうして人の心に生きてゐたい、
それでなくつてどうして詩人の甲斐がある。

四十一

近所の洋服屋の娘がとほる。
髪をまんなかから分けた身に
長いマントを着てとほる、
きけば女優になつたとさ。

四十二

女優、女優、オペラの女優、
飛んだり跳ねたり歌つたり、
冗談言つたり笑つたり
ほんとにのん氣な人氣もの。
末は野末の野たれ死に、
どうでもいいわそんなこと、
今の今さへ愉快なら、
わたしは美しいんだもの
若いんだもの。

四十三

わたしのかないが死んだなら
京都へ行つてつれてくる
もつと若くてきれいなのをと、
死ものぐるひで手に入れた
戀女房のまへで言ふ
こんなぶをとこの友だちに、
心がはりをして嫁入つた
浮氣な女を思ひつめ
死んだ男のあることが
さても不思議なことである。

四十四

目に見えぬ紐がふたりをむすんでゐます
心と心をつなぎ合はせた愛の紐、
これをとくのは神さまばかりと思つてゐたら、
あなたはいきなりその紐を
何の造作(ざうさ)もなく切つてしまふ、
目に見える紐がわたしはようござんすと。

四十五

ダンテのベアトリチエ、
ペトラルカのラウラ、
それもわたしには何でもない
わたしの女王はあなたです。

だがわたしはダンテやペトラルカのやうに
讃美の歌を紙に殘しはしますまい、
わたしはそつとそれを押しつけませう
あなたの頰に、あなたの唇(くち)に。

四十六

たのしい歌をつくらうと
心にかけてゐたものを、
かなしい歌のうたひ手に
いつかわたしはなつてゐる。

ああ、わたしの歌のかなしさは
みなあの人のしたことだ、
わたしをすてたあの人の
あのにくい笑顔(ゑがほ)に罪はある。

四十七

いつも靜かにつつましく
眼を伏せてばかりをりながら、

おとなしい娘よ、
おまへはどうしてこのやうに
わたしの心をくるはせる？

つつましやかにしとやかに
口かず少くしてをりながら、
おとなしい娘よ、
おまへはどうしてこのやうに
わたしをいぢめてぢらします？

四十八

醉つたうちさへ涙がおちる
さめたのちにはどれほどか、
どうせさびしいこの世なら
さめて泣くより醉つて泣け。

人のさまみてふと思ひ出す

ほんにきたないこのこころ、
何から何までいやならいつそ
すてて惜しくもないいのち。

四十九

ふたりが接吻をしたときに
誰も見てゐた人はない、
空に出てゐる星のほか、
星に遠慮はいるものか。

ところが星が落ちて來て
海に祕密を告げたので、
海は小舟の櫓にはなし、
櫓は船頭にささやいた。

そこで船頭はなかよしの
娘に接吻してはなしした、

さあそこで町でも田圃でも
もうみんなふたりのことばかり。

五十

こんなにまだわたしは若いのに
知らぬ他國でただひとり
死んで行かねばならないのか。

かうして死なねばならぬのを
わたしの父が知つたらば
死ぬほど嘆いてくれるだらう。

もし母がそれを知つたらば
もしまた妹が知つたらば
死ぬほど泣いてくれるだらう。

だがもし死なねばならぬのを
それをあの娘が知つたらば
ほんとに病氣になつてしまひ、
遠い故鄕のあの部屋で
おなじその日のおなじとき
死んでくれるにちがひない。

五十一

逢うたときには出逢ひの接吻よ
わかれて行くには別れの接吻よ、
ひとつの接吻には千の接吻。

まごころこめたこの戯れよ、
口から口へ押しつけられて
心と心をとりむすぶ。

あなたの息をわたしが吸へば

あなたはわたしの息を吸ふ、
そして二人の魂は一つにとける。

それでも二人は滿足しない、
もつと近くにゆくときは
天も地もみな消えてしまふ。

五十二

手にさはるもののひやりとするその氣持よさ、
わたしははるばる海を越えて來た冷たい瓶をさげて
十二ばかりの女の兒の紅い肩掛を見てあるく。

芳烈舌をも燒く佛蘭西の酒を手にさげて
鼠色したくもり日の町は行くけれど、
ああ、あの可愛い、溫かさうな紅い肩掛は、わたしにない。

紅い肩掛はまだまだ蕾の薔薇の花、
わたしは五年の後と、つい後のことを夢みながら
もう醉つたやうな氣持で步いて行く。

五十三

わたしが死んだら海のほとりに埋めて下さい、
世間の噂やわる口のなかに生きてゐるよりは
松風の音と波の響とが聞いてゐたい、
たくさんの仲間のあひだに埋められて
死んでからさへ氣がねしてばかりゐるよりは、
世間の口からはすつかり忘れられてしまひ
さびしい海邊の墓にひとりでよこたはり、
一生のあやまちや罪やかなしみを
人の耳には遠慮なく思ひ返して嘆きたい。

少女の夢

一

銀の拍車に、金の鞭、
羽のある馬にまたがつて
遠いお國の王子さまが
迎へに來て下さるその日まで
わたしはおとなしく遊んでをりますわ。

二

あなたが木にのぼつてゐるのを見ると
わたしものぼつて行きたいわ。
どんなにその木は高くとも
女だてらと言はれうと。

三

わたしはもう機を織ることが出來ませぬ
梭の手がくるうてなりませぬ、
きれいな男の兒がわたしをいぢめます
しよつちう目のまへへ出て來ては、
お母さま、あなたの娘をいぢめます。

四

けふもわたしはあみ物よ
きれいな袋をあみますわ、
あなたの胸のいつはりを
殘らず入れてしまふため、
かなしい心であみますわ。

五

あなたは薔薇よわたしは百合と

呼んで遊んで來たものを
わかれわかれになつてしまひ、
風に吹かれてたたかれて
薔薇はかなしや散つてしまひ
百合もこんなに萎れました。

六

すてた人なら薄情ものよ
あきらめなさいと敎へてくれる、
これがどうしてあきらめられよう
いつそ死んでしまつたそのときは、
あの人だとて夕方などに
ついひよつと不幸な女を思ひ出し、
かはいさうにとつぶやいて
すまぬといふ氣もしませうに。

七

わたしの心の小さな部屋を
けふはきれいに掃除して
花をいけたり繪をかけて
あなたのおいでを待ちませう、
わたしの心のお客さま
どうぞおはひり下さいまし、
ほんとにせまい部屋ですけれど
あたたかい火が燃えてます、
ねむたくおなりになつたなら
やはらかい寢床もございます。

八

あの方をひと目見てからは
まるで盲目(めくら)になつたやう、
どちらを向いても見えるのは
ただあの方の顏ばかり、
うつらうつらとしてゐるやうに

あのお姿がちらちらする、
ふかい闇からあざやかに
あの方の笑顔が浮んでくる。

この世の中がほんたうに
なんともいへずさびしうて、
ピアノを弾いたりテニスをしたり
お友達と遊んで暮らす氣もせねば、
ひとりで部屋に閉ぢこもり
こつそり泣いて暮らしたい、
あの方をひと目見てからは
まるで盲目になつたやう。

九

わたしの指のこの指輪
まぶしい金のこの指輪、
わたしはおまへに接吻をして
胸にしつかり抱きしめる。

少女の夢もさめてしまひ
浮世の風のおそろしく
さびしく泣いてゐたものを、
ほんとにうれしいこの指輪。

わたしの指のこの指輪
まぶしい金のこの指輪、
おまへはわたしに人生の
たふとさを敎へてくれました。

わたしは一生あの方の
奴隷になつてくらしたい、
そしたらどんなにたのしからう
ほんとにうれしいこの指輪。

十

わたしはいつも、いつもひとりで
ひとりぼつちで暮らしてますの、
橋をわたつてから橋をわたるまで
ながくつづいたこの町で、
わたしは山家(やまが)の一軒家でゐるより寂しくつて、
ひとり書物(ほん)を讀んだり空想したり
裏の花畠(はたはたけ)で花をつんだり小鳥を飼つたりして
一人で樂しむたつた一人の小さな世界。

わたしの髮を、姿を、わたしの顔を
賞めてくれる方はたくさんありましても、
いつになつたら來てくれませう、
かうして一人でさびしくしよんぼりと
いつまで待つても來ちやくれないでせうか、
わたしの心を知る人は、
何處へ行つたら逢へるでせう
ああ、わたしの心を知る人に。

十一

たうとわたしもお嫁に行かねばならないか
良人(をつと)をもたねばならないか。
しかも小さな年とつた良人(をつと)をもたねばならないか
口喧(くちやかま)しい厭(いや)らしい良人をもたねばならないか。

お父さんお母さん親戚までが朝晩に
お嫁に行けと責め立てる、
ああ、これがこの世の習ひなら
わたしはいつそ死んぢまひたい。

お嫁に行かねばならないのがこれが女の道ならば
わたしは男に生れて來たかつた。

でも娘と生れたばつかりにお嫁に行かねばならないか
冷(つめた)い家庭で苦勞をしなけりやならないか

世間の習ひはどうだらうと
わたしはわたしひとはひと、
いつそ家出をしてしまはう、
そしたらわたしはどうなるか。

十二

尼寺へわたしはまゐります、
浮世はなれて朝夕に
行ひすましてゐるよりも
ましなことはもうありませんもの、
ああ戀よ、これもおまへのおかげねえ。

あけくれ御像(みざう)の前に出て
どうぞわたしをお棄てになつた
あの人に惠みをたれたまへと
お祈りをする外には何もない、
ああ戀よ、これもおまへのおかげねえ。

わたしの妹も、友だちも
きれいな着物を着かざつて
たのしく遊んでゐませうが、
わたしは黒い着物を着てゐます、
ああ戀よ、これもおまへのおかげねえ。

晩に寢床につくときは
たつた一人のさびしさに
あの人の手にあつたならなどと思ひます、
神さま、どうぞお許し下さいまし、
ああ戀よ、これもおまへのおかげねえ。

ああ、十七といふこの年が
何をわたしにもつて來たか、
わたしに何が起つたか
それを知るのは神樣ばかり。

十三

よくもののわかつて下さるお父さま
なさけぶかいお母さまに
こんなに大切にされてをりながら
どうしてからも寂しいんでせう。

いち日部屋にぼんやりと
すごしてしまふ日もあれば、
人にかくれて中庭の
木かげにしくしく泣く日もある。

學校一のおてんばと
うたはれたわたしであつたのに、
いまはまるで人が變つたと噂され
病氣ぢやないことと訊かれます。

十四

わたしのやうなふつつかものでも
貰つて下さるお方があつたなら、
わたしはどんなに甲斐々々しう
お身のまはりのお世話をしませうに。

草葉がくれの名もない花も
春が來たなら咲くやうに、
色香もうすい身ながらも
いつかわびしい花になる。

人に知られず片隅で

つつましやかにおだやかに、
何の奢りはせずとても
夫婦仲よくくらしたい。

わたしのやうなふつつかものでも
貰つて下さるお方があつたなら、
旦那様と申して上げるのが
わたしはどんなにうれしからう。

十五

娘

お嫁に行くのはいやですわ
思つて見てもいやですわ、
わたしは一生このままで
のんきに暮してゐたいのよ。

母

まあ、おまへは我儘な子だことね
それで通るとお思ひか、
おまへに乳房のあるかぎり
お嫁に行かねばなりません、
子供を生まねばなりません。

娘

乳房なんかわたしはいりません、
子供を生むのはきらひです、
それより學者になりたいわ
あのエレン・ケイみたやうに。

母

ほんとにおまへは馬鹿だねえ、
あの宅へよく來るAさんのやうな
オールドミスが好きなのかえ、
それよりきれいな丸髷にゆつて
奥様と呼ばれて見たいとは思ひませぬか。

十六

『こじき！　こじき！
おまへはひもじいか、泣きたいか
ひもじけりや握飯あげよう、
おまへは寒いか、死にたいか
寒けりやわたしの古い着物をあげよう。

こじき！　こじき！
貰つた煙草の吸殼に氣をおつけ、
町が焼けたらどうします
そしたらおまへに握飯も着物もやれやしない』

『お嬢さん！　お嬢さん！
かはいいお嬢さんのお顔を見ると
わたしは泣きたかありません、
ああ、こんなかはいいお嬢さんがあるんだもの
わたしはどうして死にたうなりませう。

お嬢さん！　お嬢さん！
わたしの町も火事で焼けました、
わたしの家(うち)も焼けました
そしてわたしは乞食になりました』

十七

少　女

かはいいすみれよ、よく咲いたのね、
ほんとにおまへはいい匂ひだこと
もつとさうして咲いておゐで
そしたらもつときれいになりませう。
ねえ、すみれよ、わたしの心を知つてるの
わたしはおまへを摘みとつて
あの方へおくつてあげるつもりなの、
すみれよ、ほんとにうれしいぢやないの。

す　み　れ

ええ、ええ、わたしはやさしいすみれです、

あなたのお好きなすみれです、
どうぞ摘みとつて下さいな
今にもつときれいになりますから。
ねえ、お嬢さん、わたしの心をお知りでせうか、
わたしはあなたの白い手に摘まれ
あなたの黒い髪に飾られて見たいのです、
お嬢さん、どうかわたしを愛して下さいましな。

十八

うぐひすがなく、今日もなく、
裏の畠で今日もなく、
その小さなからだが裂けるほど
わたしの胸が裂けるほど。

うぐひす、おまへの聲聞くと
わたしは悲しくてならないわ、
おまへはほんとに樂しげに
樂しい春をうたつてゐるのだもの。

おいで、うぐひす、ここへ來て
どうかわたしに言つてくれ、
わたしが自分に言ひたくないことを
おまへはきつと知つてゐるにちがひない。

いいうぐひすよ、うぐひすよ、
おまへの口から聞いたなら
恥しい氣もしますまい、
わたしの祕密なこのねがひ。

だが、うぐひす、おまへは知らないの、
わたしの祕密も、かなしみも、
どうしてやつぱりそのやうに
樂しい春のことばかりうたふのか。

ねえ、うぐひすよ、うぐひすよ、
おまへは何處に住んでるの
お山の谿か、藪かげか、
あの方のお家の近くぢやないのかえ。

十九

街で出逢ふ若い男も年よりも
みんなわたしを見て行くに、
あの人ばかりはなぜかしら
知らぬ顔して行かれます、
ほんとに男らしい方だこと
でも、それが何だか氣になるわ、
もしきらはれてゐるのなら
そしたらわたしはどうしよう、
ああ、かはいさうなこのわたし。

二十

この燃える胸を冷やさうと
海水浴に行くものを、
ほんとに羨ましいわねなどと
友だちはみなお言ひになる。

わたしの胸に燃える火が
どんなに熱いものだかを
誰も知つてくれる人はない
この暑い日よりも熱いものを。

どんなに冷たい水だとて
とても冷やしはしませんわ、
それでもぢつとしちやゐられぬので
わたしは海水浴にまゐりました。

するとまあ、どうでせう、不思議なことに
その海にはあのやさしい顔が浮いてゐて、

こちらを眺めて笑つてゐるんですもの、
ああ、わたしの胸はなほどんなにか燃えたでせう。

二十一

ある日ふたりの娘が野原へ行きました、
大さう仲よしの友だちが、
ひとりはいかにも嬉しげに
ひとりはいかにも悲しげに。

うれしさうな娘が言ふことに
『靜子さん、ほんとに名殘惜しいわね
あなたと遊ぶのも今日きりよ、
あちらへ行つたらたよりを下さいね
どうぞ永久にわたしを忘れないで頂戴』

かなしさうな娘が言ふことに
『綾子さん、あなたはほんとに幸福ね
どんなに樂しいホオムをおつくりになるでせう、
あなたのお顔には丸髷がよく似合つてよ
でも、あはれな靜子を覺えてゐて下さいな』

二十二

ふたりはひとりの人を愛してゐたが、
ひとりが默つて愛してゐたうちに
ひとりが結婚して良人(おつと)の國へ行くのです。
ああ、そしてわたしがその靜子でしたらば。

きのふ、わたしとあの方が
すわつて話をしたのはここだつた、
ああ、草はやつぱり寢てゐるわ
お立ち、立ちよ、かはいい草よ、
立つてもはなしちやいけないことよ、
おまへの上に肩をならべてながいこと
すわつてひそひそささやき合つた

あのたのしく響いたふたつの名を。

二十三

ふたつの生きた泉が見たければ
わたしのふたつの眼を御らんなさい
涙でこんなに赤くはれてます。

刀の疵より大きい疵が見たければ
わたしの胸を御らんなさい
こんなに破れて血が出ます。

誰がこんなにしたのでせう
それをわたしは言ひますまい
その人をやつぱり愛してゐますもの。

二十四

わたしはけなげな娘です
どんなことでも出來ますわ、
縫物も出來ます、編物もします
機も織れます、糸車もまはせます、
そのうへまだまだ出來ますわ
あなたがお好きなことならば。

少年の戀

一

わたしは若くて貧乏で
財布がからだといふだけで
娘はわたしをはねつけた。

だから懸命にはたらいて
金もちになつて歸つたら
言ふことを聞いてくれるだらう。

だがそれまでにお嫁に行つて
子供を生んでしまつたら
ああ、そのときわたしはどうなるか。

二

少年

おまへを思うて死にさうだ
おまへの黒い眼が、眉が
わたしの心をくるはせる。

ああ、たつたひとことでもいいから
おまへと話がしてみたい
わたしの心はそればかり。

夜の森かげあぜ路に
おまへがちやんと待つてゐて
笑つて接吻（きす）してくれたなら。

わたしの胸から血が流れる
早くそのまつかな口をおしあてて

おまへの接吻で癒してくれ。

おまへのまつかなその口は
どんな傷でも癒すだらう
どんな苦勞も消すであらう。

少　女

あなたはわたしも好きですわ、
でもわたしには年とつた
お母さまがおゐでになりますもの。

お母さまは病氣で寢てゐます、
わたしがお嫁に行つたなら
誰が看病しませうか。

あなたはわたしも好きですわ、
だけどわたしは駄目ですわ

どうぞあきらめて下さいね。

そのかはりあなたのその頰へ
接吻をひとつしてあげます
これで我慢をして下さい。

三

おまへのきれいな眼を見ると
星も笑ひます日も照ります、
おまへが地面をながめると
いろんな花が咲き出ます、
それにどうしてわたしだけ
おまへを愛せずにゐられうか。

四

川ばたで顏を洗つてゐると
愛する娘がやつて來て

お早うございますと挨拶する、
けれどおまへの心の開くのは
早くはないよ、おそすぎる。

五

わたしが小鳥であつたなら
ふたつの翼をもつてたら
おまへのそばへ飛んで行かう、
だが人間のかなしさは
いつかもかうして泣くばかり。

おまへを思つて日をくらし
寝入るとおまへのそばに行き
おまへと話をするけれど、
さめるとやつぱりいつものやうに
たつたひとりで泣くばかり。

一番鶏がなくときは
ああ、もう夜あけになつたかと、
今日はどうでも逢ひたいが
それもはかない望みかと
やはりひとりで泣くばかり。

六

わたしのうちの果樹園に
梨や林檎がたくさんなつてゐる、
きれいな娘もそのやうに
もし木の上になつてたら、
一つむしつて食べたいな。

七

うらの杏がよくうれた
ちやうど今ごろが食べどきだ、

となりの娘は十七だ
今がいちばんうつくしい、
ああ、この杏がとなりのもので
娘がうちの杏であつたなら。

八

わたしが野道に出て行くと
田圃(たんぼ)の案山子(かかし)も笑ひます
案山子の鴉(からす)も笑ひます
雀も蝗(いなご)も笑ひます、
あれ見な、今日もまた行くよ
好きな娘を見にゆくよ
みんなで馬鹿な小僧を笑つてやれと。

九

むかし希臘の神様が
美しい娘に下りて來たやうに
わたしも白い鳥になつて
あなたのふところに飛んで行きたい、
わたしも金の雨になつて
あなたの胸にそそぎたい、
ああ、いつまでかうして朝晩に
あなたの家の門前を
往き戻りしてゐるよりは。

十

わたしの娘はうつくしい
その唇はまつかだが
あかいメリンスの帶はさめてゐる、
ああ、きれいな帶が買つてやりたいな
そしたらまつかなあの口で
お禮をくれるにちがひない。

十一

かはいい娘さん、何處へ行く
手籠をさげて何處へ行く、
靑物市場に行きますか
魚市場に行きますか、
ついて行つてはいけないの
かへりは重たくなるでせう、
わたしがかついであげたいに。

十二

おまへの心はいつもぐらぐらしてる
ちやうど荒海を行く船のやうに、
おまへは毎日氣がかはる
まるで秋の空のやうに、
いつもちがつた顏をして見せる
おまへはきれいなカメレオン、
それにどうしてわたしの心だけ
いつもこんなに變らぬか。

十三

わかれ、わかれ、かなしいわかれ、
わたしの若い心から
喜びの根をかりとつて
なげきの草を植ゑつける。

綠の枝にとまつた二羽の鳩、
わかれて行つたそのあとは
草も木もみな枯れてしまふ、
わかれ、わかれ、かなしいわかれ。

十四

ふたりは互ひに好きだもの、
人目にかからぬ片すみに
こつそりかくれてくらしたい、
ちやうど二つの巴旦杏の實のやうに

ひとつの接吻で、交はす目で
殘らず苦痛は消えてしまふ。
おなじ幸福につつまれて。

十五

かしこい人も戀すると
馬鹿より馬鹿になつてしまふ、
どんななまけものでも戀すると
どんな苦勞もいとはない、
大きな男も戀すると
小さな子供になつてしまふ、
子供だとても戀すると
一人前の男になるであらう。

十六

をはりに

ほんとの幸福は歌はれない、
戀人同志のたのしみは
だまつてゐるときが一ばんだ、

春の小曲

小曲

一

風なきに花はちりくる
ひらひらと花はちりしく
庭もせを白くうづめて
うつくしくきよくかなしく、
ここにわが最後こそあれ
げにわれもかくぞちらまし
花のごとくに四月の花のごとくに。

二

夢はさむるなとこしへに
月はくもるなとこしへに
夜はあくるなとこしへに、
そのとこしへが束の間と
おなじきものと變るとも、
われのいのちの終りなば
その時こそはとこしへに
われを忘るなとこしへに。

三

人の世のたへなる琴の
かなしみもその一の絃
よろこびもその一の絃、
かきならせ、かきならせ
人の世のたへなるしらべ、
うつくしきその生涯の
たえだえの歌のもとすゑ。

四

知られて
わすられて
死ぬるおろかさ。
知られず
わすられず
死ぬるかしこさ。

五

ひややけき石となるべく
いとかたき石となるべく、
世のひとは生命(いのち)のはてへ
わづらひの道をしたどる。
うたびとはおのれの墓を
ほほゑみてみづから築く、
うつくしきその墓のため
その生命(いのち)をしむことなく。

六

海原(うなはら)越えてなげけども、
妹(いも)はかへらず
帆影も見えず、
ただ輝くはわが涙のみ。
海原越えてうたへども、
妹はかへらず
我もかへらず、
とこしへに海原(うなばら)越えむ。

七

人の世は涙の海と

あるときに教へし君は、
われもまたかく涙すと
あるときに泣きたまひしか。

戀といふもののあればぞ
人の世は涙の海と、
そのいはれわれもさとりて
いつしらず涙ながるる。

八

母の膝にをさな兒は泣く
われは野に行き今日も泣く、
をさな兒の夢に入るとき
など忘れえぬ戀ならむ。

九

かへらぬむかしかへるとも
かへらば今や戀しからむ。

君はわが手にかへるとも
むかしの君にあらざらむ。

むかしの花を慕ひつつ
落葉をふみて今日も歩まん。

十

君はましろき指をもて
わが魂をぬきとりぬ、
されどうつけしわが身をば
君はすげなく棄てて行く。

君は右手をばさしのべて
わかれて行くにほほゑみぬ、
またあひがたきわかれにも

つゆふるふことあらぬ手を。

その指こそは憎きかな、
いくたびとなく濡らしける
涙もつひにきずつけず、
それゆゑさらに憎きかな。

十一

今日の心はかなしくも、
濁れる泉
やぶれし鏡、
愛をうつすにひそかに恥づ

十二

日に三たび死をおもひ
日に三たび苦痛を喚(よ)ぶ、
これわが青春なるか
これはた青春といひうべきか。

十三

生(いのち)の流れはとどまらず
死はひたむきに追ひすがる、
あはれおのれも人の身も
眠りの床はあとやさき。

十四

昨日(きのふ)の人をかなしめば
明日(あす)の人よりかなしまる、
かくて世はすぎ世はうつる
時の流れのとどまらねば。

日も夜(よる)もわが眼は
うちに向ひてはたらけども、
心のくらき隅々を

限なく探しまはれども、
なにものも求むべからず
なにものもまたとどまらず、
年月は絶間あらせず
逝きてかへらず、
いとはやき流れの如く
我を棄てさる凡てのもの——

十五

盃のふちとくちびるは
人目くらます珊瑚礁、
いかにかしこき船乗も
あへて難破をせむといふ。

十六

わが詩は吐息のごとし、
影のごとけむりの如く

消えて行くその果敢なさに
かなしみの吐息はつづく、
その吐息また詩となる、
わが詩はわが吐息なり。

十七

年の境に

我は今眠らむとす、この眠よりさめたる時、
いよいよ四十四年の曙は來らむ、
その時我に微笑なりともうかべよかし。

聖歌の断片

一

われらただ神のものなり、
かの操ただしき妻のごとくに

かつ仕へかつは慕はん、
神はしばしば戀をあたへたまへど、
惡魔のこれに乘ぜむをおそれて
ふたたびその手にかへしたまふ。

二

かなたなる綠の丘に我が靈魂はねむれり、
神いまだ起きよとのたまはず、
鷄は三たび鳴きぬ、
ああ、我れいかで知らずと言ひ得べき、
主よ、ゲッセマネの血の祈り
その祈りの聲を我れも感ずるを、
かなたなる綠の丘に我が靈魂はめざめん。

三

人はみなその名を有てるに
などうるはしき心を有たざるべき、

惡魔が來りて蔽ふのみ。
うるはしき心あればぞ
花を賞で月をよろこび、
かなしき人を氣の毒がりて
涙ながれてやみがたし。

この淸き光をねたむ叢雲の
隙をうかがひ來て蔽ふ、
人の世のあらゆる汚れ
人の心のあらゆる闇の
ああなどかくも力づよき。

神よおんみが神ならば
我等のための神ならば、
この闇に光をてらしたまへ
この汚れを洗ひきよめたまへ、

弱き人の子は一念に
神よただおんみによりすがる。

四

死なむとするが如く覺えたるとき

神は萬物の生きむをねがふ
神はまた我が身の生きむをねがふ、
よきことをなさんとする者に
その生命(いのち)は甘き實(み)となる小さき芽なり、
昔(いにしへ)の惡(あ)しき事のむくいは苦みとなる
されどなほいまだ死とはなるべからず、
その人はまたその罪を償はんとすればなり。

夕暮の祈禱

一

夕ぐれごとの我が祈り
かくもかなしき祈りをば
きき給ふ神はありやなしや、
よし神はなくともゐまさずとも
夕ぐれごとに祈らまし
知られざる神に祈らまし。

二

迷へる人よ祈れかし
祈りて人よ惱みを去れ、
祈りて眠れ心しづかに、
明日(あす)のよき行ひにより
今日の罪をば淨(きよ)むべく。

三

疑ひ惑ふ日にありても
我れを導くその力、
我れを連れゆくその船よ、

神か運命か名は知らず
知らねど我れは祈りてん、
夕ぐれごとに祈りてん、
我が生涯の港まで
我をしづかに導きたまへ、
やすらけき死に連れたまへと。

四

愛するに時あるを知らず
ただつねに憎まるるを知る、
ああ、かくも卑しき我れなれど
神よ、この身を棄てたまふな、
この目をおそふくさぐさの
卑しく厭はしきものより我れを守りませ、
我がこの上卑しくならぬ爲め
主よ、君がその惱みをわけたまひしごとく
またその惠みをもわかちたまへ。

五

マリアよ、我れは御身に仕ふ、
世の戀人をかへりみず
御身ひとりに仕へんとす、
かくて我れは幸ある身とならん、
マリアよ、この誓ひにたがはぬやう
我れに强き心を與へたまへ。

「春月小曲集」に序せる

　これまで作つた短かい小曲だけを選んで、小さなきれいな本にして見ようかと思ひ立つたのは、かなり以前のことで、六月の末頃には原稿を出版者の手へ渡す約束であつたが、のち私は始めの計畫を一變して、さうしたいかにもものほしげな行爲をやめにして、本年になつてから出來た新しい作品を主として、これに前の詩集を出してからのちに發見された舊稿（春の小曲、昨日の情緒等の諸篇）を加へて、一巻にまとめることにした。それから、はじめに以前の二集から採錄した分は、大部分取除いてしまつたけれど、最初の計畫だけに、そのいくらかが新作の間に介在することになつた。

　そして新しい作品に關しては、簡單な紹介狀を書いてやる必要があるやうに思ふ。なぜならば、「感傷の春」の序文に於いて、私は自分が最早詩には別れを告げなければならなくなつてゐる事を告白して置いたからである。然し、私は詩人であつた、それが誇りであつた時とおなじく、それが羞恥を覺えさせる時に於いても、私は詩人の外の何者でもないのであつた。私は韻律で、一層分り易い言葉で言へば、調子で物を考へる人間である。私から韻律を取去つたなら、そこには何一つ殘らないであらう。

　ハイネとゲエテとを續けて譯してゐるうちに、私が輕卒にも死んだとばかり思ひ誤つてゐた私の詩神は、急に蘇つて來て、再びむかしの琴をかき鳴らした。私は急いでそれを書き取つた。それが冒頭の「小曲」と、その次ぎに置かれた二つの小曲のチクルスである。これ等の作品はその二三を除く外は、すべてハイネの「新しい春」とおなじく、私の第二の春の歌である。そして「ハイネ詩集」が私を再び詩の世界へ引戻したのであるから、從つてこの集の前半は「私のハイネ」と同じ氣分を有してゐるかも知れない。また、私は時として意識的に、諸國の民謠や民謠詩人などから、そのモティヴを借りさへもした。

私は恐らく現代の詩人の何人よりも民謠を尊重してゐる、そして我國在來の民謠の單なる模擬ではなくして、新しい口語に適した民謠の形式を作り出すことが出來たならば、どんなに喜ばしいことであらう。私の「小曲」もその試みとして見られたならば私の滿足するところだ。

一九一九年秋

同上改訂版に記す

はじめ獨逸製の壁紙を利用した瀟洒な小册子として現れたこの集は、のちかうした同裝のシリイズの一つとなつて、當初の意味を失つたため「靈魂の秋」「感傷の春」二集から採錄したものを、その中に介在せしめる事が、とりわけ私は氣になつてゐた。

が今度、社の好意によつて、それらをすべて刪除し、新たに未發表の作品三十篇をもつてそれを補ふ事の出來たのを幸福に思ふ。これによつて、本集ははじめて完全に獨立した一個の詩集となる事を得たのである。

なほ、その重出の詩以外にも、今見ると自ら羞恥を覺えて刪除したいものも多いが、これ以上の我儘も云へないから、それには敢て目をふさぐ事とする。

一九二六年暮春

「春の序曲」のあとに

「春月小曲集」舊版本の卷首に置き、今この「春の序曲」中に編入した「新しい春の歌」は、抒情小曲の最初の試みであつて、はじめ多くの非難を得、次いで多くの模倣を得たものであるが、著者としては一つの昏迷の記念である。中には、なぜ自分がこんなものを書いたのか了解に苦しむものすらある。が、また、眞實の聲を出し得たものもないではないので、熟考の上、茲に收める事としたのである。

一九二九年早春

宣言

我が詩は賞めたたへらるべきものにあらず、
ただ涙のひまに讀まるべきもののみ。
多くの喝采を犧牲にして我れ寂しき詩人は
今日この眞實の幾分をつたへうるを喜ぶ。

宣言

寂しきものの聲

まことに寂しきは
この世なりけり。
誠あるものは、
來つて我れを慰めずや。

星の子

おもふ、われはかの星辰の一つなりしを。
何の罪ゆゑか、かくはさすらひて來ぬ、
あはれこの世に、このうつし世に。
あるは遠く望みてその美にあこがれてか、
あるは罪を犯して逐はれてか。
もし慕ひ來しならば
この醜さを見てなど歸らざる、
逐はれしならば
はやくその罪のゆるさるる日を祈れかし。

空を稱ふ

空を仰ぐこと稀れなる人は、
おのづと心卑し。
廣大無邊の心に住するもの、
覺えず首あがりて、
青空を遙かに眺めわたし、
飽くることなく
清澄の大氣を吸ふ。
かかる心に、
などか汚れし思ひは入らん。

身は青空の下に立つとおもへば、
物を恐るる氣は去りて
心安らに、心澄みわたる。

思慕

この世界の果の何處にか
わが思ふ人はあらむと、
限りなく
心あくがるるそのうしろより、
わが思ふ人はこの世に
既に失せしにあらぬかと、
未だ生れざるにはあらぬかと
かく疑へば、
ああ、これもまた愚かなる妄想かと
おのれを嗤ふ心ともなれど、
この世界の果の何處にか
わが思ふ人はあらむと、
なほもひそかに
おのれに隱しつつ心あくがる。

感傷

世にすてられて
ひとり荒野を漂浪せむか、
日は沒して、月もなし、
星光空に薄く寂し、
ただ風あり、ただ露あり、
草にねむりて
終夜頭を濕すを得ん。

標語

飛燕の如く輕快に、

落花の如く悲愴に、
かくも生きなん、
かくも死なん。
これぞわが望みなれ、
わが願ひなれ。

一生の値

余は余の一生の値(あたひ)を
何にてはらはむ。
紙幣か、銅貨か、金銀か、
羊毛か、瑪瑙か、青玉か、
否、涙もて。

自信

すべての人に嘲られ罵られても、

われは平然として、
路上を行かん、昻然として。
わが心には
眞珠あればなり。

二途

わが生きるに二途あるのみ。
貴公子たるか、
ジプシイたるか。
客間(サロン)の生活か、
野天の生活か。
放浪こそ、放浪こそ。

血をもつて書け

血をもつて

その傳記の一頁一頁を
染めて行け。
中途にして、
これを墨汁に換ふるべからず。

進言

悲しき時、悦しき時、
人はすなはち歌ふ。
しかも考ふる時、
人は歌はざるなり。
いたづらに歔欷し、
いたづらに雀躍するものよ、
しばらく考へよ。
されど哲人、
君はしばらく讀書をやめて、
歌へ、歌へ、この人生を。

碎けたる魂

やさしき詩人の心は
いつの日にか碎けはてけん。
玉となるとも、よし身は失するとも、
ただうつくしく碎けなば
君は詩人よ、夢の王者よ。
このみにくき世にはふさはぬ
その夢とねがひのはげしさに、
若くしてわが魂も碎けたり。

塵より起て

一たび身をば
塵に埋めよ。
その塵の中より

身を起せし時、
汝は大なる詩人たるべし。

高青邱に寄す

わが哀しき高靑邱よ、
われ今君の詩をよんで、
敢て君に言はん、
天下の愁人君と我れとと。

愁人愁詩

滿腔の幽情、滿腔の愁、
一身血涙にして、一身火なり。
今朝、愁思雲の如く湧く、
盤を打つて悲歌すれば
涙滂沱又滂沱。

傷哭して曰ふ
妥に在り、一高靑邱。

自分を憎む

かぐろい翼は空を蔽ひ、
愁はこぞつてわたしを襲ふ、
光、光もなくて、なほも生く、
ああ、うとましや、
この肉身は。

夢を愛す

夢こそは母のふところ、
かへらむか、
かへらむか、
母のふところに。

母の胸こそ過去なれや、
わが夢を殘せし過去なれや。

戀を知りて

戀を知りてよりわが胸は
戀をかたるに堪へずなりぬ。
戀を知らねばこそ
戀をかたりうるなり。

自ら覺る

われまことの悲しみを覺えそめてより、
いとど命の短くなれるを感ず。
われは世に立ちて、
人々と交はるべき人間にはあらず。
孤獨ならましかば、
さなり、幸福にあらましかば。

寂寞

畢竟寂しきのみ。
昨日はS君と
瀧野川、巣鴨をさまよふ、
友なきにあらず、惱み多きなり。
人生をかたる、
徒らに厭はしさをますのみに過ぎず。

友にあたふ

わかれにつみし苜蓿（うまごやし）、
くれなゐのよろこび吸うて、
われ都にあり。
今、花は萎れぬ、

いまつくづくとわれおもふ、
よろこびは盡くれど
夢はやぶれず、
しかして千九百〇九年は逝く。
君は故鄕に何をおもふや、
わかれにつみし苜蓿（うまごやし）、
君の詩集の中にても枯れにしか。

故鄕にて歎く

かかる處にわれかへる、
望みなきかな、
望みなきかな、
やさしき自然の手に
抱かれながら、
われはなほ
人の世の煩ひに堪へず、
人のつくりし
おきての繩に
いましめられて
うちそむく、
今われ美しきこの自然に。

羞恥

余は自ら善行をなせし時、
ますます厭世の念をたかむ。
善行は羞恥なり。
柔軟なる胸を刺すの矢なり。

孤獨の心

生くるの樂しきを思ふ時、
わが心苦（くる）し。

生くるの至難なるを感ずる時、
わが藝術欲、
忽然として醒む。

孤獨歎

さはあれ、孤獨もまたいとつらきものなり。
われ、卑しき思ひに燃ゆ。
われ、功名のために喘ぐ。
われ、人を慕うて悶ゆ。
われ、人生の無情を感ずるや切なり。
この矛盾をいかにせむ――
あはれ、孤獨の愁思はいとつらきものなり。

自箴

一度爭へば一生和睦するなかれ。

此一事を念頭において爭へ。
爭ふべき時には爭はざるを得ざればなり。
されど余は容易に人と爭はざらむ。

敵と妥協するはよし。
絶交したる友と再び交るは、
最もその人の人格を傷つく。
絶交狀はその重大なること遺言狀に似たり。

翹望

余の平和は常に破らる。
恰も絶間なく
水面に點滴の落つるが如し。
わづかに心落着きたるを覺ゆれば、
また忽ちかき亂さる。
ああ永久の平和は何時の日にか來らむ。

ゲエテは歌ひぬ、
平和よ、甘き平和よ、
來よ、ああ來よ、わが胸にと。
しかもゲエテはつひに平和を得たり。
その晩年何ぞ幽邃にして崇高なるや。
しかして、その平和のしかく偉大なりし如く、
その奔命もまた偉大なりき。
余や抑も如何の態ぞや。
余に來る平和は
唯だわづかに死あるのみ。

世を厭ひて

この世は火宅、
心も火宅、
昨日は人をわらへども、
今日は人からわらはれる、

宣

昨日のまことは今日の嘘、
今日の望みは明日のうたかた、
これがこの世の常だ、いつまでも。

ああ、ここは氣流がわるい、
何處かに逃れたい、
世界の隅の何處かには
わたしの理想の國もありさうなものだ。
それも駄目なら、
この世はおさらば、
世界の外の何處かに逃げて行きたい。

人生の苦楚

ああ、死んでも足らぬ
味氣なさー
これが人生か、

世の常道か！
生きるも辛い、死ぬのも辛い。

わがための挽歌

われは餘りに拙く世に生きぬ、
今われ自らのために、
ただ耶利米亞の哀歌をなさむ。
自らのために薤露をうたひ、
自らのために蒿里をなさむ。
自らその柩をつくり、
その上に一篇の挽歌を記し、
かくて死人となりてわれ生きむ。
さらば此上いかばかり
世に憂き事はつもるとも、
何を歎かん、何をいたまん。

僞善の辯

僞善を攻撃するの稚氣を脱して、
自ら僞善者たれ。
牧師となりて、
恭しく祈禱し、説教するが如き、
實に立派な事ではないか。
どうだ、牧師にならぬか——

生き難きこと

算盤をもつに堪へざるもの、
生くる能はぬ我が世なりけり。
かかる卑しき世に、淺猿しき世に、
生きがたきこと、
その人の譽れなり、何をか恥づる。

後から來る者

僕は後から來る者を恐れる。
僕は後からの打撃を畏れる。
僕の惡魔は僕の後にゐるだらう。
僕の、この死の影は、
必ず背後に從ふものとしか思はれぬ。
背中は、僕の身體のうち、最も軟弱である。

眞詩人

眞の詩人はつねに孤立してゐる、
その孤獨の中で、ひとり寂しくうたつてゐるのだ。
眞の詩人は市場の喧騷の中にはゐない。
彼は塵網の中を飛びまはつて、
虚名を賣つたり、政策を弄したりはしない。
どこでもかしこでも顔出すものは、
どんな拔目のない、俗人らしい顔をしてゐるか、
ぢつと見れば一目でわかることだ。
けれど悲しや、今では眞の詩人は極く稀れだ、
市場には、僞詩人が蠅のやうに飛び交うてゐる。

我なほ生く

世界の中で一番不幸な男は、
まだ死なずにゐる。
いつまで生きるのであらう——
生きなくともよささうなものだのに。

女を畏る

女は恐るべきものには非ざるべし。
尠くとも、余の恐るるが如くには、

恐るべきものには非ざるべし。
余は女性に憧憬す、
しかして最も女性を恐る。

二人づれ

法界節の二人づれ、
三味（しやみ）彈いて、
歌つてすぎて行く、
「笑つて暮すも五十年
泣いてくらすも五十年」

若い二人の行く道は
皆幸福の道ならぬはない。
殊にははてなき道の草々に
歌つて暮す五十年、
羨ましやあの二人づれ。

貧しい少女

朝早く
割引電車に乘れば、
澤山の少女が乘つてゐる。
そのなかに
何處の女工だらう、
貧しげな着物を恥ぢ、
亂れた髪をはばかるは。
可憐なものよ、
おまへは女で、しかも貧しい。
だが、恥ぢなくてよい、恥ぢなくてよい、
おまへこそ本當に幸福なのだ、
ここに同じく貧しい哀れな青年が、
おまへを愛し、おまへをいつくしむ。

女を厭ふ

女といふ
何の用もない無益なものに、
白粉をつけさせて
いい着物をきせて、
あらゆる裝飾を惜しまず飾らせて、
これを見て樂しむとは、
まあ何といふ自然の反語（アイロニイ）！

こんな皮肉なことさへ
考へるやうになつた、
女といふ
何の用もない無益なものを、
彼女が私に見せてくれてから……

悲畫

白山下で、
一寸法師の踊を見る。
一寸法師といへば名は面白いが、
頭ばかり大きくて、
しかも色の黒い片輪者が、
紅い色の褪めたをかしな着物をつけて、
同じ事ばかりをくりかへして、
ただ足ばかりを踏みかへてゐる。
何といふ悲しい光景だらう．
それを笑つて見てゐる人の氣持！
おまへたちは
よくそんなに笑つて見てゐられるね、
あれはおまへたちの心の姿だぞ。

愛を坐して待て

女のあひだに、
愛を求めてまはるは卑し。
ただひとつの天の愛を
ただ坐して待て。

愛は甘からず、
傷つけられ、鞭たるるは愛なり。
天の愛は
ただ惱めるもののみに來る。

あてなき戀を
ただ坐して待て、
神の救ひをもとむる人のごとく、
つねにその目を天に向けつつ。

迷へる羊の歌

陸ゆくときは雨なきをねがひ、
海ゆくときは風なきをねがふ、
ほしいままなる願ひをも憎みたまはず、
われ狐のごとく疑ひて見上げし時も、
なほ十字架の上よりやさしく見そなはしき。

主よ、おんみいかばかり我を愛したまふぞ、
よし身は主に近くとも背けるものより、
遠くとも主の方を向ける故をもて
ただその故のみをもて我をよみしたまふか。

主よ、我はつねに君を裏切れり、
銀三十もて君を賣りしユダの心は
またこの迷へる羊の心なりき、

されどその不信の羊も今はかすかにも知る、
愛の優手をその柔毛におぼえて、
主の惠みはつねに限りなしと。

隱棲をおもふ

奈良の廢寺こそは、
つひにわが隱棲地たらむ。
由緒ある寺にして、
無住なるものいと多しと聞く。
僧となりて、
この寺に入りてはいかにと、
人我れに言へり。
ゆるゆると隱るべしと我れは答へき。
かく答へしことを
この日頃、ふと取り出せし日記を見て
追懷す。

十年の都會生活、十年の賣文生活、
そも何の意味かあらん。
わが心常に安らけき立命の地を求めて止まず。
山林に跡をかくして、悠々風月を友として、
無限の幽邃と寂寥の中に終らむか。
若くは荒廢せる僧房に、
ひとり行ひすまさむか。
しきりに出家遁世のことを思ひ惑ふ、
今すでに
有髪の僧の身なれども。

隱　遁　心

わたしは隱遁したい、
人間を愛せんがために。
大都會の人波にもまれて

喘ぎ喘いで生活するとき、
人間の醜きを憎めば。

別離

わかれてはまた逢ふ日なき
ふたりゆゑ思ひさしぐみ、
海を見て、海に波たつ
夕ぐれのあはれ身に沁む。

影

つめたき影を
われは踏む。
ああ、この影は
死の影か。
つめたき影を
ふみ行けば、
死に行く如き
心地するなり。

宣言

我に鬣あらば、
これを振らむ。
我に蹄あらば、
地を蹴らむ。
我に翼あらば、
羽ばたきをせむ。
我に高き聲あらば、
即ち叫ばむ。
戰はざるべからず。

あるお嬢さんに

あなたを見てゐるとわたしは人生を愛したくなる、
すべては喜びとなり、愛となる、
生きてゐるのはほんとに幸福だとかんがへる、
人の心は美しいものだとかんがへる、
涙ぐましいほど敬虔な氣持になつて
神様にお祈りさへもしたくなる、
ちやうどあなたがするやうに。

あなたを見てゐると、この心さへ
朝晩となく荒れてゐるわたしの心さへ、
しづかに、しづかに落着いて來て

宣言

ほんとに神様がおゐでになるに違ひない、
きつと神様はわたしたちを守つてゐて下さる、
決して泣いたり嘆いたりしてはならない
今日のこの日に滿足してゐたいといふ氣がする。

お嬢さん、ほんとに幸福なお嬢さん、
いつまでもいつまでも幸福でおゐでなさい、
夢の國の女王でおゐでなさい、
今のままのあなたでおゐでなさい、
わたしはそれを神樣にお祈りします。

ゲエテに寄す

朝影がほのかに窓に忍びよるとき、
わが机の上なる素燒の花瓶より
立ちのぼるフリジアの香りに漂うて、
夙くに消え失せた時代の面影が、

胸のとどろき、微笑み、靜かな囁きが、
すぐれた生活の風景があたりに浮びあがる。

ゲエテよ、あなたが展(ひろ)げて見せてくれる。
この心情の繪卷物に心を奪はれ、
この廣い世界に身を忘れて
かくて、幾夜(いくよ)も、春よりはつ夏まで
だんだん曉のあしの早くなるにつれて
わが筆は更に遲くなり、
おのが力の足らぬ嘆きのみ
詩稿のかさばらぬのを補(おぎな)ふ如く積み重なる。

電燈の光と共に夜がのがれ去つて
窓掛のレエス越しに、窓の硝子越しに
朝の光がわたしの机の上に流れこみ、
目の前の狹い空地(あきち)を蔽うて
鈍く白い空に織りなされた桐の葉が
わたしの疲勞に影を投げる、
わたしはホツと溜息をついて
卷煙草に火をつける。

フリイデリイケ、リリ、ロツテ、ケエトヘン、
かくも多くの美しい名も
更に美しいその眼、その唇も
かつてこの人を囚へ得ず、
やさしい薔薇の紐さへ斷ちきつて
世紀の動亂、內部の熱にも身を完(まつた)うし、
久遠(くをん)の女性(にょしやう)に引き上げられし
おおフアウスト、汝を讚ず。

「ゲエテ詩集」を譯了したる日

公園の雪

一月、雪ばかりの一月、

雪は地上を白く染め
また木の枝にぶらさがる、
ふはりふはりと漂ふ空のジプシイ、
ふらふらと小鳥の散歩——
いまは高いところから落ちてくる
喜びに醉うて、うつとりと
白い舞踏に疲れて横たはつてゐる
この小さな魂のねむり……

寂寥

寂寥は水の如く澄む
また水の如くわが上を流る。
わが心の動亂の中にも
寂寥はふかく身をひそめてゐて、
たえずしめやかに囁く。
靜かなれ、靜かなれ、わが友よと。

宣　言

寂寥は何處にも、何處にも、
私の行くところに影のやうに隨ふ。
私の影が街燈のほの暗い間をゆらめくとき
寂寥は來つて私の影に戯れかかる、
まだほんの子供の時から私にしたやうに、
あの友達に泣かされて私が一人でゐたときなど。

またさかんなる饗宴の中でも
私は寂寥の呼吸を身に近く感ずる。
目を擧げて見ると、しづかに笑つて
あまた集つてゐる見知らぬ客の中に、
ひとり私を見て會釋するものがある。
むかしなじみのその顏よ、寂寥よ。

眞夜中に、もの皆眠つてゐる眞夜中に
何ものか來て私をゆりおこす。

この樂しい時、この僕等の時をなぜ君は眠る
今こそ我々は樂しまうではないか、
影の生、影の戀、影の名譽をと。
ああ、いつもかはらぬその聲よ、寂寥よ。

寂寥はつねに目新らしく、つねに深切だ。
私を慰める聲なきアラビアン・ナイトの語り手よ。
寂寥よ、寂寥よ、寂寥よ、
わが心のふるさとよ、
生れた國よ、
わが墓よ、ああ寂寥よ。

砂濱に二人で寢ころんで

あのとき、砂濱に二人で寢ころんで
私たちは一體何を話したのだらう？
それは磯に這ひ寄る波のささやき、
あの絶間のない饒舌（おしやべり）とおなじものだつたのだらうか？
今思ひ出さうとしても何一つ思ひ出せない。

砂濱に寢ころんでやはらかな砂をおもちやにしながら
かはいい足をいたづらな波のおもちやにさせながら、
沖を通る汽船のこと、近くに下（お）りて來た鴉（からす）のこと、
その中（うち）に來（く）る樂しい祭の事などを話したのだらうか？
ほんに二人は子供であつた、生活にまだ荒されない子
供であつた！

空は晴れて、日本海は銀色に輝いてゐた、
沖にぽツつり浮いた隱岐の島は童話（メエルヘン）の國のやうに二人
を招いてゐた、
そのことだけは覺えてゐても、二人の話したことは思
ひ出せない、
私でさへも忘れてしまつたのだもの、三人の子供のお
母さんが

どうしてそんなたわいもないことを覺えてゐよう？

砂濱に寢ころんで熱心に二人で話したことは
かはいらしい子供のかはいらしいおしやべりは
あの時の波の音といつしよに消えてしまつたのだ。
だが、二人の頭を並べてよせかけてゐたあの年とつた
　松の樹に訊いて見たなら
あるひは覺えてゐて話してくれるかも知れない。

エテルカに

エテルカよ、エテルカよ、私のエテルカよ、
おまへの瞼(まぶた)はもう二度と開く日は來ないのか？
おまへの頰はいつもいつでも蒼かつたが
でも、時によると美しい羞恥(はにかみ)の紅(べに)をさしたのに、
ああもう二度とふたたびその生の燈明(あかり)はつくことがな
　くつて

ふたり手をとつて濱邊を散步してゐたとき
おまへの兄さんの姿がむかうに見えたとき
おまへの顏はなぜか大變蒼く、眞蒼(まつさを)になつたが
あのときよりも一層蒼ざめて、永遠に蒼ざめてしまつ
　たのか？

エテルカよ、二度と會へない私のエテルカよ、
なぜ私ばかりがひとり寂しく生きて行かねばならない
　のか？
ただおまへの悲しい生涯を泣くためばつかりに
私は此の荒れた冷(つめ)たい世界(よのなか)に生きて行(ゆ)かねばならない
　のか？
おまへの柩(ひつぎ)が呻(うな)くやうな音を立てて土の底に落ちて行
　つた音
あの恐ろしい音を聞いたのももう昔になつた。
昔に、昔に、みんなすつかり昔になつてしまつたね——
おまへの涙も、おまへの微笑も、おまへの涼しい聲

も――
でも、おまへは死にはしない、おまへは私の中に生き
　てゐる！

エテルカよ、私の母よ、私の娘よ、
おまへは私を生んでくれた
しかもおまへは私が生んだのだ。
すべての人と人とを隔てるものは、おまへと私の間に
　ない、
大氣も、壁も、衣服も、警戒も、
また誤解とか、嫌忌とか云ふやうなものもない。
おまへは私の心だ、私の心の中の血だ、
おまへの死んだその日から、おまへは私の中に入つて
　しまつたのだ、
おまへの柩がくらい土の底へ入つてしまふのを見てゐ
　たうちに。

エテルカよ、おまへの身體が墓の中によこたはつてゐ
　るやうに
おまへの魂は私の胸にゐて、私の涙で育つてゐる。
さうして私の魂はおまへの魂のおなかに入つてしまひ
今も、今でもやつぱりおまへの血から育つてゆく……
ああ、私はおまへの爲めに歌はう（おまへは私を歌は
　せる）
おお、誰がこんな悲しい詩人を生んだらう？
おお、誰がこんなけだかい女を生んだらう？
からいつて人はいつもいつまでも、それを不思議に思
　ふだらう……

詩を作りながら

壁にうごく、やせた手のかげ――
うごく、うごく、いま詩を作るとき、
心は絶えず涙の滿ち潮にあらはれて

溪河にのぞいてゐる木の根のやうにすりへらされて
自分で自分を食ひつくす
自分で自分を嚙みへらす
このおろかしい消耗、心の浪費——
自分自身との戰ひにすつかり磨滅してしまふ
ああ、詩人といふものは何といふ馬鹿者！

何處か遠方の工場の汽笛の音——
幾年かまへの秋のひと夜に
日本海に面したさびしい港町の安宿で、
ひとりよごれた蒲團にくるまりながら聞いた
あのかなしい汽船の汽笛の音——
今の私がそのときの私であるやうな
今の汽笛がその汽笛であるやうな
そんな心になつて、私はペンを走らせてゐる、
さびしさ、昔ながらのこのさびしさ。

壁にうごく頭のかげ——
どこまでも、どこまでも、きりがないほどのびた髮の
　毛が
怪物のやうな影ををどらせて、
ちやうどその頭の中にあるあらゆる妄想が
ひとつひとつをどり出してゐるやうな——
ああ、これが何百年も昔から
つめたい、がらんとした屋根裏で、
才のある、又才のない夢想家達によつてなされて來た
繰返され、繰返されて來た、相變らずのあの馬鹿な事
だ。

やせた手のぐづぐづとしたものおもひ、
あつちへ振り、こつちへ振る、頭のをどり。
紙の上のやけな線の走りよ、まはり道、
もう寢ろ！　ああ、小さな詩人！

新しいハムレット

「尼寺にお行きやれ、オフィリヤ！」
男の女に言つた言葉のうちで
この言葉より殘酷な言葉はひとつもない。

だが、またこの殘酷な言葉より
まごころのこもつた言葉もない。

わたしのかはいいオフィリヤ、
おまへにわたしはかう言はう
「お嫁にお行き、オフィリヤ！」

むかしは知らず、いまの世で
これが一番まごころこもつた言葉ゆゑ。

新しいオフィリヤ

「わたしは尼寺へまゐります」
女に言へる言葉のうちで
こんな悲しい言葉はありません、
こんなに男の胸にこたへる言葉はありません。

さうしてこの悲しい言葉をあの人も
別れるときに言ひました、
「わたしは尼寺にまゐります
死んだつもりでまゐります」

でも、それはあとで訂正されました、
「尼寺へ行くやうな氣になつて
わたしはお嫁にまゐります」
ああ、これが一番悲しい、男の胸にこたへる言葉です。

かしこき妻

賢げにことをなす女より
よく勤むる女こそよけれ、
いたづらに言葉しげくて
男子のわづらひを増すのみならば
あはれ女はかなしきかな。

夫の手を強くして
人の世を幸あらしむる女を
黄金もて誰かあがなひ得ん、
あきうどのかけ値ある女の
あまりに多く買ふ人もなきを。

かしこき妻は自れを賢しとせず、
いとつつましく頸を垂れて
その手は膝の上にやすむことなし、
あはれかくも尊き女を得なば
その人はいかに幸福ならん。

愚かなる女に

愚かなる女よ、我れは御身を愛す、
我れ御身に何をか愛する？
ただ御身のその愚かさのみ
我れにつれなきその心のみ、
御身の愚かさこそげに我れの愚かさなれば。

つれなき女よ、若し御身にしてなほ愛あらば
御身はそも誰をか愛する？

童吾

御身の愛するは色白き伯爵の子なるか？
御身の愛するはいと肥りたる老いし金持なるか？
されど我れは神にあらず、我れその故に御身を責めざらん。

いとしき女よ、我れは御身を愛す、
我れを離れて幸（さち）あれよ。
御身のはかなき夢想は裏切られざれ、
御身は永遠に賢くなることなかれ、
その愚かさ故に御身は幸福なれば。

省　察

あはれ世界の苦しみの束の間こそは
我が生涯なれ、
その痙攣のをさまりしとき
我れはあらざらむ。

我が命は月のひかりに
咲く草なり、
覺束なくもふるへつつ
晨（あした）を待たで萎れゆく。

我が詩は墓のめぐりに
ささやく風なり、
くらくあやしき音（ね）をたてて
謎の如くに消えてゆく。

あはれ世界の苦しみの束の間こそは
我が生涯なれ、
喜びの笑みのただよふ面（おもて）には
我が面影はあらざらむ。

眞勇

このすべての苦痛の
つひにあだなることを知る、
あだなることを知りつつも
かくばかり身をくるしむる
世にかほどの勇氣はなしと思ふ。

なに人の賞讃をもおもはず
ただなすべきことと思ひてなす、
一つの行爲のむくいはその行爲なれば、
德のために滅ぶは德のむくい、
かくて心にふかき滿足あり。

卑劣にして世に榮ゆるとも
わが心になんの悅びあらんや、

ただきよくただ美しく
この汚れたる世にありて善を行ひ
默（もだ）しつつわれは滅び行かん。

かなはざる望みを負ひて

かなはざる望みを負ひて
あざけりの咎（しもと）くぐりて
いつまでか我れは步まん。

人の世のけはしさに泣く
幼（をさな）ごころをあはれみて
手をかす人も有（も）たぬ身の、
昨日より今日はおとろへ
今日よりも明日はやつれて
とぼとぼと日かげをたどる。

あるときは烈しき誹謗(そしり)、
あるときはつらき試煉(こころみ)、
しかもなほ命あるこそあやしけれ。

かかる益なきおろか者をも
わがもとにかへれと
母はひとへにのたまへども、
われはかへらじいつまでも
われは歩まん人の世のけはしき道を。

地はくるしみてわれを生みき、
さこそわれは苦しみて死ぬべきなれ、
その日までわれはかへらじ。

義憤

不義の勝つ世ぞ厭(いと)はしき、
我れは死なん
かかる世に憤りもて老いなんよりは。

おろかなる我が命など惜しからん、
ただ一人の不義を鏖すに
我が命なほ高價(たか)からじ。

虐げられたるもの

あゝ虐げられたるものの涙流る。
叫ばんとするも口輪の口を箝するあり
走らんとするも鎖の身を縛するあり、
かくてなほ自由を得んと試みるものは
よくその良心に恥ぢざらんとするものは、
たちまちにその罰を受く。

あゝ虐げられたるものの涙流る。

彼等の頭は垂れてまたあがらず
彼等の膽は縮みて伸びず、
しかもなほ彼等を慰むる者あらざるなり、
自由なる人は彼等を見ず、見るを欲せざるなり。
ああ空しく虐げられたるものの涙流る。

詩人のわざ

人々他人の幸福をおのが幸福の如く喜ぶを得ば、
また人々蔭にゐて互に嘲り合ふことなくば、
義しきものがつねに最後の勝利者ならば、
愚人の叫びが智者の私語を消すことなくば、
美しき少女の夢のつひに破るることなくば、
貧しきものの働きが正しき酬いを得るならば、
ジャアナリストが藝術家と呼ばるることなくば、
この人生はいかに美しき樂園なりしならん。

されどこの世は地獄なり、深き地獄なり、
義しきものは常に滅び、惡きものみな勝ち誇る、
これを見てただ嘆息す、長く嘆息す。
われに世を革むるべき力なし、
人の心を淨むべき德はさらになし、
淸き自由と平等を世に齎らすべき智慧はなし、
ただ涙ぐむ目に眺めやり深く嘆息せん、
地に面伏せてただ嗚咽せん、われ弱き小さき詩人は—

詩人

まことの詩人はかくこそあれ、
その大いなる人格のなかより
彼は一雫づつの詩をしたたらす、
流れて盡きせぬ泉のごとくに。

いつはりの詩人はかくこそあれ、

そのあはれむべき虚飾の莚に
彼はあまたの贓品を並べ飾る、
泥沼の泥水を湛ふるごとくに。

さらば我等、つたなきものはいかに、
もとより盡きせぬ泉ならねば
また泥沼をこのまねば、いかにかせむ、
さらばよし、木の葉よりしたたる露とならまし。

自箴

何をか健かなる人といふや、
ありとあらゆる不幸に身を捧げて
その上になだれ落つる世界の苦痛に耐へて
おのが力のすべてを盡くし
人生の夏の夕立となるもの、
あらゆる快樂に溺るることなく
おろかなる安逸を貪ることなく
すべての事物を愛してこれを樂しましめ、
おのれの麵麭をふたつに割りて
他の飢ゑたるものの感謝によりて
うまく味づくるよき智慧をもち、
よしたとひ自ら神を信ぜずとも
かしこき運命の前に頭を垂れて
自らの轗軻不遇を自らの罪に歸して
人類の未來の幸福に自れを捧ぐるもの、
これをしも眞の人、善き人、義しき人といふ。
いざ我等めめしき繰言のうちに
怨嗟、自棄、嘲笑、賤劣の酒をくむことなく
たとひ人の嘲笑の的となるとも
毫も意に介することなく、
すすみてその尊き使命を果すべく
苦痛をその旗じるしとなして
怒濤さかまく不幸の海をわたり

幸福の島にいざ萬人を伴ひ行け、
かくて汝の生涯は存す。

くらき街にて

ここにして人生の初めの驚きを見出せしもの、
ここにして寂寥を更に加へしもの、
そは我れなりしか？
否と言はむには少しく卑怯なるにすぎたり、
然りと答へむにはまた少しく僞惡なるを感ず。

紅き色に迷ふものは鉛の色を見出で
快樂をねがひしものは羞恥を得る、
この暗き家にて、たのしく歌はむには
我が心あまりに弱く、脆く、はかなし、
ただうなだれて足早く通りすぎん、このくらき街を。

轉居するとて

ほろびぬ、うせぬ、
そのかみの幸うすき月日。
うづたかき落葉をふみて
あたらしき望をおもふ。
そのかみの夢も、涙も
葬りて、またかへりみず、
今日こそは、わが一の日と
このいくとせの心に似たる
その破れたる木戸をいでて、
あたらしき戰ひのため、
さらによきわが生のため、
たかき家居にわれはうつらん。

彼女

いと利巧なりし彼女も不幸なり、
彼女もまたその生をまもり得ざりき。
運命よ、汝はかかる聰明を憎むか？

愚かなる女を汝は破れど
利巧なる女を汝はさらに無慙に打碎けり。

いと利巧なりし彼女も不幸なり、
彼女もまた愚かに誘惑者の手を取りき。
彼女の算盤は桁一つ踏み違へたり。

ああ彼女がより愚かなりしならば――
愚かなる女のより賢かりし如く幸福なりしならん。

人知れぬ幸福

我ればかり不幸なるはあらじ、
されどかく嘆ずるによりて
我が不幸はただちに償はる。
この世にしてただ不幸のみならば
我れは嘆きのほかの何物をも欲はざるべし、
されど我れは人に知られぬ力を授かりたり。
かくて世の人の前に不幸なる我れは
人知れずおのが幸に醉ふことをえつ、
さて、我が紅色の盃にも力は溢るるべし。

金錢につきて貧しき人々に示す

博學なる博士は絶えず我等を教ふ
人は清貧に甘んずべきものなりと。

ああ清貧とや、そはまことの貧にあらざるなり
睦じきところには常に乾ける麵麭あらむ。
飢餓なくして何の罪惡あらんや、
その愛兒をも嚙ましむるは餓なり
ダンテの地獄は常に我等が前にあり。
まづ金錢ありて、のちはじめて平和あり
德あり、義あり、愛あり、幸福あり。
恒產なきものには恒心なしと
古人の言はいかに正しきかな。
されど金錢に囚はるる時我等の魂は死す
その時人は人間の心を失ふ。
我等金錢を支配すること奴隷の如くにして
これを崇拜すること神の如くなるべからず。
もとより金錢は我れと人との恥にあらじ
我等ねがはくば更により多くこれを重んぜん
されど我等更により多くこれを輕んぜん。
我等の生活に足るところあらば他は何せん、
かくてまことの人間の如く生くるを得ん。
清貧は要なし、ただ些かの恒產を
我等に與へよ、ああ我が博學なる博士よ。

反　抗

ゲエテは自殺せずして宰相となり
シェエクスピアは成金となり
ユウゴオは崇拜者を安あがりの妾とせり、
(友よ、この粗野な言葉をしばらくゆるせ)
ああ、大詩人はつねに大なる俗物なりし。

第二流の詩人よ、ああ我はただ卿等を愛す、
クライストよ、レナウよ、ヘルデルリンよ、
マアロオよ、バアンズよ、ジェムズ・トムスンよ、
ボオドレエルよ、ネルヴァルよ、ヹルレエヌよ。

その情熱のために仆されしもの
その運命のために傷きしもの
不幸なるものよ、愚かなるものよ、
ああ汝等をおきて眞の詩人の生き方はありや？

されどかく叫ぶとき小さき詩人はいかにあはれなるよ、

かくも遺憾なく我れはおろかしきよ！
大河の濁りを淺き小川に代へんとするは——
しかも我が情熱は默するを得ず
我れは空しき反抗の叫びを擧げん——
美しきものは滅びざるべからず
この世は美しきものの國にあらざればなり！

夏八月の偶感

夏はましろき日影となりて
我が窓のすだれをば這ふ。
雛罌粟は蔭ふかく頭に燃えて、
閉ぢられたる瞼に白日の夢は忍ぶ。
一杯の氷は日本アルプスの風を齎らし
我が渇望は我れを呑み去る。
ああ堪へず、かくあるに堪へず、
をはりの戀のをはりの願ひのごとくに
凍らんばかり熱烈に我が心は語る。
熱き、熱き日影を我れに與へよ、
その底の濕氣を乾かさんために
つねに梅雨季なる心の濕氣を
なまぬるくじめじめしたる善を、柔弱の氣を。
かのシルス・マリアの隱遁者のねがへる
熱烈なる冷酷は汝になきか。
夏八月の硝子窓の中に
酒精漬の死兒のごとくに
氣味わるく蠢けるなまぬるく醜き我が心よ。

深切なる人に

彼は言ふ、「汝が才はいと小さし
我が友のBに如かず」と。
Bのすぐれたるは、我が劣れるは
そは我に何のかかはりかある？

彼は言ふ、「汝が詩はいと古し
世に一世紀をおくれたり」と。
我が詩の世におくれたるを我れはよく知る
しかもそは我れに何のかかはりかある？

彼は言ふ、「汝は空しき努力をす
汝はつひにその夢想に欺かれん」と。
我れは我が空しき努力を樂しめるもの
我が夢想に欺かるるは我れに何のかかはりかある？

ああ、かばかりに深切なる人よ、
さばかり我が爲めに心を勞するなかれ。
人はおのれの爲めに餘りにいそがしき世に
君はあまりに深切すぎる。

一娼婦にあたふ

娼婦よ、娼婦よ、汝の業を恥づるなかれ、
人誰か汝の行ひをなさざらんや。
われ、美しき髭の買はるるを餘りに多く見たり。

あまりに惱める者の冷たき手を溫め
汝が腕を、彼が深き快癒の眠りにぞ貸す、
ああ、この故に汝は罪人と呼ばるべきか？
人の生れたることが既にその罪なりと

わが善き基督教の詩人は歌へり、
されど、われ汝によりて、深く社會問題に思ひをひそめぬ。

若し神ありて我等を審判するのとき、
エドムの如く滅ぶるは汝等なるか？　否、否、否！
滅亡（ほろび）にむかふものは愛國婦人會にあり！

妻を買ふものは君子なるか？
娼婦を買ふものは蕩兒なるか？
道學先生よ、われに答へよ！

われはわが涙のいと幼きを知る、
わが憤りのなほ更らに愚かしきを知る、
されどわれは僞るを得ず。

新聞記者よ、この詩のためにわれを敢て
かの街頭の不良少年の中に數ふるか？
さらば言へ、わが言の正しきか誤まれるかを。

——一九一二年——

一九一九年の年頭に

勤勉と、孤獨と、純潔と、
かくて汝ははじめて生くべし。
より強く、より賢く、
より善く、且つより悪しく、
かくて汝は一個の男子たるべし。
徒らなる饒舌を恥ぢて、
勤勉に、孤獨に、純潔に、
かくて汝は一個の藝術家たるべし。

雑詩集

災厄直下に歌へる

×

大正十二年秋九月、
九月一日の正午十二時前、
突如として、落ち來つた
此の恐ろしい大災厄、此の悲運――
語るに何の言葉をもつてせん。

暑さやうやう去らんとし、
屋上、桐の葉の降る音す。
くるしく、長きひと夏を
ただひたすゝに待ち待つた秋、
その秋もやうやう都門に入り、
銀座、淺草の燈火華やぎ、
人はみな音樂をおもひ、繪を待ちて、
日は日につぎて
悅樂と平和をのぞみしその秋が、
こんな悲しい秋にならうとは、
神ならぬ身の知る由なく――。

これが大凶事の前兆ぞと
今ぞひしひし思ひあたる、
信州燒ヶ嶽の活動、
箱根蘆の湖の不思議な增水、
かの東北の火山、藏王ヶ嶽
その山の沼より弗々(ふつふつ)と
血紅色の水湧いて音なす凶報も、
または、六月ごろの小地震に
神田龍閑橋河岸の土地一帶

地辷りすとのさきぶれも、
あはれなる人間の悟る由なく――。

その日、一天晴れて風もなく、
市民ことごとくその業(わざ)に從ふ。
二百十日もそれと知られぬ
やはらかなる陽(ひ)ざし、事もなき人の心、
未來を知らぬ人の心のやすらかさ――
俄然として、間髮をいれず、
大地震動し、屋は躍る。
はじめ上下に搖り
次いで左右に振動す、
この間五分――
メリメリと柱は唸り、軒はかたぶき、
大厦高樓、一擧にして破壞しつくさる。
たちまち、白煙、天に冲し、
熱焰の上騰、奔馬の如し。
神田、日本橋、京橋、麴町、
下谷、淺草、本所、深川
火の手のあがること八十何ヶ所――
ああ、その阿鼻叫喚の慘狀よ、
かたるに言葉なく、記すに文字なし。
心にうごく思ひは悉く火、
外にむかふ眼は悉く煙、
いま何をとらへ、何をゑがく――
ただ、言葉なき祈りのみぞ胸に湧く。

からき生命をながらへて
いまぞ、運命(さだめ)をながめ得ぬ、
人のいのちは春の夜の
夢のなかなる夢なりと
いまぞ、さだかに思ひ知る、
ああこの遠き古言(ふるごと)の

深きいはれを今知りぬ。
科學、人力、みな空のみ、
蟲にひとしき人間の
思ひ上りしたくらみが何の憑(たの)みぞ、
ただ祈れ、力なき身をひれふして。

いかに小さくあはれなる人の力ぞ、
今ぞはかなき「我(が)」をすてて
ただ祈れ、たのむはひとり「悟り」のみ
科學が何ぞ、何の救ひ、
五十年の文化も五分にして灰燼、
人の力は憑(たの)むべからず、
なまこざかしき理窟をすてて
ただ信じ、かつ、感謝せよ、
不思議にも助けられたるその命を。
今ぞおのれもわが思ひすべて正しかりしと悟れども、
されど悲しむ、わが信仰のあまりに薄かりしを。

×

九月一日にはじまりて十餘日、
災害のとどまるところ、これを知らず、
危くも一命を全うし、家を失はざりしものも、
測りも知れぬ想像の恐怖におびえ、
放火、奪掠、流言、蜚語、限りを知らず、
戰々兢々として、夜每自警す。
火はいまだ餘燼ほろびず陰々と燃え、
大地なほ搖るること日に數百回、
富めるものも、貧しきものも、
今はこれ同じき無一物、
燒けたるトタン板の下に雨露を凌げど
灰にまみれ伏してねむるを得ず。

九段坂上よりながむれば、
ただ見る焦土殘骸の、曠漠たること數里、
震源地を藏する海を地平線にのぞむ。

昔むさしのの原は青草に蔽はれしが、
今焼け果てたる文明の残軀は
煉瓦と灰と人馬の骸とによつてみたさる。
見よ、くもでのごとき街路のあとに
電車のやけおちて蛾のごときを。

×

おもへばいかなる宿世にか、
不思議にいのちたすかりぬ、
おのがいのちの完きをば
神に謝すだにうしろめたし。
ああ、十萬の靈魂を
非業に失せし無辜の靈魂を
いかに慰め、いかに供養せん。
これが運命と知るならば
涙ながれてとどまらず。
神よ、あはれみたまへ、人の子を、
あまりに信薄かりしその無智を、
おのが力をより憑み思ひ上りしその罪を。

大正十二年秋、九月一日、
その年月を生きのびし
われらの業は、
ただ、心からの祈りのみ、
へりくだりたる感謝のみ。
忘るに早き人の子よ、
とこしへに、忘るるなかれ、これのみは。
煩惱五欲のおこるとき、
名利のこころのうごくとき、
このおそろしき惡夢をば、思ひ出でよ。
生死の海に浮沈して
まのあたり
おのが眼をもてながめたるこの悲惨事を、
心傲るごとに、思ひ出でよ。

——大正十二年九月十三日——

暗を行く電車

一臺の電車――
それに乘つてゐるのは七分通り罹災者らしい。
みなみな互ひの不幸をおもひ
みだりに言はず落着いてゐる、
寂しさうな顔付で。
だが、燒失した市(まち)の區域に入つたとき、
その中の職人風の男が呟いた、
「なんてえ、暗れえこツた……」
暗い、暗い、そこは暗い神田だ、
町並のない町だ、家のない都だ。
驛のない高架線路だ、
灯のともらない橋だ。
暗夜の街にただ一つ
灯をともし電車は走つて行く。

震後

地震の搖れがあつてから
柱や鴨居を見るごとに
左の方に目立つてずれてゐる、
何となく右の方に
わたしは肩をそびやかす。

餘震

ペンはおのづからとまる、
「やつて來たのだ、餘震が……」
搖れる工合は、初震の時と同じ上下動だが
今はもう極く緩漫だ。
こちらの心持も馴れ切つてゐる、
ぢつと壁を見ながらやむのを待つ。

ガタガタと硝子戸は音を立て
柱の端しの方がギヂギヂと鳴る。
「だが、今日は餘震としてはかなりひどい、
多分崩れかけてゐた家の二つ三つは
またこれで倒れたであらう。」

愚かな心

あんなに手ひどく嘲られた
この「惡癖」が
まだ失せないか？
こんな年配になつても！
いや、失せないばかりか
一層ひどくなる、
年とともに……
メフィストフェレスと呼ばれた

同年配の友人は、
意地のわるい皮肉を浴びせかけない時でも
いつもその淺黑い顏に
皮肉な笑ひをうかべて
おれをあはれむやうに眺めたものだ、
「こまつた男だナ……」
「馬鹿だよ、君は」
といふやうに。

今のおれを見たなら
彼は何と言ふだらう……
彼はもう世にあらはれて
若い人々にたたへられ、
かずかずの戀と情事に飽き飽きして
二度結婚して二度別れて
今三度目の結婚をしようとしてゐる。
彼は何と言ふだらう、

今なほ昔のままに、なすこともなく
世にうづもれて、みすぼらしくも
夢みつつ生きてゐるおれを見たなら……
ことによると
「君は幸福だよ……」と
二様の意味を含めて言ふかも知れない。

恥かしさに顏を染めたのも
もう昔となつた、
あの友の意地のわるい皮肉に
丁度眞白な紙に汚點でもつけられたやうに
はらたてた氣持も、
もう今では思ひ出せない。
それだのに
そのおれの「愚かさ」は
一層ひどくなる、
年とともに……

マドンナを求める心、
久遠女性のまぼろしを
地上の女にかける心、
女性の純潔と愛とにあこがれ
ひそかに心の中に崇ふこの心。
なまなましい肉を手づかみに食ふ
蠻人のやうに
かの友、この友の誇り語る經驗を
かつおそれ、かつは卑しみ、
ひとり思ひを淨めつつ、
われをば天堂に導きたまふ
ベアトリチェの面影をひそかにゑがき、
いつの日か
その人のみまへに跪き
その人の指さきにそとくちづくる
わが救はれの日なるかと、

あこがれわたるこの心。
かの友の謂ふこの「愚かさ」
この「惡癖」は、さらにいやます
年とともに……

日常生活

今日もまた昨日とおなじことである
一昨日とおなじことであつた昨日の日と。
おそらくは明日もまた今日とおなじであらう、
かくておだやかに光陰は移つてゆく
我等の生活に――つひに死別の日の來るまで。

涙のレンズ

一度涙のレンズを通して世界を眺めたならば
ここにすべての物象はその色彩を變じて、

より深く、よりおごそかに押し迫つてくる、
若い心の高揚と沈鬱とを伴ひながら。

落果

木の實がぽつたり落ちた、
庭のしげみに杏の實が落ちた。
何か一つ出來さうなもんだ、
詩ぢやない歌ぢやない、
發句がさ。

秋風

秋が來たのに工面（くめん）ができず、
素はだひとへに風がしむ。
秋の風なら心にしみる、
からの財布にやなほしみる。

諷　詩（一九一〇年作）

妻となるには何がよき？
外交官か、軍人か、
華族、金もち、わるくない。
いくら何でもね、
三十五圓の月給ぢや
ずゐぶん馬鹿にしてゐるわ。
百圓以下では私はいやよ。

教　訓

少女(をとめ)よ、すぐ頰を染める少女(をとめ)よ、
君が羞らひのうるはしさを
あまりに安つぽく振りまいてはいけない、
若い男はすぐに心を動かすから。

宣　言

それはただ、戀人のためにだけしまつておくもの
ですよ。

少女(をとめ)よ、斷髮の少女(をとめ)よ、
君はもつと顏を赧らめなければいけない。
そんなに平氣で、人の目の前で
鼻の穴をほじくるのはおよしなさい、
若い男は興ざめしますよ。

――まあ、あんなことを、なんていやな小父さん！

立　腹

――ヨリックの「道化詩」から――

おれの道化がおれの不運だ、
もつて生れたおれの病だ――
笑はされた人はあとで腹を立てる、

「馬鹿々々しい、常談もいい加減にしろ！」

中にはいくらおれが一生懸命に道化て見せても
一向笑はない批評家といふ人種がある、
「卑俗見るに堪へぬ、言語道斷である、
ヨリック氏はつひに詩人でも藝術家でもない！」

ヨリック氏の落膽、苦悶、悲觀、お察しあれ！
常談ぢやない、それではおれの生存は全く徒爾ぢやないか。
だが、おれの道化にお笑ひなさるお客樣がた、
あなた方は御存知か、ヨリックは不幸者でございます。

おれは泣きたいのだが、泣かうとすると笑ひになるのだ――
おれの道化の裏には佛樣がおゐでだぞ。
おれはヨリック、世界一のペシミスト、
おれをわかつてくれたのは、あのハイネだけだつた。

自箴

詩人の衷に一片の哲學者あらば
それは呪はれた運命である！
彼は全く孤獨で、異邦人として果てるであらう、
わが日本の詩人の仲間から永久に除外されて……
あだかも哲學者の衷に詩人のひそむとき
獨逸の哲學教授から哲學史上に除外されるごとく。
だが、それ以上汝等にふさはしい運命はないのだ、
なぜならば、汝等はともに――變な奴だから。

蠅を憎む

蠅は鼻の上にとまつて尿をし、
頭のまはりを飛びまはりながら

その神聖なる大自然の命令を果す。
怒りの手が電光のやうにはたくとき
二尺の空で、痛みの揉手を嘲つては、
つい目の前の原稿紙の上でその眞似をする。
かのきたならしい一雙の羽のおかげで。
この羽に呪ひあれ！　その性（さが）の蠅によく似て、
こんなきたならしい羽をもつ人間にも！

世界は四角だ

世界は圓くない、四角だ！
アルプスの嶮しい山角を下るとき、
あるひは人はさう感ずる……

世界はどうして圓からうぞ、
人の心のけはしい尖角にふれるとき、
我等はそれを確信する！

宣　言

生の春

生きかがよひて森は漂ふ、
大いなる地の盃の上に
なまぬるき、さはれ心も
醉ひあせばまん風ぞ吹く。

肉（ししむら）の白きは迷ふ綠の中に
消えつまたつよくかがやきつ、
鳴りひびく春のなげかひ
また死ぬばかりなるよろこびに。

ものみなは動かざるなし、
森もゆれ、地もまた胸のとどろきを
その內ふかく包みたり、
地にはもゆる火。

燃ゆるもの、めばえゆくもの、
白くまた紅にただよふものは
環となりて環、環となりて
女となりてうかぶ盃。

罪といふやたはれといふや
ここにしてすべての鎖なかれ、
血は血をさそひ
息は息をうちゆする。

ああ春、かがやかにもゆる春、
かくも溢れて人間をつつむ。
狂ふは罪か草々の
上にも亂るる足、足、足。

ひそやかに語るとするも

聲ははずみて空にかへる、
はずみたる笑ひはとみに
しづかなる涙とこそはなりにけり。

迫害せられたる青年の歌

三疊のきたない部屋には
夏の西陽がカッと射し込んで、
疊も、柱も、眞紅に見える。
その中で、ゴロリと寢ころんで、
暑い、暑い八月の午後——
おれは死んだやうに眼を閉ぢてゐた。

ああ、生は何たる地獄ぞ、
人と人との間には、何たる不信！
憎みと怒りとが心を嚙む——
猿よ、狐よ、狼よ、恥知らず！

きさまもやつぱりその一人だぞ、
きさまは死ねッと、おれは云つた。

そして、ああ、この炎暑！
夏はだんだん苦しくなる、
氣候が嶮しくなるのか、身體が弱るのか、
いや、おれの心が傷ついたのだ——
おれはその傷口を眼で見てゐる、
カッと射しくる夏の天日に晒してるんだ。

この夏がもう一月つづいたら
おれは本當に死んだかも知れない——
いや、夏が秋になつても、おれは死にたい。
おれは死んだ人が羨やましいんだ！
彼等はもはや心を攪亂されやしない、
誰も彼等を傷つけず、彼等も卑しく怒らずにすむ。

友人が假面をかぶつた敵であつても、
罵詈と讒謗とが石ころのやうに投げつけられても、
それが何だッ、とおれは弱い自分を叱咤した、
暑い西日のさしこむ窓の下で
おれは突然、かッと笑つた——
狂人のやうに笑つた、「馬鹿ッ、何でもないぢやない
か！」

なぜ、死なうなどと思ふのだ、おれは生きる、
生きて生きて生きまくるのだ、
死にたいッ……それは女のヒステリイだ、
メソメソした少女氣質よ、消えッちまへ！
おれは生きるんだ、惡意と讒謗とのまつただ中に、
憎惡、羨望、怨恨などの卑しい性根を蹂躙しつつ。

天上天下唯我獨尊——
おれの上もない、おれの下もない、

おれよりえらいものはない、
おれよりつまらないものもない、
おれはアルファでオメガ、
おれは全でそして一だ、唯一者だ。

一切の比較を超えて
おれの存在が輝くのだ。
聖を超え、凡を超え、善悪を超え、
あらゆる差別を超えておれは立つ！
世界の孤獨のまツただなかで
おれは生きるんだ、その生と死をも超えて。

暑い夕日のさし込んでくる
三疊のきたない部屋に寝ころんで、
おれはおれの存在の絶對性を見た――
おれの無價値の中に價値がある、
迫害、讒謗が蹂躙しうるのは、ただおれの影のみだ、
生きよ、男らしく、――もう十年！

狼の死

あるがままに人生を見て、
あるがままに人生を肯定せよ。
もしそれが堪へられなくなつたなら、
そのときは――默つて死ぬがよい！
これが、これのみが勇者の道だ！

最も強い者は沈默する、
すべての言葉は畢竟怯懦の表白だ。
沈默のみが人間の唯一の德だ。
狼にならへ、狼の死に――
かくて汝は運命を克服する！

私の花環

反譯者は反逆者

(traduttore traditore)

羅典古諺

私の花環の序

私はこの集を世に出すに當つて、全く何等の要求をも有してゐない。それは相變らず私の貧しい才能の恥かしい紀念にすぎないであらう。ただ私は、顧みて私の愛が今人よりもより多く古人にむかつてゐることを知つて、自ら語り得たと思ふ。そして此點で私をものずきだと非難する方があつたならば、ただただその寛恕を乞ふのみである。

然し私はものずきなのではない、また、身の程知らずのペダントなのでもない。私は現代の奇矯な新流派の詩よりも、より古い浪漫派の詩を愛するべく運命づけられてゐる。私のやうな人間こそ、

彼は現代には適しなかつた
彼は古人を愛しすぎた

といふハインリッヒ・ロイトホルドの詩句に該當するものであらう。私はむしろ十九世紀の前半に生るべきであつた。

從つてここに集められた詩も、概ね十九世紀の前半の詩人のそれである。また專ら獨逸の浪漫派詩人のそれである。それは私がおぼつかないながらも、獨逸語を學んでゐたからでもあるが、しかし私が獨逸の浪漫派詩人を愛するのは、單にそれだけの因縁からではない。私は獨逸語に熟達してゐるためにのみ、獨逸の文學者を研究するあの勤勉な、獨逸學者のごとき、立派な學者でも何でもなく、ただ小さな一人の詩人として、自分のこころのみちびくままに、自分の好きな詩人に親しんだばかりである。

第一、私がその外國語として獨逸語を選んだのが大に理由のあることであつた。ここに私は少しく自分の一身上について語ることを敢てしたい、かうした主我的なことも、この集の意義のゆゑに恕されるかも知れないと考へるので。私は二十一歳のときに始めて外國語を學んだ

のである、少年の日から貧しい流浪を續けてゐた私は、ゆたかな學習を許されなかつた、でもたうとう辛うじて生活の安定を得た、そして一日ある仕事をして、夜だけ夜學に通ふことが出來るやうになつた、そして私は神田の西小川町の學校に通つた。私は雜誌の零碎な飜譯をさへ集めて愛讀した。ハイネやノヷリスやレナウを原語で讀みたかつたのである。そしてそれが丁度一年續いた、その後私は自修する事になつた。かうしたわけで、私は少しも、語學の知識を誇るべき理由を有たない身であるが、ただかうした不利盆な境遇の中にあつては、出來るだけの努力をして來たといふことが、僅かにその慰めなのである。思へば不思議だ、私のやうな意志のよわい人間がどうしてここまで漕ぎつけることが出來たのだらう？　私は、夕方仕事に疲れた時などに、時々神に祈りを捧げようと思ふこととすらある——私の運命の星に對して。私につらかつたその星よ、なほつらかるべきその星よ、だが、結局おまへは私にやさしい、私を守つてくれる星だ。

このやうな私であるから、勿論、何等教養の誇るべきものを有たない。然し、私は詩人だ、これだけは昂然として私は公言してもいいであらう。勿論第二流の小詩人だ、だが詩人は詩人だ。私の胸には感じ易いハアトが鼓動してゐる、それが、そのあはれなハアトが、私の誇るべきものの全部だ。この故に私はあらゆる屈辱にさへも堪へる、その屈辱に最も痛ましくふるへるこのハアトのために！　そして、この心を以て私は詩を讀んだ、讀んだ、讀んだ、めくら讀みをした、やみくもに讀んだ。そして、一九一二年の頃から折りにふれて譯したものが、即ちこの一卷である。だから、これは本來、人に見せるためといふよりは、まづ、私用の愛誦詩集に外ならなかつたのだ。

私が今日この集を編しつつ、一種創作的の喜びを覺えるのも不思議ではない。ここには私の主觀が著しく反映してゐるから。そしてまたそれがこの書の意義なのであ

る。もともと詩を譯するといふことは、その譯詩家が學問が深く、感じがデリケエトで、良心が強ければ強いほど、眞實（ワアルハイト）を愛するの念が熱烈であればあるほど、愈々不可能に思はれてくる。止むを得ない事情がないかぎり、まづそれを斷念した方がましだ。然しながら、詩人には斷念することが出來ない、詩人は自ら譯することによつて、その詩を自分の物にしたいのである、彼はそこに創作の喜びを味ひたいのである。彼は著しく細心になることもあらう、彼が學者の心になればなるほど細心になる、然し彼が詩人の本來に立返る毎に、極めて大膽になる、彼には原作にある修正をさへも加へる權利がある、――私はこんな大膽な言葉をさへ使ふ――然しその修正はよりよく原作者の心もちを生かすやうなものでなくてはならないのは言ふ迄もない。然し、いづれにしても、立派な詩の飜譯を出すことは、なかなか一通りや二通りの辛勞ではない。私のやうなゆたかな才能と時間とを惠まれてゐないものは、この地域で、あまり多くの要求をなすわけには行かないのである。

曾つて「春月小曲集」に收めた小曲中には民謠や民謠風の詩人の着想に基いたものが若干あつたが、此中に於てはそれとは反對に、幾らか私自身の創意を加へたものが二三存することも斷つて置かなければならない。メリケの「アグネス」の結末の二行の如きその一例である。殊に最近はなるべく自由に譯さうと思ふので、今その譯しぶりの見本として、ここにハフィス（ハンス・ベトゲの獨譯による）の一篇を對照して掲げてみる。篤學な人々が何と言はれるか知れないけれど。

Lass mich in deinen Locken wühlen, lass mich!
Es treibt mich, meine Seele aufzusuchen,
Die arme Seele, die sich liebestrunken
In diese tiefen, labyrinthischen Gänge
In deiner Locken schöne Nacht verlor.

そなたの髮を探らせてくれ
わしは見つけたいものがある、

そなたの髪の烏羽玉の夜に
迷ひ込んだめくらの子、
あはれな心を見つけたい。

一九二〇年初夏

メリケ　Mörike (1804—1875)

おもひで

K・Nに

あれがふたりで歩いた最後であつたねえ、
おお、クレエルヘンよ、
さうだ、あれが最後であつた、
ふたりが子供のやうに喜んだのは。

その日、ふたりは急いで日のてつた
ひろい、雨あとのみちを
ひとつパラソルの中に
身をかくしながら走つたねえ、
妖精(フェエ)の部屋にでもゐるやうに
ふたりはぴつたり寄りそうて
たうとう手に手をとつて！

あまりふたりは話さうとはしなかつた、
心臓があんまり烈しく打つものだから、
默つてゐながらどちらもそれに氣がついてゐた、
どちらもその顔のほてりを
パラソルの照りかへしにかこつけて。
ああ、おまへはほんとに天使だつたねえ！
ぢつと地面(した)ばかり見て
そのブロンドの捲髮(まきげ)を
眞白な頸すぢに落してたねえ！

「今うしろの天には、きつと虹が
かかつてゐるよ」とわたしは云つた、
「それにあの窓のところでは鶉(うづら)がもう一度
たのしく鳴くやうな氣がするね！」
さうして歩きながらわたしは考へた、

ふたりの昔の子供らしい戯れを、
おまへの故郷の村のことを、
その數かぎりない喜びを。――

「まだ覺えてるの？」とわたしは訊いた、
「大きな桶のころがしてあつた
隣の桶屋の中庭で、
いつも日曜の午後を、その桶の中に
まるでお部屋のやうにすわり込んで
おしやべりしたり、本を讀んだりしたねえ、
丁度むかうのお寺では
兒童教授があつて――わたしは今も
あのオルガンの音が靜かな中に
響いてくるやうな氣がするよ。
ねえ！　ふたりでもう一度
あの折りのやうに讀みたいねえ――
桶の中でなくつてもいいからね――
あの大好きだつたロビンソンを！」

するとおまへはにつこりして、わたしと共に
最後の曲り角を曲つたねえ。
そこでわたしはおまへがその胸に
挿してゐた薔薇をおくれと云ふと、
おまへははにかんだ眼をして、歩きながら、
すばやくそれをわたしにくれたねえ。
わたしは顫へる手でそれを唇にもつて行つて、
はげしく二度三度、キスをした。
誰もそれを嘲る人はありやしない、
誰だつて見た人はなかつたもの、
おまへでさへも見てゐなかつた。

おまへを送つて行かねばならない
その知らない家の前に
たうとう着いたとき、ねえ！　わたしはそつと

おまへの手を握つた、そして――
これがふたりで歩いた最後であつたねえ、
おお、クレエルヘンよ、
さうだ、それが最後であつた、
ふたりが子供のやうに喜んだのは。

新しき愛

この世で人もその思ひの儘に
他人のものになり切られようか？――
長い夜を思ひ續けて、否と云はねばならなかつた。

さらばわたしはこの世では誰のものでなく、
誰もわたしのものとは呼べないのか？――
暗の中から光明がパッとわたしの胸にさして來た。

なぜその願ふ神と一緒にあり得ぬか、
我が物と呼び、汝の物と呼び得ぬか？
今日何がわたしの願ひを妨げる？

甘い驚きが身に沁み通る！
この世で神自らを我が物と呼ぶ、
それを不思議と思うた事をあやしむ。

徒歩旅

伐りたての旅杖をついて
朝まだき、森を辿り、
丘を上り下りして
わたしが行くときに、
繁みの中で小鳥らが
歌つたり飛んだりしてゐるか、
または日の出の中で

黄金の葡萄の房に
歡びの靈でも觸れるやう、
そんなに思ふか、わたしの古く親しい
アダムも、秋熟れ、春萠えを、
神の心をつかはれた
空にはならぬ
初熟の樂園のその歡びを。
してみるとおまへもさう惡くはない、
古いアダムよ、嚴しい師匠の云ふやうに。
おまへはやつぱり愛し、讃へ、
やつぱり歌ひ、讃へする、
永遠に新しい創造の日のやうに、
おまへの新しい創造主、愛護者を！
若しわたしにもそれがあつたなら、
さらばわたしの一生も
かるく汗ばむほどの
こんな朝の旅であらうに。

夜明前のひと時

わたしは寢床に横たはつてゐた、
夜明前のそのひと時を、
窓の外なる樹の上に、燕が一羽
歌つて聞かすのも知らないで、
夜明前のそのひと時を。

「お聞き、わたしの云ふことを、
おまへのいい人はいけないよ、
わたしが歌つてゐるあひだ
愛する人をしづかに抱いてゐた
夜明前のそのひと時を。」

いやだ！　もう云つてくれるな！
お默り！　もう聞きたくない。

飛び去れ、飛び去れ、わたしの樹から！
——ああ、愛も誠も夢である
夜明前のそのひと時を。

春

この春の丘邊に横たはれば
雲はわたしの翼となる、
一羽の鳥が前を飛ぶ。
ああ、語れ、たつた一つの愛よ、
何處にゐるかを、おまへの傍にゐたいから！
けれどおまへと風とには棲家がない。

向日葵のやうにわたしの心は開いてゐる、
愛と望みとに、
あこがれつつ
ひろがりつつ、

春よ、おまへは何をねがふ？
いつわたしの心は鎮められる？

雲は流れる、川も流れる、
黄金なす太陽のくちづけは
深くも沁み入る、わが身へと。
あやしくも醉うた眼は
眠り入るかのさまをする、
ただ耳のみは聽く蜜蜂の音を。

わたしはこれを思ひ、かれを思ふ、
あても知れないあこがれの
なかばは快樂、なかばは嗟嘆。
わたしの心よ、それを云へ、
この黄金なす綠の枝の薄暗で
どんな思ひ出を織りなすぞ？——
——古く云ひ知れぬ日の思ひ出を！

人目を忍んで谷間の路を
　谷間の路を
辿るおもひも夢ごこち、
あの人がわたしに百千たび
　百千たび
お誓ひなされたあの山へ。

山の上なる菩提樹の木に
　菩提樹の木に
しよんぼりもたれて泣くときは、
わたしの帽子の薔薇の紐
　薔薇の紐
つれない風になぶられる。

旅　路

氣もちのよい町にわたしは入つて行く、

ア　グ　ネ　ス

薔薇の花どき！　ほんとに早く
　ほんとに早く
おまへは行つてしまふ！
あの人さへ心變りをなさらねば
　なさらねば
わたしに苦勞もありませぬ。

とりいれ時に面白さうに
　面白さうに
刈手の女たちはうたひます、
だがああ！　わたしのこの胸は
　この胸は
どうすることも出來ませぬ。

街路には赤い夕日がさしてゐる。
ゆたかな花園のむかうにある
とある開かれた窓からは
金みたやうな鐘の音が漂うてくる、
ひとつの聲は夜鶯の合唱らしく
花もふるへる、
風も元氣づく。
薔薇ももつと眞紅に輝きだす。
長いこと驚いてわくわくして立止つてゐた。
町の門から出たことも
わたしは自分で氣づかない。
ああ、ここは何たる夕の世界！
空には雲まで眞紅に燒けて
うしろの町は金色に煙つてゐる、
小川のせせらぎ、底の水車のまはる音！
醉心地でわたしは迷つて行く——
おおミユウズ、あなたは愛の息吹をもつて
わたしの心にお觸れになりましたね！

郷愁

ひとあしごとに世は異なる、
愛する人から去り行けば、
心はどうしてもついて來ない。
ここは日ざしも冷たくて
何だかみんな馴染がない
小川のほとりの花さへも！
どちらを見ても
親しみのない、うその顔、
小川はつぶやいて言ふ
あはれな子供よ、まあちよいと
わすれなぐさを見てお行き、
さうだ、この花は何處でも美しい
でもあそこのやうぢやない、

水車場では男があかりをつけて
何だかごとごとやつてゐる、
あんなに働いたならどんなによからう。

それにわたしはあはれなものだ！
寢床の中でぼんやりくよくよしてゐる、
頭の中を妄想の荒れるがままに。

行から、行つちまはう、
いつかわたしの眼はくもる！

愛するものの歌

朝まだき、まだ日も出ぬうちに、
わたしの心がわたしを醒ます、おまへを思へと、
たつしやな若者のねむたいときに。

眞夜なかにもわたしの眼はあかるい、
夜明の鐘の音よりもまだあかるい、
おまへは晝間わたしを思うたことがあるか？

わたしが漁師であつたなら起き上つて
網を河まで持ち出したり
魚を賣りにいそいそ出たらうに。

さやうなら

「さやうなら」——おまへはさとらない
この痛ましい言葉のほんとの意味を、
平氣な顏してやすやすと
おまへはそれを言つてのけた。

さやうなら！　——ああ、千度でも
わたしはひとりで言つてみた、

そして飽くことのない苦しみに
わたしの胸は裂けてしまつた！

飽くなき戀

戀はそんなもの！　それが戀！
キスばかりでは癒やされぬ、
笊に一ぱい水汲み入れる
馬鹿な男は誰である？
たとひ千年汲んだとて
永遠にキスはつづくとて
とても氣に入るものでない。

戀はいつでもいつまでも
また新らしく渇くもの、
ふたりは齒がたも惜しまない、
今日は娘がふるへもせずに
ぢつと觀念つけてゐた
刄物の下の羊のやうに、
その眼はたのんだ、さあどうぞ
痛ければ痛いほどよい！

戀はそんなもの、昔もさうだつた
戀のつづく限りはまたさうだ、
ソロモンさんは別だつた、
この賢人はほんとの戀知らず。

わけまへ

アニンカは踊つた
前の草場で
すばやい踊りを、
　そのうつくしさ！

ふし目がちな
そのうつくしさ、
靜かなむすめに
　氣もくるふ！

ふつとボタンが一つ飛んだ
そのジャケツから、
金のボタンを
　わしやつかまへた。

これは不思議だ
いい前兆だ、
ところがイエゴルは
　冷笑した。

かう言ふやうに、
ジャケツはわしのもの
それを着たからだも、
むすめはわしのものだ、
　おまへのものは——そのボタン！

園　丁

雪のやうに白い
お馬に乘つて、
うつくしいお孃さま、
並木路をお騙けになる。

お馬のをどつて
行くその道に、
わたしの撒いた砂が
きらきら光る。

とびあがりとびさがる

薔薇いろの帽子、
おお、その羽毛を一本
こつそり落せ！

そのかはりにおれの花が
一つほしいと言ふのなら、
一つばかりか千もやる
いや、みんなやる。

棄てられた娘

一番鶏がなきだすと
まだ星かげも消えぬうち、
わたしは竈のまへに行き
火をおこさねばなりませぬ。

火はまあきれいに燃え上る、
火花はぱちぱちはねまする、
わたしはぢつと見つめます
あらぬおもひにかきくれて。

するといきなり目のまへに
つれない人の面影が、
わたしが夜つぴて夢に見た
その人の顔がうかびます。

すると涙がはらはらと
わたしの頬をつたひます、
かうして今日もあけてゆく――
おお、もう行つておくれ！

隠棲

おお世間よ、わたしをこのままに、

愛のたまもので誘はずに
ただこの心にもたせておいてくれ、
その樂しみと、その惱みとを！

何が悲しいのかわたしはわからない、
それは知りもしない悲しみだ。
いつも涙の目で見やる
わたしはなつかしい日のかげも。

われを忘れるともすると、
胸にはあかるい喜びが
身をおしつける重みから、
ついと湧きだすたのしげに。

おお世間よ、わたしをこのままに
愛のたまもので誘はずに、
ただこの心にもたせておいてくれ
その樂しみと、その惱みとを！

慰め

長い馴染のわたしの幸福も
たうとうわたしを棄てて行つた！
——殊に親しい友だちも
肩をすくめて避けてしまふ、
いつも助けて下すつてゐた
惠みぶかい神々さへ
蔑んでわたしに背を向けられる。
どうしよう？　いつそのことに
自分の一生を呪つて
潔く毒やナイフを取つたものか？
さうするな！　いやそれよりは
しづかに心をとりなほせ。

そこでわたしは自分の心に言つた
さあしつかり助け合つて行かう！
われわれは互ひによく知合つてゐる

燕がその巣を知るやうに、
琴が歌ひ手を知るやうに、
劍が楯を知るやうに、
楯と劍が愛し合ふやうに、
こんないい仲を誰が裂く？

わたしがこんなに言つたとき
心は胸にをどりあがつた、
つい今まで泣いてをつたのに。

祈り

主よ、御意のままに與へたまへ、
愛の惠みでも惱みでも。
ふたつともわたしは喜びます
あなたの御手から出たならば。

たとひ喜びにしろ
また惱みにしろ
あまり餘計に下さいますな！
ちやうどその中ほどが
何よりの程あひです。

風の唄

はげしい風よ、氣輕な風よ、
いつもこの世を吹きめぐる
おまへのおくにはどちらなの？

「小さな子供よ、わたしたちは
むかしむかしのそのむかしから

廣い廣い世界を吹いて行く、
どんなに訊いても
たづねても、
山でも海でも
空とぶ鳥でも
みんな返事は出來ないのです、
あなたはもつとお利巧だから
それがお言ひになれるでせう。

――さあ、もうまゐりませう
わたしたちをとめちやいけません！
後から仲間が來ますから
またあれに訊いてごらんなさい！」

お待ちよ、いいから
ちよいとお待ち！
愛のおくにはどちらなの
何處から來て何處へ行くの？
「そんなことがわかるものですか！
からかつちやいけません、
愛は風とおなじです、
はやくて威勢がよくて
やすむことなく
絶えもせぬ、
けれどもしよつちうぢつとしてゐません。

――行きませう！　さあ行きませう、」
わたしたちをとめちやいけません、」
荒野も森も牧場も越えて行かう！
あなたのいい子にあつたなら
よろしく言つてあげるから。
小さな子供よ、さやうなら！」

泥坊の唄

そら、泥坊の大將が來たぞ、
胡弓をもつて、鐵砲をもつて、
彈くのも、擊つのも、
その日の風むき次第。
　胡弓と鐵砲、
　胡弓と鐵砲！
さあ、彈いたり、彈いたり。

泥坊はお日さんに照らされて
丘の上にすわつてる、
胡弓を彈いては、赤い酒をのむ、
靑い眼がキラリ。
　胡弓と鐵砲、
　胡弓と鐵砲！
さあ、彈いたり、彈いたり。

いきなり胡弓を投出して
泥坊はいきなり馬に乘る、
敵が來た！　笛を吹いて叫ぶ、
「狼のやうにをどり込め！」
　胡弓と鐵砲、
　胡弓と鐵砲！
さあ、彈いたり、彈いたり。

ヘルデルリン Hölderlin (1770—1843)

童なりしとき

わが童なりしとき、
神は人々の叫びより、
その鞭よりわれを救ひ給ひき、
われはおとなしく安らかに
森の花もて戯れき、
空吹く微風は
われと戯れにき。

神よ、汝は植物の心を、
そがやはらかき腕を
汝が方にのばすとき、
喜ばしむるごと、
かく汝はわが心をも喜ばしめぬ、
父なるヘリオスよ！　また、エンディミオンのごと
われは汝の愛者なりき、
聖なるルナよ！

おお、汝等凡てのまことある
やさしき神々よ！
げに汝等の知りもせば、わが靈魂の
汝等をいかに愛せしかを！

そのときなほわれは汝等をば
その名をもては呼ばざりしかど、
汝等もまたわが名を呼ばざりき、
人の相知れるとき呼ぶが如くに。

されどわれはかつて人間を知りしより
いとよく汝等を知りたりき、

われはエーテルの靜寂を知りぬ、
人の言葉はさとらざりしかど。

ささやく森の
妙へなる音色に育まれて、
われは花の間に
愛を學びぬ。
神々の腕にわれは生ひ立ちぬ。

名譽に寄する歌

かつてわれ靜かに、苔むせる泉のほとりに、
安らかに眠りて、ステラのキスを夢みゐしとき、
　汝は呼びぬ、樫の樹の梢より、
　森の流れすら止まりてふるへるほどに。
飛び立ちてわれ、よろめきつつ、かの天なるもの、
そが愛者の汗ばむ顙を冷やし、
　樫と棕櫚とをおくる森にして、
　その蠱惑の力に息も絶えなんとしつ。

怒濤の音にめぐらさるる、この寂しき
多難の路よ！　わが果敢の心は汝等を嘲らん！
　聳立つ岩よ！　汝等もこの詩人の
　翼ある足は疲らし得じ！

かく呼びて、自らその聲の力に馳せ出でぬ、
されど、そは幻惑なりき！　幾歩か行きし
　そを知るまもなく、卑怯なる者どもの
うちはやす聲は起りぬ、哀れなる者をめぐりて。
ああ！　われかの苔むす泉のほとりに眠りゐたらば、
ああ！　なほステラの抱擁を夢みゐたらば！
　されど、いないな！　努力もまた値あり、

弱きものの汗もまた尊きものぞ！

熱　狂

友よ、同胞よ！　今日ぞ來らむ、
われらの交りよりわれを奪らむと
かの最後の大いなる瞬間は——
さらば、忽ちたのしき脈搏はとまり、
みだれたる友の聲は響きて、
わが地上の幸は霧にとざされむ。

美はしくも生き來つる日の凡ては
忽ちわれに別れを告げむ——
されどわれ、まことげに、などか顫へむ！
「友よ！」とわれは云はん、「かの天上に
われら凡ては再び會はん、
友よ！　より美しき日はそこに輝き出む。

されどステラよ！　汝が棲家は遠し、
はや生命を奪ふものの足音は近づけり——
ステラよ！　わがステラよ！　泣くことなかれ！
ただいま一度、われ彼女をば抱くを得ば、
さらばわれ、わがステラの胸にて死なむ、
急げ、ステラよ、來れ、この眼の閉さぬうちに。

されど遠し、遠し、汝が棲家は、
はや生命を奪ふものの足音は近づけり——
友よ！　わが歌を彼女に齎せよ。
神よ！　偉大なる人物になりなむことぞ
しばしばわが願ひなりき、地上のわが夢なりき、
されど同胞よ、なほ大いなる業ぞわれを呼ばふ。

同胞よ、美はしき夢をゑがきし
未來の凡て、凡て凡てわが希望の

かくも消え失するをば、悲しめかし！
わがなほ記念碑を建つることなくて
地のわが屍をば蔽はんことを、
この死者をかつて後人の思ひ出でぬを。

わが墓標のほとりに人の冷やかに立ち、
朽ちゆく骨に、一人の若者も
無言の祝福をもあたふることなく、
わが骨を蔽へる墓の
薔薇の上、百合花の上に、
一人の少女も心より涙を流さぬことを。

ほとり過ぐる男たちの口より
かかる言葉の墓へと響かぬことを、
若者よ！　汝はあまりに早く眠りぬと！
また、この若ものに、白髪の翁の
その生命の旅のをはりにかく語らぬことを、
子供よ！　われとわが墓とを忘るなと！
長くもあこがれてし凡ての未來の、
喜ばしき希望の幸の凡ての
かくも無慘にもわれに消え失せしを。
この世のいとも美はしき夢の
つひにかへることなく失はれしを、
不死の夢の死にはてしを。

されど行け！　この死せる胸には
わがあはれなるステラの苦惱の血ぞ流るる、
來よ、われにつき來よ！　殘されしものよ！
いかに汝が凝然とわが墓邊に立ちて、
死を、死を天に祈れるかよ！
ステラよ！　來れ！　眠れる者は汝を待つ。

おお、汝が傍にあらば！　さらば終らむ

この悲惨も！　おそらくはわれらの手は
朽ちてもなほかたみに握られたらむ！
そこにては黒き嫉みの眼もうかがはず、
また、かしましき口の嘲りもなく、
われら夢みん、審判の喇叭の呼び醒ますまで。

然らば、われらの墓標のほとりにて
若者は語らん——眠れる骨よ！
愛する死者よ！　汝等の運命は美はしかりき！
手に手をとりて汝等はその惱みを逃れぬ、
冷たき地なる母のふところに
長くも求められし眠りは幸あれや！

また、百合をもて、薔薇をもて、
少女はわれらの丘を蔽はん、
思ひも深くわれらの墓邊に立ちて
眠れるものに思ひをおくり、
少女は手をば合せて跪くべし、
この死者の運命をおのれも天に祈らんがため。

また、かたへ過ぎる師父の口よりは
われらの上に祝福の聲も響かん——
やすらへよ！　汝等は安息の幸にかなふ！
神よ！　いとし子を苛責の手にゆだねし
師父等に死はいかに恐ろしくとも、
やすらへよ！　汝等はわれらに愛を敎へぬと！」

生の喜び

なほわが心へと樂しき春は再びかへる、
なほわがをさなき喜びの心は老いず、
なほわが眼より愛の雫ぞ流れ落つる、
なほわが心には望みの歡び痛みぞ生くる。

たゞ青空と、緑の野とは、
たのしき眺めもてわれを慰むる、
なほ聖なるもの、若きしたしき自然は、
われに歓びの酒杯をぞささぐ。

心安かれ！　この世は苦痛の値あり、
神の太陽のわれら哀れなる者を照らす限りは、
よりよき時の姿のわれらの靈のまはりに漂ふ限りは、
ああ！　われらと共に誠ある眼の泣く限りは。

善き信仰

美しき生命よ！　汝れ病み伏すときわが心は
涙につかれ、恐れはやくも心にきざしぬ、
　さはれいかでかわれは思ひ得む
　　汝が愛するかぎり死にうべしとは。

昔と今と

わが若かりしとき、朝はうれしく
夕に泣きぬ。いま年老いて、
　疑ひをもて日をむかふれど、
　　神聖にまた快活にその日を終る。

愛の頌歌

たのしき眺めをよろこびて
われらは緑の野を歩む。
われらの聖職は喜びなり、
われらの神殿は自然なり。——
今日ぞ眼の曇れるなく、
憂ひと呼ぶもの世になかれ！
あらゆるものは愛により

わがごと自由に喜べかし！

友よ、嘲れ誇りかに！
奴僕（しもべ）の業（わざ）を嘲れよ！
雅歌をば高く唱へかし、
手と手をかたく握りつつ！
葡萄の丘にのぼり行き
廣き低地を眺めやれ！
いづこも愛の翼なり、
いづこもやさし麗（うる）はしし！

愛は天吹く風により
薔薇に朝（あした）の露をおくり、
五月の花の香の中にて
微風に愛撫のわざを致ふ。
愛はオリオンのまはりをば
したしき地球を導きつ
その目くばせにしたがひて
河は海へと流れ入る。

愛は荒山のかたはらに
やさしき谷を添寝させ、
燃え盡きし太陽（ひ）を靜かなる
太洋（わだつみ）の中にいこはしむ。
見よ、天（そら）の聖（きよ）き思ひは
大地に下りて睦み合ひ、
雲に蔽はれし母なる地の
胸はいみじくうち顫ふ。

愛は太洋（うみ）をもわたり行き、
沙漠の沙を嘲笑ひ、
祖國のために歡呼して
勝利の旗にと血を流す。
愛は岩をも打ち碎き

そこに樂園をつくり出す——
無邪氣に微笑ひて立ちかへり
聖なる春に花咲かん。

愛によつて力強く
われらは縛めを解き放たれ、
醉へる精神は自由に偉大に
星の方へと飛び上る！
誓ひとキスのもとには、ものうき
時の流れも忘れられ、
靈はおほけなくも近づかん、
無限よ、汝の領にまで！

ディオティマに

一

美しき生命よ！　汝は冬のやさしき花のごと、
　老いし世にひとり隱れて咲き匂ふ。
愛により汝は春の光にあたりて温まらむと
　身を伸して、世の青春を求むれども、
汝の太陽は、美しかりし時は、沈み行きて、
　氷なす夜に嵐のみせめぎたたかふ。

二

いざ來りて、われを鎭めよ、かつて四大を結びし、
天なる詩神の喜びにして、時のカオスなる汝れ、
天の平和の聲音もて荒れ狂ふ爭ひをただし、
　人間の胸より不和を解き放てかし。
人間の古き性なる、沈靜と偉大さとを
　湧き立つ時の中より強く晴れやかに起たしめよ！
民の貧しき心にかへれ、生命の美よ、
　かへれ、客の食卓に、その神殿に！
ディオティマは生く、冬のやさしき花のごと、
おのが精神に富みつつも、なほ太陽をば求むる。

されど精神(こころ)の太陽(ひ)は、美しかりし世は沈みぬ、
　氷なす夜に嵐のみせめぎたたかふ。

運命神に

われに許せよ、ただひと夏を、はげしき神々よ！
ひと秋をみのりゆたけき歌のために。
　さらばたのしき曲に心は滿ち足りて
　　すすんでわれは死にもせむ！

生きて充たされざりしたましひは
冥界(よみ)の世にてもやすきを知らず、
　さはあれわれは心によこたはる
　　聖なるものを歌となしぬ。

さらばいとはじ、靜もなきおお冥界(よみ)の世よ！
よしわが歌の伴はずともわれは足りなむ。
神々の如くわれは生きたりひとたびに、
　さらにまた何をかのぞまん。

エムペドクレス

生命(いのち)を汝れは求めき、その聖なる火は
深き地の底より汝れに輝き、湧き出でぬ、
　汝れはをののくばかりの渇望もて
　　身をば投げてき、エトナの火に。

女王の誇りなる眞珠の玉も
かくも溶くるか、そのさかづきに。
　詩人よ、おんみのその富をば
　　火の杯になどてささげし！

さはれおんみはわれに尊し、勇ましき死者よ、
おんみを奪ひてし地の力のごとく！

われもまた勇者に傚はんものを
　愛がこの身をおしとどめずば。

哀悼

われは行く、日毎に異なる路を、
あるは森の草場に、あるは泉に、
　またあるは薔薇の花咲く岩のほとりに、
　　丘よりぞ野を眺めやる、されどもつひに、
汝やさしきものよ、その光のもとに、
われつひに汝れを見出でず、
　かつて汝がもとにわれの見出でし
　　その言葉は風とともに消えたり……
げに汝れは遠く遙けし、幸ある面輪よ！
汝が生の妙へなる音色は消え去りて
　また聞くによしなし、あはれ、何處ぞ、
　　かつてわが胸を鎭めやはらげてし
かのいみじき歌の淸き聲音は？
いかに遠く、遠ざかりしかな！　靑年は
　老いぬ、地すらも、かつてわれに
　　微笑みし地すらも全く異ひぬ。
おお、さらばよ！　靈魂はあはれ日毎に
別れては汝にかへる、汝のために
　眼はも泣き、そは汝がとまるところを
　　眺めやるとき、曇りぞ晴るる。

故郷

たのしげに舟夫はかへる、靜かなる流れを、
その收穫れし遠き島より。

われも故郷に歸らんとねがふ、
　されど惱みの外にわれ刈り得しはなし。

汝等われを育みししたしき岸邊よ、
汝等は愛の痛みを癒やし得べきか?
　汝等わが幼かりし日の森よ、いまひとたび
　　汝等はわれに安息を與へ得べきか?

わが波の戲れを眺めてし涼しき河邊、
小舟の滑りゆくを見し流れの岸に、
　われやがてあるべし。かつてわれを
　　守りてし親しき山々よ、わが故鄕の

確くたふとき國境よ、母の家を、
いとしき姉妹の抱擁を、
　われやがて見出でん、汝等はわれを抱かん、
　　紐のごとわが心を結び癒やさむとぞ、

變る事なき誠實もて!　されど、されどわれ知る、
愛の痛みのさはたまゆらに癒えざるべきを、
　人の慰めに歌ふそのこころよき歌の
　　わが胸より歌ひ出でざるべきを。

さは、われらに天の火をばあたへし
神々は聖なる惱みをもおくればなり。
それゆゑにかくぞあれ。地上の子ゆゑに
　われもまた愛し、惱めよとぞ。

歸鄕

汝等やはらかき微風よ!　伊太利の使者よ!
また汝、白楊をもてるいとしき河流よ!
　汝等波打てる山脈よ!　おおすべて汝等、
　　日の照れる山頂よ!　げにそは汝等なりしか?

汝静かなる場所よ！　夢にして遙かに汝は現れぬ、
希望なき日の後になほあこがるるものに、
　さて汝、わが家よ、汝等遊びの友よ、
　　丘の樹立よ、汝等いとも親しきものよ！

いかに、いかに長かりしかな！　幼き日の安らひは
逝けり、逝けり、青春も、愛も、幸福も、
　されど汝わが祖國よ！　汝聖なる
　　耐へ忍ぶもの、見よ、汝の殘されたるを。

そが汝とともに耐へ忍び、汝とともに
喜ばんため、汝まことあるものは、そを育みて、
　そが遠くさまよひ迷へるときは、
　　そのまことなきものをも夢にいましめき。

若きものの熱くも燃えたる胸に

その氣儘なる願ひのやはらげられて、
　運命の前にしづめられしとき、
　　汝その浄められしものを藏めよかし。

さらばよ、若き日、汝薔薇なす
愛の路よ、汝等凡ての旅人の路よ、
　さらば！　おお、故郷の天よ、
　　いざわが生命を取れ、また祝福せよ！

ヒュペリオンが運命の歌

おんみらはかのやはらかなる空をふみて
光の中をぞただよへる、聖き靈よ！
光りかがやく神々の氣は
いとかるくおんみらにぞ觸るる、
あだかもいみじき女性のたくみの指が
聖なる絃に觸るるごとくに。

眠る幼兒のごと、運命も知らず、
天なるおんみらはただよひて、
つつましやかの蕾の中に
きよくまもられつ、
ふかきおもひは花咲きて
萎るる日なく、
幸はれし眼は
しづかにぞ澄む、
永遠にくもることなく。

されどわれらは何處にも
いこひやすむことをゆるされず、
惱みの子なる人間は
このひと時よりかのひと時へと
目さきも見えず、
かつまろび落ち、かつ消ゆるのみ、
あだかも水の岩より岩に
投げられて、いつかはつひに
底知れぬ淵に消え去るがごと。

記念

東北の風はわれに吹きくる、
汝はげしき靈よ、舟人に
善き航海を告げしらす
風のうちのいと好ましきものよ。
いざ行け、行きて挨拶せよ、
けはしき岸に路は走り、
谷深き河流の中へ
小川は注ぎ、そが上には
樫の木立と白楊の並木との
けだかき一對の立ちて見下す
かの美しきガロンヌに、

ボルドオの庭のあまたに。

なほわれはそをば思ひ出づ、
楡の樹の森の廣き梢は
水車の上に蔽ひかかりて、
中庭には無花果の樹の立てるを。
祭日には、
色淺黒き婦人等の
絹地なす土地の上行き、
三月ともなれば、
晝も夜も
いと長きその路をば、
黄金なす夢に重れる
軟風(やはかぜ)のそよぎ行くを。

されどわれに與へよ、
暗き光りを盛りなせる
匂はしき杯のその一つを、
そをば乾(ほ)してわが憩(いこ)はんがため、
眠りの蔭こそは樂しければ。
人の世の思想に
心なくてあるは
よろしからず、されど人と
語るはよし、その心の
思ひを云ふはよし、
愛の日について多くを聞くはよし、
なされし業(わざ)を聞くはよし。

されど友は何處(いづこ)ぞ？　ベラルミンと
その仲間(なかま)とは？　多くのものは、
かの泉のもとに行くをば厭(いと)ふ。
富はさはあれ
海におこらむ。
そは畫家のごと、地上の美をば

とり集め、翼あるものの爭ひをば
囀ることなし、また年長く、
市街の祝日の
夜を照らすなく、
樂の音も習俗の踊りもあらぬ
葉なきマストの下に寂しく住むものをも。

今されど人々は
印度へ行けり、
かしこのいと高きいただき、
かの葡萄の山の
そこよりドルドオニュは流れ來り、
麗しきガロンヌと
相合ひて、海のごと廣く
河流は注ぐ。されども海は
おもひでを取りまた與ふ、
愛もまたいそしく眼をとらふ。
その殘れるものを、詩人は修む。

斷章

かつてわれミユウズの神に訊ねたりしとき
神はわれに答へたまひぬ、
汝もつひにはそれを見出でむと。
いと高きものについては默してむ。
月桂樹は禁斷の果實なれば。
されど祖國こそ更に禁斷のものならずや。
その果實すら人みなつひに味はふべし。

シルレル　Schiller (1759—1805)

手套

その獅子園の前に
闘技を待つて、
フランツ王は坐したまふ。
王のまはりには貴族たち、
まはりの高いバルコンには
貴婦人たちが居流れる。

王が指もて合圖をすると、
廣い闘場の扉が開いて、
用心深い足どりで
一頭の獅子が出て來て、
默つてぢつと
見廻して、
長い欠伸をして、
鬣を振つて、
手足を伸して
身を横たへた。

王が再び合圖をすると
第二の扉が
すぐ開いて、
その中から
一頭の虎が
はげしく躍り出る。
虎は獅子を見ると
高く吼えて、
その尾をもつて
恐ろしい輪をかいて、
舌を嘗めて、

怒つて唸りながら
獅子のまはりを
おづおづと一めぐりして、
それから唸りながら
その傍に身を伸ばした。

王がさらにまた合圖をすると、
二重に開かれた檻は一度に
二頭の豹を吐き出す、
豹どもは強い鬪志をもつて
虎へ飛びかかる。
虎はその怒りの足で彼等をつかむ、
すると獅子が一聲吼えて
立上ると、騒ぎがやむ。
物凄い猛獸どもは
輪をばつくり、
殺氣ばんで構へ込んだ。

そのとき勾欄のふちから
美しい手の手套が一つ、
丁度虎と獅子との
眞中に落ちた。

騎士デロルゲスにむかつて、嘲るやうに
クニグンデ孃は云ふ、
「騎士よ、いつもあなたが誓ふやうに
若しあなたの愛が熱烈ならば、
あの手套を取つて來て下さい！」

すると騎士は、早足に
しつかりした足どりで
恐ろしい鬪場へ下りて行き、
怪物どもの眞中から
大膽な指で手套を拾ひ上げた。

そして騎士たちや貴婦人たちは
恐れをののいてそれを見てゐる、
彼は事もなげに手套を持つて歸る。
すると異口同音に賞讃の聲が響く、
けれどやさしい愛の眼つきをもつて
（それは彼に近い幸福を約束する）
クニグンデ孃は彼を迎へる。
然るに彼は手套を女の顏に投げつけ、
「貴女よ、そのお禮は無用！」
して、その時から彼は彼女を捨てた。

希望

人間は多くを語りかつ夢む、
　そのより善き未來の日について。
幸ある黄金なす目的へと
　かつ走り、追ひ行くなり。
世界は老いつ、また若やぐ、
されど人は常により善からんと望む。

希望は人を生へと導き入るる、
　そはたのしき童をまどはし、
そのあやしき光は靑年を誘へども、
　老人とともには葬られず。
人は墓穴に疲れし生を閉ざせども、
なほ墓邊にも希望の草を植うればなり。

そは痴人の頭に生れいづる
　空しきへつらひの妄想ならじ。
そは心の中に高く呼ばはる、
　われらはより善きもののために生ると。
さてその心の聲の語ることは
希望をもてる靈魂を欺くことなし。

芬(フン)酒(シュ)の歌

地水風火が
あつまりて、
生命(いのち)をつくる、
世界をつくる。

シトロンの
液汁(しる)をしぼれ！
人生の核實(さね)は
かくも苦(にが)し。

さて砂糖の
甘き液汁(しる)もて、
この苦さをば
やはらげよ。

迸り湧き立つ
水を注げ！
水はしづかに
萬有(すべて)を包む。

魂(たましひ)の雫を
注ぎ込め！
ただそれのみぞ
生に生を與ふ。

香(か)の散らぬまに
早く汲め！
その燃ゆるまにのみ
泉は活(い)かす。

愛の勝利　讃歌

愛によつて神々も
祝福さる——愛によつて
　人間は神に近づく！
愛は天國をさらに
天國となし——地上をも
　天國とする。

かつてピルラの背後(うしろ)にて
　詩人は琴をかなでたり、
世界は岩より飛び出だし
　人は石より飛び出でぬ。

汝等の心は岩石にして
　汝等の靈は夜陰なりき、

なほ天の焔の力もて
　火を點(つ)けられざりしとき。
なほやはらかき薔薇の鎖もて
若きアモレットらの
　汝等の靈をくくらざりしとき——
なほその胸の歌をもて
やさしきミユウズの神の
　總の諸音を奏(かな)でざりしとき。

ああ！　なほ愛するものたちの
　一つの花環も編まざりしとき！
春はいづれも悲しみて
　エリジウムへと逃れたり。

歡びも得で東天紅(オーロラ)は
　海のふところより上り來ぬ、

歡びも得で太陽は
　海のふところへ落ち去りぬ。

月神（ルナ）のおぼめく光のもとに
彼等は森のまはりを迷ひつつ、
　鐵の桎梏（くびき）を身にまとへり。
星のまどゐにあこがれつつ、
ひそかなる涙をも
　なほ神々は求めざりき。

×

さて見よ！　青き波間より
いともやさしき天の娘はあらはれぬ、
　醉へるが如き岸邊へと
　ナヤアデたちにはこばれつ。
いや若き春の榮えは
黎明のごとく織りなす、
力強き成生の上に
　風と天と、海と地とを。

うるはしき日の眼は笑ふ
暗き森の眞夜中にして。
　バルザムめける水仙は
　そが足もとに花さけり。

はやも夜鶯（うぐひす）は歌ひ出づ、
　愛のはじめの歌を、
はやも泉の音はささやく、
やはらかに愛の胸へと。

幸（さち）あるピグマリオンよ！
はや汝（な）が大理石は溶けつ燃ゆるを！
　アモオルの神、征服者よ！
汝の子等を抱けかし！

×

愛によつて神々も
祝福さる――愛によつて
　人間は神に近づく！
愛は天國をさらに
天國となし――地上をも
　天國とする。

×

金のネクタルの泡の中に、
こころよき朝(あした)の夢は
　永遠の宴樂は、
神々の日は過ぎたり。
いと高き玉座にて
クロニオンはその電光を振る。
オリュムポスは恐れよろめき、
その髮は怒りにふるふ――
神々にその玉座をゆだね

地の子等へ身は下(くだ)るとて
　森を通して嘆息(ためいき)は行く、
馴らせる雷を身にふまへて
レダのくちづけにまもられて
　巨人の殺戮者は眠り入るなり。

莊嚴なる日の駿馬を
　フェブスは金の手綱もて
　光明の廣場(ひろには)を驅れば、
そのとどろきに民は驚るる。
　その白き日の駿馬、
　そのとどろきを、
愛と調和とのもとに
ああ、いかに彼はよく忘れ去りしよ！

天よりぞ來(こ)し女神のまへに
地の女神は身をかがめたり、

その召さる車の前には
誇りてぞ立つ孔雀の番ひ。
　支配者の金冠をもて
その匂ふ髮を飾りて。

美しき女王よ！　ああ、愛は
甘き願ひもて顫ふ、莊嚴なる
　汝が御前に近づかんとて。
誇らはしき高き座にして
　神々の女王もなほ、
この心を囚ふる女の手より
　借るべきか、魅惑の帶を。

×

愛によつて神々も
祝福さる——愛によつて
　人間は神に近づく！
愛は天國をさらに
天國となし——地上をも
　天國とする。

×

愛は夜陰の國をも照らす！
アモオルの甘き魅力は
オルクスのためにもつかふ。
セレスの娘の笑ひかくるとき、
黑き王もしたしき眼する。
愛は夜陰の國をも照らす。

地獄へも天國の聲をつたへ、
暴き鬼をもしづむるは
　汝が琴ぞ、トラキア人よ——
ミノスも顏を淚にぬらし
苛責の業をやはらげ、
荒き蛇もいとやさしく
メゲエルの頰にくちづけ、

また鞭の響くことなし。
オルフェウスの琴に追はれて
兀鷹はティティヨンより去る。
レエテの水も、コシトゥスも、
その岸を打つ音をひそめ、
汝が歌を聞く、トラキア人よ！
汝は愛を歌へれば、トラキア人よ！

×

愛によつて神々も
祝福さる——愛によつて
人間は神に近づく！
愛は天國をさらに
天國となし——地上をも
天國とする。

×

永遠の自然の中に
その花のあとは匂ひ、
その金の翼はふるふ。
月光の中よりわれに
アフォロディテの眼の招かずば、
日の照る丘より
星の海より、
女神のわれに微笑まずば、
星も日も月光も
わが心をも動かすなし。
愛よ、ただ愛の
自然の眼より
鏡のごと微笑まずば！

銀の小川は愛をうたひ
愛は小川になごみを教ふ。
愛は訴ふる夜鶯の
歎きにも靈を吹き込む——
愛よ、愛はただ奏づ

自然の琴を。

太陽の眼もてる智慧も
偉大なる女神も引退かん、
　愛の前には！
征服者も、君王も、
奴隷の膝を曲げ得ざりき、
　そを今愛は曲げしめぬ！

けはしき星の通ひ路を
恐れ氣もなく汝が前に立ち
　神の座へと連れ行くは誰？
神殿をこぼち
墓の隙をよぎりて、
　エリジウムを汝に示すは誰？
それがわれらをば誘ひ入らせずば
いかでわれらは不死たらむ？

精神もまた彼女なくば
いかでその師を求め得んや？
　愛よ、愛のみぞ
　自然の父へ
愛のみぞ精神を導く。

愛によつて神々も
祝福さる――愛によつて
　人間は神に近づく！
愛は天國をさらに
天國となし――地上をも
　天國とする。

レナウ　Lenau (1802—1850)

ねがひ

わが上にとどまれ、汝くらき眼よ、
ふるへ、汝がまたき力を、
嚴かに、やさしき、夢のごとき
きはめがたくこころよき夜よ！

汝があやしき暗さをもて
この世をわれに遠ざけよかし、
汝れのみぞわが身のうへに
いつもいつもただよへかし。

霧

霧よ、わが眼につつみ去れ
谷も、流れも、
しげれる森も、
またほのかなる日ざしをも。

汝が灰色の暗をもて
この世をあまねく奪ひ行け、
われを悲しくするものを
わが思ひ出のかぎりをも！

蘆の歌

靜かにすめる池のおもてに
月のやさしき輝きはやどる、
蘆のみどりの穗のなかに
蒼白き薔薇の花環を編みつつ。

鹿はかなたの岡邊をさまよひ
暗き夜の空をうち見やる、
をりふし鳥は身うごきす
夢みつつふかき蘆の中にして。

涙せきあげつつも眼ふすれば、
わが胸のふかきそこひに
しづかなる夜の祈禱のごとき
甘き愛慕のおもひはかよふ。

おなじく

空はくもりぬ、雲は飛び
雨ははげしくふりいでぬ、
風は池邊になげくらく
星はいづくにかくれしか。

失せにし影を求むべく
波だつ池はいとふかし。
ああ、かのひとはまた笑まず
わがいと深き悲しみに！

隠れ場

屛風なすその高巖に、
銀松の曲りくねりて
悲しげに囁くばかり、
啼く鳥の聲も聞えず。

よろこびの歌もひびかず
美はしき春のときにも。
兀鷹の聲もいたみて
この暗き寂寥のうち。

岩に生ふ柔かき苔、
ふくらみてなにか求むる。
いざ來れ、雲よ、來て泣け、
人知れぬわが涙にと！

吹く風もことにひそめき
その謎の聲も悲しき。
そこここに寂しき花の
夕影にかすかに顫ふ。

音もなし、この峽間には
流れ込む川のさやぎも、
靜けさのここにて開きし
そをば世に告げざらんため。

まことこの荒き岩すら、
わが來ては悲しき戀を
人知れず嘆く場所の
靜けさを守らむとする。

秋思

樫の樹の森は鳴り立ち
空はみな雲にかくれぬ、
秋風は荒く冷たく
旅人の行くあとを追ふ。

秋風の刄をもちて
森なかに荒れくるふとき、
過去はわれに吹きくる
幸福のその刈田より。

骨立ちし樹々の上には
形ばかり木の葉かかりて、

その木の葉一つ一つに
落ち來ては路をうづむる。

いやしげく落つるたびごと
わが路をさらに遮へつ、
むしろわれここに止りて
この森に死なんと思ふ。

晩秋

うれはしき雲や、秋風、
ひとりしもわれはさまよふ、
枯木には、鳥もうたはず——
ああ、靜けさよ、さびしさよ！

死の冷えに冬は近づく、
いまいづこ森のよろこび、
いかにせしありし野もせの
黄金なす穗波のゆらぎ。

たそがれて冷たくなりぬ、
牧場には霧たちこめて、
あらはなる森を吹きすぐ
鄕愁よ、すべて逃るる。

わが心、巖間を出づる
谷水の響を聞くや？
打入りてわれら語りし
その時の長かりしかな！

いかにわれおのれも人も
幾度びか惱み痛めし、
愛のゆゑ、望みのゆゑに。
そも過ぎて、今ぞさすらひ。

旅にしてわれはいましを、
そともにはそよぐ西風、
あるはまた嵐吹くとも
さしこめて護(も)りてはなたじ。

われはわがをはりの路を
もだしつつひとり迷ふか、
げにわれらふたりの墓邊、
雨ならで誰も泣かじか！

冬の夜

かの深き森のおくがに狼は吠ゆ。
子の母を呼びさますごと、
夜の夢をやぶらんと吠ゆ、
血のたるる餌をば求めて。

いま風は雪と氷の上を行く、
もの狂ほしき風と風とに
かたみに打ち當らむとするがごと。
いざ醒めよ、心よ、荒き嘆きにと！

汝(な)が死者をして蘇らしめよ、
汝が苦惱(なやみ)の暗き群れをも！
そをば北なるその仲間(なかま)
嵐とともに行かしめよ！

流れを見る

またかへるなきその幸福(さち)の
流れ去るをば汝れは見る、
すべて波打ち流れ去る
河を見るこそいとよけれ。

おお、ただ眺め入れ、眺め入れ、
汝れは愛する汝がものの
その心より押流さるるも
惜しむ心はなかるべし。

まじろぎもせでただ見入れ
汝れの涙の落つるまで、
さらばその熱き涙のひまに
流るる水を汝れは見む。

忘却(わすれ)は心の傷口をも
夢の如くに癒やすべし、
靈(れい)はおのれの苦惱(くやみ)もて
流れすぐるを見るべけれ。

•

馭者

三月の夜はなつかしかつた、
白銀(しろがね)の雲は飛んでゐた、
やさしい春のかがやきの上に
喜ばしげに飛んで行つた。

森も野原もまどろんでゐて、
路には人の影もなかつた。
街道には月の光のほかに
誰も醒めてゐるものはなかつた。

ただ微風(そよかぜ)のみがかすかに囁いて、
春の子供たちの眠つてゐる
しづかな寢間(ねま)を通つて
やはらかに吹き過ぎてゐた。

ただ小川のみがひつそりとした
野邊にたのしく匂うてゐる
花の夢の中を通つて
ひそめき流れてゐた。

わたしの馭者はその鞭を
さらにはげしく鳴らした、
山を越え、谷を通して
その角笛は爽かに響いた。

匂やかな花野の中を
こころよげに走つて行く
わたしの馬車の四頭の馬の
蹄の音は高く響いた。

森も野もまたたくひまに
はせ過ぎて、見廻す間なく、
まるで夢のかたちのやうに
安らかな村々も消えて行つた。

この幸福な春景色の中に
ひとつの墓地があらはれて、
すばやい旅人の眼を
深い思ひにと引きとめた。

山腹にもたれるやうに
蒼ざめた塀があつて、
神の十字架が高く立つてゐた、
聲もない悲しみをもて。

そのとき馭者は手綱をゆるめて、
悲しげな面持をして
ぢつと馬をひきとめながら、

十字架の方を見やつて云つた、
「お氣にさはるか知れませんが
ここに車をとめさせて下さい！
彼方にわしの友達が眠つてるんです、
あの冷たい土の下に！

そりやアやさしい男でした！
旦那！　ほんとに殘念です！
あの友達ほど上手に角笛を
吹けるものはもうありませんよ！

ここまで來るとわしはきつと馬をとめて、
あの草葉の蔭に眠つてゐる友達を
慰めてやるために、その好きな歌を
吹いてやらずにゐられんのです！」

かう云つて馭者は墓地の方を向いて
たのしい旅の歌を吹きだした、
その音色は墓地の眠をやぶつて
その友の方へと響いて行つた。

その角笛の音はほがらかに
むかうの山から木精した、
ちやうど死んだその馭者が
その歌に音を合せるやうに。

それから馬車はまた野越え坂越えて
手綱を垂れた儘驅けて行つた。
けれどまだ長いことわたしの耳には
あの丘での音色が殘つてゐた。

三人のヂプシイ

いつかわたしの馬車がのろのろと
荒れた砂原をきしつて行つたとき、
とある草場の上に、
三人のヂプシイを見た。

一人はその手に胡弓をとつて
ひとりで興に入りながら、
夕照(ゆふやけ)の光に照らされながら、
火のやうな歌を彈いてゐた。

いま一人は口にパイプをくはえ
その煙をぢつと眺めてゐた、
この世にもうなんの幸福も
いらないやうに樂しげだつた。

三人目のはすやすや眠つてゐた、
その鐃鈸を樹にかけた儘。

その絃の上には風が行き、
その心の上には夢が行つた。

着物は三人とも穴があいて
違つた布(きれ)でつづくつてゐた、
けれどみな平然として
地上の運命を嘲るやうだつた。

三通りに彼等は示した、人生が
われらの眼にかくしてゐることを、
いかに人が煙にし、眠りにし、歌にして
三通りに空費してしまふかを。

わたしは馬車を驅りながら、
なほ長いこと、ヂプシイの方を、
その暗褐色の顏と、黒い捲髮(まきげ)とを
見返らずにはゐられなかつた。

アイヘンドルフ Eichendorff(1788—1857)

郷　愁

遠き旅路にゆくひとは
いとしきものをともなへよ、
よろこびうたふよそびとの
などかへりみん旅人を。

くらき梢よ、いにしへの
うるはしかりし日を知るか、
ああ、ふるさとははるかなる
山のかなたにあるものを。

君をたづねし夜をば知る
星を見るこそたのしけれ、
こひしき君の窓になく
夜鶯(うぐひす)こそはうれしけれ。

朝よ、うれしきわが友よ、
靜けき朝をかなたなる
山にのぼりて、心より
言(こと)を告げてん、ふるさとに。

おもひで

一

梢をわたる葉のそよぎ、
小鳥は野へと飛び去れり、
しづけき山に湧く泉、
わが故郷(ふるさと)は何處(いづこ)ぞや。

昨夜(よべ)また夢にみしものを、

めぐりて立てる山々の
いかに思ふと問ふほどに、
われは涙ぞわきいづる。

ああ、この他國の山にして、
人も、泉も、岩も、樹も、
梢にみだるるささやきも、
みなただ夢の心地する。

二

遥かなる故鄕の丘、
靜かにも高く立つ家、
春ごとにわれののぼりて
野の方を眺めてし山、
あまたたびわが想ひてし
母も、友も、また兄弟も、
みなまたもわれに偲ばゆ、
靜かなるこの月の夜に。

三

森なかのここにかしこに
われは聞く、せせらぎの音、
森なかのさやぎの聲を、
その立てるところも知らで。

夜鶯はあまた啼くなり、
この森の寂しき中に、
美しき古き日のこと
語らむとするがごとくに。

月影のうつるがままに
なにとなくかくも覺えぬ、
わが下の谷に城ありて
ここよりは遥かなるを。

白き薔薇、紅き薔薇の
咲きいでし城の園には、
よき人のわれを待ちつつ
空しくも失せて久しと。

他國にて

一

見知らぬくらき町並を
家より家へとさまよへど、
なほも心のさだまらず、
みな悲しくも見ゆるかな。

あまた行き會ふ人ごとに
あるは笑ひつ戯れつ、
みなたのしげに見ゆれども、
われは心も消えんとす。

家並の上をかけりゆく
青めく條を、その上に
なほただよへる日の影を、
天ゆく雲の影見れば、

かかる眺めのなかにして
わが眼に涙ぞ浮びくる、
われを深くも愛する人の
すべてはあまりに遠ければ。

二

野は綠して
天靑し、
野邊にふたりは
語りしか。

またも歌ふは
夜鶯か、
軟風に啼くは
雲雀か。

歌は響けど、
君なくば、
春はかへれど、
春ならじ。

春の挨拶

朝紅に染められて、
山はまるで火事のやう、
山のいただきには一本の
樅の樹が野に差出てる。

その高い梢に立つて
遙か地を見おろせば、
さしも美しい世ですらも
花のために見えやしない。

春の夜

庭園の上の空に
渡り鳥の行く音がする、
それは春の匂ひを告げる、
花の咲く日も近いと。

わたしはをどりたい、泣きたいが、
それが出來ないやうな氣もち。
月の光りともろともに
むかしの奇蹟がまたさし込む。

月も星も告げて云ふ、
林も夢にそよいで云ふ、
夜鶯(うぐひす)も歌つて聞かす、
みんなおまへのものだよと！

まごころ

旅人の夢に、その眠りながらも
聲もなく泣き出すほどに、
金いろに染まつた雲の間(ま)に
その故郷(ふるさと)のうかぶやうに、

この春の花をわけつつ、
山を越え、谷をわたつて、
おまへの姿の行くのを見る、
わたしを呼び戻さうとするやうに。

おのれも知らぬ夢の心地に、
不思議な波をたたへて、
永遠の歌の泉がみだれつつ
わたしの胸を流れて行く。

夜鶯

なにを歌つてゐるか知りたい
かくも美しいこの夜(よる)を、
今この世にはもうおまへたちと
おなじく起きてるものは誰もない。

天には雲がさまようて行き、
地はすつかり眞蒼(まつさを)だ、
夜はしづかに音もなく
森の草場を忍びゆく。

夜の雲が何處へ行くのかを
わたしはちやんと知つてゐる、
愛する人の眠つてゐる
あの山のむかうの谷あひに。

隱者が鳴らす小さな鉦の
音もあの人は聞きはしない、
うつくしい捲髪の髪は
その顔中を蔽うてゐる。

誰も吃驚させぬやう、
神樣がその土地を選んで
月影と一緒に蔽はれた、
そこでわたしを夢みてゐよう。

山から

あのふもとの家にすんでゐた
いとしい人は墓へと行つてしまつた、
ふたりがいつしよにかけてゐた
前の木だけが殘つてゐる。

いつもあの家を見ずにはゐられない、
見ても涙でよく見えない。
わたしもふもとへ下りて行つて
そこでひとりで死んぢまひたい！

夕ぐれに

山も森もだんだんに
夕やけのいろに染められる、

小鳥が枝からたづねるには、
あのかたにことづてしませうか？

おお小鳥よ、おまへはうそをつく、
あのひとはもう谷には住んでゐない、
あの空の果てまで飛んで行つて
おやすみなさいと言つてくれ！

碎けた指環

風もつめたい谷底に
水車はやつぱりまはつてゐる、
愛する人は行つてしまつた
そこの住居(すまひ)をあとにして。
彼女はかはらぬまことを誓つて
指環をしるしにくれたけれど、
そのちかひも破られたので
わたしの指環は碎けてしまつた。

いつそわたしは樂師になつて
ひろい世間へ出て行きたい、
わたしの歌をうたひながら
家から家へまはりたい。

いつそわたしは騎兵になつて
血なまぐさい戰場を走りたい、
くらい夜なかに陣營の
焚火のそばでねむりたい。

水車はごとごといつてゐる、
わたしはどうしたものかもわからない――
いつそわたしは死んぢまひたい、
そしたらみんな靜かになるだらう。

河邊にて

河はさびしくせせらぎ流れて行く、
いつものやうに、やつぱり今日も、
わたしは岸にもたれて聞いてゐる、
ああ、わたしの愛したものは疾くに逝つてしまつた！
靜かだ、そよとの風もなく、歌聲もせぬ。

眞晝どきのあつさの中に、
しづかに柳の木立が夢みてゐる
冷たい水の上まで身を垂れながら。

柳はみんな、しつとり濡れて
長い綠の髮したサイレンのやう、
かすかにあやしく、昔のことを
あこがれ心に歌つて聞かす。
歌へ、柳よ、綠の柳！
愛する人の墓の聲のやうに。
おまへの惱みに充ちたひそかな歌が
わたしを苦痛の河に引き込む。

逆戻り

物音なんぞは食へやしない、
詩は靴なしで歩いて行く、
そこでわたしもこの美人に
たうとう背中を向けてしまつた。

それから長いことせかせかと
わたしは世間中をほつき歩いた、
だがもういつでも、きまつたやうに
わたしは氣のきかない客だつた。

何處の宴會にも遲れて行つて、

満員でわたしは斷はられた、
家の前で飮みかすを頂戴したが
誰のために飮むやら知らなんだ。

幸運の神のみまへにうやうやしく
わたしは足首までもお辭儀をしたが、
女神はすまして横向いて
お辭儀させたままほつとかれた。

でも、起き直つたとき、わたしはまた
悠々として眺めやつた、
山も谷も光り輝いて
どんな枯木も花咲くのを。

世間の入口は無細工千萬、
靴がなくても歩かれる――
では、お天道樣、どうぞまた
この宿無しを照らしたまへ。

夕　景

牧者は笛を吹いてゐる、
何處か遠方で鐵蹄の音。
森はかすかにそよぎ立ち、
野には流れの音がする。

ただあの丘のむかうだけは
夕紅で眞紅に染まつてゐる――
おお、わたしに翼があつたなら
あの夕紅の中へ飛んで行きたい！

ウーラント Uhland (1787–1862.)

春の歌

一 春の豫感

あはれ、やさしき甘き息吹よ、
はやも汝れはまた呼びさます
春の歌をばわが胸に、
やがて菫も咲きいでん。

二 春の祭

黄金なす美しき春の日よ、
心にあまるよろこびよ、
いとよき歌を得べき身ならば
などかこの日につくり得ぬ。

さはれなじかはかかる日に
詩にやつるべきおろかにも、
春はこよなき祭なれば
かつやすらひつかつ祈らん。

三 春の讃美

早苗のみどり、菫のかほり、
雲雀のさへずり、つぐみの歌、
日光の雨、やさしき微風！

われかく歌はばいとしの汝れを
讃むる言の葉、またとあるべき、
やよ、春の日よ。

四 春の慰め

心よ、などかためらふこのよき日に、
刺さへ薔薇の花もつ日に。

おお橋よ、絶ゆるな、いたくふるふ橋よ、
おお岩よ、壞るるな、危ふき岩よ、
地よ、しづむな、天(てん)よ、落つるな、
かのひとのもとに辿りつくまで！

安息の谿

のこる日かげに染められて
黄金(こがね)まばゆき横雲の
けはしき山を築くとき
涙しとどに問ふらくは
「わが求めつる安息(やすらひ)の
谿はかしこにあるべきか」

身ぢかに

わたしはおまへの庭へ行く

旅の歌

一 遠き里にて

ここなる木立のもとに憩(いこ)ひ
小鳥の歌を聞きつれば
ふかくも語るよわが胸に、
われらの戀を知るや汝れ
このはるかなる里にして。

ここなる小川のふちに憩(いこ)ひ
ながむる花の匂はしさ、
誰かはここに送りたる、
はるけき故郷(くに)なるかのひとの
心をこめておくりしか。

二 旅がへり

今日はおまへは何處にゐる、
ただ蝶ばかりが飛んでゐる
このさびしい中を。

けれどおまへの花壇は
目もさめる花ざかり、
花のかほりを含んで
西風はわたしを吹きめぐる。

わたしは感ずるおまへが傍(そば)にゐて
このさびしさを賑はすのを、
目には見えねどこの世の上に、
ちやうど神樣がゐますやうに。

森の歌

たのしい氣持で森をさまよふ
追剝なんかこはくもない、
わたしの持物はこの愛する心だけだ
そんなものを惡者はほしがらない。

おや、何だか藪がざわざわいふぞ、
人殺しが來たんぢやないか？
愛する人が飛んで來たんだ！
そして死ぬほどわたしをだきしめる。

海邊の城

君は見たりやかの城を
海邊(うみべ)に立てるかの城を。
黄金(こがね)、薔薇(ばら)いろうるはしく
雲はよぎれりその上を。
鏡のごとき水面(みつのも)に

城はしづかに影ひたし、
夕の雲の中までも
遙かに高く聳えしを。

「げにわれも見ぬかの城を
海邊に立てるかの城を、
月はかかれりその上に
霧は罩めたりそのわたり。」

吹きくる風と打つ浪の
さやけき音（ね）をば聞きたりや、
かの高樓（たかどの）より響きくる
歌のひびきを聞きたりや。

「風と浪とは今深き
沈默の中にやすらへり、」
嘆きの歌の御堂より
響きてわれを泣かしむる。」

君は見たりや高樓（たかどの）に
紅き袍をばうちなびけ
金の王冠（かむり）をきらめかし
王と妃（きさき）の歩めるを。

朝日のごとく麗（うる）はしく
その金髮をかがやかせ、
いとたのしげに王と妃（ひ）を
導く美（は）しき少女子（をとめご）を。

「げにわれは見ぬ、兩親（ふたおや）を、
その王冠も光なく
黑き喪服（もふく）をまとへるを、」
されど少女（をとめ）は見えざりき。」

リュッケルト Rückert. (1788—1866)

眞夜中に

眞夜中に
　眼がさめて
　空を眺めたが、
　星月夜なのに星ひとつ
　わたしに笑ひかけなかつた、
　眞夜中に。

眞夜中に
　暗い果てまでも
　かんがへて行つたが、
　なんの明るい考へも
　わたしに慰めを與へなかつた、
　眞夜中に。

眞夜中に
　わたしは氣をつけた
　あまり動悸のはげしさに、
　苦しい脈搏が一つ
　高鳴りをした、
　眞夜中に。

眞夜中に
　わたしは戰つた
　おお人類よ、なんぢの苦しみを、
　戰ひは決しなかつた
　わたしの力では、
　眞夜中に。

眞夜中に

わたしは力を
なんぢの手にゆだねた、
死と生の主よ
守つてゐて下さい、
眞夜中に。

戀の春から

一

春の祭のうつくしさ
でも三日きりつゞかない、
愛する人を飾るがよい
薔薇が萎れぬそのうちに！

酒くみかはし思ふさま
その喜びをうたふがよい、
春の祭のうつくしさ
でも三日きりつゞかない。

二

おまへの眼の中には一人の若者が
花婿の姿をして喜んでゐる。
さあ、わたしの眼をのぞいてごらん
花嫁の姿をした娘が見えるから！

三

わたしは小さな鏡を知つてゐる
それは海や空よりなほ大きい、
その底から湧く光のやうに
海や空は清くはない。
いつもわたしはのぞいてみる
いつもその中に自分が見たいので、
この鏡がいつまでもくもらぬやうに
わたしの姿よりましなものを映さぬやうに！

四

あのひとにやりたくないやうな
星は空にはひとつもない、
いや、取り出すことさへ出來たなら
わたしの心もやりたいよ。

五

緑いろの帽子をかぶり
朝がた庭へ出るときに、
まづ心に浮ぶのは
あのひとは今ごろどうしてる？

六

眞夜中のあかりもない部屋に
ねむられないでゐるときに、
わたしはよく見る
むかうのすみに
思ひがけなく
あのひとを。

びつくりする程はつきりと
美しい盛りの姿をして、
ああ、そこにすわつて
薔薇のやうに笑つて、
はや子供を膝に
だいてゐる。

七

おまへはうつくしい
けれどまだわたしのものでない、
おお、わたしにキスしてくれ。
そしたらおまへはわたしには
いちばん美しい人になる。

八

今夜わたしはゆすぶる、梨の木を
たとひ實が落ちようと落ちまいと、
今夜わたしはたづねる、あの人を
たとひ歡迎されようとされまいと。

九

野邊で

野越え森越えそなたをたづね
西に東に駈けあるき、
それで眞黒に日にやけたとて
いやになるとは無理なひと。

十

千八百十三年に
おれとおれの祖國は自由になつた、
おれは女の魅力から
祖國は他國の束縛から。

千八百十四年に
おれはまたもや腑甲斐なく
女のとりことなつてしまつた、
祖國よ、おれに倣つちやいけないぞ！

十一

十二人の求婚者がもつてみたい、そしたら澤山よ、
みんな美しくつて、みんな怜悧でなかつたら。
ひとりは前から走つて來させるために、
ひとりはうしろから飛んで來させるために、
ひとりは冗談をさせるために、
ひとりはそれを笑はせるために、
ひとりは陰氣なのを氣がるにさせるために、
ひとりは陽氣なのをふさいでしまはせるために、

ひとりは右手をかしてやるために、
ひとりは左手をかしてやるために、
ひとりは懇ろにうなづいてやるために、
ひとりはやさしい眼つきをしてやるために、
いまひとりは大方キスをやるために、
そしてあとのひとりは飽き飽きしてわたし自身をやる
ために。

うた日記から

一

いつも若くてゐることは誰にもゆるされぬ、
だが年とつて若い時分を思ひ返すことは出來る、
するとわたしは今のわたしでない、昔のわたしだ、
若くて無邪氣で幸福で、實際あつたよりも幸福で。

二

もしまだ十年生きるなら
十分はたらくことがある、
もしも明日死ぬるなら
わたしは十分はたらいた。

三

死にたいと思ふのは
若い時にはたのしみだ、
年をとるとさて考へものだ、
だがいづれにしても本氣ぢやない。

シャミッソオ Chamisso.（1781—1838）

女心

×

さあ手傳つて頂戴、妹たち、
ねんごろにわたしのおつくりを
今日のわたしはしあはせものだから。
わたしの額のまはりに
骨折つてかけて頂戴、
花のミルテのかざりをも。

わたしがすつかり安心して
喜びに腕をふるはせて
愛する人の胸に横たはつたときに、
やつぱりあの人は呼んでゐた
あこがれに胸ときめかし
もどかしげにも今日の日を。

さあ手傳つて頂戴、妹たち、
わたしのおろかな心配が
わたしの胸からなくなるやうに。
どうかわたしが澄んだ眼つきで
あの方をながめることができるやうに、
喜びの泉のあの方を。

あなたはわたしの最愛の方、
わたしを照らして下さるお日様、
わたしにあなたの光を惠んで下さいますのね。
お祈りするやうな氣持で
へりくだつた氣持で
わたしをあなたにつかへさして下さいまし。

ねえどうかあの方に、妹たち、
あの方に花をふりかけてあげて頂戴、
あの方に薔薇をささげて頂戴。
けれど妹たちよ、あなたたちからは
わたしは嬉しい中にも
悲しい氣持でお別れしてゆくのよ。

×

やさしいお友達、あなたは驚いて
わたしをおながめになる、
どうしてわたしが泣くのやら
あなたはお分りになりませぬ、
この濡れた眞珠の
見慣れぬ飾りも
わたしの睫毛のうへに
ふるへさせておいて下さい。

なんてわたしの胸の氣づかはしい
なんてまあ、嬉しい事！
なんといつていいやら
その言葉さへわかりましたら、
さあいらつしやい、あなたのお顔を
このわたしの胸に、さうしたら
あなたのお耳にささやきませう
みんなわたしの喜びを。

いろんなしるしを母さまに
わたしはみんな訊きました、
お母さまはみんな親切に
わたしに敎へて下さいました、
どう見てもその様子では
いまに一つの搖籃(ゆりかご)が
入用(いりよう)になりますよつて
わたしにおつしやいました。

もうおわかりになりましたらう
どうしてわたしが泣いたかを、
ねえ、あなたはもうこの涙を
ごらんになつてはいけませぬ、
わたしの胸にさうしてらしつて
この胸がどんなに打つてるか
ぢつと聞いてゐて下さいましな、
もつともつと、わたしはだきしめたい。

ここのわたしの寢床のそばに
その搖籃(ゆりかご)をおきませう、
そしてその中に寢かしておきませう、
そつとわたしの樂しい夢を。
朝が來ますと
その夢は眼をさまします、
そしてそこにはあなたの面影が
そつくりわたしに笑ひかけます。

ノヴリス Novalis. (1772—1801)

聖歌

われは見る、君を百千(もゝち)の畫像に
マリアよ、いみじくもうつされたるを、
されどわが心の君をおもふごとくに
ひとつだに君をゑがきしはなし。

われはただ知る、君を見しより
世のあらしの夢のごとくに吹きさりて、
なづけがたくこころよき御空の
はてしらずわが心にあらはれしを。

グリルパルツェル

Grillparzer(1791—1872)

他國

はやもう旅には疲れた、
これが果てならよからうに！
あんまりいろいろ見聞きして
何だか氣持も變になる。

そんなら家へかへりたいか？
とんでもない！　家ならいやだ！
いつも變らぬものうさに
生きた氣持もしなくなる。

そしたら何處へ行くつもり？
何處へ行つたらやすめるか？
何處へ行つても他國なら
君の故郷は何處にもない！

光と影

そなたの眉の黒いこと、
そなたの胸の白いこと、
わたしのたのみは少ないが
このたのしみは限りない。

眼もとはしきりにもの言ふが
舌は默つてかたらない、
やりそこなひは古いけれど
望みはいつもあたらしい。

わたしの贈り物はみすぼらしいが

愛のおもひはすばらしい、
わたしの心は燃えるのに
書いてみると冷たくなつてしまふ。

のんきな心

金もなければ心配もない！
この幸福にくらべられる何がある？
金、金なら借りられる
のんきな心は誰が貸す？

君等は今日は明日の苦勞、
明日はまた後世の苦勞！
わたしは今日は今日の苦勞、
明日はまた明日のこと。

そんなら來世は？　若し明日にも
死の犠牲（いけにへ）になるとても
借金もなく心配もないならば
それがもう天國ぢやないか。

接　吻

手の上ならば尊敬のきす、
額の上なら友情のきす、
頰の上なら厚意のきす、
脣の上なら愛のきす、
閉（ふさ）いだ眼の上ならば愉悦のきす、
掌の上なら懇求のきす、
腕と頸なら欲望のきす、
さて、その外はみな狂氣の沙汰よ！

シュトルム Storm (1817—1888)

エリザベエト

ほかの人を良人にするやうに
おかあさまはお言ひになる、
前からおもつてゐた方を
すつかり忘れておしまひと、
でも忘られませぬどうしても。

なんてつれないおかあさま、
ほんとにひどいおかあさま、
賞めて貰へる筈のことが
いまはなぜまた罪になる、
ああ、どうしたらいいんだらう！

わたしの誇りとしあはせが
こんな苦勞を生んだのか、
ああ、こんな破目にならなかつたら！
ああ、いつそわたしも乞食になつて
廣い野原を行つちまひたい！

憂き世

若いはげしい愛情を
そそいだ女はどうしてか、
彼のおもひを受けつけず
顧みようともしなかつた。

そののち彼は一人のおとなしい
娘を家へ連れて來た、
娘はたくさん男もある中で
彼のことばかりを思つてゐた。

彼の心は娘のために
つひぞ燃え立つたこともない、
彼女はつらい思ひをしながらも
彼のためにだけ生きてゐた。

おまへだつた

賑かな群れは森へと出て行つた、
おまへは子供の守りしてお留守居に、
森でわたしはみんなと踊つて笑つてゐた
おまへのことなんか考へもせず——
そのうち日が暮れて心もおのづから
われにかへる時がくると、
わたしを喜ばせてくれるものに氣が付いた、
おまへだつた、おまへだけだつた。

たそがれどき

ふたりは隅の小部屋にすわつてゐた、
夕日は窓掛を洩れて落ちてゐた、
いそしみの手もいまはやすらうて、
おまへの額は赤い光に染められてゐた。

ふたりは默つてゐた、このたのしい時に
ふさはしい一言もわたしは知らなかつた、
隣りの部屋では老人たちが喋つてゐた——
おまへは不思議な眼をしてわたしを見てゐた。

小曲

×

戀はさながら子守唄

おまへをやさしう寝入らせる、
寝たかとおもふと歌はやむ、
さめた時にはまたひとり。

×

なぜにこんなにこの胸が
悲しく重くなりまさる？
愛もなくしてキスをした
君をば神よ許したまへ！

ピンク

朝はやく花環を編んで
愛する人におくつてやつた、
誰からとも告げないで
花を摘んだのが誰だとも。

ところがその晩こつそりと
舞踏會に行つてみたら、
あの人はピンクの花を胸に挿して
わたしを見つけて笑ひかけた。

クライスト Heinrich von Kleist (1777—1811)

若者の嘆き

冬よ、去り行くか汝れ
　やさしき翁よ、
胸のおもひを汝れこそは
　かたき氷としづめしを、
いままた春のあたたかき
　ゆたけき息をかけられて、
流れも溶けそめぬ——
　あはれまた、胸も溶くるか！

シェナイッヒ・カロラアト

Prinz Emil zu Schönaich-Carolath (1852—1908)

昔の人に寄する歌

一

我が生れし市（まち）は谷間にあり
かなたなる流れにそうて、
我れは歸りぬ、貧しきままにて、
我が手は仕事に硬ばりしかど。

かしこには我が殘したる戀人も住む、
懷をおもくして我が歸りくるまで。
されど今、雪解（ゆきげ）の風の小路をとほして
乞食の歸鄉にうたうたふのみ。

今日我れはいと遙かにも道行けり、
雨に漲る流れを越えて——
遲かりき、多くの人は我れに言へり、
彼女は汝れをはや忘れぬと。

二

灰いろの鳥が荒野を飛んで行く
故鄉をはなれて鳴いて行く、
おなじなげきをうたふ身か
鳥よ、おまへとわたしとは。

北から嵐が吹いて來て
おまへの巣をばこはしたか、
大丈夫だとおもつてゐたものを
わたしも奪（と）られてしまつたのだ。

ふたりはいつしよに歌はうよ
なくなつてしまつた幸福を、

さうして遠くに飛んで行かう
飛んで行つて二度とかへるまい。

三

メランコリイな羅馬の子
どうしておまへが忘られよう、
おまへの瞳は暗かつた
扁柏(いとすぎ)の森より暗かつた。

おまへの口は痛くも燃えるキスをした
まるでラティイムの日のやうに、
おまへは羅馬の一ばん美しいマドンナよりも
もつと美しくやさしいものを！

でも――はや萎(しを)れて色あせる
ロマニヤの薔薇さへも、
秋風は枯草を吹き鳴らし行く
カンパニヤの果てまでも。

西の海から吹いてくる風は
雪もよひかと冷たいが、
これは獨逸の風であらう
昔の人の風であらう。

木の葉はちる、わたしも行つてしまふ
わかれねばならぬこのふたり……
わたしの心は薔薇の木か
五月に一度咲くばかり。

おまへのところで見つけたものは
のこらず墓へ行つてしまつた。
みな一場の夢だつた、
わたしがおまへにキスしたのも。

雨はふるふる、風は吹く
扁柏の老木は鳴りさわぐ。
メランコリイな羅馬の子
おまへはすぐにわたしを忘れよう。

記念のために

薔薇の蕾をいかでかわれ愛さむ、
そはあまりにも早く飛び去れば、
かへるところなく、とどまるなく、
その香りは果てなき國へと過ぎ去れば。

ただ苦痛のみぞ不滅なる。
汝が曾て有たざりしもの、
望まざりしもの、忘れざりしものぞ
汝が天堂の礎たらむ。

プラアテン Platen (1796-1835)

トリスタン

美はしきもの見し人は
はや死の手にぞわたされつ、
世のいそしみにかなはねば、
されど死を見てふるふべし
美はしきもの見し人は。

愛の痛みは果てもなし
この世におもひをかなへんと
望むはひとり痴者ぞかし、
美の矢にあたりしその人に
愛の痛みは果てもなし。

げに泉のごとも涸れはてん、
ひと息毎に毒を吸ひ
ひと花毎に死を嗅がむ、
美はしきもの見し人は
げに泉のごとも涸れはてん。

ねがひ

わが歌のみな歎きなるを許したまへ、
またこの眸の涙にくもるをも。
げにやおのれも多くを堪へて來ぬ、
苦痛の劍につらぬかれつつ。

かろき言葉もてわれを測る人等は
この胸のそこひをいかで見うべき。
そのたはむれはすべておのれを忘れむがため、
微笑さへもわれにはいとど辛きものを。

レエムブルック Lehmbruck

（自殺せる彫刻家）

薄暮

深き靜寂よ、身のまはり、
日は遠方に沈みゆく、
一つの枝ももはや動かず。
われはさびしく、さびしく歩む、
いつもの如く、愛もなくして。
わが苦しみにわれ泣けば、
わが心しばし安らぐ。
おお神々よ、われにただこれのみは許したまへ。

シュタウフェル（ベルン）

Karl Stauffer-Bern（1857—1891）

月の夜に

冷たい夜だ、あかるい雪は
きれいに光る、月かげに、
河もたゆたひ、水は凍る、
なんと夜の冷たく白いこと。

ふたり行くのは誰かしら？
月かげに、月かげに、
ふたりは河邊に立ちどまる、氷は光る、
なんと夜の冷たく白いこと。

微かな叫び、それもやむ、
ふたりは行つた河ぞひに、
ふたりは行つた月かげに、
水は靜かに流れ行く、
月かげに、月かげに。

ふたりは死んだ月かげに、
若い男と小娘と、
水は靜かになるかしら？——
河邊だつた、河は白かつた、
なんと戀は熱く燃えること。

湖のほとりの山の上で

湖のほとりの山の上で
おまへはわたしの眼を見入つた、
何處にゐようと何處へ行かうと
谷であらうと丘だらうと、
この世はわたしに用がない。

おまへはわたしの心をつかまへて
胸の中へしつかり閉ぢこめた、
おお、その心を返しておくれ
むかしのわたしにかへりたい、
純な眼をした少年に。

薔薇のとき

ある男の兒がある娘に戀をした、
五月あからむ薔薇のとき、
娘は賢かつた、小さかつた、
男の兒は求婚しようと考へた。

ところが話をしてみると
娘はきれいにはねつけた、
おお、かはいらしい娘さん、

おお、小さな賢い金龜子、
きつとあなたは後悔するよ、
薔薇は五月に咲くけれど
いつも五月ぢやないからね。

譯者云。結末の二行は、思ふところありて、譯者の創意を加へたり。

牢獄の歌

一

牢獄の格子窓のそとに
小鳥が悲しげに歌つてゐる、
「おお戀よ、おまへは苦いねえ
おお戀人よ、おまへはきれいだねえ、
おお、おまへとむつみたい
あの戀しい國へ飛んで行きたい」

「わたしは薔薇の花さへも
ほんの格子戸越しに見るばかり！

おお、おまへと一緒に飛べたなら
日の照る國の空遠く
雲の走つて行く土地に！
遠くの國の海岸に！

波が戲れてゐるところ、
まだヴィナスが薔薇の花環で
額を飾つてゐたときの
御堂が建つてゐる土地に！」

牢獄の中は冷たくて
小さなあかりが搖れてゐる、
わたしは苦しんで吹き消した、
けれどわたしは眠れない……

二

おまへは狂氣の闇でもわたしをおもつてゐる、
おまへの頭上に天使が番をして下さるやうに！——
おまへは見ないか、いつもおまへの闇に
おそろしい劍のひらめきを？

おやすみ、おやすみ、泣くのはおよし、
わたしも寢るよ、この土牢で、
牢獄の闇に光がさしこんでくる——
おまへは見ないか、劍のひらめきを？——

わたしにはそれが見える、わたしは悲しい、ああ悲し
い……

三

おまへが狂氣のままに死んでしまつたら

わたしはきれいな墓を建ててあげる、
山の上の暗い森なかに
わたしは死んでからもおまへの傍にゐよう。

きれいな大理石のその墓を
あかい薔薇の垣根でとりかこむ、
月が山からそつとのぼつてくると
おまへはその冷たい墓を抜け出してくる。

そしてわたしの胸にそつと長いキスをする、
額の冷たい汗を吸ひとつてくれる、
そしてはまたも冷たい墓へと入つて行く——
だがどうだ！　重たい石も裂けてゐる。

その狭い隙間から嵐のやうに
愛と藝術との姿が押入つて行く！

四

あれは何だ！　扉はしまつてゐるのに
イエズス・マリア！　誰だか入つてくる？
おそろしい！　おお、誰だ、そこにゐるのは？
答へがない！——誰もゐないのか？　誰だ？
安心なさいましな、わたしよ、リディアですよ。

ショオペンハウエル

Schopenhauer.（1788—1860）

偶成

今わたしは疲れて行路の果てに立つてゐる、
疲れた頭は月桂冠を戴く力もない。
けれどもわたしは喜んで自分の仕事を眺める、
つねに他人の言葉に惑はされることもなくて。

ニイチエ Nietzsche (1844—1900.)

秋

これは秋なり。秋は——汝に心をやぶる！
飛び去れ！　飛び去れ！——
日は山に忍びよる
かつ下りかつ下りて
一歩毎に休息す。

何故に世界はかくも萎びたる！
つかれてのびたる絃の上に
風はその歌を奏づ。
希望はのがれぬ——
風はその後に愁訴す。

これは秋なり。秋は——汝に心をやぶる！
飛び去れ！　飛び去れ！
おお木の果よ、
汝はふるふか、落つるか？
いかなる祕密を汝に敎ふるぞ
夜は、
凍れる戰慄の汝の頰を
つやある頰を蔽はんために——

汝は默するか、答へざるか？
誰かなほ語るものぞ？——　——

これは秋なり。秋は——汝に心をやぶる！
飛び去れ！　飛び去れ！——
「我れは美しからず
——かく星の花はかたる——、
されど人間を我れは愛す

しかして人間を我れは慰藉す——
彼等は今なほ花を見るべし、
我がかたにかがみて
ああ！　しかして我れを折るべし——
彼等の眼にしかる時には
追想は輝きいづ、
我れよりもより美しきものの追想は。——
——我れはそを見る、我れはそを見る、——しかして
　死す。」

これは秋なり。秋は——汝に心をやぶる！
飛び去れ！　飛び去れ！
　一八七七年夏、ロオゼンラウイにて

旅人

夜をとほして旅人は行く
よき歩みをもて。
しかして曲れる谷と長き丘とを——
彼はそれらを携へ行く。
夜は美し——
彼は進む、しかして立止るなし
知らず、何処へ彼の道はなほ欲りするかを。

そのとき鳥ありて夜をとほして歌へり
「ああ鳥よ、何故に汝はなせしぞ！
何故に汝は我が心と足とを妨ぐるぞ、
しかして甘き心の腹立ちを
我が耳にそそぐぞ、我が立止まり、
耳を傾けざるを得ぬまでに——　——
何故に汝は聲音と挨拶ともて我れを誘惑するぞ？」
——

よき鳥は默せり、しかして言へり
「否、旅人よ、否！　汝を我れは誘惑せず
調をもて——
一羽の雌鳥をわれは丘より誘ふのみ——
汝に何のかかはりかある？
されど我れに夜は美しからず——
汝に何のかかはりかある？　汝は行かざるべからず、
しかもつひにつひに、立止まるを得ざる故に！
何故に汝はなほ立てるぞ？
何を我が喉笛の歌もて汝に爲せしぞ？
汝旅人よ？」

よき鳥は默せり、默して思ひ沈みぬ
「何を我が喉笛の歌もて彼に爲せしぞ？
何故に彼はなほ立てるぞ？——
あはれなる、あはれなる旅人！」

一八七六年七月

氷河のほとりにて

眞晝どき、はじめて夏の、
疲れたる熱き眼をもつ少年の
連山にのぼるとき、
そのとき彼はかたれども、
されど我等はその言葉をただ見るのみ
彼の息は熱の夜に於ける
病人の息の湧くごとく湧く
氷河も樅の樹も泉も
それに答ふれども
されど我等はその答をもただ見るのみ。
瀧は岩より飛び落つる
挨拶するよりもより速やかに
しかして白き柱のふるふがごとく
渇望の思ひもて立止まる。

しかしていつも見るよりなほ暗くまた親しげに
樅の木はそれを眺むる、
しかして氷と灰色の岩の間より
唐突に光を發す――　――
かかる光を旣に我れは見き。そは我れにかく語る――

死人の眼もまたおそらくは
なほ一度び輝き出でん
彼の子供のもの悲しげに
彼を抱きささへてキスするときに
そのときおそらくはまた湧き出でん
死せる眼は熱烈にかく語る、「子供よ！
ああ子供よ、知れよ、我れの汝を愛するを！」

しかして熱烈に凡ては語る――氷河も
小川も樅の樹も――

眼をもつてここにそのおなじ言葉を、
「我等は汝を愛す！
ああ子供よ、知れよ、我等の汝を、汝を愛するを！」

しかして彼は
疲れたる熱き眼をもつ少年は
彼は彼等をもの悲しげに
いよいよもの狂はしげにキスしつつ
立去らんとせず。
彼はその言葉を面紗(ヴエール)のごとく
その口より吹きふくらます、
その惡しき言葉を
「我が挨拶は訣別なり
我が來(た)るは立去るなり
我は若く死なん」

そのときあたりはそれをうかがひて、

しかして息だにせず、
鳥も歌はず。
そのときそれは、その戰慄は
電光のごとく
連山にみなぎり渡る。
そのときあたりは沈思す。——
しかして默す——　——

そは眞晝どき
眞晝どき、はじめて夏の、
疲れたる熱き眼をもつ少年の
連山にのぼるとき。

一八七七年夏、ロオゼンラウヰにて

孤　獨

鴉はさけぶ

列をみだして市にむかふ、
やがて雪はふらん——
今なほ故郷をもつものは——幸ひなり！

立ちつくしかへりみすれば
ああ！　はるけくも汝れは來つるよ！
いかなれば、汝痴人よ
冬の來ぬまへに世にのがれたる？

世は——默せる冷やけき
かずかぎりなき沙漠への門！
汝が失へるものを失はば、
その人は何處にもとどまりがたし。

いま汝は蒼ざめて立つ
より冷たき空を絶えず求むる
煙のごとくに

冬の旅路に逐ひやられて。

飛べよ、鳥よ、汝が歌をなけ
沙漠の鳥の聲音(こわね)をもて！——
汝痴人よ、汝の傷つける胸を
氷と嘲りとに埋(うづ)めしめよ！

鴉はさけぶ
列をみだして市(まち)にむかふ、
——やがて雪はふらん
故郷をもたぬものは禍ひなり！

一八八四年秋

友情の讃歌

二つの斷片

一

友情の女神よ、この歌に耳をかしたまへ、
　友情のために今われらがうたふ歌に！
友の眼は何處(いづこ)をさまよへばとて
　つねに友情の幸福に充たされてゐる
　　われらの傍(かたへ)に來て助け
　その眼に朝のかがやきをもつ
永遠の若さの變らぬ堅きしるしなる友情もて。

二

朝はすぎた、眞晝は來つて
熱い眼をもつて頭(かしら)を焦がす
われら園亭の中にすわつて
友情の歌をうたはんか
人生の朝の光なる友情をば
そはまたわれらの夕紅(いふやけ)たれ……

一八七八年

木より吹き落さるる木の果とともに。

一八八二年——八四年

最後の意志

かくも死なん、
かつてわが見し彼の死の如くに——、
わが暗き青春に神々しくも
電光と眼光とを投げしかの友の！
勇ましく、深く、
戰ひに於ける舞踏者なる——、

戰士の中の最も快活なるもの、
勝利者の中の最も重厚なるもの、
彼の運命の上に一つの運命を立て、
頑(かたく)なに、前を見、後(うしろ)をかへりみつつ——。

斷片

一

幸福よ、おお幸福よ、汝最美の獲物よ！
常に近く、決して十分近からず、
常に明日、ただ今日ならず——
汝の獵夫の汝にあまりに未熟なるか？
汝は罪障のまことの道なりや
　ありとあらゆる罪障のうち
最も好ましき罪業なりや？

二

日は色あせて、黃ばみたり幸福と光明とも
眞晝は遠し
なほいくときか？　さて、月と星は來らん
風と霜とも、われもはやためらはざらん

彼が打克てることに顫へつつ、
彼が死につつ打克てることを歡びつつ——。

死にながら命じつつ、
——打滅ぼすことを命じたり……

かくも死なん、
かつてわが見し彼の死の如くに——、
打克ちつつ、打滅ぼしつつ……

ツァラトゥストラの歌

——醉讃歌斷章——

×

かかる野心にとりては
世界はあまりに狹からずや？

×

欺瞞——
これぞ戰ひに於ける一切なれ。
狐の皮よ、
それぞわがしたしき鎧なれ。

×

これのみぞ凡ての苦より救ふ
(——いざ選べ！)
早き死か、
長き戀か。

×

舟行

彼か？
女か？ 奇なるもの
われを怒るか？
怒つて湧き立つか？
わが櫂をもてわれは打つ
汝等の痴愚の頭上を。

これらの舟よ——
汝等は彼を不死へとはこぶ！

×

北の、氷の、今日の彼岸に
死の彼岸に、
彼方に、
我等の生あり、幸福あり！
陸にも
水にも
汝は路を求め得じ、
かの北極の民への路を
かく我等に賢き口は豫言しぬ。

×

この快活なる深みよ！
かつて星と呼ばれしもの
今ぞ火屑となりぬ。

×

われを怒らざれ、わが眠れることを。
こはただ疲れたるなり、死せるにあらず。
わが聲は悪しく響けり。
されどそれは鼾聲ならず、
そはただ疲れたるものの歌なり。
死を迎ふる聲ならず、
また墳墓の誘ひならず。

×

偉大なる人と河流とは曲りて行く、
曲りつつ、されど行き盡くす。
それぞ彼等の勇氣なれ、
彼等は曲れる路を恐れず。

×

「敵を愛せよ、
强盗の奪ふに任せよ」
女はその言をきく——その如く爲す。

×

汝の重量を深みに投げよ！
人よ、忘れよ！　人よ、忘れよ！
忘却の術ぞ神聖なる！
汝若し飛ばんとせば、
天に住まんとねがはば、
汝の重量を海へ投げよ！
ここに海あり、汝を投げよ！
忘却の術ぞ神聖なる！

エデキント Wedekind (1864—1918)

地靈

大膽に罪障をつかめ、
罪障から快樂は生れるのだ。
ああ、おまへは何ものをも
見ないでは、承知しない子供のやうだ。
この世のたからをはばかるな、
何處にあらうと取つてゆけ。
このよのおきてといふものはただ、
踏みにじられるためにある。

上手に愉快に、あたらしい
墓の上で踊る者は幸福だ。
絞首臺の梯子の上で踊りながら
退屈した者はまだ一人もない。

ヤコブ・ユリウス・ダヰット Jakob Julius David (1859—1906)

道ばたで

私は一人の女を知つてゐる。女の名前はどう云ふか？

誰が私に鳴りやんだその言葉を口にしよう？
それはもう忘れた。私は唯これだけを知つてゐる。
私が彼女を愛したことを、さうして抱いたことを。

わたしに消え失せたその女の歌を
今では夜風がわたしの耳にうたふ――
道ばたでわたしは女を失つた、
道ばたでわたしに出逢つたその女を……

ヤコボウスキイ Jacobowski (1868—1900)

碑銘

『眼に遠く、心に近く！』

うもれたる大理石にして
我れふるき碑銘を見しとき
我がなき戀人を思ひ出でぬ……

ああ神よ、我れすでに千たびも書きぬ
ひとしき歌をひとしき悩みより、
されど一つだにこれに似ざりき。

『眼に遠く、心に近く！』

若い女

女ともだちのひとりがわたしを見て言つた
「まあひどく面變りなすつたわね！」
いまひとりは言つた、「わたし氣がついてよ
あなたのお聲は違つてきたわ」
三人目のは悲しげにわたしの顎をもちあげて
「これがまあ、あの明るかつた方かしら？」
四人目のはそつと出窓の方へ行つた

窓から外を見ようとするやうに、
この人が一ばんわたしに同情してくれてゐるんだ
その遠慮がちな足音でそれがよくわかる……

ハイゼ Paul Heyse (1830—1910)

眞夏

銀松の林のむしあつさ―
野には歌はず鳥一羽、
鹿は綠の木かげから
夢みるやうに野を見やる。

森ぞひに行く馬車一つ
中にはふたりの席がある、
馭者、馬、鞭の三つとも
こくりこくりとやつてゐる。

埃まみれの古母衣(ふるほろ)が
座席の上に幕をはり、
あつい日ざしを遮つて
中にはふたりの若いひと。

ふたりは笑ひ戯れて
ねむたいとさへ思はない、
ひそひそ言つたり笑つたり――
なにがねむけをはらふのか？

ある人に

あなたはわたしを惹きつける
わたしはあなたの足もとに跪きたい、
けれど跪かうとするごとに
あやしい力がひきとめる。

ふたりの間には恐ろしい姿をして
わたしの昔愛した女が立つてゐて、
その眞蒼な指をあげて
さし招いては泣いて消えてしまふ。

ハンス・ベトゲ Hans Bethge (1876—)

郷愁の歌

おお、いかに谷はかがやくよ
白金の夏の夜をとほして、
かなた月、空にかかるところに
我が遙かなる故郷はあらん。

おお、白金の谷のかがやき
汝はいかに心をいたましむるぞ、

我れはいと遙かなる故郷を慕ひ
あこがれに死なんとぞおもふ。

おお、何故に我れ若き愚人は
この花さく國々へさまよひ來しぞ？
いま我れはつかれぬ
靜かなる霧の野を越えて行くところに——

おお、我が遙けき故郷よ——

リカルダ・フゥフ Ricarda Huch (1864—)

おもひで

もろ鳥の歌にめざめて
わが父の園生(そのふ)をしのぶ、
連翅のかげにかくれて

君待ちつわがすごしつる
あまたあるその夏の夜を。

郷愁

夕となれば何をかおもふ?
はるけき、はるけき父の家を、
くらき森に我れは迷へり
身を終ふるまでのがるるを得ず、
おお、遙けき父の國なる父の家よ、
汝を棄てしあはれなるものは禍ひなり!
花はみなその病める手に萎れ、
友はみなその暗き歌をいとへり。

少女の夢

×

月かげはふりそそいでゐた
このしめやかな世の上に、
今日もしもひとりのやさしい方が
わたしの友達になつて下さるならば!

×

樅の樹が重なり合つてゐる
あの山にわたしはのぼりたい、
あの枝にかかつてゐるものが
月かげか銀かが見てみたい。

×

ちかごろ夜ふけて寢床の中で私は夢をみた
神樣のさづけて下された夢をみた
あなたは私の傍にゐて「わたしは此處だよ、
可愛い子」とおつしやつた
さうしてわたしは言つた

「よくいらつしやつたのね、あなたは！」と。

それからふたりはぢつと長いことキスをした、
すべての苦しみはふたりの胸から消え失せた。
さうして夜はふたりの戀の渇きのなかに
息のやうに、花の匂ひのやうにすぎ去つた。

宿　命

あなたのお心に何があつて
わたしの胸には何があつて、
わたしはあなたのお言葉のままになり
あなたはわたしを愛しないではゐられぬのでせう？

わたしのやさしく守られてゐる
このすまひから自分の方へ
あなたはわたしをお引きよせになる、

―

夜空をさまよふ月のやうに。

ファルケ Falke (1853—1916)

敬　虔

月はわが寢床を照らせり、
われは眠らず、
わがこまぬきし手は
その光のなかにやすめり。

わが心は靜かなり、
すでに祈りも終へたり。
わが胸はただ一つの思ひをもつのみ、
汝を、汝の幸福を。

墺太利皇后エリザベエト

Kaiserin Elisabeth (1818—1898)

聖母さまに

おお、あなたの腕をおひろげになつて
マリアさま、あなたのお膝もとの
この谷間の家をまもりたまへ！
おお、この小さな巣に祝福を垂れたまへ！
どんな嵐が吹き荒れようと
あなたの御加護のもとなら安らかです、
なさけぶかくまもつて下されば。

自然に

この世のものはみな變つてしまふ
まことといふのも空しい言葉、
いつもまことの變らぬものは
けだかい自然よ、おまへばかり！——
おまへにたよるものは仕合せものよ
かなしい失望を味ふことはない、
おまへのまことのためならば
その慰めのためならば
わたしは何でも惜しまない。

キッケンブルク伯爵夫人

Gräfin Wickenburg (1845—1890)

幹と蔓と

君は幹なり、我れは蔓なり、
君はかたく立ちまさむ、我れなくとも、
我れはされど、いとしき人よ、ふるへよろめく
さらに力なく倒れむ——君しあらずば。

されども我れは君が生活を飾り
また君をまごころもていだかん、
君よ我れをささへ、負ひ、たかめたまへ——
君は幹なり、我れは蔓なり。

マルガレエテ・ズウスマン

Margarete Susman (1874—)

をとめは歌ふ

野邊に歌へるをとめあり。
そは戀人の失せにしか、
はた幸福の破れしか、
その歌はいとも悲しく響くかな。

夕紅はうすれ行きぬ。
立てる楊柳は聲もなし。

悲しき歌はあやしくも
なほも遥かに響くなり。

つひにその音は消え失せぬ。
いざをとめのもとにわれ行かん。
ふたりは親しくなりぬべし、
をとめも悲しく歌へれば。

レオパルヂに（部分譯）

わが靈魂はただ汝をのみ信ず、
憂鬱なる否定の告知者よ。
かつて日の光りだに射し入らず、
月の光も深き夜陰を消すことなき
わが靈魂の底ひには谷ありて、
望みも足音ひそめて立去れば。

デエメル Dehmel (1863—1920)

象形文字

あらゆる深みを
身を以て探れ、
その目ざすものを
はつきりと知れ。
けれども戀は
かなしみだ。

その中にゐてあこがれの
歌ふ小舟は、
またそをばのむ
淵である。
けれど齒に取卷かれつつ

生は坐して高く呼ばふ
戀せよと！——

祕密

暗き峽谷に
月はかへりぬ。
瀧の邊に歌ふ聲あり。
おお、愛するものよ、
汝が上もなき快樂も
汝がいと深き苦痛も
わが幸福なりと——

昂揚

ただわれに與へよ手をば、
與へよ指を、

さらばわれこの大地をも
わが物と見ん！

おお、いかにわが地は花咲くぞ！
今ぞ見よかし、この土地の
われらを乘せて雲を越え
太陽にまでのぼりうるを！

理想の風景

汝はその額にいとよき輝きをもつ、
そは高き夕の透明であつた、
そして絶えずわたしから眼をそらして見た
光を、光をと——
そして遥かにわたしの叫びの反響(こだま)は響いた。

花嫁の夜の祈り

おお、わが戀人よ——枕にすがり
われは御空に君をば祈る！
おお、そを云ひ得ば君も知りたまはむ
わが寂寥(さびさ)の身を燒くを！

おお、世よ、いつわれは君を抱かん！
おお、夢にても近づきたまへ、
地球の如く君がまはりをめぐらしめ、
君が太陽(ひ)のくちづけを受けしめたまへ。

また君が焔の力飲ましめて、
君に焔を吹きかへさまし、
おお世よ、この世ならぬ灼熱に
われらのともに沈み行くまで。

おお、光明の世よ、歡喜の世よ！
おお、あこがれの夜よ、惱みの世よ！
おお、地の夢よ、太陽よ、太陽よ！
おお、わが戀人よ――わが夫よ――

勞働者

俺らはベッドもある、子供もある、
　なあ女房！
俺らは仕事もある、しかも二人分、
太陽にも、雨にも、風にも事缺かぬ、
俺らに缺けてるのは、ほんの一寸したものだ、
小鳥のやうに自由であるためには
　ただ時間だけよ。

俺らが日曜に野良を歩いて行つて、
　なあわが子！
うちひろがつた穗の上に
靑く燕の群れの光るのを見るとき、
俺らには着物一枚事缺かぬ、
小鳥のやうに美しくあるためには
　ただ時間だけよ。

ただ時間を！　俺らは嵐を嗅ぎつけてる、
　俺らは民衆。
ただ少しばかりの永遠が欲しい、
俺らに不足はないぜ、女房よ、子よ、
俺らの力で榮えてるものの外は、
小鳥のやうに大膽であるためには
　ただ時間だけよ！

ウェルフェル Werfel (1890—)

人生の歌

かつてこの生がわがものなりしこと、
そが中にかの松林は立ちならびて
岸の眠りつつ轉じ去りしこと、
森の中にしてあやしくも我が叫びしこと。
かつてこの生がわがものなりしことを！

岸の眠りつつ轉じ去りしところに
蘆と雲をもつ河は何を搬び去りしか？
われ何處にありや——われなほ聞く
漕ぎ行く舟の音を、その笑ひつつ着くを、
岸の眠りつつ轉じ去りしところに。

われは何處にありや——われなほ聞く
砂利深く走れる馬車の音を、
栗の樹の言葉とランタンの言葉と
なほそこにありき——されどその言葉、今何處ぞ？
われ何處にありや——われその音をなほ聞く？

栗の樹の言葉とランタンの言葉とは
なほそこにありき、廣き群れの息も。
歩みと髮の感じはわがものなりき。
おお永遠よ！　われはそをばおもはん、
かつてこの生がわがものなりしことを！

世にこの上の快樂ありや

浸せ、沈めよ、汝等の荒き面を
わが清き、流るるものの中へ！
この靈魂を掠奪するために、

汝等凡ては、凡てみな選ばれしなれ。

受難者よ、祝福す、樂欲的の懺悔者よ！
打ちのめされし胸に榮あれや！
世にこの上の快樂ありや、
傷けられて、一言も云はざるよりは。

來れ、裏切者よ、われ汝を激さしめん、
汝疲れたる手をもつもの！　狡猾なる窺知者よ！
ここに顏あり胸あり！　一突き每に
われは神の速度に近づくなり！

愛

なほ虚榮が
汝の眼を汚しなば、
未だその時來ざるなり。

汝なほ壇上に立ち
人目を惹かんとする限り、
幸福は汝のものならじ。

なほあらゆる恥辱に面して
その身をうち碎かぬものに、
未だ神性はめざめじ。

なほ切に女を持たむと
つとむるものに、
浮薄の氣は去らじ。

人、なべての獸に物に
身を分くる時こそ、
愛のはじめなれ。

充たさるる事を避けて
高きものにつく時、
つひにあこがれは足る。

よろこびて恥に
惱みに身をささげ、
聖なる諦念(あきらめ)に、

十度(とたび)死ぬとき、
その地上の面(おもて)は
愛に碎けむ！

何處(いづこ)へか伸びあがる？
合唱を超えてのぼれば、
その愛は果てなし！

少女の月の歌

われは透明に目覺めて横たはる、
わが髮と顔とを解き放しつつ。
床(ゆか)の上にはゆるやかにうち笑ひつつ
月はただよふ、不吉なる月の光は。

その致命の明るさの
額と眼とに觸るるとき、
われは碎くる、われは波なり、
渦卷きて、流れ、消え去る。

母はかたへに息づきたまふ、
父はをりをりめざめたまふ。
われはわが愛するものの
凡ての生のために氣遣はし。

今、亂れたる部屋を通して
恐ろしき劍もてる首座の天使は行く。
わが耳にと絶えず泣く、
わがものならぬ子の絶えず泣く。

苦惱の千の寢臺の夜の燈火(あかり)は、
月の光はわれを照らす。
われは多く咽び泣くものを救はむ、
しかも自らまた泣くものなり。

部屋ぬちの凡ての物を棄てて、
靴も、卓(つくゑ)も、壁も……
われは遠きものを捉へたや、
ただかい撫づる手にてありたや！
われはわななくものをもてあそび
冷たきものを腕に抱かむ！
われは覺ゆる、富めるもの、多くのものの
わが前に子供なるを、また貧しきことを。

すべてのためにわれは盡さざるべからず、
わが眼は透明にしてただよへり……
われは聞く、朝の方(かた)へと
すべてのものの息の上り行くを。

窓邊を木々は裂けて打つ、
多くの天は安息(やすらひ)に風立つ。
われはわが褥(しとね)もて
凍(こゞ)えゆく世界を蔽ふ。

祕密

汝の涙に充てるだけ汝は富む。

汝の自らを飛び越すだけ汝は自由なり、
汝の自ら難ずるだけ汝は眞實なり。
汝の前に死の小なるだけ汝は大なり。
また汝は深き奇蹟なり
汝の深き奇蹟を見るだけに!

絶望

夜は來りぬ。
明日はおそらく晝ならむ。
ふたたび馬車は走り、
呼鈴は鳴らむ。

わが母は坐したまふ。
その顔はわが顔ならず。
われに多くを語りたまふ。
われは身に遠き虚無を思ふ。

わが妹は高く笑ふ。
われそをば憎まん。
わが曠野には
はやも卑(いや)しき言葉ぞ湧く。

かくわれはつくられたり!
すべては愛をさやぐものを。
われもまた愛せんと泣く
しかもわれ人を好(この)まず。

我等ならず

われは樹の頂きを窺ひぬ。その時槃みは云へり、
なほ——あらず!
われは耳を地に着けたり。その時草と塵の下に音あり、
なほ——あらず!

われは鏡を見ぬ、わが顔は歪みて云へり、
　汝――ならず！
　そはわが審判なりき。
　われはわが歌を難ぜり、
たはれたる心は飽く事を知らざりき。
われは街路に出でぬ。そは既に夕の流れありき。
人々の額には記されたり、われらならずと。
されど凡ての瞳に、われはひそかなる讃辭を讀みて、
知りぬ。われもまた、空しき夢に破られて
新らしき胎に保たれ、再びはじめられんと、
わがまはりの凡てのものの如く。われも死を賞めぬ、
而して泣きつつもこの世の凡ての種子を讃へぬ。

われらみな地上の異人なり

煙と刄物もて自れを殺せ、
恐怖を投げよ、高き故郷の語を、
地球のまはりに汝等の生を投げよ！
愛人は汝等には與へられず。
あらゆる陸地は海となる、
汝等の足下に土地は溶け去らむ。

市街は上へと形造られむ、
ニニヹよ、石もての神への反抗よ！
ああ、われらの營みには呪ひぞかかる……
われらの前には堅きものも忽ち落ちむ、
われらの持つものはまたも持つを得ず
つひにわれらに涙の外は殘らざるべし。

山は、また平地は辛抱強し……
われらの上へ下へと避くるに驚く。
われらが行くところは凡て河となる。
彼のものを我が物と云ふものは欺かれしなり。
われらは罪深し、われ自らに罪を負ふ、

われらの分前は罪なり、罪の償却なり！

母達はわれらに消え失するために生く。
家はわれらに倒るるためにあり。
幸ある眼はわれらより逃るるためにあり。
心臓の鼓動すらも借物なり！
われらはみな地上の異人なり、
かくて互ひに結び合はんがために死す。

各人の直ちに模すべきこと

またひとたびもわれ
人の面を笑はんとせず。
またひとたびもわれ
人の性をば審かんとせず。

まこと食人種の如き額はあらむ。
まこと不具者の如き眼はあらむ。
まこと多食の唇はあらむ。

されど忽ち
輕忽に審かれしものの
鈍き言葉より、
救ひなき肩のゆるぎより、
われらの遠き幸ある故郷よりの
やさしき菩提樹の香は吹き來ぬ、
われは卑しき審きを悔いぬ。

いと汚れたる顔にもなほ
隱されし神の光はこもれるを。
貪る心は泥を掴む——
されどおのおの
生れたる人間の裡には、
われに救世主の歸來を示すものあり。

善人

力は、星宿は彼の物なり。
彼は胡桃の如く世界を手に握る、
笑ひは彼の顔のまはりに不滅にまとひつく、
彼の本質は戰ひなり、彼の歩みは勝利なり。

彼ありてその手をひろぐるところ、
彼の呼聲の壓制的に轟くところ、
あらゆる創(つく)られし不正なる物は碎け、
あらゆる事物は全一の神となる。

善人の涙は打克ち難し、
世界の材料は、かたまりし水は。
彼の涙の落つるところに
あらゆる形象(かたち)は消えて、自(おの)れにかへる。

いかなる怒りも彼のにたぐふべきなし、
彼はその生の碎けし破片の中に立つ、
その足もとには賭(か)けに敗れて、
踏まれたる火蟲、惡魔ぞわだかまる。

彼進めば、その傍(かたへ)に二つの天使
とどまりて、その頭(かしら)を天體に浸しつつ、
金と火の中に歡びわめき、
その楯をとどろに打ち鳴らす。

ワルテル・フォン・デル・フォゲルワイデ Walther von der Vogelweide(—1230)

菩提樹のもとで

菩提樹のもとで
野の中で
ふたりすわつてゐたところで
誰でもすぐに氣附きませう、
ああ、ふたりがどんなに
草も花もふみにじつたかを、
タンダラダイ！
夜鶯はいい聲でないてゐた。

わたしが出かけて
野原へ行つたとき、
はやあのひとは來てをられ
わたしを迎へになりました、
けだかい婦人とおつしやつて
まあなんてうれしいこと、
キスなすつたの？——ああ、千度も、
タンダラダイ！
わたしの脣のこの紅さ。

そこであのひとは
いろんな花で
寢床をこしらへになりました、
この道を通りかかつたら
どんな人でも
笑はずにはゐられまい、
花のみだれで知れませう
タンダラダイ！
頭をもたせたそのあとは。

あのひとのおなさけを
どなたかお知りになつたらば、
なんてまあ恥かしい！
けれどふたりの戯れは
誰も知らない、
あのひととわたしと
小鳥が知るばかり——
タンダラダイ！
小鳥もないしよにしておくれ。

あかい口から

あのかあいらしい人とつれだつて
薔薇をつんだらよからうに、
ふるい馴染の友だちのやうに
いつしよに遊んでくらしたい、
ふとした拍子にキスひとつ
あのあかい口からくれたらば
わたしの惱みも消えように。

レッシング Lessing.（1729—1781）

盗んだ女

薔薇いろの頰をしたこの盗人(ぬすと)、
あをい眼をしたこの女。
おまへさ！　まだ平氣なのかえ。
さあ白狀おしよ、わたしは知つてるよ。

默つてゐるね、でもおまへの薔薇いろの頰は
いつもよりもつと眞紅(まつか)になつてるぞ。
おお薔薇いろの頰をしたこの盗人(ぬすと)、
わたしの心をどうした、何處へやつた？

アナクレオン Anacreon (550—478 b.Chr.)

詩章

一

黒い地面は水を飲む
木立はまたその土から飲む、
海は河流(ながれ)を飲みつくす
お日さまはまた海を飲む、
お月さまはそのお日さまを飲む
それにどうしたのだね、君たちは、
わたしだけ飲んぢやならぬとは？

二

わたしは愉快なとしよりが好きだ
わたしは若いをどり手が好きだ、
としよりだとてをどりさへすれば
たとへ頭はどんなであらうと
心はりつぱな若いもの。

三

娘さんがたがわたしにいふのには
「アナクレオン、あなたはとしをおとりだね
まあ鏡を見てごらんなさい、
あなたの髪はどこへ行きました
額はすつかり禿げてますよ」
「わたしに髪がまだあるやら
髪がどこへ行つたやら
それは知らぬが、ふざけたり
笑つたりしてゐることが、
死ぬ日が近くなればなるほど
としよりらしいと知つてゐる」

四

君はテエベの戦をうたひ
彼はトロヤの戦をうたふ、
わたしはうたふわたしの敗北を。
わたしをやぶつたのは騎兵でも
歩兵隊でも船艦でもない、
ずつと違つた兵に敗かされた
あの美しいまなざしに。

ペトラルカ Petrarca (1304—1374.)

小曲

たえず我れは求めきただ寂寥をのみ、
(河流も森も野原もそれをよく知る)
神のみちより遥かにもかけ離れたる
かのものわきまへぬ輩を逃れむがため。

我れ我が願望の果てを得べきか、
トスカナのそよ風のもとをはなれて
我れとともに泣き歌ふかのソルガの
そのくらき底ひに身をひそめなば。

我が運命は常に我が身につれなかりき、
むごくも我れを泥濘に突き落しつ
我れは悩みの眼もてかのひとを眺めぬ。

されどこたびこを書き記す手は恵まれたり、
そはこの幸にふさへりと愛は知れり、
我れもかのひともまたそれをよく知る。

ハアフィス Hafis. (—1389.)

小曲

×

この胸の打つてゐるかぎり
わしはしつかりそなたのものだ、
もしまた土に埋められる身となつたらば
塵になつて墓から舞ひあがり
そなたの着物の裾にキスしよう。

×

この燃える心がもしかのことに
千々のかけらと碎けたら、
その千々のかけらがひとつびとつ
千々の心のやうに愛しよう。

×

そなたの髪をさぐらせてくれ
わしは見つけたいものがある、
そなたの髪の烏羽玉(うばたま)の夜に
迷ひ込んだめくらの子、
あはれな心を見つけたい。

×

わしは死んだよそなたのために
こがれこがれて燒け死んだ、
その灰がふはふは舞ひあがり
そなたの足もとに落ちたらば、
踏んぢやいけないやつぱり中に
わしの心が打つてゐる。

×

この子は杉の木でできてゐる、
杉の木の柩のめでたさよ
わしの眠るによいところ、
杉の木でこさへた娘の腕に
わしは永遠に寢てゐたい。

ヂェラレッディン・ルミ Dschelâl-ed-dîn Rumi (—1262.)

波斯の唄

かたい青銅もやはらかになる
　おまへが撫でるとやはらかになる、
またやはらかになるまでは
　おまへは撫でずにおきはせぬ、
高慢な心の貧しさも
　謙遜ばかりでゆたかになる、
おまへは沙漠に河をそそぎこみ
　お庭の池にしてしまふ、
この世の國は滅びてしまひ
　みな天國になつてしまふ、
愛するものは愛されるし
　若い者も長老になる、
われわれは欲望がちがつて來
愛のおもひがひとつになる。

サッフォ Sappho (610 b. Chr.)

少女の日

おお、少女(をとめ)の日、少女の日、
おまへは何處へ行つてしまつた？
わたしは二度とはかへりませぬ
あなたのお手にはかへりませぬ。

眞夜中に

月は落ちてしまつた
七つ星もかくれた、
もはや眞夜なか、
時はすべつて行くものを
わたしはまだひとり。

ペテフィ Petöfi (1822—1849)

醉人

憂ひを溶かす酒杯にむかつてゐると
私の生は幸福に流れてゆく、
憂ひを溶かす酒杯にむかつてゐると
私は身の不運をも笑つてやる。

私がかうして愉快な酒の神
バッコスだけを尊敬してゐると
バッコスだけを愛してゐると言ふならば、
君等はそれを不思議に思ふかね？

酒のたのしい醉心地で、冷たい世間よ
私はおまへを嘲つてやる、
私は無慈悲にとりめぐる
苦痛の巣なる世間をば。

酒は私に教へた、私の琴を
ほしいままな歌に合せよと、
酒は私に教へた、浮氣な少女
おまへの胸に苦勞を忘れよと。

もしまた私がこの酒杯から引き離されて
死の深淵へ投げ込まれる日が來たなら——
もう一杯！　さうして眞暗な死の淵へ
私は笑ひながら飛込んでやる。

崇嚴な夜

崇嚴な夜よ！
空には大きな月がうかび

星のむれも照り輝く、
崇嚴な夜よ！
天鵞絨の草間には露が光り
夜鶯は葉かげに歌うたふ、
崇嚴な夜よ！
若者は戀人のあとをつけ
人殺しは血刀を振る、
崇嚴な夜よ！

小曲

一

その愛しないとき心は凍る
その愛するとき心は燒ける、
このふたつの禍ひのうち
どちらがましかは……神ぞ知る！

二

人の名譽は
はかない虹か、
涙にくもる
日のかげか。

三

少女よ、そなたの眼は
なんてまあ黒いこと
なんて明るく光ること！
とりわけそなたが
こちらを見るときは、
あらしの晩の
稻妻に——
首斬人の劍の
閃くやう！

四

まるでこの大きな地球をかついでゐて
今にも落してしまひはせぬかと恐れるやうな、
少女（をとめ）よ、そんな恐ろしい氣持になる、
この手でおまへの小さな手を握るとき。

五

そは、運命の神の手に
惠まれし人よ、その人は、
酒と女のために生き
祖國のために死ぬ人は。

六

手をこまぬきてなきひとの
墓邊に來ては墓のごと
ものも言はずに立ちつくす
ただ墓石をながめつつ。
かくも海邊に舟人（ふなびと）は
その寶をばみな奪ひ
彼を乞食となしたりし
海を眺めて立つらむか。

七

我れは棄てん、この輝きのとりめぐる世を
快樂と苦痛との我れをとらへてはなたぬ世を。
我れは去らん、遙かにも人里はなれし
物すごく、また美しき森の寂寥の中へ。
かしこに我れは木の葉の囁きをきき
さやかなる小川の音に耳をかし、
小鳥の歌にききとれて
しづみ行く日をながめやり、
我身もとにも沈み行かまし。

ベッケル　Becquer (1836—1870.)

小曲

一

おまへが忘れるのには驚かない！
おまへが愛してくれたのに驚く！
わたしのうちに本當に愛すべきものがあると
おまへは一度も考へて見たことさへなかつたものね。

二

そのひと目のためには――生命(いのち)もやる、
その微笑(わらひ)のためには――天もやる、
キスのためには……どうしよか、
キスのためには何をやらう？

三

今日、天は地上にをりて來た、
今日、意地悪の運命もわたしを傷つけない、
今日、ふたりの眼は心を讀み合つた、
今日、わたしは信ずる神様を！……

四

わたしの生涯は荒れた花壇だ
どんな花さへ咲きはせぬ、
おそかれ早かれ人が來て
いろいろ不幸の種(たね)を蒔く、
泣きながらわたしが刈るために。

五

おまへの眼に涙が浮んでくるのを見たときに
わたしはいつそ恕(ゆる)して下さいと言はうとしたが、

忽ち誇りが頭をもたげた——涙は乾てしまひ
言葉はわたしの脣で死んでしまつた。

そこでふたりは永遠に別れてしまつたのだ、
ふたりが一緒になりたいと思つてゐたのなら——
なぜまたわたしはあんなに默つてゐたのだらう！
なぜまたわたしはあのとき泣かなかつたのだ！

六

ふたりの戀は滑稽な悲劇であつた、
事件はごたごたこみ入つてゐて
喜劇のやうで、しかも痛切で
泣いていいやら笑つていいやらわからない。

けれどこの喜劇で何より悲しかつたのは
——幕切れにどうやらさう思はれたが——
涙ながらにもおまへが笑へたのに

わたしが泣くよりほか出來なかつたことだ。

七

わたしの眼は黑く、髮も黑い、
わたしの生れた國は熱いのです。
わたしは夜と怒りがきらひです、
幸福と快樂とが何より好きですわ、
あなたはわたしが好きですか？　ねえ！
——いや、決して、おまへぢやない！——

わたしの髮はブロンドで、顏も蒼白い、
わたしの心は靜かでやさしくやはらかい、
けれどわたしを愛して下さる方を
死ぬほどわたしは愛しますわ、
あなたはわたしが好きですの？　ねえ！
——いや、決して、おまへぢやない！——

わたしは——空想の子供です、
わたしを愛する人はわたしを手に入れませぬ！
わたしは永遠に心をかき亂す夢です、
わたしを望む方は不幸になりますよ、
あなたはわたしが好きですか？　ええ！
——おお、おまへだ、おまへだ！——おまへだつた！

八

輕き嘆息は風とともに行き
重たき涙は海へ走る——
されど言へ、女よ、愛の忘らるるとき、
愛は、おお我れに言へ、何處へか行く？

九

電光のひと閃きに……我等生れぬ！
なほその光るとき……我等死なん！
かくも短かし人の命は！

幸福の位に据ゑし名譽も愛も
夢の影のみ、ああ、そは捉へがたし……
かくて夢よりさむるとき——これを死とよぶ！

十

おまへの心のその薔薇が
咲きつづけようとは思はれない、
火山が熱い火をふくのに
どうして花が堪へようか。

アレクセイ・トルストイ

Alexei N. Tolstoi（1817—1875）

小曲

×

井戸のほとりの砂のうへに
きれいな娘の足のあと、
それにもつれてついて行く
釘うちつけた靴のあと。

かくれ場はこつそりしてゐるが
嫉みに燃える耳はきく、
思ひみだれたささやきと
手桶の水のしたたりを。

×

戀をするなら――心から！
脅(おど)してやるなら――眞劍に！
罵るのなら――思ひきり！
なぐりつけるなら――血の出るまで！
喧嘩するなら――大膽に！
處罰するなら――正當に！
恕してやるなら――さつぱりと！
酒宴(さかもり)するなら――底ぬけに！

×

ああヴォルガがここから逆さに流れるなら！
ああ我等が生れかはれるなら！
ああ春の花が冬のなかばにひらくなら！
ああ我等の戀が燃えて決してさめぬなら！
ああ海の底が我等にさぐれるものなら！

ああきれいな娘があてになるなら！
ああ婆さんがみんな若い女にかはるなら！
ああブランデイのまぜ水がもつと少なくあつたなら！
ああ盃がいつも一ぱいで口から口へまはるなら！
ああこの地獄の悪魔の間違を神が正してくれるなら！
ああ我等の衣嚢（かくし）が銀貨でいつも鳴つたなら！
ああ我等がふだん自分の着物で行けるなら！
ああ貧乏人がつひぞ空（から）の胃袋をもたぬなら！
ああ人が皇帝（ざあ）に眞實（まこと）を告げるなら！

×

秋だ！　庭の木立は裸になつて
黄色な枯葉は風に吹きまくられる、
わづかに遠くの谷底にだけ
木の果があかく殘されてゐる。
うれしく悲しくわたしの胸は鳴る
默つてわたしはおまへの手を握る、
おまへの眼は涙に濡れてゐる、
わたしはどんなにおまへがいとしいか！

プウシキン Puschkin.（1799—1837）

斷　片

グルジエンの丘の上には夜霧がたれこめ
アラグアの河波は泡立ちながれる、
わたしの心は重く沈みまた輕く息づく、
げにおまへはわたしの夢と憧れをなだめる
わたしのたつた一つのやさしい面影よ。
わたしの心を悲しみの慰めにうちまかすとき
またもや心は愛の思ひに燃えあがる、
どうしても愛せずにはゐられないから！

ビョルンソン　Björnson. (1832—1910)

問答

子供

ねえ、お父さん！　森の中を見廻しても
ひつそりとしてゐるのよ、
一羽の小鳥も歌つてやしないの。

父

あんなに歌つてゐた小鳥は、海越えて
南へ飛んで行つたのだ。
南の國で死ぬかも知れない。

子供

可哀想な小鳥ね。なぜぢつとしてゐないでせう？

父

小鳥は溫かさと光りとが要(い)るのだ。

子供

お父さん、そんな事していいでせうか？
わたしたちがここに殘つて
凍(こゞ)えてゐるのに行つちまふなんて。

父

新しい春は、心の底から湧き出でる
新しい歌をよろこぶ。
小鳥は今にその歌を持つて來てくれるよ。

子供

でも、もし冷たい波で死んだなら？

父

そしたらほかの仲間がやつて來るよ。

我が好む月

われは讃(たた)へむ美しき四月を、
古きものは滅びて

新しき力の芽ぐめば。
四月は平和の月ならじ、
されどその平和、何をかせん、
ただわが意志を通すぞよき。
われは讃へむ美しき四月を、
そは嵐の如くすべてを拂ふ、
氷を溶かし、心をゆるがし、
新しき力を喚びおこし、
夏の來るを喜べば！

シンネエヴェの歌

遠い昔のなつかしさ、
幼な同志の野あそびの
その樂しさがいつまでも
つゞくと思うてゐたものを。

こんな遊びのたのしさが
樺の森からお家まで、
家から寺の庭までも
つゞくと思うてゐたものを。

夕となれば君待ちて
樅丘ばかり見てゐたが、
木かげは谷をうち蔽ひ
君は路さへ知らずして。

あこがれ心に君來ます
ときまで待つてゐたけれど、
その日は來ても、急ぎ來る
人の影さへ見えずして。

いつも見て來たこの眺め、
どうしてこの眼をそらされう、

たとひこの眼は燃えるとも
どうして他所が見られよう。

丘のお寺が慰めを
くれるところと言ふけれど、
どうしてそこへ行けませう、
君と並んでかけられう。

なぜにこんなに神様は
屋敷をならべてくれたやら、
飛んで行けない身だものを
なぜ路ばかりが見えるやら。

どうしてお寺のこしかけを
並べて置いてくれたやら、
並んでかけて聲そろへ
歌をうたはせなさるやら。

狐と兎

狐がかくれてる樺の木に
　荒野の藪に、
兎がひよいひよい跳んでます
　荒野を越えて、
「お日様ここに照りそこに照り
きらきら、ちらちら、
　荒野の上を」

狐は樺の藪にかくれてる
　荒野の藪に、
兎はひらりひらり
　荒野を越えて、
「なんて楽しい日でせうか
おいらのやうに跳べるものはない

荒野の中を」

狐は樺の木蔭にねらつてる
　荒野の藪に、
兎はその前に飛んで來た
　荒野を越えて、
「おおこはい！　神樣お助け」
「まあ此奴、ここで跳るとはけしからぬ
　荒野の上で」

母の歌

主よ、荒磯にたはむれあそぶ
このいとし兒を護りたまへ、
聖靈をおくりたまひて
愛の紐もていましめたまへ。
水は深くて、砂はゆるきも
絆はつよく結ばれたれば、
永遠に救はれ、生きながらへて
きみがみもとにのぼり行かむ。

吾兒はいづこと行方知らねば
深き愁ひに母はしづみて、
戸をば開きて遠く呼べども
かすかに答ふる聲もあらず。
さあれ何處にさまよふとも
このいとし兒を捨てたまはじ、
耶蘇ぎみやさしく天の御國へ
恙もあらで導きたまはむ。

小羊

わたしの羊よ、小羊よ、
坂はどんなに嶮しくとも

岩から岩へいさましく
その鈴音について行け！

わたしの羊よ、小羊よ、
おまへの毛皮をよごすなよ、
冬になつたら、母さんが
着物にこさへて着なされば。

わたしの羊よ、小羊よ、
お前の肉を肥えさせよ、
かはいい羊よ、母さんが
スウプをこさへて下されば。

ヴェネヴィル

若いヴェネヴィル、いそいそと
戀人の許へ飛んで行く。

歌はひびきます、お寺を越えて、
「御機嫌よう！　御機嫌よう！」
小鳥もいつしよに歌ひます、
「聖ハンスのお祭りで
みんな笑つて踊るとき、
婚禮の花環を編みまする。」

牧場の菫で編みました
「わたしの眼のやうに靑いから」
男は花環を投げ上げて
「かあいい友達、御機嫌よう！」
男は歌つて行つてしまふ、
「聖ハンスのお祭りで
みんな笑つて踊るとき、
婚禮の花環を編みまする。」

明るい髪の毛で編みました

「これはわたしの大切な髮よ」
娘はそれを差出した
紅(あか)い脣も差出した
男は受けた樂しい誓ひ
「聖(セント)ハンスのお祭りで
みんな笑つて踊るとき、
婚禮の花環を編みまする。」

白い百合のを編みました
「これはわたしの右の手よ」
紅(あか)い薔薇(ばら)のを編みました
「これはわたしの左の手」
男は兩(ふた)つとも受けて眼をそらす
「聖(セント)ハンスのお祭りで
みんな笑つて踊るとき、
婚禮の花環を編みまする。」

みんなの花で編みました
「もう花はちつともありませぬ」
摘(つ)んでは編んでは涙ぐむ
「これがわたしの殘らずよ」
男は默(だま)つて貰つて逃げてしまふ
「聖(セント)ハンスのお祭りで
みんな笑つて踊るとき、
婚禮の花環を編みまする。」

たうとう色のないのを編みました
「わたしの婚禮の花環なの」
指が青くなるまで編みました
「あなたの妻の飾りにと」
男の姿は何處にもありませぬ
「聖(セント)ハンスのお祭りで
みんな笑つて踊るとき、
婚禮の花環を編みまする。」

なほも娘は編みました
悲しい心で編みました、
聖ハンスの日もすぎて
夏も、野花ももうすぎて
氷の花で編みまする、
「聖ハンスのお祭りで
みんな笑つて踊るとき、
婚禮の花環を編みまする。」

あの山越えて

あの山越えて、その先きは
どんなところか知つたらば！
ここはどちらも雪ばかり、
森は黒くもうちつづく、
遠く行きたい、ためらはず、
行けないわけもないものを。

あの山越えて、空高く
鷲は勇んで舞ひ上る！
若い力をうちふるひ
獲ものめがけて突き進み、
心のままにやすらひて
他所の岸邊をながめやる。

あの山越えて、その先きに
あこがれもたぬ林檎の樹——
冬がすぎれば花ひらき
夏ともなれば實をむすぶ、
おまへの枝には小鳥らが
たのしく歌をうたひつつ。

あの山越えて、あこがれの

二十の年もたちぬれば、
つひに望みも空しくて
月日とともに薄らげど、
空飛ぶ鳥の歌ごゑを
聞けば心の苦しさよ。

あの山越えて、小鳥らよ
こちらへ何が誘うたか、
むかうに樂しい巣もあらう
美しいところはあるものを、
あこがれ心を持て來たか
われに翼はないものを。

あの山越えて、その先きへ
行きもえがたい身であるか？
聳立つ岩は氣を挫き
氷は道をとざすものを、

この山かげのふるさとが
つひの柩となるべきか。

あの山越えて、世の中へ
遠くわたしも出て行きたい！
ここは苦しく息づまる
若いこの血は燃え立てど——
ただ上へ上へと登り行かん
岩に心は碎けざれ。

あの山越えて、いつの日か
一度は出て行く身とぞ知る、
主は待ちたまふ、その國の
うるはしさこそたのしけれ、
その戸の開かぬたまゆらを
思ふがままにあこがれん。

インゲリッド・スレッテン

シッレヨオルのインゲリッド・スレッテン、
白金黄金はないけれど
どんな寶も及ばぬものは
小さなきれいな綿頭巾。

母のかたみはただこればかり、
小さなきれいな綿頭巾、
母の頭巾は金よりも
もつと重たくかがやかしい。

娘はかぶつた二十年も
かたときはなさぬ綿頭巾、
いつか一度は花嫁さまで
神のみまへでかぶりたい。

かうしてかぶつた三十年も
したしいしたしいこの頭巾、
いつかたのしい花嫁御にて
お寺へかぶつてまゐりたい。

かうしてかぶつた四十年も
やつぱり母をおもひつつ、
頭巾も古びた、もう知れた
花嫁さまではかぶれない。

やがて死にます、死ぬほどに
も一度見たい綿頭巾、
古い簞笥をかきまはしたが
糸すぢ一つも見えなんだ。

樹

樹は靑々と芽ぐみました、
霜が言ふには、「取つてやろか？」
「どうぞこのままに
花の咲くまで置いておくれ！」
ぶるぶる顫へて樹はたのみます。

樹は花咲きました、鳥は歌ふ、
風が言ふには、「取つてやろか？」
「どうぞこのままに
果實がなるまで！」
風に搖れつつ樹はたのむ。

樹は實りました、日にきらきらと、
娘が言ふには、「取りましよか？」
「ああ、どうぞ取つておくれ、
あなたのお好きなほど」
かうたのんで、樹は身を屈げました。

音色

森を子供はさまようた、朝から晩まで、
朝から晩まで。
そこで聞いたよ、不思議な歌を、
不思議な歌を。

子供は楊で笛をこさへた、
笛をこさへた、
吹いて見ました、鳴るか鳴らぬか、
鳴るか鳴らぬか。
音いろは起つた息するやうに、

息するやうに、
けれどすぐまた消えてしまつた、
消えてしまつた。

子供が眠るとそつと出て來て、
そつと出て來て、
音(ね)いろは額(ひたひ)をやさしく撫(な)でた、
やさしく撫でた。

つかまへようとて、すばやく醒(さ)めた、
すばやく醒(さ)めた、
歌は殘つた、靑ざめた夜に、
靑ざめた夜に。

「どうぞ神樣、おつれ下さい、
おつれ下さい！
歌はわたしをくるはせました、
くるはせました」

神は答へて、「あれは友だよ、
あれは友だよ！
けれどおまへのものにはならぬ、
ものにはならぬ。

どんな歌でもあれほど逃げぬ、
あれほど逃げぬ、
いくら求めようともつかまへられぬ、
つかまへられぬ！」

少女の教

われは思ひぬ、われもまた偉大にならむ
ただ潔(いさぎよ)くこの里を出で立たばと、
かくてすべての業(わざ)を忘れて

ただ旅をのみあこがれぬ。
そのとき少女の眼を見入りて
われは旅をば忘れたり、
今われ少女と安らかに
住むぞこよなき幸とする。

われは思ひぬ、われもまた偉大にならむ
ただ潔くこの里を出で立たばと、
精神の國に打ち出でて、
若き力を試さむと。
そのとき少女は言葉ならで
われに敎へぬ、この世にて
いとよきものは譽れならで
正しき人となることぞと。

われは思ひぬ、われもまた偉大にならむ
ただ潔くこの里を出で立たばと、

この故鄕は冷たくて
人みなわれをあざけると。
されど少女に會ひてより
愛にかがやく世と知りぬ、
すべてはおのが迷ひにて
この世は上なき惠みぞと。

愛の賜物

いかにしてかかくなりけん
嵐も洪水もなかりしに、
心の中の小流れは
やがて大河となりかはり、
激しく海へと注ぐなり。
生命の中にものありて
あこがれ心を呼びさそふ、

いざなふ力、やさしの胸、
惱み、苦しみ、旅出の願ひ
安らひ抱く、愛の賜物。

生命のおくりしこの使ひ、
われをば呼ばふこの幸に、
神の攝理ぞあらはるる、
わがため道をやはらげて
われをば正しく導きたまふ。

歌の力

小さき歌のあたへし力に
生の喜び、また悲しみも、
春のごとくに萠え立つ胸に
露のごと、日影のごとくしたたりぬ。
いかなることもはやすでに
心を破ることあらじ。
いかなることもわが歌は
愛と光りに變へぬべし。

小さき歌のあたへし力に
あこがれ望むものを得たれば、
今は心をいましむるものも
道をはばむものもなし。
ただ矢の如く進まばや、
世の苦しみも恐れずに
その住む里に限りなく
愛と光りはあるものを。

小さき歌のあたへし力に
人にいむかふ力も出でぬ、
さまよふ路に出で會ひたる
人をはげます力も出でぬ。

つねに絶えせぬ喜びは
人もおのれもわかちなく
ともにたのしく歌はんことぞ、
愛と光りの中にして。

イプセン Ibsen. (1828—1906)

建築の計畫

わたしの最初の詩が紙上に印刷されたのは
つい今日のことのやうに思はれる。
わたしは踏臺の上に腰かけて、煙管(パイプ)をくはえて
煙草をすひ、考へ、夢想した——樂しい時間(とき)よ！

わたしの築いた蜃氣樓、それは立派な建築で
一つは大きく、一つは小さい二つの支屋(つばさ)。
大きい方は不朽の詩人の精神のために、
小さい方はまた美しい少女のために。

この計畫は初めどんなに美しくも完全に見えたらう！
だが後(あと)でそれは殘念ながら變更された。
建築師は理性にかへつて、城は直された、
大きな支屋(つばさ)は小さくなり、小さいのは繼ぎ足された。

消えてしまつた

にぎやかな祝宴(うたげ)がすんで
廊下のはてに、
最後の客のさやうなら——
それも消えてしまつた。

またもや何といふ寂しさ、
さつきまでは互に耳を傾けて、

たのしい歌がわたしを
すつかり醉はせてゐたものを。

そのすべてがただほんの數秒間の
夢にすぎなかつたやう。
彼女が最後に殘つた客だつたが
それさへもう行つてしまつた。

小鳥の歌

ふたりは歩いた五月の日に、
謎のやうに不思議に
湖水のやうにしんとした
並木のかげを。

西風がそよそよ吹いて
みんな氣もちよかつた。

とある木の枝には一羽の鳥が
雛を育てて鳴いてゐた。

わたしは詩人の夢を描いてみせた、
あらゆる色彩を惜まずに。
ふたつの鳶いろの眼は心をとめて、
はれやかに輝いてゐた。

けれどもふたりの頭の上では
何だか笑ふやうな聲がした——
ふたりはそれきり別れてしまひ
二度とふたたび逢はなかつた。

いまひとりでさまよへば
並木のかげを、
小鳥の歌はわたしの胸の
苦しみをなほ重くする。

ふたりの言つた最後の言葉を
雀はちやんと覺えてゐて、
それから歌をつくりだし
それに曲節をつけたのだ。

菩提樹の枝の上で
鳥といふ鳥はうたふ、
並木のかげの
あのふたりの五月の散歩を。

ワイルド Wilde.（1854—1900）

キイツの墓

その苦しみと、いつはりの世よりはなれて、
このあたらしき殉教者は、ここにいこへる、
生と愛のはじめの芽生えを摘まれ、
セバスティアンの如く美しく早くたふれて、

つひにここなる神の靑きテントのもとに。
扁柏も水松も蔭をささねど、
やさしき菫は涙の露もていと忠實やかに
常あらたなる花の紐をば結べるものを。

誇りたかき心は苦しみにやぶれず、
ミティレエネは更にあでなる唇を知らざりき、
おお英吉利の詩人の畫家よ！　君が名は
水に書かれぬ——されど水と共に流れざりき、
われらの淚は君が思ひ出を綠にたもつ、
イサベラがバジリオの樹をたもちし如くに。

羅馬にて

ブラウニング夫人

Elizabeth Barrett-Browning（1806—1861）

小曲（大意）

重き心をわれははこびぬ
幼き日より、君を見るまで。
ただ悩みに悩みのみぞつらなりつつ、
舞踏（をどり）に胸のとどろくままに、
眞珠の飾りのゆらめくやうに
樂しくもをどるかの喜びならで。
望みもわれには苦（にが）きものとなりぬ、
神のめぐみも力なきまで
わがこの重き心をはこび行くとき。
さはあれ、たふとき救ひの君よ、君こそは、
その君がみ胸のふかき底ひに
急ぎ下りてやすらへとぞ。君がまにまに。
さて、君はその胸の戸をとざしつ
つれなき運命（さだめ）の前にわれをかくまひたまふ。

クリスティナ・ロゼッティ

Christina Rossetti（1830—1894.）

若しも（部分譯）

若しもかの君、今日この日、この日をここに
來ますなら、いかにたのしき今日ならむ、
さはさりながら、かの君はいま離（さか）りつれ、
わが身より、海をへだててわが身より。

ああかけりゆく、かけりゆく、かけりゆく鳥、
いまわれの病みて死ぬべきありさまを
かの君に告げよ、あたたかき西のはてなる
ふるさとへたちかへりゆく途（みち）すがら。

われにひとりの姉妹と、忠實なる狩獵の
犬と、また、人になづきし鳩とあり、
さらにもひとつ持ちたりき、嘗てはひとつ。
今やなし、わがめぐしびと、めぐしびと。

このつかれたる人の世はいともつめたし、
われここにさびしくひとり殘りゐて
老いゆくを待つかなしさにいかでか堪へむ。
むしろいま、いま死に遠くゆかばやな。

ねがひ　（意譯）

願はくば、澄めるみそらを、よろこびの翼もかろく
翔りゆく小禽のごとくわれもあらなむ。
また願はくば、ある日ある時、ふとしも聞きし、
さはれしばしばひとり寢の夢には入りし、
いともいとも胸躍らせしかの歌を聴きてあらなむ。
またそよ風にゆらぐ床の上の白百合の影。
またあるは、ここにしるせし凡てにも換へがたき
愛の言の葉、愛の心のたかき反響を。
さらにまた、かへる時なき丈のびしありし望の
いとうれしく、いとなつかしの思ひ出に棲まむ事をも。

惡夢　（意譯）

ああ幽靈のかの國にわれは一人の友をもつ、
とく見出でたる、あなあはれ、またとく早く失せにしよ
紅あざやけき海草のうちつけられてしづくする、
かのいや遠き荒磯邊の波つよくうつほとりにて。
われ眼を醒ますたびごとに惡夢のごとくつきまとふ。
恐れに髮は波をうち、壓しつけらるるわがからだ、
眸くらく、をののきて碎かれぬべき心かな。
祕めかくしたるくらやみの一の祕密の胸を這ふとき。

汝が慰められぬことも——不思議ならじ、
われ汝が彼等のすまひの戸より、彼等とともに
しづかなる日没をながむるを見たれば、ここもおなじく
明るくしづかなり、されどそれも束の間。
いまや汝が希望も失せ、汝が髪は灰となりぬ。
このいとも見なれし眺めよ、悲しくも——
この墓のみ——ひとり殘れる。　　(1824)

死

一

死はここにあり、またかしこにあり、
死はいたるところにその手をふるふ、
まはりも、うちも、上も下も、
みな死なり——われらもまた死なり。

シェリイ Shelley (1792—1822)

死

一

彼等は逝けり、逝きてかへらず、辛苦は、
髮白く眼窪めるこの若者は、くちあけし
墓穴のほとりに坐して、彼等を呼ばふ。
その悲しげに呼ぶものは、緣者の、友の、
愛するものの名なり——彼等みな逝けり、
あはれなるもの、皆逝けり！　空しき名のみ殘りて。
このいとも見なれし眺めよ、悲しくも——
この墓のみ——ひとり殘れる。

二

辛苦よ、わが親しき友よ、おお、泣くなかれ！

二

死はそのしるしを既に捺せるを、われらの上に、
われらの感ずるものの凡てに、
われらの知るもの、恐るるものの凡てに、

……………………

三

まづ、われらの快樂がほろび——
さらに希望がほろび、恐怖がほろぶ——
これら失せなば、かぎられし時は盡きて、
塵は塵にかへり——われらまた死す。

四

われらが愛でいつくしむものの凡ても
われらのごとくに消え失すること、
これぞわれらが悲しき運命ならずや——
愛すらもまたほろぶ世なれば。

(1824)

愛の哲學

一

泉は河と溶け合ひ
　河は海と溶け合ふ、
空なる風はとこしへに
　たのしき思ひとまざる。
ひとりなるも世にはあらじ、
　すべては神の法則によりて
ひとつの靈と溶け合ふを、
　などわれのみ君と相得ざる？——

二

見よ山は空にくちづけ

波はかたみにだき合ふを、
もしそのともを斥けなば
　花はいかでかゆるされむ、
日光は地をかきいだき
　月かげは海にくちづくる、
何かせんこの凡てのたのしきわざも、
　君だにわれにくちふれずば！　(1819)

レオパルヂ Leopardi (1798—1837.)

無窮

このあらはなる丘ぞわれにはつねに好ましき、
また遠き地平のながめを
わが眼に遮るこの生垣も。
ここに坐して四方を見渡し、われは夢みる、
果てなき廣さ、世の常ならぬ沈黙、
いとも深き安息の、かなたにあるを、
かの低き垣根のかなたに。
かくて、心は恐れにふるふ。
枝の間にうそぶく風を聽きつつ、
かの限りなき靜寂と、この高き聲とを
くらべ見て、われは思ふ、永遠を、
死せる歳月、なほ生けるこの瞬間と、
またその聲のいかに響くかを。
窮みなき萬有の中に心はしづみ、
この海に沈まんことぞ、われにたのしき！

おもひで (部分譯)

×

美はしき星よ、昴よ、おもひきや、われ、
わが父の園生の上高く輝きならぶ

おんみらとまたかくも禮せむとは。
わが旣に童の折りより住み來つる、
またわが喜びのいち早き終りを見つる、
この家の窓よりかくもおんみらと語らんとは。

×

風はもて來る、この小さき市街の塔より
時告ぐる鐘を。思へば、この響こそ、
わが童とき、いと暗き部屋にこもりて、
身をとりめぐる恐れの中に眠りもやらで
朝待ちかねし夜々のわが慰めなりき。
われをめぐるもの、わが眼、わが耳に入る
ものの凡ては、われに一つの面影を齎らし、
いと甘き思ひ出ぞ、心に喚び起さる。
さはれそが中には、今の苦しさ、過ぎにし時の
あだなりしあこがれぞ、苦しくも混ぜられたる、
わがこと過ぎぬとの苦きその思ひこそ！——

×

おお汝等凡ての希望よ、汝やさしき靑春の日の
まぼろしよ！　心はつねに汝等にかへる。
いかに時は急ぐとも、いかに思想と感情とは
變ずるとも、かつてわれは汝等を忘れざりき！
まぼろしよ、われは知る、名譽と光榮とは。
幸福と快樂とは、ただ空しき願ひのみ。
益もなき生はあだなる苦痛。さればこそ、
たとへ我が歳月はすべて空しからむとも、
我が死ぬべき命はくらくすさびてあらむとも、
幸福は（われはよく知る）われに僅かを奪ふのみ。
されどああ、わが汝等を思ひ出づるごとに、
汝等靑春の希望よ、かつてかくもやさしく
わが前に漂ひしものよ、われはわがみすぼらしくも
悲慘なる生を思ひて、かくも多かりし美しき希望の中、
ただ死のみが、今日なほわれにのこれるを知る。

心はをののき、かかる運命にはただ一つだに
慰めのあらじとぞおもふ。
さて、もし、この常に願ひてし死のわれに近づき、
わがあらゆる不幸の終局(はて)に立ち、地はわれに
見知らぬ谷となり、わが眼に未來の消ゆるとき、
その時汝等をわれは思ひ出でん、汝等の面影は、
われに最後の嘆息を値せん、わがいたづらに
生きたりしことをいと苦(にが)く思はせつつも、
好運の日の甘さの中に、苦汁をば滴(したた)らすべし。

×

誰か嘆息なくして汝等を思ひ出でんや、
おお靑春の曙よ、おお汝等美しき
云ひがたく樂しき時よ、幸福なる者に
輝やかしくも少女(をとめ)の微笑のむかふとき！
その時ぞ凡てのものはきそひて彼に微笑をおくる。
妬(ねた)みは默(もだ)す、あるはねむり、あるはゆるして。

さて世界は——おお稀れなる奇蹟よ！——
この無經驗なる者にその手をのべて、
助けんとするかと思はる。彼の迷ひをゆるし、
あたらしき生の歩みを祝ひ、彼を迎へ、
我が主(あるじ)よと媚びへつらふ。
しばしの時よ！　電光(いなづま)のごとくにそは消え去る。
いまだなほ不幸を知らぬその者に、
はやも樂しき時代(とき)は過ぎ去る。そのよき時は、
その者に、はや靑春は、ああ、靑春は消え去る！

×

あはれネリナよ！　いかなれば汝(な)が思ひ出を
ここなる人々はつひに語らざる？　いかなれば
わが心より汝れは消え失せしか？　何處(いづこ)へ行きし？
いとしきものよ。ただわれのみ、ここにひとりして
今もなほ汝れを思ふに。ああ、汝(な)が故鄕は
また汝れを見じ。かつて汝(な)がわれと語りし

その窓は、今はた星の光りを覺束なくも
ただ悲しげに映せるのみ、中はも空し。
何處へ行きし汝は、汝が聲を、いま、
われは再び聞くを得じ。汝が唇より出づる
遠き聲音のわれに迫りて、わが血を
胸より頰へとのぼらせしかの日のやうに。
はや過ぎぬ！ 過ぎ去りぬ、汝が生は、
いとしきものよ、汝れは逝きぬ。
今また異なるもの來りて、この世をわたり、
この匂はしき丘に住むならん。
おお、速かに汝れは逝けるよ、汝が生涯は
ただ夢の如くなりき！ 汝がかしこにて踊りし時、
喜びに汝が額は輝き、眼には思ひも深き
安らぎの、靑春の光の輝きしを――
そのとき運命は、いち早くそをば消しぬ、
今ぞ靜かに汝れはやすらふ。ああ、ネリナよ、
常になほわが心には、古き愛こそ消えやらね。

あまた度び、祭りに、人のつどひの中に
われは密かに自ら云へり、おおネリナよ、再び汝れは
踊りにも祭りにも、身を飾るなく、交る事なしと！――
かくて五月來りて、綠の枝と善き歌とを
愛する童のその少女子にささぐるとき、
われは云はん、ああネリナよ、汝のためには
春は再び還らじと、愛は再び還らじと！

伊太利小唄抄

（花のリトルネレ）

○

罌粟の花よ。
戀のためには死にはせぬ、
心が病氣になるばかり。

○

柘榴の花よ。
わたしの吐息が火であつたらば、
天も地もみな燒けよもの。

○

金雀花の花よ。
一度その火がつけられたなら、
闇の中にも火花が殘る。

○

牧場の花よ。
煙草は上等、煙草入も上等、
一服やつてはそなたを思ふ。

○

巴旦杏の花よ。
心をくれといはれてあげましたのに、
貰つていぢめてよいものか。

○

林檎の花よ。
母さんわたしの胸に手をおいて、
「不幸な娘よ」とおつしやつた。

○

窓から海をみおろせば
みんな知らない舟ばかり、
あの人の舟はないものを。

○

晝顔の花よ。
死んで天國へ行つたとて
そなたがゐなけりや引返す。

○

市場に立つてる家なら好きよ、
時計が打つとき見上げられるし
あの人が通れば見えますから。

○

窓に出て見りや、外は夜の闇。
敷石をわたしの涙が濡らします、
美しいものの泉よ、よくおやすみよ。

○

水仙の花よ。
娘が歌ふなら結婚がしたさ、
散歩に出る男は戀したさ。

○

窓から波をかぞへてみたら
かぞへられよかわたしの惱み
誰が答へをしてくれる。

西班牙俚諺抄

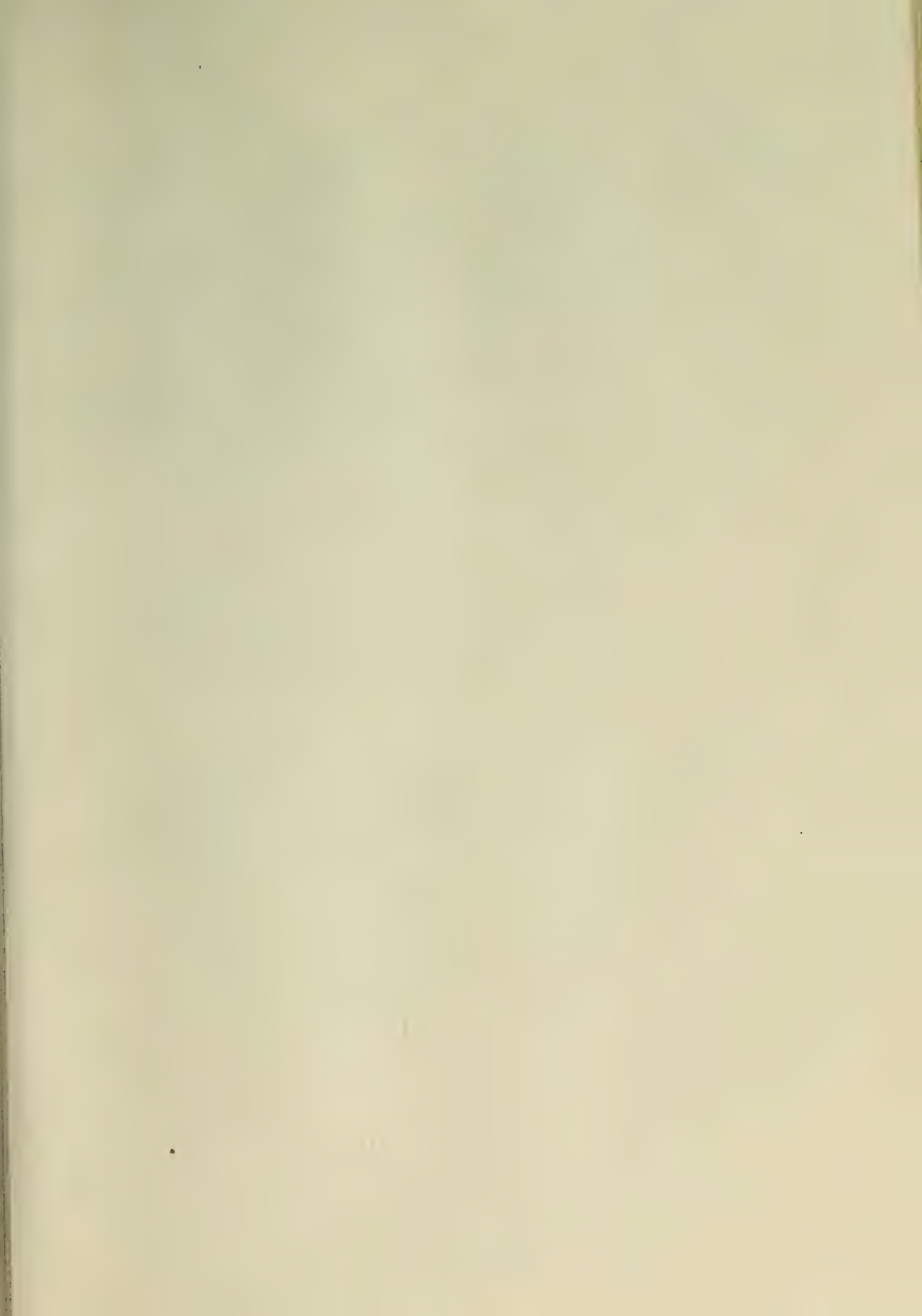
○

山の木でさへさだめは別よ、
神様になる、炭になる。

○

今夜はうれしい、あの、クリスマス、
眠つてすごす晩でなし。

○

金があるときやトマスの旦那、
金がなければこのトマス。

ツルゲエネフ

散文詩

……讀者が此の『散文詩』を一息に讀過しないやうにと望みたい。でないと、その結果は恐らく退屈を來して――そして「歐羅巴の使ひ」はその手から取落されてしまふであらう。むしろ一篇づつ讀んで頂き度い、今日はこれ、明日はあれと云ふ風に――さうしたならば、多分その中から何物かゞその胸に刻み込まれるであらうと思ふ……

ツルゲエネフの書翰から

序

ツルゲエネフの散文詩は詩の衣裳をまとうた哲學である。近代文學の生んだ最も警拔な詩である、しかして又此の憂鬱な露西亞の天才の一生の懺悔である。その中にはツルゲエネフの全作品を一貫してゐる凡ての特色がコンデンスされてゐると云つてよい。さればこの小篇は既に屢々多くの人によつて譯せられた。今此の飜譯は、徒らに屋上屋を架するものかも知れない。たゞ私一個としては此の我が熱愛する詩集の譯書を、自ら出すべき機會を與へられたのを感謝するだけである。そして私の志したのは、これに詩的な流麗な日本文の着物を着せて、眞に散文詩の名に背かざらしめんとするにあつたが、これは私にとつては不遜な無謀なことだつたかも知れない。

一體、既に屢々譯出せられた書を更に飜譯する者は、多くの利益を有すると共に、またそれに劣らぬ不利を有する。先人の教を受けるのはその利益で、的確な譯語を先人に占められ、なるべくそれを套襲しまいとて苦心をして、反つて無理を來す如きはその不利な點である。曾て、獨人ストロトマン、そのシエレイの詩集の譯本に序して、先人の勞力をどれ位の程度に利用すべきかの問題を論じて、多くの場合外國詩家の語句を最もよく自國語もて現はす言葉はたつた一つしか無い、故に後人が の虛榮心若くはその義務の誤解によつて、先人の的確な譯語を避けることを妥當ならずとし、自分が先人を凌駕し得ないと思ふ限りは躊躇なくそれを利用した事の告白を恥ぢず、自分の譯がどれ位な程度に獨立性を有するかは、これを批評家に一任すると言つた。私もまたその通りである。（なほ此問題に就いては、既に批評家の注意が向けられるべき時となつてゐると思ふ）從つて私の飜譯が卓越した先人上田敏氏、篤實なる仲田勝之助氏、草野柴二氏等の譯に負ふところ多きは言ふ迄もない。然しながら、先人と意見を異にした點ももとより尠くはない。

此の譯書のテキストとしたのは、ヰルヘルム・ランゲ及びコンスタンス・ガアネットの西歐語譯で、遺憾ながら重譯である。なほ卷末に解題と註釋とを添へたのは、年若い讀者諸君の手引にと思つての老婆心に過ぎない。

一九一七年六月　　　譯者

第一 ［一八七八年］

田舎

七月終りの日。このあたり一千ヱルストは露西亞、我が鄕國。

一體の碧色が空中に漲つて、唯一片の雲切れがその面に半ば漂ひ、半ば消えて行く。風もなく、暖かで……空氣はしぼり立ての牛乳のやうだ！

雲雀は囀り、野鳩はくゝと啼く。聲も立てず燕は空を飛び交ふ。馬は嘶いたり、ものを嚙んだりする。犬は吠えもしないで尾を振り乍らじつと立つてゐる。

畑や乾草の匂ひ、樹脂や獸皮の匂ひもほのかにする。麻はすでに滿開で、重苦しい芳香を放つてゐる。

深いけれどなだらかに下りてゐる谷。兩側には大きな頭をした幹の下で裂けてゐる楊柳の並木がある。小

川はこの谷を走つてゐる。その底の小石はきら〱する波間にふるへて見える。遙かの遠方の天と地との境界には大河の青い筋が輝いてゐる。

この谷に沿うて一方にはきちんとした物置や、ぴつたり戶のしまつた小さな納屋がある。他方には樅の木造りの板葺小舍が五つ六つある。どの屋根にも鳩小舍のついた高い柱が立つてゐて、どの戶口の上にも鬣の短い鐵製の馬が見える。瑕だらけな窓硝子は虹の七色に輝き、窓の扉には花瓶が描かれてゐる。どの家の前にも小さな腰掛が一つづゝきちんと置かれ、小高いところには猫が日向ぼつこをして、透き通つた耳をそばだてゝゐる。高い敷居の向には涼しさうな暗い外房が見える。

私は馬衣を擴げて谷の外側に横はつた。あたりには息づまるばかりの香ひを放つ刈り立ての草が積み上げられてある。拔目のない農夫達はその草を小舍の前に擴げて、もつと日光に乾して、それから納屋に收めよ

うと云ふのだ。その上ならばよく寢られることであらう。

　積草の中からは縮れ髮の子供の頭がのぞいてゐる。鷄冠のある鷄の乾草の中に蝿や小さな甲蟲を探す。まだ鼻の白い子犬は綱のやうになつて草の中にころげ廻つてゐる。

　ブロンドの髮の毛をした若者達はさつぱりした上衣に帶を低くしめ、重たい靴を穿いて、馬具をはづした車に寄りかゝつて、白い歯を光らして、冗談を言ひ合つてゐる。

　丸顔の若い女が窓から覗いて、若者の冗談や、乾草の山の中で子供達の ふざけ 廻つ てゐるのを笑 つてゐる。

　今一人の若い女は逞しい腕でもつて濡れた大釣瓶を井戸から汲み上げてゐる……釣瓶は搖れ動いて、光つた長い滴を底へ垂らしてゐる。

　私の前には新しい縞の袴と新しい靴とをつけた婆さんが立つてゐる。

　日に燒けた痩せた頸には大きな空洞の玉を三列に卷いて、赤い玉を染めた黃色な手拭で白髮頭を包み、それが曇つた眼の上にすべり落ちてゐる。

　けれどもその老眼には人を迎へる笑ひがあり、その皺の寄つた顏中には笑みをたゝへてゐる。この婆さんは七十臺には手が屆いてゐるに違ひない……それでも未だ昔の美しい面影は窺はれる。

　日に燒けた指をひろげて、婆さんは右手に穴倉から出したばかりの冷たいクリイム入りの牛乳の椀を差出してゐる、椀の外側は雫で蔽はれて眞珠の紐を垂れたやうである。左手の掌には溫い麵麭の大きな塊を私に持つて來て、「旅のお方、ようこそお出でになりました、どうぞこれを召上つて下さい！」と云ふやうだ。

　雄鷄が俄かにうたひ出して、忙しげに羽搏きすると小舍に閉ぢ籠められてゐた犢が懶げにそれに答へる。

「こりやすばらしい燕麥だ！」と私の馭者の言ふのが

聞える……あゝ、廣々とした露西亜の田舎の滿足よ、平和よ、豊饒よ！　あゝ、深い平和よ、幸福な生活よ！　すると何がなしにこんな考へが浮んで來た、コンスタンチノオプルの聖ソフイア寺院の圓頂閣の上に十字架を建てようとか、その外我々都會の者が懸命になつてゐる事が、此處で我々に何の價値があらうぞ！

一八七八年二月

會　話

「ユングフラウもフインステラアルホルンも未だ曾て人間の足に踏まれしことなし」

アルプスの最高峰……峨々たる懸崖の連續……山脈の眞中。

山の上には淺緑の澄み渡つた黙せる空。身に沁み渡る烈しい寒氣。かたい、輝く雪。その雪を貫いて聳える氷に鎖され風に吹きはらはれる陰暗たる峯。

地平線の兩端には二人の巨人が立つてゐる。ユングフラウと、フインステラアルホルンとである。

ユングフラウはその隣人に言つた、「何か新しい事がありますか？　貴下は私よりよく見えるでせう。下界には何があります？」

幾千年は過ぎ去つた。たゞ一瞬である。するとフインステラアルホルンは雷の轟くやうな聲もて答へる、

「地は深い雲に蔽はれてゐる……まあ待ちなさい！」

再び幾千年は過ぎ去つた。たゞ一瞬である。

「さあ、今は？」とユングフラウが問ふ。

「今度は見える。下界は何處もまだ元の儘だ。靑い水黒い森、灰色の積み重つた石。そのまはりには虫共がやつぱり這ひ廻つてゐる。そら、例のまだ一度もお前や私を汚し得ないあの二足動物のことさ」

「人間のことですか？」

「さうだ、人間のことだ」

幾千年は過ぎ去つた。これたゞ一瞬である。

「さあ、今度は？」とユングフラウが問ふ。
「虫共は滅つて來たやうだ」とフインステラアルホルンは雷鳴の聲もて答へる、
「下界は明るくなつた。水は減いて、森は疎らになつた」
またも幾千年は過ぎ去つた。たゞ一瞬である。
「今度は何が見えます？」とユングフラウが問ふ。
「此の我々の周圍は綺麗になつたやうだ」とフインステラアルホルンが答へる、
「けれども彼方の方は谷間に矢張斑點がある、元のやうに何だか動いてゐる」
「さあ今度は？」また幾千年過ぎ去つた後、――即ち一瞬の後、ユングフラウが問ふ。
「もうよくなつた」とフインステラアルホルンが答へる。「何處を見ても、すつかり眞白で、綺麗になつてゐる……何處も彼處も雪だ、雪と氷だ。何も彼も凍つてしまつた。もうよくなつた、靜かになつた」
「よろしい」とユングフラウは言つた。「ところで貴下私達は大分喋りました、もう寢る時分です」
「さうだ、寢る時分だ」
そして巨大な山は眠り入つた。そして澄み渡つた蒼空も、永遠に沈默した大地の上に眠り入つた。
一八七八年二月

老　婆

私は廣い野をたゞ一人歩いて行く。
突然背後に輕い用心深さうな足音が聞えた……誰かが從いて來る。
振返つて見ると、灰色の襤褸を纏うた小さな腰の曲つた老婆だ。襤褸の中からは黄色な、皺の寄つた、鼻の尖つた、齒の無い顏ばかりが覗いてゐる。
私は傍へ寄つた……老婆は立止つた。
「お前は何だ？　何が欲しいのか？　乞食かお前は？

施與を貰ひ度いのか？」

老婆は答へない。私はその方に身を屈めて見て、老婆の兩眼とも一種の鳥に見られるやうに半透明な白い薄皮で蔽はれてゐるのに氣が附いた。彼女の眼はそれに依つて鋭い光から保護されてゐるのだ。

けれどもこの老婆にあつてはこの薄皮が動かないで瞳をも蔽うてゐる……それで私は彼女が盲目であると推した。

「施與をくれろと云ふのか？」と私はもう一度聞いて見た。「何故お前は私に從いて來るのだ？」

けれども老婆はやつぱり返事をしないで、かすかに身顫ひした。

私は身を返して歩き出した。

するとまた例の輕い規則正しい忍び足とも云はゞ云はれる足音がする。

「また婆めが！」と私は思つた、「何故私にくつゝいて來るんだらう？」けれども私は直ぐにひそかに附け加へた。「大方目が見えないものだから道に迷つて、私の足音について人里へ出ようとするんだらう、てつきりさうだ」

けれども一種異樣な不安の念がだん〳〵私の心を捕へた。老婆は私に從いて來るばかりではなくして、右へ左へ私を動かして、私は知らず識らずその命令に服してゐるのだと思ひ出した。

けれども私は矢張り進んで行く……然し見よ、私の行手には黑く廣いものが……穴のやうなものがある……「墳墓！」と云ふ考へが頭に閃いた。「老婆は彼處へおれを追ひ込まうとしてゐるんだ！」

私は急に振返つた。老婆はまたも私と對ひ合つた……然も今は目が見える！　老婆は大きな殘忍な無氣味な目で……摯鳥の目で私を見てゐる……私も彼女の顏を、彼女の目をきつと見た……と、また例の不透明な瞙、また例の盲ひた鈍い顏附……

「あゝ！」と思つた、「此の老婆はおれの運命だ。人間

の免れられない運命だ！」
「免れられない！　免れられない！　いや、それは狂氣だ！……免れなけりやならぬ！」そこで私は違つた方向に向つた。
私は急いだ……けれども矢張り後からはまたかの輕い足音がばた〳〵近づく……前にはまたかの暗い塚穴。
また他の方に向ふ……また後にはおなじ足音、前には同じ恐ろしい黑點。
追はれてゐる兎のやうに向きを變へて何方へ走つても……駄目だ、駄目だ！
「待てよ！」と私は考へた。「一つ誑してやらう！　何處へも行くまい！」そして私は直ぐ樣地面にすわつた。
老婆は私より二歩許り後に立止つた。音は聞えなかつたが、其處にゐるのを感じたのだ。
不圖向うの例の黑點を見やると、漂うて私の方へ這つて來る！
あゝ神よ！　私は見返る……老婆は私をぢつと見て齒のない口を歪めて冷笑してゐる。
「免れられない！」

一八七八年二月

犬

部屋の中には私達二人、犬と私と……戸外には恐ろしい嵐が吹き荒んでゐる。
犬は私の前にすわつて眞面に私の顏を見守つてゐる。
私もまた犬の顏を見てゐる。
犬は何か言ひたげにしてゐる。彼は默つてゐる、言葉が無いのだ、自分で自分がわからないのだ——けれども私は彼の心を知つてゐる。
私は此の瞬間に彼にも私にも同じ感情があつて、私達の間には何の差別も無いことを知つてゐる。私達は

同じ生物だ、何方にも同じ顫へる火花が燃え輝いてゐるのだ。

死はその冷たい廣い翼を羽搏いて落して來る……

かくて萬事休す！

誰かその時私達二人の心に燃えた火花の差別を立て得ようぞ？

いな！　互に見交す二人は獸と人間ではない……

互にぢつと見交してゐる眼は同等な物の眼である。

獸にも人間にも、同じ生命が恐れ戰きつゝも互に寄り添うてゐる。

一八七八年二月

我が競爭者

私は一人の競爭者を持つてゐた。事業や、官職や、戀愛上の競爭者ではなかつたが、たゞ我々二人の意見はどんな問題にも一致しないので、二人が出會へば果てしもない議論が起つた。

二人は事毎に爭つた。藝術や、宗教や、科學に就いて、地上や墓の彼方の生活に就いて、とりわけ墓の彼方の生活に就いて。

彼は正教信者で、且つ熱狂家であつた。或る時彼は私にかう言つた、「君は何でも嗤ふが、若し僕が君より前に死んだら、きつと他界から君のところへ來る……その時君がなほ嗤ふかどうか見たいものだ」

そして事實彼は私よりも前にまだ若くて死んだ。けれども歲月は移つて、私は彼の約束、彼の脅喝を忘れてしまつた。

或る夜、私は床に就いたが眠れなかつた。と云ふより眠る氣がしなかつたのだ。

部屋の中は暗くも明るくもなかつた。私はいつか灰色の薄明りをぢつと見入つてゐた。

すると不意に二つの窓の間に私の競爭者が立つてゐて、靜かに悲しげに、頭を上下に振つてゐるやうに思

はれた。

　私は恐れなかつた、驚きもしなかつた……けれども少し起き上つて、肘を突いて、その思ひがけない幻影を一層鋭く打見やつた。

　その幻影はやはりうなづいてゐる。

「さあ？」と私はたうとう言つた、「君は勝ち誇つてゐるのか、悔い憾んでゐるのか？　どうだね――警めるのか責めるのか？……或はまた自分が間違つてゐたとか、二人共間違つてゐたとか知らせに來たのか？君はどんなことを經驗したのか？　地獄の責苦か？　天國の愉樂か？　せめて一言でも話したまへ！」

　けれども私の競爭者はたゞの一言も言はないで、相變らず悲しげに穩かに頭を上下に振つてゐるばかりだ。

　私は笑つた……彼は消えてしまつた。

　一八七八年二月

乞　食

　私は街を歩いてゐた……老衰した乞食が袖を引いた。

　血走つて涙ぐんだ眼、蒼い脣、ひどい襤褸、膿んだ傷……あゝ、何たる忌はしい貧窮が此の悲慘な人間に食ひ込んだのであらう！

　彼はむくんで赤くなつた汚ない手を私に差出した。彼はうめいて、ぶつ〳〵と施しを乞うた。

　私は衣嚢を殘らず探しはじめた……財布も無い、時計も無い、ハンケチすらも無い……何一つ持つて出なかつたのだ。それに乞食はまだ待つてゐる……彼の差出した手はぶる〳〵顫へてゐる。

　はたと當惑して、私は此の汚ない顫へる手をしつかり握つた……「君、宥してくれ、僕は君、何も持合せてゐないんだ」

乞食はその血走つた眼を私に向け、蒼い脣に微笑を含んで、彼の方でも私の冷たい指を摑んだ。

「そんな事を、貴下」と彼は呟いた、「これも有難いので。これも施物でございます、旦那」

私もまた彼から施物を得たのを感じた。

一八七八年二月

「汝は愚者の審判を聞かざるべからず……」

プウシキン

「汝は愚者の審判を聞かざるべからず……」おゝ、我等の偉大なる詩人よ、卿は常に眞實を語つた。今度も亦卿は眞實を語る。

「愚者の審判と群集の笑ひと」……誰か此の二つを知らなかつた者があらう？

此の凡てを人は堪へることが出來る、また堪へなければならぬ。自分の力を信ずる者はそれを輕蔑するがいゝ！

然し世には一層殘酷に心を衝き通す打擊がある……

或人は出來る限りの事をした、懸命に、親切に、正直に働いた。……然も正直な人々は嫌惡をもつて彼から顏をそむける、正直な顏は彼の名を聞くといづれも憤怒に燃え上る。「行つてしまへ！　其處を退け！」と正直な若者は聲々に彼を罵る。「おれ達はお前にもお前の仕事にも用はない。お前はおれ達の居處を汚す。お前はおれ達を知つてはゐない、理解してはゐない。……お前はおれ達の敵だ！」

かやうな人はどうすべきであらうか？　仕事を續けるがいゝ。自分を是認しようとしてはならぬ、より正しい判斷を求めようとさへしてはならぬ。

曾て百姓は麵麭の代用物、貧民の常食なる甘藷を齎した旅人を呪つた……彼等は旅人が差出した貴い贈物をその手から打落して、泥の中へ投げて足で蹂躙つた。

今彼等はそれで生きてゐる、しかもその恩人の名前

さへも知らない。
それでいゝのだ！　彼等に彼の名前が何であらう？　彼はよし名前は顯れずとも、彼等を餓ゑから救つてゐるのだ。

我々は我々の齎すものが眞に立派な食物であるやうに氣を附けさへすればいゝのだ。

愛する者の脣に上る苦い不當な非難……然しそれもまた堪へられる……

「私を打て！　然し私の言葉を聽け！」とアゼンスの將軍はスパルタ人に言つた。

「私を打て！　然し健かに滿腹してゐよ！」と我々は言はなければならぬ。

一八七八年二月

滿足せるもの

一人の靑年が首都の街を喜び躍つて行く。彼の擧動は敏捷できび／＼してゐる。眼は輝き、脣は微笑し、昂奮した顏は氣持のいゝ紅を潮してゐる……彼は滿足と喜びとで一杯になつてゐるのだ。

何事が彼に起つたのか？　彼は遺產を得たのか？　昇進したのか？　情人に出逢ひに急いでゐるのか？　それとも單に旨い朝飯を食べて、健康の感じ、滿腹の感じが身體中に漲つてゐるだけなのか？　波蘭土王スタニスラウスが、彼の頸にその美しい八稜十字の勳章を懸けてやつたのでもなからう？

否。彼はある友人に對して誹謗をこしらへ出して、それを懸命に擴めて步き、今その同じ醜聞を外の友達の口から聞いた、そして――彼自身もそれを信ずるに至つた！

あゝ、この瞬間に於て、此の愛すべき有爲の靑年は、いかに滿足して、またいかに善良でさへもあつたらう！

一八七八年二月

處世法

「若し君が敵を手ひどく苦しめ、迫害してやらうと思ふなら」とある狡猾な老漢が私に言つた、「君は君自身の持つてゐると思ふ缺點や惡德を以て罵つてやり給へ……大に憤慨して、罵つてやり給へ！

「さうすればまづ君がその惡德を有つてゐないと思はせる。

「次ぎには君の憤慨は噓でなくてすむ……且つまた君は自分の良心の的となるのを避け得られる。

「たとへば、君が變節者ならば、君の敵を信念の無い奴と罵り給へ！

「若し君が卑屈な性質なら、口を極めて、彼は奴隷だ……文明の、歐羅巴の、社會主義の奴隷だと罵つてやり給へ！」

「非奴隷主義の奴隷とも言へるか知ら」と私は氣を引いて見た。

「左樣、さうも言へる」と老猾な好物はうなづいた。

一八七八年二月

世の終

夢

私は露西亞の或る荒野の一軒しか無い百姓家にゐるやうに思つた。

部屋は廣くて低く、窓が三つ附いてゐる。壁は白く塗られてあつて、家具一つ無い、家の前は荒涼たる原で、だん〳〵と傾斜してゐる。單調なる灰色の空がその上に寢臺の天蓋のやうに垂れ下つてゐる。

私きりではない。部屋の中にはまだ十人ばかりゐる。皆あたりまへの人達で素朴な風をしてゐる。無言で、足音を忍ばせて、彼等は行きつ戻りつしてゐる。互に避け合つてはゐるが、絶えず心配さうに目を見交す。

何故此の家へ來たか、一緒にゐるのはどんな人だか誰も知つてゐる者はない。どの顏にも不安と絶望とが見える……いづれも交る交る窓に寄つては、外から何か來るのを待つてゐるやうに熱心に見廻す。

それからまた不安氣に歩き廻る。中に一人小さな子供がゐて、一本調子の細い聲で始終「お父さん、こはいよ！」としく／＼泣きながら言ふ。この啜り泣で私の胸もわく／＼して來て、私も恐くなり出した……何が恐いのか？ 自分でもわからない。たゞ或る大きな大きな災難が次第に近いて來ることだけは感じられる。

子供は矢張り泣きやまない。あゝ、此處から免れたい！ どうも息苦しい！ 鬱陶しい！ 重苦しい……でも免れることは出來ないのだ。

天は經帷子のやうだ。それに風一つない……空氣は死ぬかどうかしたのだらうか？

突然子供は窓に驅け寄つて、例の哀れつぽい聲で叫んだ、「あれ！ あれ！ 地面が落つこちた！」

「なに？ 落つこちた？」實際、つい今迄は家の前には野原があつたのに、今は、家は大きな山の頂に立つてゐる！ 地平線は墜落し、陷沒して、家の直ぐ前は險しいまるで削り取つたやうな暗い絶壁になつてゐる。

我々は皆窓に押寄せた……恐ろしさに我々の心は凝結した。「彼處だ！ 彼處だ！」と私の隣にゐた者が囁いた。

そして見よ、遙か遠い地極に添うて何ものかゞ動き出した、小さな圓い丘らしいものが擧つたり墜ちたりし出した。

「海だ！」と云ふ念が同時に我々一同の胸に閃いた。「それは直ぐに我々を呑んでしまふだらう……だがどうしてこんなに高く來るものか！ 此の絶壁の上まで！」

けれどもそれは高まる、見る間に高まつて來る……

もう遠方には起伏してゐるきれ〴〵の丘はない……打連つた恐ろしい一脈の波濤が全地平線を抱き込んでゐる。

波濤は引さらひ、引さらつては、我々めがけて押寄せて來る！　地獄の闇黒の中に渦巻いてゐる氷のやうな颶風に乘じて逆巻き來る。あらゆるものは震撼した——かの轉がり來る塊の中には、雷のはためき、數限りなき喉から洩れる魂消る叫喚があつた……

あゝ！　何たる怒號慟哭であらう！　地面そのものが恐ろしさに怒號してゐるのだ……

世の終り！　一切のものゝ終り！

今一度子供は啜り泣いた。私は仲間の者につかまらうとしたその時、既に我我は殘らずその眞黒な氷のやうな轟く波濤に壓し潰され、葬られ、呑み込まれ引つさらはれてしまつた！

暗黒……永遠の暗黒！

息もつげないで、私は目を覺ましました。

一八七八年三月

マアシヤ

幾年か前、私がペテルブルグに住まつてゐた時分、橇を雇ふやうな事がある毎に、私はその馭者と話をすることにしてゐた。

とりわけ私は、近在の貧乏な百姓で、自分達の食料や地代を儲ける氣で、茶色に塗つた橇とみすぼらしい馬とをもつて首都に出て來てゐる夜の馭者と話すのが好きだつた。

或日、私はかうした馭者を雇つた……彼は二十歳ばかりの脊の高い頑丈な立派な男で、碧い眼と赤い頰をもつてゐた。ブロンドの髮は眉深にかぶつたぼろぼろな小さな帽子の下から、小さな渦を巻いてはみ出してゐた。こんな幅の廣い肩の上にどうしてそんな小さな破れ襯衣が着られたのであらう！

けれどもその馭者の綺麗な髯の無い顔は悲しげに打沈んでゐた。

私は彼に話しかけた。彼の聲にも悲しい調子が籠つてゐた。

「君、どうかしたのか？」と私は訊いた。「何故沈んでるんだね？　何か心配事でもあるのかい？」

若者は直ぐには返事もしなかつた。「はい、旦那、お察しの通りで」と彼はたうとう言つた。「こんな情無い事は復とありません。家内が死んぢまつたんで」

「可愛がつてゐたんだらうね…　そのお神さんを？」

若者は私の方には向かないで、ほんの一寸頭を下げた。

「可愛がりましたとも、旦那。もうそれから八月になりますが……忘れられませんや。始終それが殘念でなりません……まつたくですよ！　何だつて死なゝきやならなかつたんだか？　あんなに若くて丈夫だつたのに！……たつた一日で虎列拉にやられてしまひました」

「いゝお神さんだつたんだね？」

「そりや旦那！」と不憫な男は深い溜息を吐いて、「どんなに二人は仕合せでしたか！　それに私の留守に死んじまつたんです！　此市でそれと聞いた時にやもう葬られてゐましたんで。直ぐに村へ驅け附けましたが、家へ着いた時にやもう眞夜中過ぎでした。小舍へ入つて、部屋の眞中に立つた儘、そつと「マアシヤ！　マアシヤや！」つて呼んで見ましたが、蟋蟀が鳴いてるばかり……その時にや私や泣き出して、土間にべつたりすわつて、拳で地面を打ちました！　そして私や言ひました……「この胴慾な土め！　貴様は彼女を呑んぢまつたな……さあ俺も呑んぢまへ！ ――あゝ、マアシヤ！」

「マアシヤ！」と彼は急に沈んだ聲で附け足した。そして手綱を持つたなりで兩眼の涙を袖で押し拭ひ、それを振ひ、肩を縮めて、もう一言も言はなかつた。

橇を下りた時、私は彼に賃金の外に幾らかの酒手をやつた。彼は兩手で帽子を取つて丁寧にお辭儀をして、一月の寒氣を含んで灰色の霧のかゝつた、寂しい街路の一體に積つた雪の上を、ゆつくりと曳いて行つた。

一八七八年四月

愚　物

一人の愚物があつた。

長いこと彼は平和に滿足に暮してゐた。ところが、自分が世間からつまらぬ愚物だと目せられてゐると云ふ噂がだん〳〵と彼の耳へ入つて來出した。

そこで愚物は悲しくなつて、どうしたら此の面白からぬ噂の跡を絶やしてしまへるだらうかと打沈んで思案しはじめた。

たうとういゝ思ひ附が彼の鈍い小さな頭腦にふいと浮んだ……そこで、早速彼はそれを行つて見る事にした。

街へ出ると一人の友達が彼に出會つて、或る有名な畫家を賞めそやした……

「待ちたまへ！」と愚物は叫んだ、「その畫家はずつと前に時代後れになつてゐるんだ……君はそれを知らないのか？　まさか君がさうだとは思はなかつた……君はすつかり時勢に後れてゐる」

その友達は驚いて、直ぐ愚物に同意した。

「僕は今日すばらしい書物を讀んだよ！」とまた違つた友達が彼に言つた。

「待ちたまへ！」と愚物は叫んだ、「君はそれでよく恥しくないのかね。あの書物は一文の價値も無いんだ。誰だつてずつと前に讀み捨てたものなんだ。君やそれを知らんのか？　君や全く時勢後れだよ」

此の友達も驚いて、愚物に同意した。

「何てすばらしい男だらう、僕の友達のＮＮは！」と

三人目の友達が愚物に言つた。「實際鷹揚な男だよ！」

「待ちたまへ！」と愚物は叫んだ。「ＮＮは有名な惡黨だ！　親戚中を騙り歩いた奴だ。そりや誰でも知つてる事だ。君は全く時勢に後れたね！」

此の三番目の友達も驚いて、愚物に同意してその友達を捨てた。かうして誰であらうが何であらうが、自分の前で賞められるものなら、愚物はきつと例の返答をした。

時によると彼は非難の調子でかう附け足した、「ぢやまだ君はオーソリチイを信じてゐるのか？」

「意地の惡い憎々しい奴だ！」と友達は愚物の事を言ふやうになつた。「然し何と云ふ頭腦だらう！」

「そして何と云ふ辯舌だらう！」と他の者は附け足すのであつた、「さうだ、たしかに天才だ！」

つひには或る雜誌の主筆が愚物に評論欄を引受けてくれと言つて來た。

そこで愚物は例の 態度例の 表白を少しも 變へ ないで、何事をも何人をも批評するやうになつた。

今や、曾つてはオーソリチイを擊破した彼が、自らオーソリチイとなつた。そして青年は彼を尊敬し、彼を畏れた。

可哀相な青年はさうする外に何をする事が出來よう？　元來、人は何人をも尊敬してはならぬ筈だ……がこの場合には、若し人が彼を尊敬しなければ全く時勢後れになつてしまふのだ！

臆病者の間には幾多の愚物が時めいてゐる。

一八七八年四月

東方の傳説

誰かバグダッドで宇宙の太陽ヂヤフアルを知らない者があらう？

何十年も昔のこと、或日ヂヤフアルは（彼はまだ青年であつた）バグダッドの郊外をぶら〳〵歩いてゐた。

突然嗄れた叫び聲が彼の耳に附いた。誰かゞ懸命に助けを呼んでゐるのだ。

　ヂヤフアルは同年配の青年の中で思慮分別の備つてゐるので聞えてゐたが、彼の心は慈悲深く、またその膂力を恃んでゐた。

　彼は聲する方へ馳せ附けて、一人の弱々しい老人が二人の追剝に市の城壁に壓し附けられてゐるのを見た。

　ヂヤフアルは劍を拔いて、惡漢に飛びかゝつて行き、一人を殺し、他の一人を追つ拂つた。

かうして救はれた老人は、救つてくれた人の足下に跪づいて、その着物の裾に接吻しながら叫んだ、「勇ましい若い衆、貴下のお志はきつとお酬いします。私は見かけこそみすぼらしい乞食だが、それは見かけだけで、私はたゞの人間ぢやない。明日の朝早く本市場にお出でなさい。泉水のところで待つてゐませう。私の言ふ事をゆめ疑ひなさるな」

　ヂヤフアルは考へた、「成程此人は見かけは乞食だ。然しどんな事だつてあり得るものだ。一つ試して見よう」それで彼は答へた、「御老人、承知しました、まゐりませう」

　老人は彼の顏をぢつと見て、そして行つてしまつた。

　翌朝、まだ日の出ぬうちに、ヂヤフアルは市場へ出かけた。老人は泉の大理石の窪みに臂を突いて、ちやんと彼を待つてゐた。

　彼は無言のまゝヂヤフアルの手を取つて、高い壁でぐるりと圍まれた小さな園の中へ連れて行つた。

　此の園の眞中の綠の芝生の上には一本の奇妙な樹が生えてゐた。

　それは扁柏に似てゐたが、たゞその葉は空色をしてゐた。

　三つの果實が――三つの林檎が――上の方に曲つた細い枝になつてゐる。一つは中位の大きさで、長くて、乳白色をしてゐた。二つめのは大きくて、圓くて、鮮

紅色をしてゐた。三つめのは小さくて、皺ばんで、黄色がかつてゐた。

風も無いのに樹はさら〳〵鳴つてゐた。風鈴のやうな鋭い悲しげな音である。まるで樹がヂヤフアルの來たのを知つてゐるかのやうだ。

「お若い衆！」と老人は言つた、「此の林檎の中どれか好きなのを取りなされ。若し白いのを取つて食べれば、貴下は人間中で一番賢い人になれる。紅いのを取つて食べると、猶太人ロスチヤイルドのやうな金持になれる。また黄色なのを取つて食べれば、お婆さん達に好かれる。さあどつちかに定めなされ！　ぐづぐづしてはゐられない。一時間の中に林檎は凋んで、この樹もひとりでにしいんとした地の底に沈んでしまふから」

ヂヤフアルは首を垂れて考へ込んだ。「どうしたものかしら？」と彼は小聲で言つた、自分自身に相談するやうに。「餘り賢くなると多分生きてゐるのが厭やになるだらう。誰よりも金持になると人に嫉まれるだらう、さうだ、三つめのしぼんだ林檎を取つて食べた方がよからう！」

そこで彼はそのやうにした。すると老人は齒の無い口で笑つて言つた、「賢い若い衆だ！　お前は一番いゝのを選んだ！　白い林檎がお前に何の役に立つ？　それでなくてもお前はソロモンよりも賢いのだ。紅い林檎も用はあるまい……それが無くたつて金持になれる。たゞお前の富は誰も嫉みはしないものだが」

「御老人、話して下さい」とヂヤフアルは昂奮して言つた、「祝福せられたる我が回教王の尊き母君は何處におゐでになりますか？」

老人は恭しく腰を屈めて、若者にその道を示してやつた。

誰かバグダツドで、宇宙の太陽、偉大なる、高名なるヂヤフアルを知らない者があらう？

一八七八年四月

二つの四行詩

昔、一つの町があつた。その町の人達は詩を熱愛してゐたので、何週間も立派な新しい詩が現れないで過ぎると、かやうな詩の不作を公の不幸と考へた。

そんな時には、彼等は一番惡い着物を着て、頭に灰をふりかけ、群をなして廣場に集まつて、涙を流して彼等を見捨てた詩神を悲しみ訴へるのであつた。

或るかうした不幸な日に、靑年詩人のチユニアスは悲嘆に暮れてゐる公衆の押し合ひへし合ひしてゐる廣場にやつて來た。

急ぎ足で彼は此の爲めに造られてゐる高壇にのぼつて、一つの詩を朗讀したいとの合圖をした。

係官たちは直ぐに束桿を振廻した。「レツ！ 謹聽！」と彼等は高く叫んだ。群集は片唾を呑んで靜まり返つた。

「友よ！ 同志よ！」とチユニアスは高いが、然しあまり落着きのない聲ではじめた——

「友よ！ 同志よ！ 詩神を愛する者よ！
汝等、美と優雅とを崇むる者よ！
暫しも憂愁に心を惱まさるるなかれ、
汝等の心の願ひは滿たされん、然して光は暗を
逐ひやらん。」

チユニアスはやめた……すると彼に應へて廣場の八方から叱聲や嘲笑のどよめきが起つた。

彼に向つた顏は皆憤激に燃え、眼は皆忿怒にきらめき、腕は皆擧げられて、威嚇の拳を振つた。

「彼奴、あんなことで我々をごまかさうと思やがつたんだ！」と怒の聲が怒鳴つた。「あの下らない平凡詩人を高壇から引きずり下せ！ 馬鹿者を引つ込ませろ！ この馬鹿野郎にや腐れ林檎と腐れ玉子で澤山だ！ 石

を取つてくれ――そこの石を！」

　ヂユニアスは一目散に高壇(フオーラム)を飛下りで逃げ出した。……けれどもまだ家へ行き着かないうちに、熱狂した拍手喝采や讃嘆の叫聲やどよめきを耳にした。

　不思議に堪へず、ヂユニアスは、人に氣附かれないやうに注意して、（荒れ狂つた獸(けもの)を怒らすのは危險であるから）廣場へ引返した。

　そして彼は何を見たか？

　群集の上高く、彼等の肩の上に、平たい黄金の楯に乘つて、紫の寬袍(クレミエ)を纏ひうち靡く髮に月桂冠を頂いて立つてゐたのは彼の競爭者なる靑年詩人のヂユリアスであつた。……そしてまはりの群衆は叫び立てた、「萬歲！　萬歲！　不朽のヂユリアス萬歲！　彼は我々の悲しみを、我々の非常な苦しみを慰めた！　彼は蜜よりも甘い、鐃鈸(ねうはち)の音よりも調子のいゝ、薔薇よりも匂はしい、蒼空よりも淸らかな詩を我々に與へた！　彼を凱旋式をして連れて行き、彼の靈妙な頭に香(かう)の柔かな匂ひを注ぎかけ、彼の額を棕梠(しゆろ)の葉でしづかに煽ぎ、彼の足もとに亞剌比亞のあらゆる沒藥(もつやく)の香りをふり撒け！　ヂユリアス萬歲！」

　ヂユニアスは熱狂して讃歌を叫んでゐる者の一人のところへ行つた。「市民の方、私(わたし)に敎へて下さい！　ヂユリアスは一體どんな詩で貴下方を喜ばせたのです？　私は殘念にも彼が詩を讀んだときに廣場に居合はさなかつたんです！　どうか御忘れでなけりや私に云つて聞かして下さい！」

「あんな詩がどうして忘れられるものですか！」と問はれた人は力を籠めて答へた。「私をどんな人間だと思つたんです？　まあ聞きなさい――　聞いて喜びなさい、一緒に喜びなさい！」

「詩神(ミユウズ)を愛する者よ！」かく、かの崇(あが)められてゐるヂユリアスははじめたのだ……

「詩神(ミユウズ)を愛する者よ！　同志よ！　友よ！

美と優雅と音樂とを崇むる者よ！
汝等の心を暫しも憂愁に脅かさるゝなかれ！
願ひてし時は來れり！　然して晝は夜を逐ひや
らん！」

「君、すばらしい詩ぢやないか？」
「こりや驚いた！」とチユニアスは叫んだ、「そりや私の詩ぢやないか！　チユリアスは私が詩を讀んだ時に群集の中にゐたに違ひない、それを聞いて、一二句言ひ廻しを變へて、しかも拙くして繰返したのだ！」
「ははア！　わかつた……貴樣はチユニアスだな」と彼の呼び止めた市民は顏を蹙めて言つた。「貴樣は嫉妬深い奴だ、でなきや馬鹿だ！……まあ考へて見ろ、みじめな奴、チユリアスが「然して晝は夜を逐ひやらん！」と歌つたのはどんなに莊厳だか。それに貴樣のは何だ、「然して光は暗を逐ひやらん！」だつて、馬鹿な、何の光だ？　何の暗だ？」
「然しそれは同じ事ぢやありませんか？」とチユニアスは言ひはじめた……
「もう一言言つて見ろ」とその市民は彼を遮つた、「俺は皆を呼ぶぞ……皆は貴樣を八つ裂きにしつちまふぞ！」
　チユニアスは賢くもさからはなかつた。するとその話を聞いてゐた白頭の老人が此の不幸な詩人のそばへ寄つて、彼の肩に手を置いて言つた、
「チユニアス！　お前は自分の思想を歌つた、然し時機がよくなかつた。彼は他人の思想を歌つた、然し時機がよかつた。そこで彼は成功した。その代りお前には良心の慰安が殘されてゐる。」
　然し我々のチユニアスの良心が全力を盡して（實を云へばあまり成功はしなかつたが）傍に押し除けられてゐる彼を慰めてゐる間に――遠方では、稱讚と歡呼の叫びの中に、紫金に輝く太陽の勝利の光輝に包まれて、額に月桂樹の影を帶び、沒藥の香ひの雲に取圍ま

れ、あだかも本國へ凱旋する皇帝のやうに、重々しげにまた誇らはしげに、チュリアスの毅然たる姿は悠然と動いて行つた……そして棕梠の長い枝は彼の前に上つたり下つたりしてゐた、あだかもその靜かな戦ぎ、愼ましやかな會釋によつて、魅せられてゐる市民の心に絶えず湧き返るかの讃嘆の情を云ひあらはさうとするかのやうに！

一八七八年四月

雀

私は獵から歸つて、庭園の並木道を歩いてゐた。犬は前を走つてゐた。

突然犬は刻み足になつて、獲物を嗅ぎ附けたやうに忍んで歩き出した。

私は並木道を見遣つて、嘴の黄色な頭の上に毯毛の生えた一羽の子雀を認めた。巣から落ちたのだ（風はひどく並木の樺の樹をゆすぶつてゐた）そして其處にぢつとすくんだ儘、彼はまだ生え切らない翼を徒らにばたばたさせてゐた。

犬がそつとそれに近づいて行つた時、突然直ぐ傍らの樹から、喉の黒い親雀が丁度小石のやうに犬のつい鼻先きに飛び下りた。そして全身ぶるぶる顫へながら、あはれな絶望の叫びを擧げて、彼は歯列のきらめく開いた口の方へ二三度飛びかゝつた。

彼は助けようと思つて、身をもつて雛をかばつたのだ……けれども其の小さな全身は恐怖のために戰き、其の聲は怪しう嗄れてゐた。恐ろしさに氣を失ひながらも、彼は身を投げ出したのだ！

彼の眼には犬はどんなにか大きな怪物に見えたに違ひない！　それでも、彼は安全な高い枝に止まつてゐる事は出來なかつた……その意志よりも強い力が彼を飛び下りさせたのだ。

私のトレソルはぢつと立止つてゐたが、後退りした。

……彼もまた此の力を認めたに違ひない。

私は急いで面食つてゐる犬を呼んで、敬虔の念に打たれて立去つた。

さうだ、笑つてはならない。私はこの小さな悲壯な鳥に對して、その愛情の衝動に對して、たしかに敬虔の念に打たれた。

私は思つた、愛は死よりも死の恐怖よりも強い。ただそれに依つてのみ、愛に依つてのみ、人生は維持され、進歩するものであると。

一八七八年四月

髑髏

壯麗な、燦爛たる廣間。紳士淑女の群れ。

すべての顏は活氣附いて、談話ははずんでゐる。……賑かな談話の對象は或る有名な唱歌女である。彼等は彼女を神聖だ、不朽だと呼んだ。……「あゝ、實にすばらしいものだつた、彼女が昨日やつた最終の顫音は！」

すると突然――丁度魔法使ひの杖を振つたやうに――すべての頭から、すべての顏から、綺麗な皮膚の蔽ひが滑り落ちてしまつて、忽ち白々とした髑髏があらはれ、むき出しになつた顎や齒齦が鉛色に光つた。

恐る〳〵私はその顎や齒齦の動くのを見た。そのごつ〳〵した骨の球が、ランプや蠟燭の光にきらめいたりぐる〳〵廻つたりするのを見た。又その球の中に他の一層小さな球が廻つてゐるのを見た。それは何の意味も無い眼の球だ。

私は恐ろしくて自分の顏に觸れないやうに、また鏡にも向はないやうにしてゐた。

髑髏はやつぱりぐる〳〵廻つてゐる。……そして初めのやうな騷ぎをして、小さな紅い布みたやうな舌を剝き出された齒の間からぺろ〳〵覗かせながら喋つてゐる、「實にすばらしい、實に及びもつかぬ、不朽な…

…さうだ、不朽な……唱歌女(シンガア)のやつたあの最後の顫音(トリルレル)は！」

一八七八年四月

勞働者と白き手の人

對　話

勞働者。何だつてお前(めえ)は俺等(おいら)のところへやつて來たんだ？　何の用があるんだ？　お前は俺等(おいら)の仲間ぢやねえ。……あつちへ行つてしまへ！

白き手の人。いや諸君、僕も君等の仲間なんだ！

勞働者。なに仲間だつて！　途方もねえ！　まあ俺の手を見ろ。どうだ穢(きたね)えだらう。肥料(こやし)の臭ひや瀝青(ちやん)の臭ひがすらあね――ところでお前(めえ)のは眞白(まつしろ)ぢやねえか。何のにほひがする？

白き手の人。（手を差出して）嗅(か)いで見てくれ。

勞働者。（その手を嗅いで）こりやどうだ？　鐵みてえな匂ひだが。

白き手の人。さうさ、鐵なんだ。僕はまる六年間と云ふもの手錠を篏(は)められてゐたんだ。

勞働者。そりや何故(なぜ)だい？

白き手の人。なに、そりや僕が君等の爲めになるやうに働いたからだ。壓迫されてゐる無智な連中を自由にしてやらうとして、皆に君等を壓制する奴等の事を說き聞かせて、政府に反抗(てむかひ)したんだ。……すると奴等め、僕を縛りやがつた。

勞働者。政府(おかみ)でお前(めえ)を縛つたつて？　何だつてまた反抗(てむかひ)なんかしたんだ！

二　年　の　後

第一の勞働者。（第二の勞働者に向つて）おい、ピヨトル！　一昨年(おとゝし)だつたか手前(てめえ)と話をした生白(なまつちろ)い手の野郎を憶えてゐるかい？

第二の勞働者。うん憶えてる……それがどうした？

第一の勞働者。ところでよ、あの野郎今日絞首(しめくび)にな

るつてんだ、その布告だ。

第二の勞働者。また政府に反抗したんだね？

第一の勞働者。反抗したんだ。

第二の勞働者。うむ！……ところでおい、ドミトリイ、一つ彼奴を絞めた繩の切れつ端を取つて來ようぢやねえか？　そいつを持つてると家に福が來るつて言ふぜ！

第一の勞働者。そいつあよからう。一つ遣つて見ようぢやねえか、ピヨトル。

一八七八年四月

薔薇

八月の末……秋はもう迫つてゐた。

太陽は沈みかけてゐた。はげしい驟雨が雷鳴も雷光も伴はないで、今しも此の曠野を颯と過ぎて行つた。

家の前の庭園は、夕紅の光と雨後の行潦とにすつかり燃え立つて、水蒸氣をあげてゐた。

彼女は客間の卓子に向つて、ぢつと思ひに耽つて、半ば開かれた扉から庭園を眺めてゐた。

私はその時彼女の心に思つてゐることを知つてゐた。私は彼女が暫しではあつたが烈しい苦闘ののち、この瞬間に最早その打克つことの出來ない或る感情に屈服してしまつたことを知つてゐた。

突然彼女は立上つて、急いで庭園に出て行つて、見えなくなつてしまつた。

一時間たつた……また一時間。彼女は歸らなかつた。

そこで私は立上つて、外へ出て、彼女が通つて行つた並木道へ——其處を行つたに違ひない——向つた。

あたりはとつぷり暮れて、もう夜になつてゐた。けれども步道の濡れた砂の上に私は何だか圓いやうなものを認めた——それは暗を透してさへくつきり紅かつた。

私は身を屈めた。それは鮮かな咲き立ての薔薇であ

つた。二時間前彼女の胸に見たその薔薇であつた。

私はそつとその泥の中に落ちてゐた花を拾ひ上げて、そして客間に戻つて、それを卓子の彼女の椅子の前に置いた。

するとたうとう彼女も歸つて來た。輕い足どりで部屋一杯に横ぎつて、卓子に向つて腰をかけた。

彼女の顔は一層蒼く、また一層生々してゐた。いくらか小さく見える彼女の眼は嬉しさにどぎまぎしたやうに、伏目がちに忙しげにあたりを見廻してゐた。

彼女は薔薇を見ると、それを取上げて、くしや〳〵になつた汚れた花瓣を眺め、私を眺めた。そしてその眼は急にぢつと据わつて、涙が輝いた。

「何故泣くのです？」と私は訊いた。

「まあ此の薔薇を御らんなさい。こんなになつてしまひましたわ」

その時私は何か意味深いことを言はうと思ひ附いた。

「あなたの涙はその泥を洗ひませう」と私は意味ありげに言つた。

「涙は洗ひはしません、燒いちまひますわ」と彼女は答へた、そして壁煖爐の方へふり向いて、消えかゝつてゐる焔の中に薔薇を投げ込んだ。

「火は涙よりもよく燒きますわね」と彼女は氣輕に叫んだ。そして彼女の愛らしい眼は、やつぱり涙で輝いてはゐたが、氣輕に樂しさうに笑つた。

私は思つた、彼女もまた火の中にゐたのであると。

一八七八年四月

ユウ・ピイ・ウレフスカヤの記念のために

荒涼たる勃加利の村、急に野戰病院にされた傾きかかつた小舍のあまり頽りにならぬ屋根の下、汚い濕つぽい惡い臭のする藁蒲團の上に、彼女は二週間の其上

も窒扶斯で死んだまゝ横たへられてゐた。

彼女は人事不省であつた、それに一人の醫者も彼女を見舞はなかつた。彼女が自分の動くことの出來る間看護してやつた病兵達が、代る代るその臭氣を放つ病床から起き上つて、こはれた土瓶の破片に入れて水の數滴を彼女の乾いた脣に注ぎ込んだ。

彼女は若くて美しかつた。上流社會にもてはやされて、高位高官の人達すら心を寄せた。婦人達は彼女を嫉み、男子達はその機嫌を取つた……その中幾人かは心の底から彼女を愛してゐた。人生は彼女に微笑を見せた。然し世には涙よりも悪い微笑がある。

素直な優しい心……しかしかばかりの力、かばかりの献身！　助けを要する者を助けること…彼女はその外に幸福を知らなかつた……それを知らなかつた。決してそれを知らなかつた。その外のあらゆる幸福は彼女の傍を通り過ぎた。然し彼女は疾くに心を決して、消し去る事の出來ない信仰の熱に燃えて、隣人のために身を献げたのだ。

いかなる不滅の寶が彼女の胸深く、その心の奥底に藏されてあつたか、誰一人知る人はなかつた。今ではもとより誰も知る人はないであらう。

あゝ、然しそれが何であらう？　彼女の犠牲は献げられた…　彼女の事業は完うされた。

然し彼女の遺骸にさへも誰一人感謝の言葉を捧げなかつたことを考へると傷しい思ひがする、彼女自身はすべての感謝の言葉を恥ぢ斥けてはゐたけれども。

彼女が在天の靈よ、希くは此の時を失したる花をその墓の上に置く私の大膽を許せ！

一八七八年九月

最後の面會

曾て我々はたゞならぬ親しい友達であつた。……けれども不幸な日が來た……我々は敵となつて相分れ

た。
　多くの年は過ぎ去つた……そして彼の住んでゐる市へ來たとき、私は彼が瀕死の床に横はつて、私に會ひたがつてゐることを聞いた。
　私は彼を訪れて、彼の部屋へ入つた……二人の視線は出會つた。
　これが彼だとは思へなかつた。あゝ！　病氣は彼をこんなに迄したのか？
　黄色くなつて、皺が寄つて、すつかり禿げて、まばらな白い髯を生やして、特別な仕立方をした襯衣を着けたばかりで彼はすわつてゐた……彼は輕い着物の重みにすら堪へられないのだ。彼は忙しくその恐ろしく痩せ細つた嚙みへらされたやうな手を私に差しのべて、辛うじて二言三言わけの分らぬことを呟いた――それが歡迎の言葉か非難のそれかを誰が知らう？　彼の痩せ衰へた胸は波打つて、その血走つた眼のどんよりした瞳には押し出された苦痛の涙が浮んでゐた。
　私の心は掻き亂された……私はその傍の椅子にかけて、その物凄い姿に思はず眼を落しながらも、同じく手を差出した。
　けれども私の手を握つたのは彼の手ではないやうに思はれた。
　二人の間に脊の高い無言の白衣の女がすわつてゐるやうに思はれた。長い着物は彼女を頭から爪先まで包んでゐた。彼女の深い蒼い眼は空を見、その蒼い嚴めしい脣からは一語も洩れなかつた。
　此女が我々の手を結び合せたのだ……彼女が我々を永遠に和解させたのだ。
　然り……死が我々を和解させたのであつた。

一八七八年五月

おとづれ

私は開け放した窓邊にすわつてゐた……朝早く、五

月一日の朝早くである。日はまだ出ない。けれども、仄かに白みそめて、暗い暖かな夜は早く涼氣を帶びはじめた。

霧はまだのぼらず、そよとの風もない。よろづの物は一色に、まはりには深い靜寂がある――けれども自然はやがて目覺めることを思はせた。微風は鋭い濕つぽい露の匂ひを蒔き散らしてゐた。

突然開け放した窓から輕い音立てゝ、大きな鳥が部屋の中へ飛び込んだ。

私はびつくりして、それに眼を遣つた……鳥ではなかつた、身にぴつたり附いた長い靑物を垂れて、翼をそなへた小さな女の姿であつた。

彼女はすつかり灰色であつた、眞珠母いろの灰色であつた。たゞその翼の內側のみが、咲き初めた薔薇のやはらかな紅を帶びてゐた。君影草の花輪はその圓い頭のうち亂れた捲髮をとりかこんでゐた。美しい圓い額の上には、二つの孔雀の羽根が蝶の觸角のやうに面白く搖れてゐた。

彼女は部屋の中を二三度飛び廻つた。彼女の小さな顏は笑つてゐた。大きな黑い明るい眼も笑ひを湛へてゐた。

氣儘に飛んではふざけ廻るので、彼女の眼は金剛石のやうにきら〳〵輝いた。

彼女は曠野に咲く花の長い莖を持つてゐた。露西亞人が「皇帝の笏」と呼んでゐるもので、實際笏によく似てゐる。

すばしこく私の上を飛びながら、彼女はその花を私の頭に觸れた。

私は兩手をその方へ差しのばした……けれども彼女は窓から飛び出して、また行つてしまつた……

庭園の紫丁香花の花の繁みの中で、斑鳩はその日のはじめの鳴聲を擧げて彼女を迎へた。彼女がはるかに消えてしまつたあたり、乳白の空はだん〳〵と紅味を帶びはじめた。

私はおん身を知つてゐる、空想(ファンタジィ)の女神よ！　はからずもおん身は私を訪ねてくれた、若い詩人たちの許(もと)へ行く道すがらに。
おゝ、詩歌(しいか)よ、青春よ、女性の童貞の美よ！　たゞこの瞬間に、お前たちは私の生涯に光輝(かゞやき)を與へてくれた、春のはじめの朝まだきに！

一八七八年五月

NECESSITAS-VIS-LIBERTAS!

薄肉彫

鐵のやうな顔をした眼附の鈍くすわつた脊の高い骨張つた老婆が、大胯にふんばつて、そして棒のやうに乾いた腕で今一人の女を前に押出してゐる。
此の女は―― 大きな身體(からだ)をして力がありさうに肥つてゐて、ヘラクレスのやうな筋肉をし、牡牛(をうし)のやうな頭には小つぽけな頸(くび)が載つてゐて、しかも盲目である。――彼女もまた小さな痩せた娘を前に押し出してゐる。
此の娘だけは眼が見える。彼女は反抗して、ふり返つて、その綺麗な優しい手をふり擧げてゐる。その顔は生々としてゐて、性急さと大膽さとを現してゐる……彼女は從ふまいとしてゐる、押される方へ行くまいとしてゐる……でも彼女は屈從して、行かなければならないのだ。

Necessitas-Vis-Libertas!

氣が向いたら譯して見たまへ。

一八七八年五月

施物

或る大きな市街(まち)の近くの廣い大通を一人の病みほけた老人が歩いてゐた。
彼はよろ／＼歩いて行つた。彼の年と共に衰へた足

は、止つたり引きずつたり躓いたりして、苦しげに力無げに動いてゐた、まるで他人の足でゝもあるかのやうに。彼の着物はぼろ〳〵になつてゐて、露出の頭は胸の上に垂れてゐた……彼は精も根もすつかり盡き果てゝゐるのだ。

彼は路傍の石に腰をかけて、がつくり屈んで、膝の上に肘を突いて、両手で顔を蔽うた。そして涙は曲げられた指の間から洩れて乾いた灰色の埃の上に滴つた。

彼は昔の事を思出した。

彼もまた健康で金持であつた事、それからその健康をこはしてしまつた事、その金を他人の爲めに、敵の爲め友達の爲めに蕩盡してしまつた事を思出した……そして今は、一塊の麵麭も持つてゐないのだ。凡ての人が彼を見棄てゝしまつた、友達の棄てゝ行つたのは敵よりも早かつた。……彼は施物を乞ふまでに身を下さねばならぬのだらうか？　から考へた時、彼の心は苦々しさと羞恥とに充たされた。

涙は溢れに溢れて、點々と灰色の埃を濡らした。

突然、誰かゞ自分の名を呼ぶ聲を聞いて、彼はものうい頭を擧げて、前に一人の知らない人物の立つてゐるのを見た。

その顔は落着いて重々しげではあつたが、峻嚴ではなかつた。その眼は輝いてゐると云ふよりはつきりしてゐた。この眼附は人を見抜くやうではあつたが意地の悪いものではなかつた。

「君は財産をすつかり人にやつてしまつた」とその知らない人物は落着いた調子で言つた、……「然し、君はその善行を後悔してゐやしまいね？」

「後悔いたしはしません」と老人は溜息をして答へた。

「けれども私は餓死しかけてゐます」

「若し乞食が君に手を出さなかつたなら」と知らない人物は續けた、「君は自分の慈善の心を證明して見る人間が無かつたらう。君は善行をする事が出來なかつた

らう」

老人はそれには答へないで、ぢつと考へ込んだ。

「爺さん、だから君も今は氣位を高くしてゐないで」と知らない人物はまた言ひはじめた「行つて手を出したがいゝ。君も他の善人たちにその慈善心を實證する機會を與へるがいゝ」

老人は吃驚して眼をあげた……然し其知らない人物は、もう消え去つてゐた。そして遠方から一人の男がおなじ道を此方へやつて來るのが見えた。

老人はその男のところへ行つて手を出した。その男は冷たい眼色をして顔をそむけて、彼に何も與へなかつた。

然し其後から又一人通つた、そして其人は老人にほんの僅の施をしてやつた。

かうして老人は貰つた銅錢で自分の麪麭を買つた、乞食して得た少しの食物は彼には旨かつた、そして心に何の恥づるところもなく、むしろ反對に平安と歡喜とが彼の心に神の惠みのやうに湧いたのであつた。

一八七八年五月

蟲

我々廿人ばかりが窓を開け放した大廣間にすわつてゐる夢を見た。

その中には女も子供も老人もゐた。……珍らしくもない話が、騷々しく取交はされてゐた。

突然鋭い騷音を立てゝ二寸ばかりの大きな蟲が廣間へ飛び込んで來た……飛び込んで來て、二三度飛び廻つて、壁にとまつた。

それは蠅か、山蜂かのやうであつた。その身體は土色であり、平つたいごつ／＼した翼も同じ色であつた。擴げた足には毛が生えてゐるし、頭は蜻蛉などに見るやうに大きくて角ばつてゐた。そしてこの頭も足も血潮に浸したやうに眞紅だつた。

此の奇怪な蟲は絶えずその頭を上下左右に振り、その足をばた〱させてゐた…… それから突然壁から飛立ち、ぶん〱と部屋を飛廻つて、また止まると再びその場を動かないで、身體中を厭やな氣味の悪い工合に動かしてゐた。

それは我々凡てに嫌惡、恐怖、戰慄の感をさへ起させた……我々の中には誰一人これまでこんなものを見た者はなかつた。我々は一齊に叫んだ、「此の怪物を追ひ出しちまへ！」そして、遠くからその方へ手巾を振つた……けれども、一人として敢て近づいて行く者はなかつた……そしてその蟲が飛びはじめると、皆思はず身を避けた。

一座の中でたつた一人蒼い顔をした青年が、驚いたやうに我々一同を眺めた。彼は肩をゆすぶつて、にやりとした、そして一體我々にどんな事が起つたか、何故我々がこんなに騷ぎ立つてゐるか一向譯がわからなかつたのだ。彼自身は全く蟲をも見なければ、その翼の無氣味な音をも聞かなかつた。

突然蟲は青年をぢつと見込んだらしく、飛立つて彼の頭上へ落して行き、額の、眼の上のところを刺した。……青年は微かに呻いて、そして倒れて死んでしまつた。

その恐ろしい蠅は直ぐに飛び去つた……その時はじめて我々は、我々を訪れたものが何ものであつたかを悟つた。

一八七八年五月

キャベツ汁

或る百姓の寡婦の一人息子に二十歳になる若者があつた、村中での一番の働き手であつたが、それが死んでしまつた。

此の村の地主の奥様が此の女房の不幸を聞き附けて、葬式の日に訪ねて行つてやつた。

女房は家にゐた。
小舍の眞中の食卓の前に立つて、彼女はゆつくりと右の手を規則正しく動かして（左の手はだらりと垂れてゐた）、眞黑になつた鍋の底から、薄いキヤベツの汁をしきりにすくつては飮んでゐた。

その女房の顏は沈んで暗く、眼は赤く脹れ上つてゐた……けれどもその樣子は寺院にゐるやうにきちんとし、ちやんとしてゐた。

「まあ！」と奧樣は思つた。「こんな時にもまだ食べてゐられるなんて……この人達は何て感情が荒つぽいんだらう！」

そしてそのをり、奧樣は自分が幾年前生後九ヶ月になる娘を失くした時、悲しさのあまり、ペテルブルグの近傍にある大好きな別莊にも行かないで、一夏市街で過した事を思出した！　その間女房はキヤベツ汁をすゝり續けてゐた。

奧樣はたうとうこらへ切れなくなつて、「タチヤナ！」と呼んだ……「まあ！　驚いた！　お前まあ息子の事を思はずにゐられるのかえ？　こんな時にやつぱり物が食べたいのかえ？　どうして汁なんか食べてゐられるのだらうね！」

「家のワアシヤは死んぢまひました」と女房は小聲で言つて、悲嘆の涙はまたもそのげつそり落ちた頰に流れた。「もう私も死んぢまひさうでございます、もう此の胸をかきむしられるやうでして。でも、汁はうつちやらかして置いちや勿體なうございます、これにはお鹽が入つとりますから」

奧樣はたゞ肩を動かしたばかりで行つてしまつた。彼女には鹽の價はわからなかつたのだ。

一八七八年五月

空色の國

おゝ、空色の國よ！　おゝ、光明と色彩と、青春と

幸福の國よ！　私は夢に汝を見た。私は幾人かの仲間と華かに飾られた綺麗な小舟に乘つてゐた。白鳥の胸のやうに白帆はふくらんでゐた、風に翻へる流旗のもとに。

仲間と云ふのは誰だか私は知らなかつた。けれども私自身のやうに、若い快活な幸福な人達だとは心底から感じられた！

しかも私は彼等には目もくれなかつた。私はたゞまはりの金の鱗の波立つ果て知らぬ海を眺めた。頭上にも同じ窮りなき空色の海が横はり、太陽は嬉しげに勝ち誇つたやうに動いてゐた。

我々の間には、時々諸神の笑ひのやうによく透る喜ばしげな笑ひ聲が起つた！

それから不意に誰かの唇から言葉が出た、不思議な美や感激した力に充たされた歌が出た……天もそれに應へ、まはりの海もそれに調子を合せて顫へるやうに思はれた。……それからまた樂しい平穩にかへつて行つた。

おだやかな波の上を輕く浮んで、我々の小舟は走つて行つた。風が走らせるのではなくて、我々自身の輕く波打つ心臟がそれを導いて行くのである。小舟は我我の行つて見たい方へ走つた、まるで生き物のやうに從順に。

我々は群島に近づいた、紫水晶や綠柱石などの寶石のきらきら光つてゐる半透明の仙島である。そのぐるりの海岸からは心を醉はす薰香が立ちのぼつてゐた、その或る島では薔薇や君影草の雨を我々に降らし、また或る島では虹の七色をした長い翼を持つた鳥のむれが舞ひあがつた。

鳥のむれは我々の頭上に輪を描き、百合や薔薇は我我の小舟の滑らかな舷を滑つて、眞珠のやうな泡の中へ溶け込んでしまふ。

そして花や鳥とともに、蜜のやうにスキイトな音調が我々の方へ漂つて來た……その中には女の聲も聞え

た……そして我々のまはりはすべて、天も、海も、高くあがつた帆も、舵のところでどくどく云ふ水も――すべて戀を語つた、幸福な戀を語つた！

　そして彼女も、我々のそれぞれの戀人もまた其處にゐたのである……目には見えなかつたけれども。いま一時、そして見よ、彼女の眼は汝等に輝き、彼女の頬は汝等に笑みゆらぐであらう……彼女の手は汝等の手を取つて、永久の樂園へと導くであらう！

　おゝ、空色の國よ！　私は夢に汝を見た。

　一八七八年六月

二　富豪

　富豪ロスチヤイルドがその莫大な收入の中から子供の教育、病人の治療、老人の扶助に、巨萬の金を寄附すると言つて人の賞めるのを聞く度に、私は讃嘆し感動する。

　然しそれを讃嘆し、それに感動する時ですら、私は孤兒になつた姪をそのみすぼらしい小舍に引取つた貧しい百姓一家を思ひ出さずにはゐられはい。

「もしカチカを家へ引取るとすると」と女房は言つた、「一文無しになつちまつて、汁に入れる鹽だつて買へなくなりますよ」

「いゝやな……鹽が無くつたつて食へるさ」と亭主が答へた。

　ロスチヤイルドは此の百姓を相距ること遠いと云はねばならぬ！

　一八七八年七月

老　人

　陰晴たる荒涼たる日は來つた……その身の衰弱、その愛する者の苦痛、老年の冷索と憂愁。汝が愛したものは、そのために獻身的に盡したものは、すべて凋落

しては碎け散つてしまふ。道はすべて下り坂である。

今さら何をすべきだらう？　悲しむべきか？　嘆くべきか？　そんな事をしても自分にも他人にも何の益もないであらう。

曲つた凋れた樹の葉はだんだんと小さく少くはなるけれども、その綠の色はやはり變らない。

いざ、汝もまた縮かまつて、汝自身のうちに、汝の追想の中に隱れよ。さうすればその奥底に、汝の心の奥底に、汝の過ぎ去つた生活、汝にのみ理解の出來る生活が、美しい春の力と香ばしい未だなほ鮮かな綠のいろとをもつて、汝の前に輝き出るであらう。

然し氣を附けるがいゝ……哀れなる老人よ、前途を見てはいけない！

一八七八年七月

通信員

二人の友達が食卓によつて茶を飲んでゐた。

すると突然街路で消魂しい騒ぎがおこつて、哀れな呻き聲や、烈しい罵詈や意地の惡い笑ひ聲などが聞えた。

「誰やら打擲られてるぞ」と、友達の一人が窓から覗きながら言つた。

「罪人か？　人殺しか？」と他の一人が訊いた。「そりや誰でもかまはんが、無法に打擲らせちや置けない。行つて、助けてやらう」

「打擲られるのは人殺しぢやない」

「人殺しぢやない？　ぢや泥棒か？　何だつてかまはん、彌次馬の手から救ひ出してやらう」

「泥棒でもないよ」

「泥棒でもない？　ぢや持逃げした會計係か、鐵道の役員か、陸軍の御用商人か、露西亞文藝の保護者か、辯護士か、保守黨の記者か、社會改良者か？……何だつていゝさ、行つて救つてやらうぢやないか」

「いや違ふ、打擲られてるのは新聞の通信員だ」
「通信員？ あゝさうか。だがや、まあ茶を喫んでしまつてからにしよう」

一八七八年七月

二 兄弟

それは幻影であつた……

二人の天使が……二人の精靈が私のところに顯はれた。

私は天使とも精靈とも呼ぶ、二人は裸身で衣も纏はず、いづれも肩のうしろに二つの長いしつかりした翼が附いてゐるからである。

二人とも若かつた。一人はふつくらとしてゐて、柔かな滑かな肌に黑い捲髮をしてゐた。鳶色のぱつちりした眼は睫毛が濃くてはればれした眼附には媚を含み、また熱が籠つてゐた。顏には魅するやうな迷はすやうなところと、厚かましい意地が惡さうなところとあつた。やはらかさうな紅い唇はぴくぴく顫へてゐた青年は力ある者のやうに——自ら恃むところありげにまた氣怠るげに微笑した。つやつやした捲髮にふわりとかかつた見事な花輪はその天鵞絨のやうな眉に觸れんばかりである。まだらな豹の皮は金の矢をもてとめられて、まるい肩からふつくりした腿へふわりと垂れてゐる。翼の羽根は薔薇色に染めなされ、その端はまるでなまなましい鮮血に浸されたやうな眞紅である。時々さわやかな銀の響、春雨の音を立ててせはしげにその翼は振ふ。

いま一人は瘦せてゐて、肌は黃ばんでゐる。息する度に肋骨がかすかにあらはれる。その髮はブロンドで、細くて直ぐだし、その眼は大きく圓くて灰鼠色である……眼附は不安げで、異樣に光つてゐる。相貌はすべて鋭く、尖つた魚のやうな齒をもつた小さな半ば開かれた口、よく通つた鷲鼻、白い絨毛で蔽はれてゐる突

き出た頸。その乾いた唇は未だ曾て微笑したこともないであらう。

よく整つてゐながらも、何と云ふ恐ろしい無慈悲な顔だらう！（もつとも前の美しい靑年の顔も、惚れ惚れするやうではあつたが慈悲の相は缺いでゐた）此の靑年の頭には少しばかりのちぎれた空穗が枯草で卷き附けられてゐる。腰には粗い灰色の布をまとひ、どんよりした鼠いろの翼をゆるゆると脅かすやうに動かしてゐる。

此の二人の靑年は離すことの出來ない伴侶のやうに見えた。互に肩をもたせかけて、一人がその柔かな手を相手の骨ばつた頸に葡萄の房のやうに卷きつければ、一人の細長い指をした痩せた手首は相手の女のやうな胸のまはりに蛇のやうに曲げられた。

すると何だか聲がして、それはかう言つた、「戀と飢とがお前のまへに立つてゐる――これ雙生兒、生きとし生けるものの二つの礎。

「生きとし生けるもの皆食を求めて動く、そして後繼者を生まんが爲めに食ふ。

「戀と餓と――その目的たるや一つである。自分の生命も、他人の生命も――生きとし生けるものの生命を絶やさせまいとするにある。」

一八七八年八月

エゴイスト

彼はその家族を責め苛む凡ゆる性質を具へてゐた。

彼は生れて健康であり富裕であり、またその長い一生涯富裕で健康で通して來て、たつた一つの罪も犯さず、たつた一つの過失もせず、また曾て心得違ひも遣り損ひもしたことはなかつた。

彼は一點難の打ちどころもない、堅實な人間だつた！……そして自分の堅實なことを誇りにして、彼はそれに依つて、家族であれ友達であれ知人であれ、凡て

の人を壓服してゐた。

彼の堅實さは彼の資本であつた……そして彼は此の資本から法外な利息を收めてゐたのだ。

此の堅實さが彼に無慈悲であり、また法律の命じない善事をしないと云ふ權利を彼に與へた、そして彼は無慈悲であり、何事の善事もなさなかつた……何となれば命じられてなす善事は少しも善事では無いからである。

彼は彼自身の模範的の自我を除いては、いかなるものにも興味を有しないで、しかも若し他人がそれと同じやうに、深い興味を有たなければ本氣になつて怒るのであつた！

その癖彼は自分を主我主義者だとは思つてゐなかつた。そして主我主義者や主我主義を非難する事は特別苛酷で、それを見附け出す事は鋭敏なものであつた。云ふ迄もなく、他人の主我主義は彼自身の主我主義の邪魔になるものである。

彼は自分には些かの弱點も認めないで、他人の弱點は理解もしなければ容赦もしなかつた。まつたく彼は何人も何物も理解しなかつた、と云ふのも、彼が上下前後、あらゆる方面からすつかり自分と云ふもので取圍まれてゐたからである。

彼は寛容の意義さへも理解してゐなかつた。彼は自分自身を赦さねばならぬ必要を持たなかつた……どうして他人を赦さねばならぬ必要があらうぞ？

彼自身の良心と云ふ判官の前に立つて、彼自身の神の面前に於いて、彼は、此の驚くべき人物、此の德の怪物は、その眼を空に向けて、確乎たる明晰な聲で公言した、「然り、自分は模範的人物である、眞個の道德的人物である！」と

彼はこの言葉をその臨終の床でも繰返すであらう、そしてその時でさへも、此の石のやうな心は何等の動搖をも來さないであらう――缺點も汚點も無いその心は！

ああ、廉價に購(あがな)ひ得たる德の頑迷な自己滿足のその醜惡よ。汝は惡德のおほつぴらな醜惡よりもより惡(にく)むべきものである！

一八七八年十二月

神の饗宴

或日神がその蒼穹の宮殿に一大饗宴を催ほさうと思ひ立たれた。

あらゆる美德は招き呼ばれた。然しただ女性なる德のみで……男子は招かれず……婦人ばかりであつた。

大きな德、小さな德、非常な數であつた。小さな德は大きな德よりは一層愉快で樂しさうであつた。けれどもいづれも滿足氣に見受けられ、近親か知己ででもあるやうに打ちとけて話し合つてゐた。

ところが神は全く初對面らしい二人の美しい婦人にお目を止められた。

主人(あるじ)は一人の婦人の手を執つて、今一人の婦人に引合はせて、

「恩惠！」とはじめの婦人を指(さ)して言ひ、

「謝恩！」とつぎの婦人を指して附け足された。

二人の美德は此上もなく驚いた。世界の創造されて以來(このかた)、すでに長い年月は經つてゐたけれども、この二人の出會つたのはこれが初めてだつたのである。

一八七八年十二月

スフィンクス

上の方は柔かく、底の方は硬(かた)くきしむ黄色がかつた灰色の砂……見渡す限り際涯(はて)のない砂。

そして此の沙漠の上、此の死せる砂埃(すなほこり)の海の上には埃及(エヂプト)のスフィンクスの巨大な頭が突出てゐる。

これ等の厚い出張つた唇や、動くことなく開いた仰向いた鼻孔、二つの眼、二重の弓門(アーチ)のやうになつた高

い眉の下に半ば眠り半ば醒めてゐるやうな眼などは何を言はうとしてゐるのだらう？

　それ等は何か言はうとしてゐるのだ。實際それ等は何か語つてゐるのだ。けれどもその無言の言葉を解しその謎を解き得るものは、ただエヂプスだけである。

　ところで、私はかうした容貌を知つてゐる……それには少しも埃及風のところはない。白い低い額、出張つた頬骨、短かい眞直な鼻、綺麗な口に白い歯、柔かな口髭にちぢれた顎鬚、ずつと懸け離れた二つの大きからぬ眼……そして頭には眞中から分けた髮を頂いてゐる。……ああ、それは汝である、カルプである、シドルである。セミヨンである、ヤロスラアフやリヤザンの百姓、我が同國人、血あり肉ある露西亞人である！　汝もまたスフィンクスの仲間であるか？

　汝もまた何をか言はうとするか？　然り、汝もまたスフィンクスである。

　そして汝の眼、汝の光澤のない窪んだ眼もまた語つてゐる……そして汝の言葉もまた無言で謎のやうである。

　然し汝のエヂプスは何處にゐるか？

　惜しむべし！　汝のエヂプスとなるためには、百姓服を着ただけでは十分では無いのである。おお、全露西亞のスフィンクスよ！

　　一八七八年十二月

ニンフス

　私は半圓をなした美しい山脈に對つて佇んでゐた。若々しい綠の森がその頂から麓まで蔽うてゐた。その上には澄み渡つた靑い南國の空が輝いてゐた。頂には日光が戯れ、麓には半ば草に隱されて、小川の早瀬がさざめいてゐる。

　するとかの古傳説が私の胸に浮んだ。基督降誕後一百年、希臘の船が多島海を走つてゐた時の事である。

時は眞晝……天候は靜穩であつた。突然水先案內の頭上高く聲あつてはつきりと呼ばはつた、「汝かの島の傍を行かば、聲高く呼ばはれよ、『大いなる神パンは死せり！』と」

水先案內は驚いた……恐れた。けれども船がその島にさしかかつた時、彼はその命に從つて呼ばはつた、「大いなる神パンは死せり！」

すると忽ちその叫聲に應じて、その海岸のすべてに亙つて（その島は無人島であつたけれども）高い歔欷慟哭の聲、長く曳いた悲嘆の叫びが響き渡つた。

「ああ死せり！　大いなる神パンは死せり！」と。私は此の傳說を思出した……そして妙な考へが胸に浮んだ。「若し今私が呼び懸けたならばどうであらう？」

ところで身のまはりの喜ばしげな美景を眺めては、死について考へることが出來なかつたので、私は懸命の聲を擧げて叫んだ、「大いなる神パンは蘇れり！　蘇れり！」すると忽ち、何等の不思議ぞ、私の叫び聲に應じて、半圓形の綠の山脈から嬉しさうな笑ひのどよめき、喜ばしさうな私語や拍手の音が起つた。「彼は蘇れり！　パンは蘇れり！」と若々しい聲々がどよもした。眼前のすべては急に笑ひはじめた、大空の日よりも輝かしく、草間を流るる小川のせせらぎよりも樂しげに、せはしげなばたばたと云ふ輕い足どりが聞え、綠なす木立の間には、ふわりとした白衣が大理石のやうにきらめき、生々と紅味のさした裸形の四肢がちらちらした……それは山からこの野邊へと急ぐニンフや、ドライアッドやバッカントの群れなのであつた。

忽ち彼等は森のすべての出口に姿をあらはした。捲髮はその神々しい頭から垂れ下り、そのしなやかな手には花輪や鐃鈸を捧げ持つてゐる。そして笑聲は、はれやかな神々の笑ひは飛びつ躍りつ彼等に伴つて來る……

一人の女神が彼等の先頭に立つてゐる、彼女は皆の

神より一層脊が高くて美しい。肩には箙、手には弓を携へて、その浪打つた捲髪には白銀の新月がきらめいてゐる……

「ダイアナ、おん身はダイアナだな?」

けれどもその女神は突然立止つた……そして一時にニンフの群れもすべて立止つた。はればれしい笑ひ聲は消え失せてしまつた。

私は沈默せる女神の顔が忽ち死人のやうに蒼褪めたのを見た、彼女の足は地にぴつたり着いてしまつて、名狀すべからざる苦痛に唇が開き、眼が大きく見開かれて遠方を凝視するのを見た……彼女は何を見附けたのだらう? 何を見詰めてゐるのだらう?

私は彼女の見詰めてゐる方に向きかへつた……

遙かなる地平線の上、なだらかな野の果てに、基督教の寺院の白い鐘樓の頂きに、一點の火のやうに黄金の十字架がきらめいてゐた……此の十字架を女神は目に留めたのであつた。

後に切れた絃のふるふやうな長い切なげな嘆息が聞えたので、私が振向いて見ると、ニンフの群れはあと方もなく消え失せてゐた……うち擴がつた森は依然として綠で、ただ繁り合つた木の間の其處此處に何か白いものがかつ消えかつ輝いてゐたが、それがニンフの白衣であるか、谿から立ちのぼつた霧であるかはわからない。

然し、女神達の消え失せたのを私はどんなにか悲しんだであらう!

一八七八年十二月

友と敵と

或る終身禁錮に處せられた囚人が獄を破つて一散に逃走した……彼の後には踵を接して監守どもが追跡してゐた。

彼は一生懸命に走つた……追跡者は漸くおくれはじ

めた。
　然るに、突然彼の行く手に斷崖絶壁をなした一條の河が現れた、幅は狹いが深い河である……しかも彼は泳ぐことが出來ない！
　一枚の朽ちかかつた薄い板が岸から岸へかかつてゐた。逃走者はすでにその上に片足をかけた……然るに、たまたまその兩岸に彼の親友と怨敵とが立つてゐた。
　仇敵は何も言はないで、ただ腕を拱いてゐた。けれども親友は聲の限り叫んだ、「危い！　何をするんだ？　君は氣が違つたか？　氣を附けろ！　板のまるつきり腐つてるのがわからないか？　乘つたが最後身體の重みで折れて、君は死んぢまふぞ！」
「だつて外に助かる道が無いぢやないか、そら、追跡者はもう迫つてゐる！」と不幸な男は絶望の呻聲を擧げて、板を踏んだ。
「斷じていけない！……君の破滅するのが見てゐられるものか！」と熱心に親友は叫んで、逃走者の足もとから板を奪取つた。逃走者は忽ち逆卷く激流に墜落して溺れてしまつた。
　仇敵は滿足の笑ひを浮べて行つてしまつた。けれども親友は岸に身を投げかけて、彼のあはれな……あはれな友人を悲しんで激しく泣きはじめた。
　しかしながら、彼はその友を死に到らしめたのについて、自分を責める念などは起らなかつた……ただの一瞬時といへども。
「私の言ふことを聞かなかつたからだ！　聞かなかつたからの事だ！」と彼はがつかりして呟いた。
「もつとも」と彼は最後に附け加へた、「どうせ一生恐ろしい牢獄で苦しまなきやならなかつたんだ！　まあその苦しみだけは免れたと云ふものだ！　今は樂になつたんだ！　かうなるのもあの男の因果だつたんだらう！　とは言ふものの、人情だもの、いかにもかはいさうだ！」
　そして此の親切者は、身を誤つた友の運命を思つて、

熱い遣瀬(やるせ)ない涙を流すのをやめなかつた。

一八七八年十二月

基督

私は夢で、まだ青年と云ふより少年のままで、とある低い木造の教會にゐた。細い蠟燭は古い聖者の畫像の前に點々と赤くともつてゐた。

七色(なないろ)をした光の輪が小さな燈明の火を取り卷いてゐた。教會の中は薄暗くぼんやりしてゐた……だが、私の前には澤山の人が立つてゐた。いづれもブロンドの髮をした百姓の頭ばかりであつた。それ等の頭は時々かがんで、ずつと下(さ)げてはまた上げる、丁度熟した麥の穗が夏の風の吹き過ぎる度に、ゆるやかに波を打たせるやうに。

不意に、誰やら後(うしろ)からやつて來て私の傍に立つた。

私は彼の方には向かなかつた。けれども直ぐ此人こそ基督だと感じた。

感動、好奇、畏怖の念が忽ち私を囚(とら)へた。私はやつと自分を制して……隣の人を見た。

他(ほか)の人と同じやうな顏、凡ての人と毫も變りの無い顏であつた。眼は穩(おだや)かに心を籠めたやうに、少しく上の方を向いてゐる。脣は閉ぢられてゐるが、然し堅く結ばれてゐるのではなく、云はば上脣を下脣の上に休めてゐるやうである。濃くない髯は二つに分けられてゐる。手は組まれた儘ぢつとしてゐる。また着てゐる着物もあたり前のものである。

「どうしてこれがまあ基督だらう？」と私は思つた、「こんなあたり前の、何の特徴も無い人が！　そんな事があるものか！」

私は眞直(まつすぐ)向いた。ところが私が此のあたり前の人から眼を離すや否や、また此の傍に立つてゐるのが、基督その人に外ならぬと感じられた。

また私は自分を制して振向いた……そしてまたその

おなじ顔、萬人に似た顔、見た事の無い顔ではあるが毎日出會ふやうな顔を見た。
　すると急に心が重苦しくなつて私は我に返つた。その時私ははじめて悟つた、丁度このやうな顔が——萬人の顔と同じ顔が基督その人の顔であると。

一八七八年十二月

第二〔一八七九年——一八八二年〕

岩

　諸君は、うらゝかな春の日の滿潮時、海岸の年經た灰色の岩に、八方から勢ひのいゝ浪が打寄せて——碎けて、戲れて、撫でさすつて——そしてその苔むした頭上に眞珠の破片のやうなきら／＼する泡を散らすのを見た事があるか？
　岩はいつも變らぬ岩であるが、そのくすんだ灰色の面は鮮かな色を呈して來る。
　その色は溶けた花崗石がやつとかたまりかけたばかりで、まだ赤熱の色に燃えてゐたあの太古のことを語つてゐる。
　そのやうに此頃の私の老いた心も、若い婦人の心の浪に圍まれ打たれて……その手に撫でさすられて、久しく褪せてゐた色、消えた火の名殘が燃え上る！
　浪はまた退いてしまふ……けれども、その色はまだ褪せない、鋭い風は乾かさうとするけれども。

一八七九年五月

鳩

　私はゆるく傾斜をなした岡の頂上に立つてゐた。眼の前には黄金いろ白銀いろにきらめく海のやうに熟した大麥が連なつてゐた。

然しこの海の上には小波一つ起らず、大氣は息づまりさうでそよとの風もない。大暴風雨が來ようとしてゐるのだ。

身のまはりに太陽はまだどんよりとした光を投げてゐたが、大麥の彼方の、あまり遠くもないところに、暗碧色の雨雲が重苦しい塊をなして、地平線のまる半分を蔽うてゐた。

萬象寂としてゐる……最後の日光の無氣味なきらめきのもとに、あらゆるものが色を失つてしまつた。鳥一羽影も見せず啼きもしない。雀までが身をひそめた。たゞ何處か近くで山牛蒡の葉が絶えずばさ〳〵云つて騷いてゐる。

生垣の苦蓬は何と云ふ強い香ひだらう！　私はかの暗碧色の塊を見やつた……すると漠然たる不安の念が私の胸を襲うた。「さあやつて來い、早く、早く！」と私は考へた、「金の蛇よ、閃け、雷よ、鳴れ！　動け急げ、篠つく雨となれ、意地惡の雨雲よ。此の待ちのぞむ息苦しさを切上げてくれ！」

けれども雨雲は動かなかつた。それは依然として、ひつそりした地上を壓し附けてゐた……そしてたゞ一層かたまり、一層暗くなる許りのやうに思はれた。

折りしも、その物凄い暗碧の空を、何か白い手巾か雪の塊のやうなものが、すうと眞直に飛んでゐるのが見えた。それは村の方から飛んで來る一羽の白い鳩であつた。

鳩は飛んだ、まつすぐに飛んだ……そして森の中へ飛び込んでしまつた。暫らく經つた――やつぱり恐ろしい程ひつそりしてゐる……然し見よ！　二つの白い手巾が空に閃いてゐる、二つの白い雪の塊がひら〳〵と歸つて行く、二羽の白鳩は相並んで家路をさして飛んで行く。

そして今やつひに暴風雨は來つた、騷然たる聲が起つた！

私はやつとの事で歸つて行けた。風は吼えたけつて

狂ひ廻る。その前を疾走する低い赤い雲は引きちぎられたやうに見える。すべての物はごつちやになつて渦卷いてゐる。篠突く雨は直立した木の下をすさまじく濺り流れ、雷光は青い火をはなつて目を眩し、雷鳴は砲聲のやうに颯と轟き渡つて、空氣は硫黄の匂ひに滿たされた。

しかし差出た軒下、屋根窓の緣に、二羽の白鳩は互によりそつてとまつてゐる。一羽はその配偶を呼びに行つたあの鳩で、一羽はそれに連れ歸られて、恐らく破滅から救はれた方の鳩であつた。

彼等は羽根をさか立てゝ、互に翼をくつつけてゐる。

彼等は幸福である！ そして彼等を見る私もまた幸福である……私はたゞ一人であるけれども……いつもの通りたゞ一人であるけれども。

一八七九年五月

明日は！ 明日は！

過ぎ去つた日のすべてはいかに空しく味氣なく徒らなものであらう！ それはいかに僅かな痕跡を殘すのであらう！ 今日から明日へと消えてしまふ月日と云ふものは、いかに無意味にいかに馬鹿らしいものであらう！

しかも人間は生きようとする。生命に執着して、その生に、その身に、來るべき日に、その一切の希望をかける……おゝ、いかに多くの幸福を人はその未來に期待するであらう！

しかしその未來の日もまた過ぎ去つた日に異らぬとは、何故また人は考へないのだらう？

彼はそれを考へもしない。考へる事を欲しないのだ。まことにそれはいゝ事である。

「明日は！ 明日は！」と彼は自ら慰める、しかもこの「明日」が彼を墓場へ搬んでしまふのだ。

さて、一度墓へ入つてしまへば、人はおのづから、もはや考へなくなつてしまふ。

一八七年五月

自然

私は夢に高い丸天井のついた地下の大廣間にゐた。あたりはあまねく地下の光に照らされてゐた。

その廣間の眞中に、綠色のふうわりした衣を着けた威嚴のある一人の婦人がすわつてゐた。頭を手で支へて、深い沈思に耽つてゐるやうであつた

私は直ぐにこの婦人が「自然」そのものであると知つた。すると畏敬の念が心の奥底まで沁み渡つて、ぶるぶると身ぶるひがした。

私は此のすわつてゐる人に近寄つて、恭しく身を屈めて、「おお私達の共通の母よ！」と叫んだ、「あなたは何をお考へになつてをります？　人類の未來の運命についてですか？　それとも人類がどうしたら最高の完全や最大の幸福に達し得られるかと云ふことですか？」

婦人はその黑い脅すやうな眼をおもむろに私に向けた。その脣は動いて、そして私は鐵の響のやうなよく徹る聲を聞いた。

「私は蚤がその敵から一層容易に逃げられるやうに、その足の筋肉にもつと強い力を與へる方法を考へてゐる。攻撃と防禦との平衡が破れてしまつた……元のやうに直さなくてはならない」

「何ですつて」と私はどもつて言つた、「あなたはそんな事を考へてゐらつしやるのですか？　然し私達人間はあなたの寵兒ぢやありませんか！」

婦人はかすかに眉を顰めた。「あらゆる生物は皆私の子供です」と彼女は言つた、「だから私は同じやうに皆の爲めに闘つてやりもし、また同じやうに皆を破滅させるもする」

「けれども善……理性……正義は……」と私はまた吃つた。

「それは人間の言ふ言葉だ」と鐵のやうな聲は答へた。「私は善も惡も知らない……理性なんぞ私の法則にはならない——そして正義とは何のことだ？——私はお前に生命をやつた、私はそれをまたお前から取つて、他の者にやる、人間にでも蟲にでも……何だつてかまやしない……だからお前もそれ迄は自分の事によく氣を附けて、私の邪魔などしなさるな！」

私はまだ何か言ひ抗はうとした……けれども地面は鈍い唸きを發して震動し出したので、私は目を覺ました。

一八七九年八月

「絞罪にせい！」

「千八百三年の事だつた、」と私の年老いたる知人が話し出した、「アウステルリツ役の少し前、私が士官の勤務をしてゐた聯隊はモラギアに舎營してゐた。

「我々は土地の人民を困らしたり苦しめたりしないようにと嚴命された。さなくとも、その味方と云ふ事にはなつてゐながら、彼等は我々を猜疑の眼をもつて見てゐたからである。

「私はもと母の農奴であつたイエゴルと呼ぶ從卒を連れてゐた。彼はおとなしい正直な男だつた。私は彼を子供の時から知つてゐて、友達扱ひにしてゐた。

「ところで或日、私の泊つてゐた家で罵る聲や叫ぶ聲泣く聲が聞えた。主婦が二羽の牝鷄を盜まれたので、その罪を私の從卒に歸したのである。彼は自分でも辯解をし、私をも證人に呼んだ。……『なにこの男が、イエゴル・アフタモノフが盜みをしたんだつて！』私は主婦にイエゴルの正直なことを說いて聞かせた、けれども彼女は私の言ふ事なんか耳にも入れなかつた。

「折りから街路を行く馬の蹄の音が聞えた。司令長官が幕僚を率ゐて來たのであつた。彼は並足で騙つてゐた。がつしり肥つた人で、頭を垂れて、胸には肩章が

垂れかかつてゐた。

「主婦は彼を見ると、ばたばた驅け寄つて、その馬の前に跪き、そして髮を振り亂した取亂した姿で、私の從卒を指しながら、聲高に彼のことを訴へ出した。

『大將樣』と彼女は叫んだ、『お殿樣！　どうぞお調べ下さい！　お助け下さい！　どうぞお救ひ下さいませ！　此の兵隊が私のものを泥棒いたしました！』

「イエゴルは手に帽子を持つて、胸に突出すやうにさへして、番兵ででもあるやうに踵をくつつけて、その家の戸口にすつくり立つた儘、一言も口を利かなかつた！　大將の一行が街の眞中に立止つたのですつかり恐れ入つてしまつたものか、それとも身にふりかかつた災難に氣を失つてしまつたものか、何とも言へないが、かはいさうに、イエゴルは白墨のやうに色を失つて、目をぱちくりさせて立つてゐた。

「司令長官は彼に落着きの無い氣味の惡い一瞥をくれて、怒つたやうに『さうなのか？』と呶鳴つた……けれどもイエゴルは石像のやうに突立つた儘、まるで笑つてゐるやうに齒をむき出してゐた！　傍から見たら笑つてゐるとしか思へなかつたらう！

「すると司令長官は『絞罪にせい！』と言放つて、馬に拍車を當てて歩き出した、はじめは並足で、それから駈足で。一行はその後を追つた。ただ一人の副官が鞍の上から振り向いてイエゴルをちらと見た。

「命令に背くことは出來ない……イエゴルは直ぐにつかまへられて執刑に引立てられた。

「そこで彼はもう人心地も無くなつて、二度程喘ぐやうに言つた、『ああ神樣！　ああ神樣！』それから小聲で、『神樣こそ御存知だ、私ぢやない！』

「悲しさうに、悲しさうに彼は泣いた。私に別れを告げながら。私は絶望して叫んだ。『イエゴル！　イエゴル！　お前はどうして大將に何とも返事をしなかつたんだ？』

「『神樣が御存知です、私ぢやありません！』と可哀さ

うな男は繰返して、しくしく泣いた。主婦は恐しくなつて來た。彼女はこんな恐しい事にならうとは思ひも懸けなかつたのだ、そして自分も大聲で泣き出した。彼女は人々に赦免を乞廻つて、牝鷄が見附かつた事を讐つて、事件の顚末を說明しようとした……

「勿論それは何にもならなかつた。何しろ君、戰時の事だ！　それに命令だ！　主婦はますます大聲に泣いた。

「イエゴルは僧侶に最後の祈をしてもらうふと、私の方に振向いた。

「『旦那樣、主婦に言つて下さい、何も心を痛めることはないつて……私は主婦を惡く思つちやをりませんから』」

私の知人はこの彼の從卒の最後の言葉を繰返してかう呟いた、「あゝイエゴルシカ、かはいさうな奴、本當に聖者のやうな奴だつた！」そして淚は彼の皺の寄つた頰を傳はつた。

一八七九年八月

何を私は考へるだらう？……

私ど死ななければならぬ時に、若しその時何事かを考へることが出來たとすれば、何を私は考へるだらう？

一生を無駄に費してしまつたこと、ずつと眠りつゞけて夢のやうにすごしてしまつたこと、人生の賜物を享受する道を知らなかつたことなどを考へるであらうか？

「なに？　もう死なきやならんのか？　こんなに早く？　そんな事があるものか！　私はまだ何一つする暇もありやしなかつたんだ……これからやつと何かしようとしたばかりなんだ！」

私は過去を追想するであらうか、經驗して來た僅かばかりの光彩ある瞬間を——わが身に貴い面影や容姿

を心に思ひ浮べるであらうか？
おのが惡行を思ひ出すであらうか、そしてあまりに遲く來た後悔の燃えるやうな苦しみに胸を刺されるやうに覺えるであらう？
墓の彼方で私を待つてゐるものについて考へるであらうか……實際、其處で何ものかゞ私は待つてゐると考へるであらう？
否。……私は考へまいとするであらう、そして私の前を眞黒に閉してゐる脅かすやうな暗黒から、自分の心を轉じさせよう爲めにのみ、強ひて何かつまらない事に興味を向けさせることであらう。
私は曾て、胡桃を嚙ませないと言つて、怒りつゞけてゐた瀕死の人を見た！……しかもそのどんよりした眼の底には、致命傷を受けた鳥の破れた翼のやうに、何ものかゞ顫へ跪いてゐたのである……

一八七九年八月

「げに美しく、鮮かなりき、
その薔薇は……」

何處であつたか、何時であつたか、餘程以前に、私はある詩を讀んだ。それは直ぐ忘れてしまつた……けれどもその最初の一行はかたく私の記憶に殘つてゐる——

「げに美しく、鮮かなりき、その薔薇は……」

今は冬である。霜は窓硝子に凍りついて、暗い室の中にはたつた一つ蠟燭がともつてゐる。私は室の片隅に身を縮かめてすわつてゐる。そしてその句が絶えず頭の中に響いてやまない——

「げに美しく、鮮かなりき、その薔薇は……」

私は或る露西亜の田舍家の低い窓の前に自分の佇んでゐるのを見る。夏の黄昏はいつとなく夜に移つて行く、嗳かい空氣は木犀草や菩提樹の花の芳香を漂はせてゐる。そしてその窓には、頭を一方の肩にもたせかけ、肘を突いて、一人の少女がすわつてゐる。そして言葉も無く、またゝきもせずに、空を見入つてゐる、はじめての星の現れ出るのを待つてゞもゐるかのやうに。その夢みるやうな眼差は、何と云ふ率直な感激に充たされてゐるであらう、その開いた何か問ひたさうな唇は何と云ふ人を動かす無邪氣さであらう、そのまだ十分に熟してゐない、まだ何ものにも搔き亂された事の無い胸は、何と云ふ穩かな息づかひであらう、その初々しい顏の輪廓は何と云ふ純潔さ可憐さを示してゐるであらう！　私は敢て彼女に言葉を懸けようとはしない。けれどもどんなに私は彼女を愛してゐるであらう、どんなに私の胸は皷動してゐるであらう！

「げに美しく、鮮かなりき、その薔薇は……」

けれども室の中はだん／＼暗くなつて行く……蠟燭は燃えさがつて、ぱちぱちと音を立て、低い天井にちら／＼と影が搖れる、室の外には霜柱のぽき／＼折れる音がする、そして中には老年のもの悲しい呟きがするかと思はれる……

「げに美しく、鮮かなりき、その薔薇は……」

また違つた幻影が私の前に現れる。田舍の家庭生活の樂しさうなどよめきが聞える。二つの亞麻色の頭が互にもたれ合つて、はればれしい眼差をして遠慮もなげに私を見てゐる、薔薇色の頰は笑ひを抑へるので顫へ、手と手は睦まじげに握り交はされ、初々しい力のこもつた聲は入り亂れて聞える。また少し彼方の小ぢん

まりとした室の隅では、おなじやうなまた別の若々しい手が、ともすれば亂れ勝ちな指で、古いピアノの鍵盤の上を飛んでゐる、けれどもそのランネルのワルツの曲は家長めいたサモワアルの煮え沸る音を消し得ない……

「げに美しく、鮮かなりき、その薔薇は……」

蠟燭はぱつとちらついて、そして消えてしまつた……誰だらう、皺嗄れた空咳嗽をしてゐるのは？ 私の足もとには、私の唯一の伴侶の老犬がまるくなつて寢てゐる、そしてぶる〳〵身顫ひしてゐる……おゝ寒い……凍えてしまひさうだ……あゝ皆死んでしまつたのだ……死んでしまつたのだ……

「げに美しく、鮮かなりき、その薔薇は……」

一八七九年九月

海上にて

私は小蒸汽船で漢堡から倫敦に行かうとしてゐた。乘客は私達二人きりだつた。私と、一匹の小さな牝猿とで。これは漢堡の商人が英吉利の同業者に贈物として送つて遣るものであつた。

彼は甲板の椅子の一つに細い鎖で縛られて、始終ぐる〳〵動きまはつては、低い悲しげな聲で啼いてゐた、まるで鳥のやうに。

私が傍を通る度に、彼はその黑い冷たい手を伸して、その小さな悲しさうな何だか人間のやうな眼で私を見上げた。私がその手を取つてやると、彼は啼きやんで、しつきりなしに動きまはるのも止めてしまふのであつた。

ひつそりと死んだやうな凪ぎであつた。海は鉛色の

動きもしない敷布のやうに八方に擴がつてゐた。眼界は狹く小さかつた。濃霧が海上を覆ひ、帆檣の頂點さへ雲に隱されて、そのやはらかな濃霧に眼は眩み疲れるばかり。太陽は此の濃霧の中にどんよりとした赤い斑點のやうにかゝつてゐた。けれども夕方前には、奇妙な不思議な赤味がゝつた光を放ち出した。

何か重たい絹物の褶のやうな長い垂直な褶は、一重また一重と船首から起つて、進むに連れてうち擴がり、皺みつ伸びつ、一搖れしてはまた滑かになつて、そして消えてしまふ。單調な音を立てゝ廻る車に搔き亂されて、泡は飛び上り、牛乳のやうに白くなり、かすかな音をぶつ／＼立てゝ、碎けてうね／＼した渦をつくり、それからまた溶け合つて、同じやうに消えて霧に呑まれてしまふ。

猿の啼聲のやうに絕間なく悲し氣に、艫の方で小さな鐘が鳴つてゐる。

時々海豚が浮上る、そして急に身を轉じては、ありとも見える波間にもぐり込んでしまふ。

船長と云ふのは陰氣な日に燒けた顏の寡默な男で、短いパイプを燻らしては腹立たしげにどんよりと澱んだ海に唾を吐く。

何を訊ねても、彼はきれ／″＼にぶつ／＼答へるばかりなので、私は仕方なしに、唯一の道づれなる猿を相手にせずにはゐられなかつた。

私は猿の傍にすわつた。彼は啼きやんで、また私の方にその手を差出した。

濃霧は睡氣を催しさうな濕氣でもつて二人を壓し附けるやうだつた。そして同じやうにぼんやりした氣持になつて、私達は兄と妹とのやうに相並んですわつた。

私は今では微笑むのだが……その時はまつたく違つた感じを持つてゐた。

我々は皆おなじ母の子である、そしてその哀れな小さな動物が兄にむかつてするやうに、親しげに私を慰めて、私に馴れ馴れしくしてくれるのが嬉しかつたの

である。

一八七九年十一月

N・N・

落着きはらつてしとやかに、泣きもしなければ笑ひもしないで、お前は人生(このよ)の行路(みち)を辿り、何ごとをも無頓着に知らぬ顔に見すごして、心の平和を擾(みだ)されるやうなことはない。

お前は善良で聰明だ……然しあらゆるものはお前には馴染(なじみ)のないもので、お前には誰一人として必要な人もない。

お前は美しい。けれどお前が自分の美貌を誇りにしてゐるかゐないか、誰一人言ふことの出來るものはない。お前は同情を人に與へもしなければ、人から求めることもしない。

お前の目差(まなざし)には深味がある、けれどもその中には何の思ひもありはしない。そのはつきりした深味は空虚(くうきよ)である。

かうしてグルックの旋律(メロデイ)のおごそかな調べにつれて、極樂境(イリシアン・フイールド)を此のしとやかな影は動いて行くのである。

喜びもせず悲しみもせずに。

一八七九年十一月

止まれ!

止(と)まれ! 今私がお前を見るまゝに、永久に私の記憶に留(と)まれ!

お前の唇から最後の感激の聲は逃(のが)れ出て了(しま)つた。お前の眼には光も輝(かがや)きもない。其眼は幸福に壓せられたやうに曇つてゐる、それを現すのがお前の喜(よろこび)であつたかの美——其方へお前が勝誇つた樣(やう)でもある弱つた手を差伸すやうに思はれたかの美——を有してゐると云ふ幸福な意識に壓せられたやうに曇つてゐる!

何と云ふ光が――太陽の光よりも更に淸らかに更に氣高くも――お前の手足のまはりに、お前の着物のもつとも小さた襞の上までも注がれたであらう？

いかなる神の愛撫の息吹がお前の波うつ捲髮を弄んだであらう？

その神の接吻はお前の大理石のやうに蒼白い額になほ燃えてゐる！

これぞ祕密のあらはれである、詩歌の、人生の、戀愛の祕密のあらはれである！　これぞ、これぞ不朽そのものである！　これを外にして不朽はあり得ない、またあるを要しない。此の瞬間に、お前は不朽である。

それは消えてしまふ、この瞬間は――そしてお前は再び一塊の灰、一人の女性、一人の子供となつてしまふ……けれどもそれが何であらう！　この瞬間に、お前は超越したのである、あらゆる無常のもの、流轉するものを超越したのである。此のお前の瞬間は永遠に不滅であらう。

止まれ！　而して私をもお前の不朽にあづからしめよ、私の靈魂の中にお前の永遠の美を反映せしめよ！

一八七九年十一月

僧

私は隱者で聖者である一人の僧を知つてゐた。彼はたゞ祈禱の涅槃にのみ生きてゐた。そして祈禱に專念して、寺院の冷たい石疊の上に立ち盡してゐた、その足が膝の下から痺れて、柱のやうに無感覺になつてしまふまでも。しかも彼はそれを感じなかつた、彼は立ち盡して祈禱しつゞけた。

私は彼の心を知つてゐた、或は彼を羨んでゐたであらう。然し彼もまた私の心を知つてゐた、そして私を責めるやうなことはなかつた、私は彼の法悅に達し得なかつたけれども。

彼はその憎むべき「自我」を滅却する事に成功したの

である。私もまたさうであるが、然し私が祈禱を顧みないのはあながち利己心から來たものではない。

私の「自我」は、多分彼のよりは一層私にとつて重苦しく、厭はしいものなのであらう。

彼はすでに自分自身を忘れる方法を見出した……然し私もまたその方法を見出してゐる、いつも〳〵と云ふわけではないけれども。

彼は虚僞を言ふ人ではない……然し私もまた虚僞を言ふものではない。

一八七九年十一月

我等なほ戰はん

實に何でもない事が、時とすると人間をまるつきり變へてしまふものだ！　憂愁の思ひに暮れて、或日私は街道を歩いてゐた。

私の心は重苦しい氣遣はしい感情に壓し附けられ、意氣沮喪の極に達してゐた。ふと頭を擡げると……私の前には二列の高い白楊の間を街道は矢のやうに遠く走つてゐる。

そしてそれを越えて、その道越えて、十歩ばかり彼方に、夏の眩しい太陽の黄金の光の中を、一群れの雀が列をつくつて飛んでゐた、遠慮氣もなしに、をかしげに、自ら恃むところがあるやうに！

とりわけてその中の一羽は、必死の力を籠めて、わき道をはね、小さな胸をふくらまし、傲然として囀つてゐた、まるで何一つとして恐ろしいものがないと言ふやうに！　實に健氣な小戰士ではある！

しかも其時、空高く一羽の鷹が輪を描いてゐて、その小戰士を餌食にしようとする風であつた。

私はそれを見て、笑みをうかべ、身ぶるひして、憂愁の念は忽ち消え失せた。勇氣、剛膽、生存慾、ふたたび私の胸に還つて來た。

我が上にも、飛べよ我が鷹……

我等もまた更に戰はう、なんの恐ろしいことがあるものか！

一八七九年十一月

祈禱

その祈るところが何であらうとも、人間は總て奇蹟を祈るのである。どんな祈禱でも、皆これに歸する。曰く
「大いなる神よ、二二が四たることなからしめ給へ」
たゞかゝる祈禱のみが人格ある者より人格ある者に捧ぐる眞の祈禱である。宇宙の靈に祈り、上天に祈り、カントの、ヘエゲルの、實體無形の神に祈るといふ事は、あり得べき事でもなく、また考ふべからざる事である。

然し人格あり、生命あり、形體ある神なりとも、二二が四たることなからしめ得べきか？

すべての信者は「然り」と答へなければならぬ、また自らそれを信じなければならぬ。

然し理性が彼をしてかゝる不合理に反抗せしめる時はどうする？

此の時シエクスピアがその助けに來る。曰く「ホレエシオよ、天地の間には汝の哲學で夢みられるよりはより多くの事物がある。」

しかも人々眞理の名によつて、なほも駁し來つたならば、かの有名な問ひを繰返しさへすればよい、曰く「眞理とは何ぞや？」

さらば、我等杯を擧げて樂しまう、そして祈禱をしようではないか。

一八八一年七月

露西亞語

疑ひ惑ふ日にあつても、國運を思うて心傷む日にあ

つても、汝のみは我が杖であり柱である。おゝ、偉大なる、信實なる、自由なる露西亜語よ！　汝がなかつたならば、いまの祖國のさまを見て、どうして絶望せずにゐられよう？　然しながら、かやうな言葉が、偉大なる國民に與へられたものでないとは誰か考へ得られようぞ！

一八八二年六月

註釋

田舍――ヱルスト、露西亜の里程で、一哩の三分の二に當る。――コンスタンチノオプル、昔のビザンチン今の土耳其の首府、この結末は當時アクザコフ等のスラヴ主義者、國粹主義者が盛んに此地の領有を說いてゐたこと、及び露西亜が多年宗教上政治上關係から、ダアダネルス海峽や土耳其の土地に垂涎してゐることを念頭に置いて讀まれたい。――聖ソフイヤ寺院云々、回教徒たる土耳其人の手から取り返さうと云ふのである。

會話――ユングフラウ、處女峯の義、少女が嶽とでも云ふべきか。――フインステラアルホルン、黑鷲峯の義共に獨逸語。ツルゲエネフがこれを書いた時分には、未だ一人の此の二峯を踏破する者が無かつたのである。一八九〇年に至つてはじめて登山者が山頂を極める事に成功した。

我が競爭者——正教、露西亞の國教、希臘より傳はつた基督教である。ツルゲエネフは獨逸哲學に心醉した懷疑家だつたから、死後の生活について信じ得なかつたのである。この篇は「祈禱」などと比較して考へれば一層よくわかる。——競爭者と云ふのは詩人ネクラソフではないかと思はれる。ネクラソフは露西亞で最も廣く讀まれた傾向詩人で、彼は詩を實利主義の奴隷となし、「乾酪の一片は、プウシキンの全集よりも尊し」と叫んだ。だから藝術の自由を說くツルゲエネフとは合はなかつたのである。ネクラソフの代表作は長篇詩「露西亞にて幸福に生くる者は誰ぞ」「露西亞の婦人」等で、西歐にもよく知られてゐる。

汝は愚者の審判を聞かざるべからず——これはプウシキンの詩「ある詩人に寄す」中の一句、原詩は「おお、詩人よ、汝の民衆の愛顧を切望するな、賞讃者の喝采の響は息の如く消え去るべし、愚者は汝を審判すべし、群衆は汝を嘲るべし、されど冷然として努力せよ、よし汝の手に何等の慰めも與へられずとも云々」と云ふのである。——アレクサンドル・プウシキン、露西亞の國民的詩人、露西亞の新文藝の創建者である。その母は波得大帝の黑奴イブラヒム・ハンニバルの孫であつたから、黑人の血を享けてゐる。一七九九年に生れ、一八三七年決鬪によつて斃れた。はじめバイロンの影響を受け、のち自己の新境地を拓いた。代表作は韻文小說「オネエギン」其他「高加索の囚人」「ボリス・ゴヅノフ」等の詩、「大尉の娘」(邦譯あり)等の小說もある。トルストイ、ドストエフスキイ皆プウシキンを尊敬した。ツルゲエネフもさうで、また屢々自ら散文のプウシキンと呼ばれたものである。——この篇はツルゲエネフの後年の大作がいづれも冷淡に迎へられ、作者其人も故國人に反感を抱かれてゐた事を考へて讀まねばならぬ。

處世法——文明の奴隸云々、西歐主者者は露西亞の國粹主義者よつて排斥された。彼等は自國を又なきものに思つて、丁度、我國の靑年會の會員等が一等國だとか東

洋の盟主だとか云つて誇るやうに、未開の自國を尊しとし、反つて文明を排斥した。そして歐羅巴から來るものを凡て拒んだ。ツルゲエネフ自身は西歐主義者、文明の使徒として終始した、彼が故國の人望を恢復するに長年月を要したのはその爲めである。

愚物——當時の文學界に對する諷刺である。何處でも批評家にはこんな愚物が多いと見える。——N、N、羅甸語の Nomen nescio の略語、名前知らずの義、人の名前を擧げたくない場合に用ゐる。何の某と云ふ程のこと。——オーソリチー、權威者の義である。

東方の傳說——東方とは小亞細亞から波斯阿拉比亞等の地をさす、アラビアン・ナイトの舞臺になつてゐる土地が東方だと思へばよい。日本や支那は極東だ。——バグダツド、アラビアン・ナイトで御馴染の土地。回敎王はこの地にゐた。——猶太人ロスチヤイルド、有名な世界的大富豪、その家は歐洲各國にまたがつてゐる。——ソロモン、舊約聖書にある王樣、賢人ダビデ王の子で、賢人である。

——回敎王の母、基督敎の聖母マリアに當る。

二つの四行詩——この篇は羅馬時代のこととして書いてある。——詩神、ミユウズは希臘神話にある、本來は音樂や踊や歌唱を司る女神でクリオ、ウラニア等九人ある。——フオラムは古羅馬の公會堂である。——リクタアは羅馬の役人。——東桿は棒を束ねた中に斧鉞を包んだもので、羅馬の高官の權力の標とされてゐたもの。

雀——ツルゲエネフの愛と云ふ思想を最もよく現したもの。彼の厭世主義の特質は人生の虛無を說くと共に、愛のみを眞實なるものとしたところにある。

髑髏——唱歌女（シンガア）オペラの歌うたひ、柴田環、原信子などと云ふ人がそれに當る。——顫音は音樂上の言葉、聲をふるはせて長く引つぱる唱ひ方をいふ。

勞働者と白き手の人——所謂人民の中に行くこと、即ち革命運動の徒勞を諷したもの。「處女地」の主人公ネヂダノフは革命運動に投じて、農民に說敎したが、彼等は彼の言ふ事なんどてんで理解もせず、ただ一緒に酒を飮

んだばかりである。ペアリングは革命運動にたづさはつた人達の失敗した農民を理解し農民に融合する事に、ドストエフスキイなどの方が成功したと言つてゐる。――緬云々は民間の迷信、ああ何等の悲痛な皮肉ぞ。

ウレフスカヤ――一八七七年―七八年の露土戰爭中の出來事。健氣な露西亞の少女に對する讃美である。この篇は「その前夜」のエレナを思出させる。

最後の面會――友人と云ふのは前に言つたネクラソフである。二人は青年時代に共に活動したが、のち長らく反對の地位に立つてゐたのだ。――露西亞では死は女性と見られてゐる。

NECESSITAS-VIS-LIBERTAS――羅甸語。これを譯して見ると必然、力、自由となる。卽ち鐵のやうな顏したのが必然で、大女が力、小娘が自由だ。三つの概念を三人の女の彫刻になぞらへたのである。――薄肉彫、普通の彫像ではなくて、淺く浮彫にしたものを云ふ。――ヘラクレス希臘神話に出る半神の英雄、獅子と格闘して苦もなく組伏せてしまふ大力者。それで大男のことを、あれはヘラクレスだなどと云ふ。

キャベツ汁――露西亞では鹽は重稅を課せられてゐるから、その寡婦が勿體ながつたのである。

エゴイスト――エゴイストは主我主義者、利己主義者自分の事ばかり重んじて他人の事は顧みない人間。

神の饗宴――人間の忘恩を諷したもの。――德は女性である。

スフィンクス――埃及のスフィンクスは誰でも知つてゐるが、露西亞の農夫をそれに比したのである。――エヂプスはテエベの王、スフィンクスの謎とは、朝は四本の足で行き、晝は二本の足で行き、夜には三本の足で行く者は何と云ふので、女面獅身翼を具へたスフィンクスと云ふ怪物がこの謎に答へない者は皆岩から突落してしまふので、それを退治たものを王にすると云ふ布告が出ると、エヂプスが見事その謎を解いてそれは人間だと言つた。赤ん坊の時は四つん這ひ、大きくなると立つて步

き、年を取ると杖を突くからだ。それでスフインクスは岩から身を投げて死に、エヂプスは王になる。その後の悲劇はソフオクレスの名作があつて、この間藝術座でも上演した。さう云ふ事からして、ツルゲエネフは埃及のスフインクスの面、更に露西亞農民の面それ自らを謎だと云つたのである。――カルプ等は皆ありふれた百姓の名前、リヤザン等は地名。百姓服云々は百姓服を着て人民の愛顧を獲ようとした熱狂的なスラヴ主義者、國粹主義者を諷したものである。

ニンフス――この篇は基督教と異教との爭闘を知つてゐなければわからない。基督教の宣傳されると共に、希臘の神々は滅ぼされてしまつた。――パン神は牧神である、頭に角を生やし、半羊の姿をしてゐる。ニンフ、山林水澤の神、女神である。――ドライアッヅ、森の闇の中に棲んでゐるニンフの一種。――バツカンテス、酒神バツカスに仕へる女神達をいふ。――神々の笑ひ（オリンピアン・ラフタア）無遠慮な哄笑である。神々はよく笑ふのだ。――ダイアナ、狩獵の女神である、貞潔を代表してゐる。ダイアナの原形は月だから月を頂いてゐるのだ。――十字架云々、基督教は神々には禁物だから、それで十字架を見て驚き恐れたのである。

基督――ツルゲエネフの基督觀を窺ふに足る。ルナンが「基督傳」を書いたのと同じ精神で、基督を一個の人間として見ようと云ふのである。

鳩――たゞ一人云々、ツルゲエネフは一生結婚しないでしまつた人である、一度農奴の女と一緒になつて子供さへ出來たが、のち佛蘭西へ行つて孤獨に終つた。

絞罪にせい！――アウステルリッツ役、一八〇五年十二月に露墺の軍がナポレオンに對して戰つた戰爭。――モラギア、墺太利領になつてゐる土地の名。

げに美しく――ランネル、音樂家の名。――ワルツの曲、ワルツといふ一種の舞踏に合せて彈ずる曲。――サモワアル、自働湯沸器、露西亞では重寶がられてゐる、だからいかにも一家のかしらしく構へてゐるやうに思

得べからざる事が即ち奇蹟？——シエクスピアは有名な沙翁、英國の大戯曲家で、このホレエシオよ云々の文句はその「ハムレット」中にあるハムレットの言葉である。ホレエシオはハムレットの友人の哲學者。——眞理とは何ぞや、これは猶太の代官ピラトが基督に反問した文句である。

はれるから族長的（家長めいた）とも云はれるのだ。族長とは舊約にあつて、大一族のかしらである。

海上にて——ハンブルヒは獨逸の港。

N、N、——これは「エゴイスト」と同じやうな作である。極樂境、イリジアン・フィールドとは希臘神話にあつて、何等の罪も犯した事のない幸福な人間の魂のゐるところ。それで影と云つたのである。ツルゲエネフはかうした人間の醜惡を深く感じたのである。——グルック、獨逸の音樂家。

僧——ツルゲエネフの見出したものは恐らく藝術であらう。

祈禱——カント、獨逸の大哲學者、「純正理性批判」によつて哲學に一時代を畫した、近世哲學の鼻祖である。——ヘエゲル、カントに續いて起つた大哲學者、ツルゲエネフが獨逸に留學して學んだのはこのヘエゲル哲學である。——二二が四とは理窟に合つた事、當然の事、それが二二が五にでもなれば、これ即ち奇蹟である。あり

『散文詩』を讀む人々のために（註釋の第二として）

譯　者

此の老年の憂鬱と未だ消滅せざる青春の若々しさとのあやしく織り交ぜられてゐる美しい哲學、深遠な詩のエッセンスたる小さな力ある書物は、ツルゲエネフがその晩年の五年間（一八七八年――八二年）に自身の並びに社會の日常生活を觀察し思考するの餘、折りにふれてそのノオトに書き留めて置いた寫生や空想や考察の中から、五十篇だけを選んで、一八八二年、露西亞の大雜誌「歐羅巴の使ひ」（ウエストニク・エフロピイ）の十二月號に於て發表したものである。その主筆のもとに送られた原稿には、もと何等の題も指定されてゐなかつた代り、その表紙に覺え書きめかしく、“Senilia” と云ふ一語が書き流してあつた。これは羅甸語で老衰の義である、されば鷗外博士もこれを「耄語」と譯してゐられたやうに覺えてゐる。獨譯者ランゲは云ふ、ツルゲエネフは人も知る如く、極めて謙遜な人である、それ故この過謙の語を書き記したものであらうが然しこの作品には最も適當しないものである、何故と云ふのに、これには精神的老衰の痕跡すらも認められないからであると。そして彼は前記雜誌の主筆スタシユレキツチが、作者の手紙の中に記されてゐる「散文詩」と云ふ言葉を、此の無韻ではあるが眞に詩的な考へ深い作品の表題に定めたのを頗る當を得た處置だと云つて、自らその名によつて獨譯を發表した。此譯にも散文詩の名を棄て得なかつたのは、それが既にこの名によつて一般に知られてゐるのと、今一つは散文詩なる文字に對する一種の愛着からであつた。けれども、ツルゲエネフが、もと、かの非常な謙遜な題を眼中に置いてゐた事だけは述べて置く必要があると考へる。

ツルゲエネフはその原稿に添へて、スタシユレキッチに與へた手紙の終りに左のやうに記してゐる、『……讀者が

此の「散文詩」を一息に讀過しないようにと望みたい。でないと、その結果は恐らく退屈を來して、――そして「歐羅巴の使ひ」はその手から取落されてしまふであらう。むしろ一篇づゝ讀んで頂き度い、今日はこれ、明日はあれと云ふ風に――さうしたならば、多分その中から何物かがその胸に刻み込まれるであらうと思ふ……』と。全く、このやうな作品は一度や二度卒讀したのみでは十分でないのである。靜かな瞑想の中から生れたものは、また靜かに落着いて味はれなければならない。

この集に對する大思想家及び大批評家の批評。

グロポートキンは云ふ、『これは一千八百七十八年以降、彼の私生活もしくは公生活の、種々の事實から受けた印象に基いて書き留めた「飛び行く思ひつき、思想、影像」である。これらは散文で書いてはあるが、優れた詩の眞の斷片であり、或るものは眞の寶玉である。或るものは深刻な刺戟を與へ、優れた詩人達の最もよい詩の樣に印象的である(「老婆」「乞食」「マーシャ」「何と美しい、何と鮮かな薔薇だらう」)。而も一方には(「自然」「犬」)ツルゲーネフの哲學的思想を何よりも明かに語ったものがある』(田中純氏の譯による)

ブランデスはこれを『立派な散文集』と嘆賞し、その「自然」を引き來つて、ツルゲエネフが沈鬱の特性を認め、ゴオゴリ、ドストエフスキイ、トルストイと比較し、『獨りツルゲエネフは哲學者である』と斷じ、また云ふ、『抒情的な、空想的な一要素がそれらの中に最も詩的に閃いてゐると云ふ事を除いては、同樣に靑年時代の諸作より遙に深い憂愁を含んでゐる。此處に、最後に、彼は生の祕密に面して、それを小止みもない悲しみの中に象徵や幻影を以て說明してゐる。自然は頑固で冷淡である、それならば人をして愛することを忘らしめるな。此處にはツルゲエネフが、ハムブルグからロンドンへの寂しい旅行中、哀れな、いぢけた、鎖に繫がれた小さい猿の手をとつて一時間も坐つてゐる場面がある――此處には如何な

る信仰書に於けるよりも更に眞實の信仰がある」（瀨戸義直氏の譯による）

この小册子を讀んで先づ目に附くものは、作者の厭世思想である、それは最も深刻なニヒリズムである。人間の微小を二巨山によつて語らしめた「會話」、その宿命觀を披瀝した「老婆」、一瞬に於て人生の無常を觀じた「髑髏」、特にブランデスをして『ツルゲエネフにとつてはそれは、人類の理想は——正義も、理性も、優越も、善も、幸福も——悉く自然に對しては無關係の事である、そして決してそれ自身の精神力で確立するものではないと云ふ事を理解した思想家の沈鬱である』（瀨戸氏譯）と云はしめた「自然」、それに老年の悲愁を託した「老人」、「明日は明日は」、「何を私は考へるだらう」。そして彼は常に常に死と云ふ大問題にかへつて來る。そして「世界の終り」をさへ夢みてゐる。けれどもそれが何故激烈に心を打撃しないであらう？　何故にかくも溫かく柔かく心に沁み込むであらう？　何となれば、それは驚くべく沈靜な悲哀であるからである。

それはやはらかな少女の手のやうに撫でさすり、薄暗に於て靜かな落着いた聲音で囁くからである。また眞理に美くしい衣裳を纏はしめてゐるからである、（赤裸の眞理は決して人の心を動亂させないでおくものでない）とりわけ彼の厭世思想を特質づけてゐる愛の致の爲めである。溫かい慈悲と慈愛の心のためである。たとへば、「乞食」、「雀」、「海上にて」、「鳩」。

ブウルチェは云ふ、『彼の厭世思想はしば〳〵誠に强かりしも嘗て人嫌に至ることはなかつた。思ふに、彼は方に斯くの如く人嫌と當然なるべきであつたらう、凡て厭世思想は、理想と現實との對比なる自然に對する呪咀なれば。然して一面に思想は人心の所產物なる故に、論理的に云はば、此の世を呪咀する權利を得んためには、此の心を激昂せしむるを要すべし。されど彼は決して斯くの如きことはなかつた。……彼は厭世思想家にして然も慈愛に富める人である。凡ての存在物が宿命的に老衰す

る様は、彼をして致命の罪に處せられし可憐なる生物を無辜の犠牲者なりと訴へしむるに至つた。……かくてツルゲエネフは其の作を靉靆たる慈愛の衣を以て包むに至つた。此れまさにその愛を捧ぐる女がその生涯の癒し難き不幸を語るその告白に面せる戀人の心の如くなるべし』（山田手捲氏の譯による）

ブリュクネルは云ふ、『彼の厭世思想は後に至つてはじめて内面外面の經驗からして形成されたものではなく、彼に生得のものなのである。その上、その非常なる教養が更にそれを助成した。しかもその知識たるや、たとへばベリンスキイの如きかき集められたものではないのである。……其處に人道的精神が加はつて來る――曾て青年時代にバルザックが彼を親しましめなかつたのに反して、ジョオジ・サンドが彼の崇拜を受けたのもその精神のためである。』

ツルゲエネフは人間の醜惡と痴愚と利己主義とを深く感じて悲痛の思ひに打たれた。その感情が反語となり機智となりユウモアとなつて現れたものが「滿足せるもの」「處世法」、「愚物」、「エゴイスト」、「友と敵と」、「神の饗宴」などであるが、然し彼は、溫厚なる彼は、それをも堪へようとする、『私を打て、然し健康に幸福に生きよ！』と言ふことが出來るのである（愚者の審判）。ウレフスカヤと共に何人に感謝されなくとも怨むことをしないのである。

この外、この集には蜂蜜も缺けてはゐない。それは最も詩的で、薔薇の香りのやうに喜ばしい。「薔薇」、「おとづれ」、「空色の國」（幸福の領と譯した方がいゝかも知れない）。然しそれらもまた憂鬱な黒い帷に織り出されたる薔薇の花である。

ツルゲエネフの晩年は、あゝ何等の苦痛、何等の孤獨！彼は丁度かの獨逸の薄倖なロマンチシスト、彼が青年時代に心醉してゐたかのハインリッヒ・ハイネと相似たる運命に遭遇した。丁度同じ巴里で、丁度同じ death-in-life を

彼は逆らねばならなかつた。痛風だと思はれてゐたが實は頑強な病氣、脊髓の癌腫のために廢人のやうになつて最後の數年間――丁度彼がこの散文詩を書いた時分である――を、ハイネの所謂蒲團の墓の中に横はらねばならなかつた。そして彼は絶間なしに考へた、瞑想した、夢想した、回想した、常に人生の謎に面して、人生の最後の大きな謎、――死に相面して。それ故に此悲痛な詩篇！然り、この詩篇を讀む人は、この作者がかゝる境遇にあつたことを考へなくてはならない。彼が多年敬愛してゐて、その遺産の相續人に定めたヴィアルドオ夫人、彼のために無くてはならぬ人であり、彼に對して骨肉も及ばぬ世話を見てくれたそのヴィアルドオ夫人すら、後にはさまでの注意を拂はなくなつたのである。そして彼は孤獨に愈々孤獨にその二階に寢てゐたのだ。この事を想うてこの作品に對する時、一層力強く動かされずにゐられない！

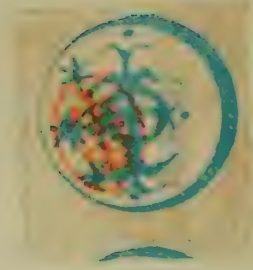
　ツルゲエネフは、この五十篇を發表した翌年、卽ち一八八三年にその第二の故郷なる巴里で逝いた――年は六十五歳であつた。

　ツルゲエネフの言葉の中でも、とりわけどうしても忘れ去ることの出來ない二節を終りに添へて置きたい。

『人生は冗談ではない、慰みではない、勿論快樂ではない……人生は重い苦痛である。放棄（あきらめの義）、永久の放棄――それが人生の祕義である。鍵である』ファウスト

『人生はただ人生のことを思慮せず、そして人生より何物をも要求せずして、安んじて人生が附與する僅少の賜物を受け、安んじてその賜物を利用する人を欺かない。汝は出來るだけ前に進め、しかし足が疲れたなら路傍に坐して、悲しむことなく、また猜むことなく、通行者を眺めるがよからう。彼等も遠くは行くまい……』通信（昇曙夢氏譯による）

——第二巻『詩集』了——

生田春月全集

第二卷

昭和六年三月十五日印刷
昭和六年三月二十日發行

編輯者 生田花世
同 生田博孝
發行者 佐藤義亮
東京市牛込區矢來町七十一番地
發行所 新潮社
電話牛込 長八〇五番 八〇六番 八〇七番 八〇八番 八〇九番
振替東京 一七四二

印刷者 佐々木俊一
富士印刷株式會社
製本者 植木瀧藏

全十巻目次